魔界荘の日常

部屋内妄想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔界荘の日常

【Ｎコード】
Ｎ６５０６Ｎ

【作者名】
部屋内妄想

【あらすじ】
魔界荘という個性豊かな人々が住まうアパートに住むこととなった男
そんな人々が織りなすコメディ

第一話・魔界荘へようこそ（1）

あー。腹減った。胃が空になってると今も音で知らせてくれてるよ。これは人間の神秘だな。

何か食いたいけど、財布の中も空腹だ……。俺の人生終わりかもしれない。親父、お袋、今までありが――って、思っていいものか、元はと言えば、親父とお袋が原因でこうなったではないか。無理矢理家を追い出しやがって。

冬の冷たさを運ぶ空っ風が身に染みる。……ま、追い出されたのも、自分の責任なんだよな。ひきこもってた俺の責任だ。

……けど、追い出すのってひどくね？　金もなし、職歴なし、学歴なし、なしのフルコースな俺を外に放り出したらホームレス一直線じゃないか。ま、すでにそんな感じだけど。

……はあ。勢いで電車に乗って、知らない街に来るんじゃなかったな。帰り賃もなくなったし、どこに行けばいいのかも分からない。現在も寂れた通りをただ歩いてるだけだしな。

もう歩くのも辛くなってきた。いよいよマズいかもしれん。どこか休める場所はないか……。

俺は辺りを見回した。草が好き放題に伸びた空き地があるだけだ。遠くにはアパートらしき建物が見えるが、築何十年も建ってんだろうな、ここからでも寂れてんのがよく分かる。人が住んでいるのかどうかも微妙だ。

しかし、ここら辺で住宅はあの建物くらいしか見あたらない。人通りもないし、別世界って感じだ。

人が多そうな場所を避けてきたから、そんな場所に行き着いたのは当たり前か。ちと極端だが。

駄目だ。立っているのも辛い。自分の体力のなさに呆れる。ここで休むか。幸い人は全く通りそうにないからな。

衣類が詰まったバッグを降ろし、それをクッション代わりにし、座る。衣類がペシャンコになってるだろうがどうでもいい。もう着ることもないだろう。まもなく日も暮れる。風も冷たい。今夜が命日になるかもしれないな。

「ヘックシュン！」

ああ。寒い。僕とても寒いんだパト〇ッシュ――って気分だ。次は空から天使が迎えにやってくるな。と、俺が灰色の空を仰いだ時だった。

「きょーうはお鍋ー♪　楽しいお鍋ー♪　お肉に魚にチョコレート♪」

フランダースな雰囲気をぶち壊す歌が聞こえた。声は可愛いが恐ろしくオンチだ。それにチョコレートって何だよ、鍋に入れるもんじゃないだろ。最近の流行かもしれないが。

「あ、死体だ」

「死んでねぇよ」

声からして歌の主か。つか、いつの間に近づいたんだ？　さっきは遠くから聞こえたようだったが。

「じゃあ、粋なオレ？」

頭を傾げ聞いてきた。

粋？　逝き？　うーん、もしや。

「行き倒れ？」

「そう、ソレ！」

どういう間違いだよ。いや、見た目から考えれば、そんな聞き間違いもあるか。

背は座ってる俺と同じくらいだし、顔も目がパッチリと大きく、唇も瑞々しい。茶色がかった髪は肩口で綺麗に揃えられている。実に可愛らしい女の子だ。

「ねえ、何で行き倒れてるのー？」

年相応の幼き声で、好奇心百パーセントの瞳で聞いてくる女の子。
俺は行き倒れじゃねー……と返したいとこだが、生憎今の状況は似たようなものだ。
「あっち行け」
手でシッシッとしながら、俺は言ってやった。素直に腹が減ってると言いたかったが、俺のちっぽけなプライドがそれを拒んだ。実際は女の子の手に持ってる袋から覗く長ネギが最高のごちそうに見えるほど腹減ってるよ。

『グゥゥー』

何とも間抜けな音が閑散とした通りに響いた。俺の腹が空腹を知らせる音だ。人間の神秘だ。
音が完全に鳴り止んでから女の子は言った。
「お腹減ってるの？」
捨てられた子犬を見るような純粋な目で俺を見ないでくれ。情けなくなる。が、そんな気持ちとは裏腹に俺の首はコクリと機械的に頷く。
「じゃあ、ウチくる？」
同情されてんのかな俺。いや、人の好意は無駄にしたら駄目だって誰か偉い人が言ってた気がする。
「いいのか？」
「うん！」
満面の笑みを浮かべ女の子は頷いた。ああ……人の優しさに涙がでそうだ。
「お鍋は人がいっぱいいたほうが楽しいもんね、早くいこ！」
そう言い、女の子は俺の手をもの凄い力で掴み引っ張った。体は華奢なのにどこにそんな力があるのか不思議だ。俺は慌ててクッションにしてた荷物を担ぎ、歩きだした。

「ねえ、行き倒れのお兄ちゃん、名前は何ていうの？」
俺を見上げながら女の子は聞いてきた。どうやらこの子には“行き倒れ”のイメージらしいな俺は。
「勇気だ。日野勇気（ひの ゆうき）」
「アタシの名前は雪香（ゆきか）だよ、ユーキお兄ちゃん」
ユーキお兄ちゃんか……悪くない響きだ。決して俺はロリコンとかではないと思う。どちらかというと年上の方が――げふんごほん。
「そいえば、雪香ちゃんは寒くないのか？　その格好で」
雪香はこの寒空の下、水色のワンピースだけを着ている。何も羽織ってないし、防寒対策は皆無だ。
「え？　寒くないよー」
最近の子は寒さに強いのか？　今も風の子とかいうのが通用するのかもしれないな。
「ここだよ、アタシのウチ」
雪香が立ち止まったのは、古ぼけたアパートだった。さっき遠目に見えていた所だ。近くで見るとさらに凄いな。お化けが二、三人住んでいてもおかしくない雰囲気が漂っている。

「ここだよ」

雪香に案内されたのは二〇四号室。二階建てのアパートの角部屋だ。雪香がドアを開け部屋に入る。
俺はとりあえず、玄関で待つことにしよう。雪香は誘ってくれたが、親がどうかは分からないからな。
雪香の親か……子があんなに可愛いからな、相当――

「よう、上がんな」

……。
ダレデスカ？　この体格がデカくて筋肉質で肌が日焼け後のよう

に赤黒いオッサンは？　とても雪香とは似ても似つかんよ。もしかしたらアッチ系の人かもしれん。声にドスが利いてるし。

ここは逃げよう。腹が減って死にそうだとかどうでもいい。下手したら死期がさらに早まる可能性だってある。

「ユーキおにいちゃん、どうしたの？　あがらないの？」

と、雪香がオッサンの図太い足の横から小動物のように顔を見せた。どうしよ。雪香が優しく誘ってくれたのに断っていいものかとも思うが……このオッサンと鍋を囲むのはな……。

「早く上がんな。すぐ用意ができるからよ」

「はいー」

あ、怖くてつい返事をしてしまった。

この建物は外見もみすぼらしいが、中身も同じだ。六畳一間に台所、トイレがあり、風呂はなし。すきま風もスースー吹き込んでくる。それも寒いが今は別の意味で寒気がする。

原因は四角いテーブルに向き合って座る、オッサンだ。黒木さんというらしく、下の階に住む人らしい。まあ、見た目からして父親はないな。今は新聞を読んでいる。

雪香はというと、台所でお手伝いをしている。今も雪乃さんに野菜や肉が盛られた皿を持ってトコトコとこちらに歩いてくる。実に可愛らしい。

って……俺は何もしなくていいのだろうか。雪乃さんには待っているように言われたが、居たたまれないな。

「何か手伝おうか？」

「いーよいーよ、ユーキおにいちゃんは待ってて。もうすぐできるから」

「そ、そうか」

そう言って雪香は台所に戻っていく。

「おう、兄ちゃん」

新聞を閉じ、黒木さんが話しかけてきた。
「はい？」
う、寒気が全身に迸る。やはり怖いな……アッチ系じゃなくて大工をやってる人らしいんだが、顔に迫力がありすぎる。
「腹減ってるならドンと食えよ」
白い歯を見せ、ニカッと笑いながら黒木さんは言った。顔が怖いから爽やかさはあまり感じない。
「ありがとうございます」
ここは人を見た目で判断してはいけないと思った方がいいか。。
「遠慮せずに食べてくださいね」
と、魚の切り身が盛られた皿をおく雪乃さん。雪香の母親だ。腰まで伸びた艶やかな茶色がかった髪と細長の目が印象的で大人の色香が漂わせている。
「たくさん食べてね、ユーキおにいちゃん！　じゃないとまた行き倒れになっちゃうよー」
雪香が天使のように笑いながら言う。癒されるな。……たくさん食べても、このままならまた行き倒れになりそうだけどな。先のこと考えても仕方ない、今は人の優しさに甘えるとしよう。

実に満足な食事だった。こんな楽しい食事は久しぶりだった。途中からチョコが入って激甘鍋になってしまったが。
「ごめんなさいね。片づけ手伝ってもらっちゃって」
隣で食器を拭きながら雪乃さんは微笑みながら言う。
「いえ、ご馳走してもらったんでこのくらいさせてください」
俺にも恩を感じる心はある。いや、寧ろ雪乃さんと後片付けをできるのなら金を払ってもいい。そのくらいの価値はある。
「勇気さん、これから泊まるところはあるんですか？」
俺は上を向き少し考えるふりをし、

「ないですね」
「でしたら、このアパートに住みませんか？」
食事の時に大まかに事情は話したからか、雪乃さんはそう進めてきた。少しばかりだが、ここに泊めてもらえると思ったがそれは甘い考えだったな。……てか、最低だ俺。
「……家賃払えませんよ俺。稼ぎないですから」
今まで一度もな。
「家賃は払えるときに払えばいいですよ。私も何年も払ってませんから」
「ホントですか！？」
「ええ、大家さんが優しい方なんですよ。……それに忘れっぽいですし」
どんな大家だよ。つか、何年も払ってないという雪乃さんも凄いな。
「本当に、払えるときに払えばいいのなら……」
というより、今日宿なしだったら凍死へ一直線だからな。ここで断られるのは命綱を離すに等しい。
「でしたら、隣が今、一応空き部屋なんですよ。勝手に住んで構いませんよ。大家さんが戻ってきたら事情説明すればいいですから」
おいおい。いいのか勝手に住んで。それより鍵はどうすんだよ。針金でカチャカチャと？
「鍵は頼めば開けてもらえるかと、ちょっと行ってきますね」
と言って、雪乃さんは出ていった。大家はいないんじゃなかったか？　それとも別の人か？

俺が洗い物を終えたのと同時ぐらいに雪乃さんは戻ってきた。
「鍵は開けときましたよ」
「ありがとうございます」

「あとで布団を持っていきますね」
本当に勝手に寝泊まりしていいのか不安だが、雪乃さんを信じることにした。

そして、隣の部屋の前。ドアノブを握ると冷たさが伝わってくる。果たして鍵は開いてるんだろうか――ノブを回す。
「マジで開いてるよ」
いったい雪乃さんは誰に頼んだんだろうな。大家がいない間鍵を管理してる人がいると考えるのが妥当か。
中は真っ暗だ。さらに寒い。当たり前だが暖房とかないだろうな。けど屋根無しよりはマシだ。
明かりはどこだ……。おそらくは隣と同じような間取りだろうし、部屋の中央あたりに電灯があったはず。暗くてよく見えん……手で探るしかないか。懐中電灯でも借りとけばよかった。――と、これか。
電灯の紐を引っ張り、部屋に明かりが灯っていく。電気は通ってるみたいだな、しかし、当然だが何もない殺風景な部屋だ……って。

「うー、眩しいー」

俺の目に映ったのは、部屋の角で眩しそうに手で目を覆う少女だった。

第二話・魔界荘へようこそ（2）

よく思い出してみよう。

俺は雪乃さんに言われたとおり空き部屋であるはずの隣の部屋に入ったわけだが……何故か少女がいた。

で、俺はとりあえず一目散に部屋から出た。部屋を間違えたかと思い、考えを巡らすが、雪乃さん家は二階の端の部屋。もちろん隣の部屋は、今俺がドアの前に立っているこの部屋しかない。

もしくは俺が聞き間違えたか、もう一つ隣だったりする可能性もあるが、ここは、

「あら、どうしたんですか？　鍵開いてませんでしたか？」

ナイスなタイミングで雪乃さんが布団一式を抱えて現れた。

「あの……どの部屋ですか？」

雪乃さんから布団を受け取りながら俺は聞いた。もし、この部屋が正解だったらどうしようかね。

「この部屋ですよ、今勇気さんが立ってる二〇三号室です」

と、今さっき入った部屋を指さした。

これはご丁寧にありがとう雪乃さん。どうやらこの部屋にはすでに先客がいるようでして……正直に言おう。

「この部屋、誰か住んでるみたいなんですけど」

「あー、見えたんですね」

え、何すかその発言は。俺、見えてはいけないものが見えてるんですか？

「大丈夫ですよ。害はありませんから。寧ろ明るい子ですし、寂しくないと思いますよ」

いや、何ですか、そのフォローは。というか、あの子がいったい何物なのかの説明を聞きたいんですが。

「明日の朝食はこちらで用意しときますね。それでは、おやすみなさい」

雪乃さんはニコリと笑顔を浮かべ、丁寧なお辞儀をして、家へと戻っていった。

そして、取り残される俺。

どうしよ。入るかな……でも、雪乃さんの話から察するに明らかに霊的な類だよな。俺昔から霊感とかないと思ってたのにな。

ひゅーっと風に吹かれ枯れ葉が一枚風に舞うのが見えた。

体が寒さに震えた。

やはりここに突っ立っていてもしょうがない。大丈夫だろ、害はないって言ってたし。それに結構可愛かったしなあの子。

「あ、おかえりー」

部屋に戻った俺を玄関で少女は笑顔で迎えた。確かに可愛い。

黒髪と表すには少し色素が薄く茶色に近い髪が肩下まで伸びており、それが縁取る顔は少し垂れた目が印象的で幼い感じがする。見た目は中学生くらいだと俺は推測する。が、着ている服が昭和初期を思い出させる——本で見た写真だが——赤い花柄模様の和服を来ている。

「で、君は何者ですか？」

六畳一間の何もない畳に座り、少女に訊ねた。少女は布団の一式の上に正座し、姫様のように偉そうに見える。つか、俺もそこに座りたい。畳から冷たさが伝わってきて寒い。座布団が欲しい。

「幽霊だよ」

考える間もなく即答する少女。俺って霊感あったんだねえ。見えちゃってるよ。しかし、幽霊といっても、いたって普通だ。体は透けてないし、足もある。言われなければ幽霊だとは思わなかっただろう姿だ。

「で、俺はここに住んでもいいのか？」

細かいことはあえて聞かないことにした。今はとても疲れてるか

らな。色々あったし。
「うん！　いいよー」
「そうか、ありがとう」
「あ、私は麻衣っていいます！　永遠の十六歳です！」
元気よく名乗る麻衣。
そりゃ死んでるからな。十六だったのか。だとしたら少し幼く見える。
俺も名乗り、永遠ではない歳をついでに教え、
「お前、できればここから出ていって欲しいのだが、駄目か？」
幽霊とはいえ、年頃の少女と一つ屋根の下で暮らすのは、困る。ほら、男には色々とあるし……。
「あー、ごめん無理」
拒否られた。
「私、この部屋からでられないの」
「何故だ？」
「わかんない。何ていうかね、この部屋から出ようとすると、バーンって壁にぶつかって出られないの」
言って、麻衣は両手を目一杯広げた。バーンっと壁にぶつかるのを伝えたいらしい。
壁ね、もしかしたらあれだ、
「地縛霊って奴か」
「まあ、そんな感じかな」
あっけらかんと言う麻衣。つか、部屋からでれないってことは強制的に同居生活じゃないか。幽霊だが。
「まあ、そんなわけだから、これからよろしくねユウくん」
いきなりあだ名とは馴れ馴れしい奴だ。けど悪くはない。
「ああ、よろしく」
と、何となく手を出してみる。麻衣も手を出し、握手しようとするが……俺の手をすり抜けた。麻衣はケラケラと笑い、
「ま、霊だからねー」

幽霊だということが実感できたな。カメラには映るのか気になってきた。

「じゃ、俺寝るから。そこどいてくれ」

だが俺は今、睡魔と戦闘中だ。ここ数日間まともに寝てないからな。おまけに満腹だ。睡魔も元気を取り戻したらしい。

「えー！　もっとお話しようよー！」

不満顔で麻衣はフワリと周りを飛びながらブーブー言うが、俺は無視して布団をひく。

「これから長い付き合いになるんだからさー、お互いのこと色々知りたいでしょ？」

いや、対して知りたくない……訳でもないが、今は眠い。快適な睡眠をしたいんだ。つい数時間前までは睡眠が死の淵に直結していたし。

俺は部屋の真ん中に敷いた布団に潜り、睡魔に白旗を振り降伏を願い出た。

すぐにそれは認められ、俺は深い眠りへと落ちていく。近くで誰かが何か喚いてるのを気にせずに。

次の日。俺は朝日を瞼越しに感じて目を覚ました。そういえば窓は東側にあったし、カーテンもなかったんだよな。今度買うか――って、金がないんだよな……。

「……あ」

俺が目を開け、眩しさに目を細めた後、隣を見ると、麻衣が寝ていた。一つの布団を分け合ってたためか、体が半分はみ出していて、和服が微妙にはだけて色気が……とか、客観的に見ると羨ましがられるだろう光景だとか……よりも、幽霊って寝るのかってのと、朝でも居るのかというのが気になった。

そいえば、今何時だ？　部屋には時計もないし、荷物にもない。

季節と陽の高さから考えるに七時ぐらいか。
「ん……」
眩しさからか麻衣は布団で目を覆う。思い切り引っ張った所為で、頭が完全に布団に覆われたが、その分膝上までが外に出てしまっている。和服もいっしょに引っ張られてしまい、白く綺麗な足が露わになっている。
布団から生足が出てるという奇妙な状態だ。これを夜中に見たならばまさに恐怖しただろう。

「勇気さん、起きてますか？」
ノックから一拍置いて、聞こえたのは雪乃さんの声か。確か朝食を用意してくれると言ってたから、わざわざ呼びにきてくれたのか。
「んー……」
その音と声に反応したか、布団から声が漏れ聞こえた。
俺は立ち上がり、ノソノソと歩きドアを開けた。
「おはようございます」
互いに朝の挨拶を交わす。
「朝ご飯の用意できてますよ」
「ありがとうございます」

礼を言い、雪乃さんの部屋におじゃまする。
「あ、ユーキおにーちゃん。おはよー」
「おはよう」
まだパジャマ姿の雪香が食卓の前に座っていた。待っていてくれていたんだな。食卓の上には、ご飯に味噌汁、焼き魚、漬け物と理想的な朝の食事（和風）がそこにはあった。実に美味そうだ。
人数分敷かれた座布団に座り、偶然にも雪乃さんが隣に座った。それだけで味が何倍も美味く感じるだろう。もっとも雪乃さんの料理が美味しいのは昨日の鍋で証明済みだ。鍋なんて具材をぶち込むだけかと思っていたが、出汁が一番重要なのだと昨日わかった。

「あ、勇気さん。後でこれを各部屋に持っていってくれませんか？」
雪乃さんの手料理を美味しく食した後。そのまま図々しくもくつろいでテレビを見ていると、雪乃さんがＡ４サイズの紙を渡してそう言った。受け取った紙には、町内で起きた事件らしきことなどの近況が書かれている。広報のような物だろう。この辺りに、他に人が生活してそうな場所はなかった気もする。文字だらけだし、詳しくは読んでないが。
「大家さんがいない間は私が代わりに配っているんですが、挨拶にもなりますし、勇気さんが配ってはどうかと」
まあ、近所付き合いは大事だな。何より雪乃さんの頼みを無碍にするわけにはいかんのですよ。

渡された紙を持って早速訪れたのは、二〇二号室。俺の隣人だな。近所付き合いの上で最も重要なポジションだろう。ここでしっかりと挨拶しとかなければ、最悪殺人事件になるかもしれん。考えすぎだとは思うが。
「ユーキおにいちゃんどうしたの？　入らないの？」
視線を下に移すと雪香がいた。純朴な瞳で俺を見ている。勝手についてきたんだが正直助かる。
多分ここの住人と知り合いの雪香がいれば、話しやすくなるからな。雪香がいなかったら、話題に詰まり、気まずい空気になりそうだ。そして何よりも重要なのは、
「雪香ちゃん、この部屋の、みくり……さんってどんな人なんだ？」
部屋番号の下のネームプレートに書かれた魅栗という名前を読んで、雪香に聞いた。多分読み方は合ってるだろう。
雪香にあらかじめどのような人物か聞いておけば、心の準備がで

きる。昨日は黒木とかいうオッサンがでてきて、怖い思いをしたからな。

「えっとね、髪の毛がこんな風に長く伸びてて、たまに鎌もってたりしてる人かな」

聞かなきゃよかった。

鎌持ってるって明らかに危ない人じゃん。万が一草狩りが趣味だったりするのかもしれないが、今の季節だと草はあまり生えんし。

そして、雪香ちゃんのジェスチャーによると髪は顔全体を覆い隠すように伸びてるらしい。某ホラー映画の幽霊をイメージした。

人の首を狩ってます。って感じの人じゃないだろうな？　血走った目とかしててさ嫌だよ、そんな隣人。

「でもいい人だよ」

鎌持ってる人にいい人がいるのか。イメージが沸かないな。でも、雪香がそう言うんなら信じるしか……だがしかし、鎌がな……この部屋は後回しにしようかな。

「黒いお姉ちゃーん、いるー？」

「あ……」

何してんの雪香ちゃん。ノックしないでくれ。出てきちゃうから。

逃げようか考える間にドアが開き、

「おはよう雪香ちゃん……誰？」

「……」

まさに絶句したね。

第三話・魔界荘へようこそ（3）

二〇二号室の住人は、視線を降ろして雪香に挨拶をしてから、視線を戻し、見かけない人物（俺）を見て率直に『誰？』と聞いてきた。

俺は衝撃で数秒ほど絶句したが、とりあえず、

「隣に住むことになりました、日野です」

自己紹介をして、雪乃さんに渡された紙を一言説明して、手渡した。住人は空いてる方の手でそれを受け取り、軽く目を通すと、視線を俺に戻し、

「そう。魅栗沙羅（みくりさら）。よろしく」

淡々とした口調で沙羅さんは眉をピクリとも動かさない無表情のまま名乗る。雪乃さんや雪香とは違う妖艶さを纏う雰囲気といい、どこかミステリアスな感じの女性だ。

黒髪が闇に流れる滝のように膝裏まで伸びていて、屈めばで地面に着きそうだ。シャンプーも大変そうだな。目鼻立ちが整った凛とした顔立ちをしていて、美しい妙齢の女性だ。

雪乃さんといい、そのような美人が隣人なんて実に喜ばしい状況なのだが、この人は雪香の言うとおりの人物だった。

「お姉ちゃん。これから仕事ー？」

無邪気な声で雪香が聞いた。

沙羅さんは片手にあるモノを一度見て、

「ええ、一件だけ」

一件って何？　セールスか何かですか？　そうであってほしい。

片手に持つモノを売りに行くんですね。貴方が持っているその鎌を。

沙羅さんが左手に持ってる鎌。それは草刈りとかに使う鎌のように、軽く振れるほど小さくはなく、長身痩躯な沙羅さんの身の丈をゆうに越して、目算、二メートル弱ぐらいはあるだろう。黒い柄の先には三日月のように弧を描いた銀色の刃が付いている。

さらに沙羅さんの格好――シャレじゃない――は、雪香が『黒いお姉ちゃん』と形容するように黒いノースリーブワンピースを着ている。露出した肌の部分は雪のように白く、それと相まって実に美しく感じる。

そんな黒が多い姿と鎌から、俺は沙羅さんの仕事とやらの憶測をした。それは非現実的だったが、この寂れた建物と何故か俺に見える幽霊、黒木さんの強面などからしてもしかしたら『ありえる』と思った。思ってしまった。

答えを聞いてみよう。

「仕事って何をしてるんですか？」

俺の問いに、沙羅さんは短く答えてくれた。

「死神」

それは俺の憶測と一致した。

少しの間互いに沈黙。

「急ぐから。詳しく聞きたいのなら、また今度」

やはり淡々と沙羅さんは言い、ドアが閉められた。まばたきすらしてなかった気がする。

「雪香ちゃん、今の本当なのか？　死神って」

雪香なら嘘は言わないだろう。まあ、実際沙羅さんの言葉で結構信じてしまってるが。頭が毒されてきたかな。

「ホントだよー。お姉ちゃんが仕事してるの見たことあるもん」

仕事ね、子供に見せていい光景なのか？　あの鎌で首を……想像しちまったよ。血しぶきが飛んでたよ。

いや、さすがに常識はあるだろうし、子供にそんな光景は見せないだろう。死神という仕事がどのようなのかは知らないが、とりあえず雪香に見せても大丈夫な仕事らしいな。

次は二〇一号室か。
もう何が来ても驚かないという覚悟はできている。何せ隣が死神だからな。
「この部屋はどんな人が住んでいるんだ？」
だが、雪香に聞いとく。
だって不安だし。心の準備というのがやはり必要だ。
「面白い人だよー」
アバウトだな。明確な情報じゃないぶん不安倍増したよ。
ま、死神以上の危ない人は出てこないだろ。名前も荒井だし普通だ。危険そうだったら、即刻逃げればいいだけさ。近所付き合いなんて知らん。

呼び鈴を突くと、至って普通なピンポーンという高い音が鳴り、少しした後に『はい』という男の声がドアの向こうから聞こえた。
俺はいつでも逃げれるように、盗塁を試みるランナーのように足を一歩自室に踏みだし、開くのを待った。
「はい。どちら様で？」
出てきたのは二十代中頃くらいの青年。若手俳優として連ドラの主役でもしていてもおかしくない顔立ち。オシャレな眼鏡を掛けている。知的で誠実そうな外見だ。
「おはよー、シュウくん」
元気良く片手を挙げ、雪香が挨拶する。荒木さんは屈んで視線を合わせて、
「雪香ちゃん。おはよう」
穏やかな笑みを浮かべ挨拶をする。雪香はさしずめこのアパートのアイドルといったところだろうか。誰とでも仲がいい。
俺は簡潔な紹介と雪乃さんに渡された紙を渡した。
「荒木修です。よろしくおねがいします」
と、荒木さんは丁寧に言い、手を差し伸べ、俺も手を出して握手を交わした。触れるから幽霊ではないな。

しかし、落ち着いた物腰の青年といった印象で、雪香の言う『面白い人』とは思えないな。付き合いやすそうな人で安心したが。そのナリでお寒いギャグでも言ったりするのか？

「シュウくん今日はこの性格なんだね」

え？　どういうこと？

「ああ、それは昨日までだったからね」

意味不明な会話をしているが、下手に突っ込まない方がよさそうだ。

「じゃ、俺は次の部屋に行きますんで。それじゃ」

「はい、これからよろしくお願いします」

荒木さんは丁寧に頭を下げ、ドアを閉めた。

「今日は面白い方じゃなかったみたい。残念だったね」

残念だったというか……いったい荒木さんにどんな秘密が隠されているんだか。いや、知りたくはない。危険な香りがするから。

二〇一号室を手早く後にし、階段をおり、やってきたのは一〇二号室。一〇一号室は空室だと雪香が教えてくれた。

そして、この部屋に入る前にネームプレートを確認したが、今回は雪香に聞かなくてもどんな人なのか楽に想像できた。

『天使』とネームプレートに書かれていたし。

多分『あまつか』と読むのだろうが住んでる人は文字通り『てんし』だと推測する。死神もいたんだし天使がいてもおかしくはない。いや、ここに来てからがおかしいのかもしれないが。

さて、天使とやらにお目通り願おう。俺は呼び鈴を押した。ちなみに俺の天使のイメージは美少女しかない。いつも笑みを絶やさない可愛い子だ。

「……留守か？」

一度押しても反応がなく、間隔を開けてさらに二度押したが、反応無し。

「まだ寝てるのかなー」

雪香が言い、年相応の小柄な身体を懸命に伸ばして呼び鈴を押す。

いや、寝てんのなら寝かしといてあげたほうがいいんじゃないか。

いないかもしれないし。仕方ない、郵便受けに突っ込んどくか――と、ドアに一歩近づいた時だった。

「うるさいっての」

その瞬間衝撃が俺の鼻に走った。茶色の壁、いや、ドアが迫ってきたのだ。

同時に透き通った、けど明らかに不機嫌だとわかる女の声が聞こえた。

「ユーキおにいちゃん、だいじょーぶ？」

鼻を抑える俺を心配そうに見つめる雪香。まだ痛いが、

「まあ、平気だ」

とりあえず鼻血は出ていないようだし。

「何なの雪香。朝っぱらから。こんな変な男連れて」

女は謝ることもせず、その美麗な顔に不機嫌な皺を眉間に刻んでいる。半開きな目と寝癖で自由に毛先が跳ねたブロンドヘアー、明らかに寝起きだと分かる。格好も淡いブルーのキャミソールと、下着（パンツ）。豊満な胸のふくらみの頂点には突起が見える……ブラはしてないな。イカン。なるべく視線は顔に向けるようにしよう。

まあ、俺も天使さんの立場だったら不機嫌になるね。眠りを妨げられるのは誰しもが嫌だろう。さっさと用件を済ました方が良さそうだ。

「二〇三号室に住むことになった、日野勇気です。あと、これを配りに」

紙を差し出すと、天使さんは頭をグシャグシャ掻きながら気だるそうに受け取り、

「あっそ。じゃ」

ドアを閉めようとするが、そうはいかん。どうしても聞きたいことが残ってるんだ。俺はしつこいセールスマンのように素早く足をドアに挟み、閉まるのを妨げた。

「何のつもり？」

力づくで閉めようとしないでくれ。靴越しでも痛くなってきた。

馬鹿力だな。

「アンタは天使なのか？」

「それが何？」

と、天使さんはあっさりと認めた……よな？

「いえ、別に……」

更に天使さんの表情は不機嫌な色合いを濃くしていく。顔もそうだが、威圧感といえばいいのか、これ以上口を開けば殺されてしまいそうな雰囲気を漂わせている。

「じゃ、さっさと消えて」

そう言い放ち、天使さんは俺の足を強引に蹴ってどかし、衝撃で変形しそうなくらい勢いよくドアを閉めた。

アレが天使かよ……容姿以外は天使のイメージとはかけ離れてるよ。よく形容されてるような『天使の微笑み』は全くなし。

まだ決めつけるのはよくないか、寝起きだしな。仕方ない。普段はいつも微笑みを浮かべているに違いない。そう思わせといてくれ。

一〇三号室は留守で、雪香に訪ねたところ、大家の部屋とのこと。帰ってきたらしっかりと挨拶をしとこう。今んところ勝手に住んでるようなもんだし。

一〇四号室は黒木さんの部屋で、日曜だしきっと寝てるだろうと、あのオッサンなら昼頃まで寝てるだろうと考え、郵便受けにつっこんできた。ちゃんと人のことを考え、配慮できる俺カッコイイ。決して、黒木さんの顔が怖いからとかではない。

「おつかれさまでした」
雪乃さんの部屋に戻り、雪乃さんが容れてくれたお茶を飲んでいる、温まります。
そういえばこの部屋、冬だというのに暖房器具がない。部屋の温度は外気と差があまり変わらないと感じる。
なのに、雪乃さんも、雪香も、寒がる素振りは一切見せない。雪香にいたっては半袖Tシャツに膝丈のスカートだ。見てる方が寒々しくなる。
この部屋で唯一暖がとれるお茶を一口飲み、俺はここまでに蓄積していた疑問を雪乃さんにぶつけた。
「雪乃さん。このアパートの住人って、あの……おかしな人が多くないですか？　死神とか、天使とか――」
他にも強面の人とか、幽霊少女とかもいるが。
俺の問いに、雪乃さんは口元に手を当てクスッと笑い、
「勇気さん、このアパートの名前は見ませんでしたか？」
名前？　すいません。全然記憶にありません。ここに来たときは腹が減ったりしていて、注意散漫でしたから。
「えっと……覚えてませんね」
雪乃さんはもう一度クスッと笑う。
「魔界荘。それがここの名です」
「……まかいそう……」
オウム返しにつぶやき、思考する。まかいって、ゲームとかでよく登場する『魔界』のことだよな。他に当てはまりそうな漢字が見つからんし。
ゲームの魔界は大体、敵の本拠みたいなのが多く、魔王やら悪魔やらがいる世界か。
そしてこのアパートが魔界荘。
名前とは程遠いな。オンボロ荘って名のほうがしっくりくる。
「で、その魔界荘って名前と住人に何か関係があるんですか？」

「ここに住んでいる人は魔界から来ているんです」

……どうやら。俺はまだ驚く必要がありそうだな。

と、まあ、雪乃さんが放った言葉にしばし言葉が詰まったりしたわけだが。割とポテトチップスうす塩味のようにアッサリ信じちまってる俺がいる。昨日今日で耐性がついていたからかもしれない。というより、元々俺は、テレビの超常現象を特集した番組は信じてはいないが、世界のどこかじゃそういう場所に繋がってたりとかあってもいいじゃないかと思っていた。

マンホールに落ちたら、見渡す限りの草原が広がっていたり、トンネルの向こうに温泉街があったりとか。

さすがに日本のどこか（山奥とか）に魔界村という村があって――パンツ一丁のオッサンを想像した――その村から集団でこの町にやってきた……何てことはないだろう。

万が一の可能性としてドッキリというのも考えられるが、一般人にしないだろ。するとしたら、麻衣はなんだ？　ホログラム発生装置を使って裏で声優が声当ててたのか？　雪乃さんに魅栗さんや天使さんに、その他は劇団員か？　だとしたら俺はその劇団で共に汗水流したいと申し出る。

そして大オチとしては大脱出マジックばりの大爆発があるかもしれないな。この辺りじゃ、火薬使っても近所迷惑はないだろうし、この建物が元々解体予定の廃屋であってもおかしくはない。

まあ、そんなことはないし。あったとしても相応の対応すればいいだけだ。素人レベルで最良のリアクションを取れる用意はしておくか。

で、雪乃さんがいう魔界とは正真正銘……というのもおかしな話

ではあるが、異世界。この世界ではない、あるいは、地図には絶対に載ってはいない場所にあるであろう、魔界のことを指しているんだろう。

「……魔界ですか」

「はい」

雪乃さんが頷く。

「どうしてですか？」

「そうですね……」

と、雪乃さんは上を見て考え込む。魔王の世界征服のためとか言うんじゃなかろうか。ま、そうだとしても俺は雪乃さんの味方をする。この世界にはあまり執着はないし。

「何となく……ですね」

雪乃さんはニッコリと微笑み、あっさりとした答えた。いいのかよそんな理由で魔界を飛び出して。

「魔界もいい所ですけど、こちらの世界もいい所でしたから」

……いい所ね。この世界がですか。雪乃さんには悪いが俺はあまりそうは思わないな。ま、価値観は人によって違うけどな。

「あの、雪乃さんは何者なんですか？」

何となく想像はつくが。名前から。

「雪女。ですよ」

イタズラっぽくフーと息を吐く雪乃さん。その息は小さな吹雪のようにキラキラとした氷つぶてが見える。雪乃さん共々美しい光景だ。

「じゃ、麻衣も魔界から来たんですか？」

俺の部屋に住み憑いてる、幽霊少女のことも聞いてみる。麻衣も魔界の住人だったら、死者は魔界に行くことになるということになるのか。

「いえ、数十年前からあの部屋に住み着いたんです。魔界の方ではありません」

数十年って、幅広いな。魔界では人間とは寿命とか違うのか？

というか、雪乃さんは何歳だろう。いや、そんなことより、
「あの、ホントにここに俺住んでもいいんですか？　魔界の住人じゃないんですけど」
「構いませんよ。普通のアパートですから。魔界荘って名前なんで、そのような人が集まってるだけですから」
それを聞いて安心した。追い出されずにすみそうだ。
「でも、前に隣に住んでた方は一週間で引っ越しましたけど。その前の方は一ヶ月……」
恐らくは見えなかったんだな。
見えずに麻衣と過ごしていたんなら何かと騒がしそうだ。天真爛漫っぽいし。

「確かに魔界荘だ」

建物の正面。俺の背丈ぐらいの高さの塀に、長方形の板が張り付けられ、『魔界荘』と書かれている。長年風雨に曝されたんだろう、板は黒くくすんでいる。
何気なく板の表面を撫でる。指が汚れた。
俺はこの魔界荘で新たな人生を始めようと心に誓った。

第四話・魔界荘での生活

一時的にだが、天涯孤独の放浪人になりはて、いずれは野垂れ死にを迎えるはずだった俺が、魔界荘というアパートに住むことになって一週間が過ぎた。

魔界荘の住人はいい人ばかりで、特に隣人である雪乃さんにはかなりの世話になっている。

朝食を用意してくれるし。

昼食も用意してくれるし。

夕食も――

「このままじゃ、マズいよな……」

これだと、以前の生活と変わらない。ひきこもる部屋が変わったのと迷惑をかける相手が変わっただけだ。というか、雪乃さんの収入源も未だ謎だ。

「何がマズいの？」

大工の黒木さんの手作りちゃぶ台に腰掛けながら麻衣は首を傾げた。

幽霊はいいよな。飯も食わなくても死なないし――いや、既に死んでるか――

「バイトでも探すかな……」

不安だがな。今まで経験ないし。

「バイトって、お金稼ぐために働くことだよね。ユウくんにできるのー？」

馬鹿にするな……と言いたいが、不安だらけだ。とにかく、町にでも行ってみるしかないか。

と、部屋をでると、雪乃さんに会った。いつもながら美しいその姿は、いつ見ても飽きない。とりあえず、雪乃さんに事情を話したところ、

「あ、それでしたら――」

魔界荘はこの町の外れにあり、周囲には人が住んでいるような建物は少ない。

ここから、人通りのある通りまでは、三十分はかかる。駅まではもっとかかる。立地条件は最悪だ。その分家賃はタダ同然らしい。大家が未だ帰ってきてないから詳しくはわからんが、雪乃さんは何年も払ってないと言っていたな。

「……ここか」

雪乃さんの教えてくれた建物は、『魔界カフェ』と看板が掲げられていた。……直球だ。魔界を隠すつもりは更々ないらしい。

この店は、雪乃さんの友人が経営してるとのことだ。実際、接客業というのは苦手……だと思う。経験はないが、得意だったら今までの人生、こうはならなかっただろうし。

でも、やらないとな。このまま雪乃さんに世話をかける訳にもいかんし。メイドでもなんでもやってやらあ。

店内はいたって普通の喫茶店といった印象。

人通りもまばらの道に面した窓からは、道路を挟んで、今は身を纏う葉がなくなり裸になった街路樹が望め、その景色を活かすようにテーブルが並べられている。が、椅子はまだ壁端にまとめて置かれている。

まだオープン前らしい。

「すいませーん」

誰も人が見あたらないし、カウンターの方に声をかけてみる。カウンターの奥にある棚にはコーヒー豆が入った容器がたくさん並べ

られている。俺は違いがわからん男だから詳しくはないが。
「はーい」
間延びした声が店の奥から聞こえ、少ししてエプロン姿の女性が出てきた。水晶玉のような大きな瞳でこちらを見て、
「すいませんー。まだ開店してないんですよー」
癒し効果抜群の微笑みを浮かべる女性。この人が雪乃さんが言っていた友人だろう。見た目からして間違いはない。
「あの、ここでバイト募集してると……雪乃さんが」
女性は小さく小首を傾げる。その仕草に俺は萌えという感情が実在することを実感する。だって耳がピクリと……。
「雪乃さん……？」
と小さくつぶやき、少しして、
「あ、もしかして、雪乃って魔界荘の――」
俺は頷き、
「そうです」
それを聞いて女性は、耳をピンと突っ立て、カウンターから出てきて、
「初めましてー、このカフェの店長の猫俣なつき（ねこまた　なつき）ですー」
深々と礼をする。俺も自己紹介をして、
「えっと、ここで働きたいんですが」
「はいー。雪乃の紹介ですしー、オッケーですよー」
「え……あ、ありがとうございます」
案外あっさり決まったな。雪乃さんに感謝しなきゃな。一つ聞いとこう。
「店長の、その耳と尻尾は……」
「あ、コレですかー」
と、頭に対になるように生えた三角形の二つ耳と、正面からだと見えないが尻のあたりから生えているだろう、細長い茶色の尻尾を動かした。尻尾は二つ見えており、それぞれ自由に動かせるようだ

な。

店の名前や、魔界荘の住人と同じで名字などから考えるに、店長は猫又――確か尾が二つに分かれている猫の妖怪――だろう。

「それ隠さないんですか？」

「え、何でですか？」

意味が分からないと、キョトンと首と耳を傾げる。その仕草がカワイくてすごく癒される。

「あ、いや、別に」

まあ、本人が気にしてないならいいか。いまの世の中だと、注目はされるがコスプレだと思われるだけだろうし。

それから、なつきさん（名前で呼んで欲しいと言われた）から簡単に説明などを受けて、家路に着いた。

「バイト、決まってよかったですね」

「雪乃さんが紹介してくれたおかげです、ありがとうございます」

俺は今、雪乃さんの部屋で昼食を食べている。見た目は普通のチャーハン。一口食べれば、中国人もびっくりの味だ。『ウマいぞぉー！』と叫びたくなる美味さだ。

「ユーキおにいちゃん、バイトするの？」

「ああ、一週間後からだけどな」

雪乃さんの娘、雪香がほっぺに米粒を付けながら聞いてきた。将来は雪乃さんのような美しい雪女になるだろうな。

「頑張ってくださいね」

「あ、はい」

その柔らかな微笑みで言われたら、オリンピックで金メダル取れと無理難題だされても頑張れますよ。

「バイト決まったんだ。よかったねユウくん」
雪乃さんの部屋で昼食を食べた後、俺の部屋に戻り、ちゃぶ台に寝転がりながら本を読む麻衣に報告した。今後じっくり、マナーについて話し合いたいと思ってる。
俺も読みかけの小説を手に取り、畳んだ布団をクッションにし読み始めた。二件隣の荒木さんから借りた本だ。荒木さんはアシュラとかいう妖怪らしく、一週間ごとに性格が変わるらしい。だから、今週は顔を合わせないようにしようと思う。怖いから。
読んでいる小説は今人気の推理小説だ。実に面白い。
そして、今恐れているのはこの小説の下巻を今読んでいる麻衣の存在だ。数日前、この口軽幽霊に、別の推理小説のネタバレをされ、続きを読む気をゼロにされたからな。今回は麻衣が読み終わった後、どうにかして口封じしとこうと考えてる。

さて、暇を持て余した俺は夕方、雪乃さんの作る夕食の放つ鼻孔と腹の虫をくすぐる匂いで目を覚ました。
麻衣は押し入れて寝息を立てている。押し入れの上段には布団が敷いてあり、麻衣はそこを寝床にしている。雰囲気が気に入っているらしい。某猫型ロボもそんな気持ちで押し入れで寝ているのだろうか。
ちゃぶ台の上には、もう読むことはないだろう推理小説が置いてある。
まさかあんな意外なトリックであの人が犯人だったとはな。麻衣よ、口頭で教えてくれてありがとう。俺はもうお前の近くで小説は読まないよ。
トントン。

と軽く二回壁を叩く音が、夕食の合図になっている。そのうち自炊でもしないとな。

雪乃さんの料理は『美味い』という単語以外は必要ないな。今日の夕食も美味でした。

「ユーキおにいちゃん。お風呂いこー」

という言葉がだいたいお風呂に行く合図だな。そして雪乃さんと三人並んで行くのがいつもの光景になりつつある。

ま、別に雪乃さんと同じ湯につかるわけではない。いや、入れるのなら一緒に入りたいが。

魔界荘はボロい見た目通り、部屋も六畳一間だ。トイレはあるが、風呂はもちろんない。そのため、魔界荘から数分歩いた銭湯に行く。その名も『地獄湯』最初は赤い湯がゴポゴポ煮えたぎっているのを想像したが至って普通の銭湯だ。

普通のちょうどいい温度の湯。

普通に湯上がりに飲む牛乳が置いてあり。

普通に番台には、とんがりコーンのような角が額に生えてる肌が青い鬼が座っている。

ま、利用するのは魔界荘の住人だけだからな、普通だ。どうやって経営が成り立ってるのかは謎だが。

「おう、いらっしゃい」

相変わらずいい肌の色をしてるな。

ちなみにここの銭湯はカウンター式だ。俺のなりたい職業トップ10にランクインしている番台さんはこれとは違う形式だ。

男湯には誰もいない。

荒木さんも黒木さんもここをよく利用していて、二人の裸に、俺は自信喪失した。魔界は恐ろしいと感じた。

「あ、黒いおねーちゃん」
「こんばんは。沙羅さん」
ベルリンの壁よりも乗り越えるのが困難な壁の向こうから声が聞こえた。どうやら先客に俺の隣人の死神、魅栗沙羅さんがいたらしい。
「雪乃さんに雪香ちゃん、こんばんは」
相変わらずの感情の薄い淡々とした口調だな。
魅栗さんのスタイルは抜群だ。いつも着ている黒いワンピースから伸びる手足の色白さから察すると、芸術作品のように美しい身体なんだろう。想像することしかできないが。
俺の観察眼によると、一〇二号室に住んでる、天使の天使（てんし）さんに次ぐ胸の大きさだろう。それにしても紛らわしい名前だ。
雪乃さんは日本人体型だが、雪のように白い肌が美しい。
この世に法律という壁がなければ、今すぐにでも向こうに広がる桃源郷に行きたいと考える俺はおかしいでしょうか。

風呂上がりの牛乳というのは何故こんなに美味いのだろうか。それより、この白い液体は牛の乳なのだろうか。魔界の家畜から搾り取った怪しい液体ではなかろうか。
いや、考えるのはよそう。味は慣れ親しんだ味だし、何よりタダだ。この銭湯の資金源がわからない。
「いいお湯でした」
と、雪乃さんたちが女湯から出てきた。まだ湿った髪が艶っぽい。
魅栗さんの長い髪を見てると、ホラー映画を思い出すな。井戸から出てくる奴。髪がまだ乾ききってないから余計に。

部屋に戻ると、麻衣はまだ寝ていた。というか一日の半分は寝ている。まるで猫だ。

昔の俺も、そんくらい寝ていたな。暇だったから。あと、このまま目が覚めなければいいとも思っていた。

麻衣と俺は似ているのかもしれない。

ずっと部屋で時を過ごしている。

それを、自主的にするか、強制的にするかの違いだな。

この魔界荘での生活も慣れてきたな。今は俺を追い出してくれた親に感謝したくなるくらいに。

バイトが始まるまでの一週間何をして過ごそうか。ここでなら暇になることはなさそうだがな。

第五話・魔界カフェへようこそ

魔界カフェ。
このネーミングだけを聞くと、いわゆるイロモノな店が想像する。
中に入ると、薄暗い雰囲気で、目が光る鹿の頭の剥製とか飾られていたり。
そして、ウェイトレスが黒い羽を背中につけ、ゴスロリな服を身に纏い、先端が矢尻みたくなってる尻尾とかつけて、悪魔に扮していたり。
客が来ると『お前を蝋人形にしてやろうか』的な閣下みたいなことを言って出迎える。出るときは……思いつかん。
メニューは、ドリンクはトマトジュースなどの赤系だな。ランチは、よく分からない生き物の血が滴るステーキとか。

多分、一時話題にはなるが、一発ネタで流行った芸人並に廃れるのが早そうだな。

が、そんなダークな想像をし、興味本位で入った客はドアを開けた瞬間、期待はずれという感想を頭に浮かべるだろう。
中はいたって普通。
落ち着いた雰囲気の喫茶店だ。
そもそも外装からすぐに分かるが。
ウェイトレス、ウェイターは普段着に紺色のエプロンの身に着けたのみ。客が来ても『いらっしゃいませ』だ。
メニューは、コーヒーが色々と種類豊富らしい。俺にはよく分からんが。あと、そんなコーヒーに合うケーキなどがある。ランチメニューもそれなりに豊富だ。
そんな名前以外は普通の魔界カフェでの初バイト。人生でも初だ。
はっきりいって不安だ。

「ではー、あと十分したら開店ですー。頑張りましょー」
店長の猫俣なつきさんが言った。
名前以外は普通といったが、なつきさんも異端だ。魔界から来た人物だし。まあ、今の俺にとっちゃ、普通と表してもおかしくないくらい生活に馴染んではきているが。
「ねえ、なつきさんのアレ……ホンモノかな？」
と、鼻歌を奏でながらカウンターを丁寧に拭くなつきさんの髪からピョコンと飛び出したアレを指し、訊ねてきたのは、三神莉子（みかみりこ）。バイト仲間になる。
今時の女子高生はレベルが高いが、三神さんはその中でも上位に位置するだろう。俺もツキが上がり始めたかもしれん。
「……さあ。趣味じゃないか？」
さらっと俺は言うが、アレは本物だ。見た目にはただの萌え系のコスプレにしか見えないが。実際萌えるし。
「でも、尻尾とか動いてるし、耳も……」
「最近のはリアルなんじゃないか？」
しかし、なつきさんのネコミミと尻尾はよく動く。今だって耳をパタパタと動かしてるし。多分、開店が嬉しいんだろう。感情がわかりやすいな。

今度は、耳が伏せられ、尻尾はただの飾りのように垂れ下がっている。
「来ませんね……お客さん」
三神さんの言うとおりの状況だ。
開店から二時間。お客ゼロ。店には閑古鳥が鳴いていた。
まあ、宣伝は全くなかったみたいだし、店の外にも『本日オープン』などと伝える看板もない。いわば通常営業だな。
しかし、一人も来ないとは……店名に惹かれて入る客くらいはい

るかとも思ったが、この街の人はまともな感性を持っているらしい。魔界カフェなんて怪しい店名を掲げる店は避けるということか。

つか、そろそろ魔界荘の住人くらいは来てもいいと思うが。特に雪乃さんは知り合いの店のオープン日だし、来てもおかしくはないんだがな。

と、考えていると、店内にカランコロンと、ドアにつけられたベルの音が来客を知らせる。俺は視線を音の方向に向け、前日より発声練習した言葉を発しようとしたが、初の客を見て、呑み込んだ。

「……い、いらっしゃいませ……」

三神さんは客を見て、ほんの少し戸惑いを見せながらも、来客を迎える挨拶を発した。

「あらー。黒木さん、いらっしゃいませー」

「おう、今日開店だってな」

「はいー、黒木さんがお客第一号ですよー」

と尻尾をパタパタ左右に振りながらなつきさんはカウンターへと入る。黒木さんもでかい図体を動かしカウンター席に腰掛け、

「おう、日野も頑張ってんな」

「ええ、まあ」

相変わらずの強面だな、近くでみるとまだ慣れない。実際はいい人なんだが。

「コーヒーどうぞー」

なつきさんは慣れた手付きでカップに注ぎ、本日、開店日ということでサービスしているコーヒーを差し出した。

このサービスがあるなら、客は入りそうなものだが、生憎この事を知らせる紙は店内に貼られている。外からだと、注視しないと見れないだろう。何故外に貼らないのかはつっこまなかったが。

「日野くん。あの人？　知り合いなの？」

疑問符が一つ多くないか三神さん。まあ、合ってはいるのだろうが。見た目は肌が赤黒いし、北京原人に見えるかもしれないが、一応は人型だし失礼だと思うぞ。つか、北京原人ってどんなんだっけ

か。
「同じアパートなんだ」
それ以外に答えようがないな。雪乃さんとかなら友人とでも答えるが。
もしくは、もう少し先の――と不純な考えを巡らせていると、またベルが鳴った。俺は同居人の幽霊にウザがられるほどした発声練習の成果を見せようと、ドアのほうへと向き、
『いらっしゃいませ』
三神さんとの見事な二重奏。
「こんにちは、勇気さん」
噂をすれば――って頭の中でしかしてないが、客は雪乃さんだった。
「あ、雪乃さんー、いらっしゃいませー」
「こんにちは、なつきさん」
挨拶を交わし、雪乃さんはカウンター席へと座る。黒木さんの座る席から離れた席だ。まあ、黒木さんは気にしないだろうが、俺があのオッサンの立場だったら傷つくな。天然でやってるのか、わざと離れた席を選んだのかわからないが。
「日野くん、あの人も同じアパートとか？」
勘がいいな三神さん。できれば黒木さんの時と同じ聞き方をしてくれれば、答えを用意してあったんだが。これだと、
「ああ、うん」
としか答えようがないではないか。
「どうですか？　繁盛してます？」
あ……雪乃さん、その問いは、
「……あ、ええ……」
あー、なつきさんズバリ言われて困惑の表情だよ。耳もパタリと伏せてるし、あともう一押しで泣きそうな感じだ。
「そうですか。よかったですね」
ちょ……雪乃さん。言葉の捉え方が百八十度違いますよ。わざと

すか？
「……あうー」
あ、なつきさん……うなだれて、ユラユラと歩いて幽霊のように奥に消えていったな。どうやら精神にクリティカルヒットしてしまったらしい。
「あら？　どうしたんでしょう」
と、首を傾げる雪乃さん。その姿が愛くるしく……おっと危ね。
「トイレじゃないのか？」
黒木さん。あんたも気づいていなかったのかよ。ここは俺のフォローが必要なようだな。
「ちょっと、無神経すぎます！」
え、どしたの三神さん。つか、俺の話すタイミングはどこに消えたんだ？
「え？」「なんだ？」
三神さんに注目する二人に力強く歩み寄り、黒木さんの顔に驚いたか、一歩下がってから三神さんは言い放った。
「まだあなたたちしか、お客が来てないんです！」
そして、店内には時を刻む音がはっきりと聞こえる程静まりかえった。そして俺含む三人は三神さんを見つめ固まった。永劫とも思える時を切り裂いたのは、
「あらー、そうだったんですか」
雪乃さんであった。いつもの穏やかなトーンで場の空気がまた生き返る。
「……莉子ちゃん、ありがとー」
なつきさんが奥から出てきた。目が赤く腫れ上がり、どんだけ泣いていたんだろうか……つか、短時間でよくそんだけ泣けたな。とにかく、耳はピンと天を指してるし今は大丈夫そうだ。
「でも、ダメですよーお客さんに怒鳴っちゃ」
「す、すみません」
申し訳なさそうに三神さんは頭を下げる。この辺はさすがに店長

か。威厳はないが。
「なつきさん」
雪乃さんが声を掛ける。
「はい」
「まだ開店したばかりじゃないですか。これからきっと、お客さんたくさん来ると思いますよ」
柔和な笑みを浮かべた雪乃さんに、俺含め、店内にいた者全てが癒された……と思う。
「はい。そうですねー。これから、ですよね」
「そうですよ。なつきさんの姿は萌えますから、常連客もすぐにできそうですね」
「……萌え？」
雪乃さんの意外な発言に三神さんが声を漏らす。いや、確かになつきさんは萌え要素の宝庫だが。

確かになつきさん、三神さん共に容姿も抜群だし、おまけにタイプが被っていない。二人目当ての客はすぐに付くんじゃないかと思う。俺が客側ならそうなる。だが、まずは客が入る必要がある。
雪乃さん達が去って、一時間。ランチタイム時だ。店内は、
「じゃ、ここ」
三神さんの細い指に挟まれた白石が緑の盤に置かれる。石が置かれた盤面を確認し、
「あ、ちょっ……待っ」
「待ったはなし」
迂闊だった。俺の抗議は流され、盤面の黒石が寝返り、白石が浸食していく。そうか、二手前のは罠だったということか。この女……可愛い顔して大した策略家だ。だが、まだ勝負は分からない。俺の孔明も驚く（悪い意味で）頭脳を見せてやる。

現在、店内には俺と三神さんと、カウンターでカップを磨いているなつきさんしかいない。そして、俺は空いたテーブルを挟んで三神さんとオセロ対決中だ。戦況は白が優勢だ。

オセロはなつきさんが、自宅になってる店の二階から持ってきてくれたもので、何も問題はない。俺が『暇だな……』などと呟いたから、なつきさんが暇つぶしに用意してくれたとかいう訳では決してないと思う。まあ、耳は垂れていたけど。

黒の石を摘み、盤面を眺める。戦いとは一手二手先を読むものだと、誰かがアニメで言ってたから、読んでみる。

例えばここに置くとして、敵はこう返すだろう……そして――と、思案していると来客を知らせるベルの音が数時間ぶりに鳴った。

「いらっしゃいませー」

三神さんがいち早く反応し、立ち上がり来客を迎える。俺は黒石を戻し、盤面を見て、白石を何枚かひっくり返したい衝動で天使と悪魔が戦っていたが、何とか天使が勝利し、振り返った。

「あ……いらっしゃいませ」

とりあえず、義務だし言ったが、客はまたもや魔界荘の住人で、

「案外中は普通なのね」

「……そうね」

天使と死神という、水と油のように交わりあうことのない二人組だった。あくまでも俺のイメージで、実際天使（あまつか）さんと魅栗さんは仲が良く、いっしょに行動してんのをたまに見かける。

「いらっしゃいませー」

遅れてなつきさんが言った。天使さんが綺麗な碧眼でなつきさんを見て、

「へえ。猫又……」

え、マジヤバ。

「あー！　窓際の席でいいですか！？」

思わず天使さんの台詞を遮った。この場には魔界の存在を知らない三神さんがいたから。いや、案外話してもアッサリ受け入れられ

るかもしれんが、まあ、セオリーというやつだ。
「急に大声だささないでよ」
「ええ」
天使さんは不機嫌な表情を浮かべ、魅栗さんは無表情で頷いた。
とりあえず、二人を席に案内し、
「あんまり、魔界がバレるようなこと言わない方が……」
と、小声で忠告した。
天使さんは艶っぽく足を組み、
「別にいいでしょ。守秘義務とかないし」
「……そうすか」
としか言えん。魔界事情とか知らんし。
「ま、自分から言ったりはしないわね。色々と面倒くさそうだし」
「言っても信じないと思う」
そりゃあな。魅栗さんの言うとおり魔界なんて容易く信じられたら、この世界は詐欺が横行するね。……じゃあ、それを信じてる俺は詐欺師の恰好の獲物だな。

「私、イカスミパスタ」
「カルボナーラ」
ちなみにイカスミが天使さんで、カルボナーラが魅栗さんだ。これ以上俺が抱いていたイメージをぶち壊さんでくれ。

その後、魔界荘住人以外の一般人も数人来店し、俺のバイト初日は無事終了。
何とかやっていけそうだな。

店が潰れないか心配だが。

魔界の商品（1）

俺が魔界カフェでバイトを始めて一週間が過ぎた。常連と思しき客が二、三人できたが、まだ暇な時間が多く占める。ちなみに雪乃さんはここまで三回来た。

あと、魔界カフェという名前が呼び水になるのか、魔界荘以外の魔界の住人も度々訪れる。さすがに見た目はなつきさんのようにネコ耳があるとかではなく、至って普通なのが多い。もう魔界って何なんだろうね。この街でもこれだけいたら、俺以外にも魔界の存在を信じてる奴が結構居そうだ。

「日野」

「はい？」

「魔界に興味があるらしいな」

「……あまりないですが」

どこからそんな話になるんだ。

現在魔界カフェの店内には、客が一人。スーツ姿でメガネのイケメンな彼は、見た目は一般人だが、魔界の方から来ました。という人で、ここの常連客の一人だ。

「そうか、興味あるか」

話聞けよ。まあ、お客様は神……彼はエルフらしいから声には出さんが。客は横に置いた鞄から何か取り出すと、それをカウンターに置いた。まん丸い赤い飴玉が入ってる小瓶だ。

「何ですかコレ」

さすがに見せられたら気になる。

「今度、上に提案しようと思ってる製品だ」

「……」

沈黙が続く。いや、だから何なのさコレは。

「えっと……どう使うんですか？」

客は心底嫌そうに溜息を吐き、やれやれ説明してやるか面倒だな。

というオーラと言葉を放った。オラなんだか苛々してきたぞっ。
「これは、名前はまだ決めていないが。一度だけ命令を効かせることができる――おっと、」
話を途中、ピリリリと携帯の着信音が鳴り、客はスーツの胸ポケットから、携帯を取り出して会話を始める。
まだ途中だが、よーく把握した。だとしたらこれはとんでもないステキアイテムだ。
「すまんが急用だ。これは自由に使ってくれて構わん」
電話を終え客は小指でメガネの位置を正すと、そう言って立ち上がり、勘定を置いて店を後にした。カウンター席には飴玉が入った小瓶が残された。それを手に取る。
「一つ命令を……か。だとしたら、凄い商品だ」
おっと、独り言が漏れた。今はなつきさんは奥にいるが、誰かに聞かれていたらマズい。しかし、あの客こんな商品を扱う会社に勤めてるのか……。闇の世界に流通させんのかね。
「まあ、いいか」
とにかくこれさえあれば、俺は新世界の――おっと邪な考えが浮かんでしまった。が、これは試供品サイズなのか飴玉の数は四粒しかない。要するに命令を聞かせることができるのはつまり四回。慎重に使わねば。
「あらー、帰ったんですかー？」
「ええ、急用とからしいです」
サッと小瓶を持つ手を背中に回し、俺はしれっと言ってのける。大丈夫だ全く怪しくはない。
……なつきさんか。相変わらず見る度に癒される容姿――いや、全体から癒しを放っている。歩くマイナスイオン発生装置だ。
だが、俺はまだ一つだけ足りないと思っていた。髪からピョコンと出す三角な猫耳に、感情を如実に反映して動く二本の尾。こういうキャラなのに、しゃべり方はおっとりとした口調だ。それはそれでいいが、一つだけ望みが叶うなら言ってみたいと思ったことがあ

る。

それは、語尾に『ニャン』と付けさせてみたいと。それ即ち、鬼に金棒。メイドにネコミミ。元気っ娘にボク。萌えの宝石箱と化す。

こんな球を七つ集めたら現れる龍にパンティーを要求するくだらない願いだとしても、俺はなつきさんのニャアを聞いてみたい。

飴玉の効果を実証する意味でもやってみてもいいだろう。

「なつきさん、飴いりませんか？　さっき貰ったんですが」

小瓶を見せると、なつきさんはニッコリと微笑んで、

「いいんですかー？」

「はい。もちろん」

と、小瓶から飴玉を取り出して渡す。

飴玉の形をした、一回限りの王様ゲーム強制薬はなつきさんの口の中に入った。

「おいしいですー」

同じシチュエーションで幼い子供が見せるような、満面の笑みを浮かべるなつきさんの口の中では少しずつ飴が小さくなっていってるだろう。

今命令して効果があるか分からんし、全部溶けるのを待つか。仮に今『語尾にニャンを付けろ』と言って効果がなかったなら、俺の胸に秘めてた趣向がバレることになる。

そろそろ、飴玉が溶けた頃合いだろうか。俺の脳内レコーダーを用意し、一息吐いて念願を言おうとした――時だった。

「いらっしゃいませぇー」

ドアが開き、客が来た。

クッ……まさかここで邪魔が入るとは。

ま、いいさ。この客が帰ったら実行するとするか。

ん、待てよ。この客は今カウンター席に座っている。カウンターにはなつきさんがいる。要するに俺を介すことなく注文を直接なつきさんに申し付けるのが普通だろう。

注文するって命令に入らないか？　仮に王様として考えるとメ

イドに『コーヒーを持ってまいれ』と言うことだ。これは命令か否か……。うん、命令に入ると思う。というわけで、先手必勝。俺は素早く客に近寄り、

「あ、ご注も――」

「コーヒーと、ナポリタン」

ぬあああ。間に合わなかったあああ。こんな名無しふぜいに貴重な飴玉を無駄に消費されちまうとは……。

「はいー」

ニッコリとなつきさんは微笑んで注文を承り、テキパキと――というには少々時間の流れがゆっくりとした動作で用意を始める。

しかし、これだと飴玉の効果があったか分からないな。命令じゃなくても客の注文を断るわけがないし。断ったらそれは態度が悪すぎる店だ。効果が残ってるのか確認してみるか。

「あ、なつきさん」

「はい？」

と、冷蔵庫から材料を取り出しながら、なつきさんはこちらを見ずに反応する。

「語尾にニャアと付けてもらってもいいですか？」

客の存在なんていいや。むしろ、なつきさんは語尾にニャアを付けたほうが客も喜ぶだろう。

「え……、何でですかー？」

こちらに大きな瞳を向けパチパチと瞬きをし、耳をピクッと動かしてなつきさんは首を傾げる。

「いえ、……何でもないです。何となく思っただけなんで……」

慌ててそう言い繕うと、頭上にハテナマークを浮かんでるような表情を見せ、作業に戻る。うーん、やはり命令権は客に使われたということか。

「あ、勇気さん。奥に行って玉葱を持ってきてくれますかー？」

「は――」

い。と、答えようとした瞬間、背筋がピンと伸びた。俺の意思に

関係なく。まるで糸に操られているかの如く、手を額に持って行く。
「イエス！　マム！」
これは俺の口から――いや、腹の底から出た、まるで厳しい軍隊で上官の命に答えるときのような張りのある返事だ。何故だ……。
「……お願いしますー」
なつきさんも客も、変貌ぶりに驚いた顔でこちらを見ている。何より俺が一番驚いている。
それから、いつ体に染み着いたのか、足を大きく上げ手を大きく振り、軍隊の行進のような動作で玉葱を取り行き、
「玉葱持って参りました！」
と、玉葱を渡すと再び敬礼。腰を九十度に折ってから回れ右したところで、体に自由が戻ったと分かった。
「ありがとうございますー」
俺は首を捻りながら、空席に座して思考する。小瓶に入った飴玉を眺めながら。これを渡しやがったメガネの客の言葉を思い出してみる。
確か、これが命令を一度だけ利かせるということは聞いたが、具体的な使用方法は聞いてなかった。
頭上に電球が発光するイメージが浮かんだ。手のひらの上に拳をポンッと置く。
どうやら俺はとんでもない思い違いをしていたようだ。なんか漫画の展開にあったのかもしれないが、飴玉を“舐めさした”相手に命令が一度できるという先入観が根付いてしまっていたんだ。
飴だからって舐めるのが使用方法とは限らない。ヘソにでも張り付けるのかもしれない。が、ここまでの展開でよく分かった。
この飴玉は“舐めた本人が一度だけ誰かに命令を下すことができる”のだ。
だから、飴を舐めたなつきさんに玉葱を持ってくるような命令されたから、俺は否応なしに体が勝手に動き、持って行って命令を遂行したら、元に戻った、と。

あのメガネ……、半端な説明しやがって。一つ無駄にしてしまった。

……だが、しかし。

飴玉を舐めた後、誰かに命令を一つだけすることができる。

それだけなら素晴らしい商品だと思う。しかし、一つ気になる点がある。

命令された側は誰もが軍隊調になってしまうのか？　と。

鬼教官には逆らえない隊員のように一々『サー！　イエス！　サー！』と、発言前後に『サー！』を付けてしまう反応になってしまうとしたら、それを女性にさせてよいものか。

例えば、なつきさんがほんわか空気を振り払って、そんな風になってしまう姿は俺としてはみたくない。

だとしたらこれは男に使うのがベストだろうが、俺に男を命令するような趣味はない。

……返した方がいいのかもしれないな。メガネの客には、改良点として従順なメイドのように命令に従ってもらうように言っておくか。

「日野くん、どしたの？　何か考え事？」

カウンター席にて考える人モードに浸っていた所に割り込んでこないでくれ三神さん。それに急にのぞき込む形で端正な顔が近くに来たから、心臓が早鐘のように速まってきた。

「いや、別に」

素っ気なく返し、立ち上がり仕事に戻る。客はいないからテーブルでも拭くぐらいしかないが。

「ん、何コレ？」

「あ」

と、俺の間抜けな声が漏れた。

「これ日野くんの？」

カウンターに置きっぱなしだった小瓶をこちらに見せ、三神さんは小さく首を傾げた。
「……え、あ、ああ。そうだ」
ごく自然に言い、自然に出来の悪い二足歩行ロボのように三神さんに歩み寄り、小瓶を受け取ろうと手を出す。早く返してくれ。
「ね？　一つ貰ってもいい？」
口元を緩ませて笑みを作り、三神さんはやや上目遣いで聞いてくる。
いや、それは危険な代物だからやめたほうがいい。これは毒だから舐めてはいかんぞ――と否定する言葉を練っていると、
「その飴、とっても甘くておいしかったですよー」
「へえ、そうなんだ」
なつきさんの評価を聞いて、三神さんは飴玉を一つ取り出し、口に入れた。
「うん、おいしい。あ、サンキュー」
俺の手に小瓶を置き、三神さんはテキパキとテーブルを拭き始める。俺は再び席に腰掛け、考える。
今から飴玉を吐き出させるのは無理である。んなこと言ったらトンデモ性癖の持ち主だと冷たい視線を浴びるのは確実だ。
じゃあ、素直に効果が発揮されるのを見てるしかないということか。この飴玉の効力がいつまで持つかは分からないが、日常生活の中で命令する事なんて、たかが知れてる。三神さんが優秀なスナイパーにするように暗殺を命じたりするわけはないし。由々しき事態になることはないだろう。
この場にしたって、立場的には店長であるなつきさんに向かって命令――それが『何か取ってきて』だろうとしないだろうし、俺も歳からしたら人生の先輩だ。何か言われたりは――するかもしれない。三神さんに俺を敬う様子がないことは既にタメ口なことで明らかだ。
だが、それでも俺が命令される確率は低いと弾き出した。帰宅ま

での数時間からすると、三神さんの姿が俺から離れてから、飴玉効果が発揮される確率の方が高い。

俺の目の前でなつきさんが、ハキハキと軍隊口調になるのは見ずに済めば後はどうでもいいや。

「あのさ日野くん、何考えてるかは知らないけどさ、真面目に働きなさいよね」

……前フリって大事だよな。

「サー！　イエッサー！」

魔界の商品（2）

いつもより疲労が溜まった体を夕陽に染め、俺は帰路を歩いている。

あれから真面目に働けという、三神隊長の命令によって、普段の三倍増しと自己評価するくらいテキパキした動きでバイト業務をこなし、ようやく三倍は長く感じた時間は終わりを告げた。

あの飴玉の効果で身体は糸に括られたマリオネットのように勝手に動かされていたが、その動きによってもたらされる疲れはしっかりと俺の身体から差し引かれていた。

小瓶から取り出し、陽にかざしてルビーのように輝く飴玉を俺は仰ぎ見る。

残り二粒。

これがどこまで人を操れるかは分からないが、心が黒く染まった奴が効果を知れば、間違いなく人として誤った方向に利用するだろう。

資産家に金を要求したりとかな。銀行強盗より稼げるだろうし、危険もない。

いや、俺はしないよ。俺は金と聞いたら目が小銭になる漫画チックなキャラでもないし、金や地位や名誉をどん欲に求めてはいない。

今が一番いいと感じているからな。

ここまでの生き方が道路脇にある溝の中で人知れず芽を出す誰もが名も知れぬ、か細い草のようだったし、こうして人との繋がりがあるってことの幸せっていうのを、誰よりも感じられている自信がある。

そして何より、俺には資産家と会える場所のあてがない。調べて探すのも面倒くさいし。

だから、この飴玉はとりあえず、ガキ大将にイジメられたメガネくんが、青狸を利用して仕返しする道具みたいな物として、取って

おこうと思う。
　気に入らない人が現れたら、土下座なり、パシリなりさせるとかさ。あいにく、そのような人は周りにはいないが。
「――よっ……」
　そんな考えを巡らせながら飴玉を指で上に弾いた。
　高く上がった飴玉が落ちてくるところをキャッチしてから小瓶に戻すという、カッコイイを勘違いした行動をしようとしたんだが、俺の手は飴玉を掴み損ね、勘違いでもなくカッコ悪い結果に終わった。
　今、歩く道が坂道だったら、どんぐりころころみたく飴玉との追い駆けっこが始まるところだが、傾斜は平坦だ。
　三秒ルールで、三秒以内拾えば大丈夫という認識の元、屈んで拾おうとすると、先に口がパクリと飴玉をかっさらった。
「あら……駄目よアマテラスちゃん。道に落ちたのを拾って食べるのは駄目っていつも言ってるでしょう」
　バリボリと豪快に飴が砕かれる音が犬の口より聞こえる。いや、犬かこいつ？　犬種的にはパグのようだが、丸々と肥えていて、失礼な話、珍種のブタに見える。
「ごめんなさいねえ」
　上品に手を頬に当てながら謝る飼い主に目をやると、納得した。飼い主に似るという言葉は正しいと。恰幅のいいオバサンだ。
「いえ。気にしてませんよ」
　まあ、用途に迷ってたところだし、一粒くらいくれてやってもいい。しかし、これは完璧に無駄にしたと言っていいな。犬に命令なんてできるわけがないし、豚に真珠だろう。
「バウ！」
　ほらな。吠えたところでなんの命令にもならない。バウリンガルでもあれば分かる――
「サー！　イエッサー！」

後日知ったが、犬の伝えたい言葉を認識して、効果を発揮できるらしい。
何の命令を下されたかは、俺は語りたくないが、この犬何様だよと言いたくはなった。

ついに飴玉は一つか。
三神さんの時の置き忘れといい、ブタ犬の時といい、俺はなんたるウッカリさんであろうか。
俺が美少女だったならドジっ娘属性キャラとして萌えられるんだろうが、男がドジをしても怒りを買うだけだろ。更にドジった後に『テヘッ☆』なんてされた時には、殺意が沸くだろうな。
例えばこんな風に、手をグーの形にして頭を軽く小突き、
「……テヘッ」
ちと恥ずかしさが垣間見得てしまったな。舌も出すのも躊躇ってしまった。

「兄ちゃん……何やってんだ？」

俺の身体は石のように、頭に拳を置いたまま固まった。
だが、この見すぼらしい汚れた格好をしたオッサンを俺は知っている。この近くにある寂れた公園を根城にしている人だ。よく、道端に座ったりしていて何度か些細な会話を交わしたりしたが、気さくないい人という人物評だ。
どうする？　ここは『見られちゃったテヘッ☆』と舌を出せばいいのか？　否、それは美少女だから許される事だ。野郎がやったら半径十メートルは距離を置かれること確実。
「……ああ、いや……何でもないですよ」
と、誤魔化すように苦笑いを浮かべてみる。

「そうか。それより兄ちゃん、なんか要らねえモンはねえか？」
出た。オッサンのいつもの台詞。
ＲＰＧの一般キャラのように、このような台詞を誰かれ構わず言ってることから、安直に“物乞いオッサン”と俺は勝手に命名している。
しかし、断ったとしてもアッサリと「そうか」と引き下がるし、まさしくいらない適当な物を渡したとしてもお礼を言ってくれるし、昔の遊びを教えたりして近所の子供達にも人気があるそうだ。親の評判は悪いらしいが。
俺は、一粒の飴玉が入った小瓶を見た。
ただの飴玉として渡しちまうか。誰かに無理に命令に従わせるより、オッサンの腹の足しにでもなったほうがいいかもな。
「これでよければ」
オッサンの差し出した汚れた手に飴玉を転がしてやった。
「サンキュウな」
欠けた前歯が覗く笑みをオッサンは見せる。雪乃さんやなつきさんの笑顔と比べれば雲泥の差だが、悪くはない。
何か、心に暖かい物を代わりに受け取った気分になりながら俺はその場を後にした。

「そうですか。優しいんですね」
「いや、単なる偽善ですよ。たかが飴玉一つですし」
時刻は夜十時。雪乃さんの部屋にお邪魔して茶飲み話の最中である。
先程の出来事を話した後、雪乃さんは、やはりさっきのオッサンのと比べれば月とスッポンの柔和な笑みを浮かべてそう言ってくれた。
『速報が入ってきました』

と、点けっぱなしのテレビから聞こえ視線は自然とそちらに向く。
『業界最大手の国産車メーカーの社長が突如辞任し、代わりの社長を独断で決めたようです。あ、今新社長の就任会見が――』
「あ……」
焚かれたフラッシュの中、現れたのは物乞いオッサンであった。
それだけで十分に驚くべき事態だが、もう一人、テロップにて前社長と表されてる人の顔は確か……。
『私は、この方に社長を譲ることに決めました！　イエッサー！
一人でぶらり旅をしていましたが、彼にあった途端私の体に何かが走り、社長を譲ることに決めました！　サー！　イエッサー！』

やはりだ。オッサンに飴玉を渡した後、すれ違った、やけに高貴な雰囲気を纏っていた人とそっくりだ。いや、この人だ。
「凄い人もいるんですねえ」
「……そうですね」
どう考えても、あの後すぐオッサンが飴を舐めて、いつもの台詞を社長に放ったんだろう結果なのは確かだが、こうなるとは想定外だ。というか、前社長……今の役職いらんかったのか。

……とりあえず、俺は雪乃さんに合わせ、感心しきりなフリをして、後は気にしないことにした。

魔界からの来訪者（1）

澄み渡る青空に煌々と地上を照らす太陽。優しく草花を揺らす風。これが小春日和という奴か。ハハハ。誤用なのは知っているさ。今、春だしな。

「……平和だな」

空を仰いで思わず声に出してしまう。

これは精神的な平和だ。この魔界荘に来てから早一ヶ月半。新たな生活にも慣れてものだ。

未だ朝と晩の食事は雪乃さん用意してくれるし。

未だ洗濯物が溜まると雪乃さんが洗ってくれるし。

……何というダメ人間ぶりだろう。まともにこなしている家事は掃除ぐらいか。近いうちに洗濯機の購入を検討しておこう。

まあ、そんなことはいい。魔界荘の庭は中々風流だ。

塀の角には木々が植えられており、今は葉が少なくて寂しげだが、もう少ししたら桜が咲くと雪香が教えてくれた。

花もたくさん植えられ、色とりどりの花を咲かしている。

紫色のヒマワリのようなのとか、真っ赤な色の手を叩くとクネクネと踊るのとか、虫が近づくと食べたりするのとか、土管から出てきて火を吹くのとか、色々だ。まあ慣れればいいものだ。

そんな庭を見ながら、設けられた木のテーブルとイスに座り、優雅に紅茶を飲む俺はまるで貴族にでもなったかのようだ。手に持つのはライトノベルだがな。

あとは血統書付きの気品溢れる犬とかいれば、さらに優雅な感じになるんだが――

「……ハァハァ……」

これが噂をすれば何とやらということか。魔界荘の庭に走り込んで息を切らしてるのは、紫色の髪に犬耳を生やした子供。見た目十歳前後というところか。尻からは焦げ茶色のぶっとい筆先のような

尻尾が垂れている。……気品はないな。あ、こっち見た。
「ん、人間か？」
子供らしい中性的な声で犬の少年は言った。
「ハッ！　犬コロがちょこまかと逃げ回りやがって。ようやく追いつめたぜ！」
と、もう一人庭に入ってきたのは、赤い髪を針山のように逆立てた目つきの鋭い男。追いつめたってのは、ここに入ってきたことか。魔界荘は大人一人ぐらいの高さの塀がぐるりと囲んでいるからな。
俺は紅茶を一口飲む。美味だ。まあ、目の前で起きている事態は俺には関係ない。とりあえず、黙ってれば巻き込まれることはないだろう。ああ紅茶美味い。

さて、何やら犬コロが俺の後ろに廻って強く肩を掴んでいるのだが、どうしたもんだろう。俺の未来予知によると、獲物を前にした獣のような瞳の赤い髪の男にやられるビジョンが見えるんだが。
「日野ォ！　そいつを捕まえろ！　それとも……」
赤髪の男はそう俺に言って、掌を相撲取りの突っ張りみたく前に突き出した。距離的には全く届いていないが、人外な空気を漂わせているこの男、掌から気功でも飛ばせてもおかしくはない。つか、何故俺の名前を知ってんだ？　こんなやばそうな奴と知り合った記憶はない。……しかし、どこか顔に既視感が……そういや、

「もしかして、荒木さんでしゅか？」

この空間の時が止まったかのような静寂。
ああ、噛んださ。自分でもはっきりと分かるくらいにさ。けど、アナタがヤクザのような鋭い眼光を向けるのが悪いんだぜ。どうしても物怖じしてしまうだろ。その結果がこれさ。つまり、アンタのせいだ。
「ああ、そうだが」

やはりそうか。荒木さんは一週間ごとに性格が変わるんだったな。温和な荒木さんの時しか合わなかったからな。怖かったし。というか、性格どころか姿形も変化してるね。

「さあ、そこをどけ。……まあ、死にたいのなら別だがなァ」

荒木さん（怖いバージョン）はククク……と、含み笑いを漏らす。ヤバいよこの人目が獲物を狩るトラのようだよ。

首を回し、背後を見ると犬耳の少年が俯いている。俺でさえ怖いんだ。この少年も……肩を掴む手が更に強く――

「……ッ！」

刹那。俺の身体が押され、前へとつんのめる。バランスを崩した俺の目の前には荒木さんが……いや、荒木さんの唇が。咄嗟に俺は手を突き出し、荒木さんを押し飛ばす。

「ぬおッ！」

荒木さんは地面に倒れ、俺は荒木さんの体の上に倒れた。つまりは押し倒した形になったわけだ。生憎俺にそんな趣味はない。雪乃さんなら――

「へっへー！　バーカ！」

背後から犬耳少年の声と走り去る音。まんまとやられたわけだ。

「チッ……クソッ！」

荒木さんは俺を蹴飛ばし立ち上がる。あと少しズレてたら男の急所に当たるとこだったじゃないか。アンタも同じ性別ならわかるはずだろ。

「おい日野」

「はい？」

「お前のせいで逃げられた」

酷い言いがかりだな。

「手伝ってもらうぞ」

「はあ……」

荒木さんの話によると、あの犬耳の少年は魔界から来たとのこと。まあ、それは見た目で分かってたが、魔界とこの世界の関係というのは、日本と外国のようなものでこっちに来るには許可が必要らしい。あの犬耳は不法入国というわけだ。

荒木さんはそんな、許可無しでこっちに来た魔界の人を捕まえ、送り返すのが仕事とのこと。初めて知ったね。

で、俺は荒木さんの仕事を手伝うため街に来ている。せっかくの優雅な休日だったのにな……。これもあの犬コロのせいだ。さっさと見つけてやる……と、意気込みたいとこだが、今現在俺は一人だ。荒木さんは魔界荘周辺を探している。つまり、サボってもバレない。フッ……あの状態の荒木さんは頭脳も変化するらしいな。

さて、どうしたもんかね。急な事態だったし財布を持ってきていない。とりあえず、ブラブラ歩くか。運良く犬コロも見つかるかもしれんし。

「キャー！　カワイイ！」

ギャルの甲高い声。もう下校時間なのか。なにやら、四人組で何かを囲ってるようだが、子猫でもいるのか？　遠くだから分からんが。ちょっと近くで見てみるか、俺は犬より猫派だし。だが、なつきさんよりは雪乃さんだ。

女子高生共に嫌な顔をされない絶妙なポジションから様子を窺う。囲みの中心には、紫の髪に犬耳が生えた少年がいたよ。頭を撫でられて、頬を赤らめながら嫌がっているよ。

「キャー！　カワイイ」

「ホラ、笑って笑って」

「その耳ホンモノみたいだねー」

「ボク、名前はー？」

おー、写メ撮られてるよ。何とも羨ましい。この有名人でもいるような女子高生の声を聞きつけてか、人が集まってきたな。この犬

コロ愛くるしい顔立ちだからな、人気が出るかもしれん。
「だぁ！　邪魔だってぇの！」
叫んで……いや、吠えて犬コロが女子高生の隙間から出てきた。背の高さの関係で犬コロの顔が若さ溢れるヒップに当たっていて、何とも……殺意が湧いた。
とりあえず逃げ出した犬コロを追うか。そして、ジョシコーセーの尻に触れた頬に頬ずりしてやる。ただのスキンシップだ。断じて変態思考ではない。動物愛護だ。

俺の華麗なる尾行テクニックで犬コロは俺に気づく様子もなく、街を彷徨いている。キョロキョロと視線を左右に動かしている。何か探しているのか？　あ、立ち止まった。俺はすぐさま近くの電柱の影に隠れ、そっと様子を窺う。……つか、あそこは。
犬コロの立ち止まったのは店の前で、その店とは俺がバイトしている『魔界カフェ』である。ジーっと、魔界カフェの看板を見つめている。そりゃ、興味が湧くのも解る気がする。俺からしたら外国で『喫茶日本』とかいう店を見つけるようなものだ。もしくは、別の惑星で『地球カフェ』とかな。
残念だが、俺が休日だということは、魔界カフェも休みだということだ。ドアにはクローズの木札が掛かっているし。休日なのに尾行とは、これも全てはアイツのせいだ。
「あらー。お客さんですかー？」
と、タイミングが良いのか悪いのか店からなつきさんが出てきて、しゃがんで犬コロに視線を合わせて声をかけた。休日モードなのか今日は春らしく桜色のワンピースにカーディガンという出で立ちだ。
「あ……」
犬コロはなつきさんを見上げて、口をポカンと開け……見とれてるのか？　なつきさんは全てを癒す微笑みを浮かべている。

「ケーキは好きですかー？」
との、なつきさんの問いに対し、
「……う、うん」
恥ずかしげに犬コロは頷いた。
「そうですかー。じゃ、中へどうぞー」
なつきさんは犬コロに手を差し伸べた。犬コロは頬を赤らめながら、それを取り、いっしょに店の中に入っていった。あんなに尻尾を振りやがって。発情期の犬のようだ。羨ましい。さて、どうしますかね、店内なら逃げ場はないし楽に捕らえれるが、無理に捕まえようものなら、なつきさんの心証が悪くなりそうだ。ここは、とりあえず店に入るか。
「あらー。勇気さん、こんにちはー」
「なつきさん。こんにちは」
犬コロはカウンター席に座っている。俺を見て、多少警戒の色を強めた様子だ。
「どうしたんですか？」
「あ、ちょっと。その子供に用があって」
自然な口調と動作で犬コロの隣の席を確保する。
「あっちいけよアホ！」
犬コロの遠吠えを聞き流し、
「ケーキ食ったら帰るぞ」
家出した弟を迎えにきた兄のように優しく言ってやった。
「ヤダね。アホか」
すぐに断られた。
「連れて帰らなきゃ、俺も帰れないんだぞ」
俺の事情を説明してやった。
「絶対帰らねえ！　アホ！」
三回目のアホか。俺は大人だ。だから、犬にも子供にも、しっかりしつけてやらねばならん。
「無理矢理にでも連れて帰ってやる！」

「い・や・だ！」
「俺の命がかかってんだぞ」
「関係ねえ」
「ハウス！」
「オレは犬じゃねえ！」

「まあまあ。これ飲んで落ち着いてください」
なつきさんはそう言ってなだめて、コーヒーを置いてくれた。犬コロにもカフェオレが出され、一口飲んでいる。
「この子、不法入界ですか？」
入界というのは、ここがあちらさんの世界だと人間界と呼ばれているからだ。
「まあ、そうみたいです」
言いながら犬コロを見ると、ばつが悪そうに視線をそらしている。
「きっと何か理由があるんですよー。こっちに来た理由が。ね？」
なつきさんが犬コロに優しく問いかける。
犬コロは俯いたまま、しばし黙っていたが、
「……母さんに会いに……」
と、小さな声で言った。
「そうだったんですかー」
穏やかな笑みを浮かべるなつきさん。俺は頭を掻き、面倒くさそうな表情を演出し、
「で、その母親がこの町にいるのか？」
「……ああ」
俺は欠伸をしながら席を立ち上がり、
「仕方ないな。探してやる、その後はちゃんと帰れよ」
俺の優しい言葉に犬コロは感動して涙を――浮かべなかったが、敵対心はなくなったようで、
「……ありがとう」
頬を赤らめ、礼を述べた。中々素直じゃないか。

「その前に、」
と、なつきさんが出したのは、
「これをどうぞー」
ショートケーキである。犬コロはそれを興味深そうに眺め、口にすると幸せそうに笑顔を浮かべた。可愛いやつだ。
フッ……とりあえずこれで、なつきさんの俺への評価は上がったな。

魔界からの来訪者（2）

あの犬コロの名前はクリス。大層な名前だな。タロウとかで十分だと思う。

んで、そのタロ……クリスの母親は、たまたま魔界にやってきた若い男に一目惚れし、駆け落ち同然にこっちの世界に来たということだ。まあ、母子家庭じゃないらしいし、当然父親もいるわけだ。

ある日、離婚届がテーブルに置いてあったとさ。

父親も父親で、一年もしないうちに再婚したそうだ。

ベタなドラマだな。

出演者の中で一番気の毒なのがクリスだ。新しい母はいい人でそれなりに仲良くやってるらしいが、たとえ息子を捨てて若い男と出ていく奴でも、やはり生みの親が一番だよな。少しばかり同情する。

「ここだな」

俺はつぶやき、なつきさんに書いて貰った地図を見る。大きな通りから外れた通りにある寂れた建物。

『桐生探偵事務所』と入り口のドアに書かれている。なつきさんが教えてくれた所に間違いない。

「きったねー建物だな」

隣でクリスが正直な感想を漏らしている。確かに汚い。魔界荘といい勝負だ。しかし、クリスの母親を捜す当てはないし、ここに頼るしかないしな。「変な人ですが腕は確かですよー」と、なつきさん談。

まあ、変な人物にはこの短期間で耐性はできた。できたくはなかったが。どんだけ優秀かはしらんが、俺ら二人で探し回るよりはマシだろう。

塗装が剥がれ木が剥きだしなドアをノックする。しかし、寂しい通りだ。四階建てのビルは窓ガラスが割れてるし、元は店だったらしき建物はシャッターが降りている。ゴーストタウンかここは。な

どと辺りを見回してると『は～い』という返事がした。若い女の声だ。少ししてドアが開いた。

「依頼ですか？　借金取りならお帰りくださいませ」

言いながら、出てきたのは、ドギツいピンク色のショートヘアーの少女。頭頂辺りにはピョコンと髪が一房跳ねている。

もう髪色だけでこの世界の住人の可能性は低いな。染めてるかもしれないが。

「ああ、依頼です」

俺が答えると、女はパァッと明るい笑顔になり、

「中へどうぞ！」

と、女は先んじて中に入り、

「桐生さーん！　起きてください！　依頼ですよ！」

騒がしい声が聞こえてきた。なんだか不安になってきたんだが。

「中もきったねーな」

クリスが中に入り、やはり正直な感想を漏らす。

それに続いて俺も入る。確かに汚い。紙屑が床に散らかり、段ボール箱が歩く面積を圧迫している。来客用らしきソファーまで、傷が付いていて中身がはみ出している。

その奥の、窓際に机を構え、机に頭を乗せて突っ伏してるのが桐生探偵だろう。脇で少女が揺さぶって起こそうとしている。

「桐生さん、起きてくださいってば」

さらに揺らす。同時に机も揺れ、乗っていたビール缶タワーがけたたましい音を立て、床に転がった。

「依頼が来たんですってば！」

さらに強く揺さぶる。つか、馬鹿力だな。これ以上揺らすと脳震とう起こしませんか？　止めた方がいいのか？

「……あ？」

どうやら俺の心配は杞憂に終わったようだ。寝ていた男は薄目を開け、不機嫌な声を漏らした。体を起こし、思い切り両手を天に伸ばす。ボサボサで焦げ茶色の髪。顔は良い部類に入るだろう。さら

に男は欠伸をした後、俺たちの存在に気づいたようで、
「なんだお前らは……」
「依頼者ですよ」
少女が説明する。
「ふぅん……珍しいな」
自ら珍しいとか言っちゃってるよ。
「ま、座れ」
と、手をヒラヒラと振って勧めて自らも気怠そうに立ち上がり、ソファーに座る。見た目と反して中々座り心地はいいな。
男はジーンズのポケットから煙草と高そうな金色のジッポライターを取り出し、一服。そして、フゥーと煙を吐き、
「桐生……獅童だ」
何故か格好つけるかのようにタメを入れながら名乗った。
とりあえず、俺とクリスも名乗る。桐生は煙草を灰皿に押しつけ、訊ねた。
「で、依頼は何だ？」
俺は隣に座るクリスの頭に手を置いて、
「コイツの母親を捜して欲しいんです」
桐生は興味深そうにクリスを見る。
「ほう、こいつは……おいチビ、お前の母親はウルフェアではないな？　ハーフか？」
クリスはあからさまに不機嫌そうな顔になる。チビ呼ばわりが癪に触ったのだろう背が小さいのを気にしてるそうな。俺は桐生の聞き慣れぬ単語に、首を傾げた。多分、あちらの種族のことだと推測する。
「……ああ。サキュバスだけど、それがどうしたんだよ」
クリスは不機嫌状態で答える。
サキュバスは聞いたことがあるな。淫魔とも呼ばれていて、男を誘惑して精気を吸い取ったりする妖魔だったな。ゲームだと結構エロチックな外見なのが多かったりする。

「別に……ただ珍しかったんでな」
桐生は言って、もう一本煙草を吸う。ヘビースモーカーか。
「あの、依頼の方は？」
俺は訊ねた。請け負ってくれんのか。
「フッ……それはコレ次第だな……」
桐生は指で丸を作る。なんだ大仏が欲しいのか。奈良のあたりにでも行けばいい。まあ、金のことだな。
生憎、俺はコイツの為に出せる金額といったら、一万くらいか。クリスの方はというと、
「……」
子犬のような瞳で無言で俺を見つめてきている。そりゃそうだ。子供だし、金はないだろうよ。そもそも魔界とこちら側だと金の種類が違うだろうし。
桐生は紫煙を吐いて、
「……で、いくら出せるんだ？　言っておくが最低ひゃくま――」
「桐生さん！」
恐らくは百万とかふざけた額を言おうとしていたんだろうが、それを奥から出てきた助手？　の少女遮って、
「そんな風に高い金額を要求するから依頼がこないんですよ。ここは安く依頼を請け負ってまずは評判をあげるべきです！」
早口で少女は言って、こちらを向き、
「えっと、出せる金額でいいですよ。とにかく依頼はカンペキにこなしますから！」

そんな風に少女は言ってくれたから、俺は百円を財布から取りだし、依頼をした。
桐生はあきらかに不満顔をし、少女は苦笑いを浮かべながらも依頼を請け負ってくれた。

よかったよかった。んで、探し終わるまでの間、クリスは俺の部屋に住まわせることになった。

荒木さんは憤慨していたが、雪乃さんの説得によって、見つかるまでの間まではこっちにいられることとなった。

三日後。

桐生よりクリスの母親の居場所がわかったと連絡があった。結構迅速な調査だな。まあ、これ以上金は出さんが。

そして現在。クリスとその母親が駆け落ちしたという人間の男と暮らすマンションに来ている。

「……」

「……」

「……」

気まずい。いつから空気に重さなんて加わったんだ？　ちなみに三点リーダは順に、俺、クリス、そしてクリスの母親。紫色の髪をした結構な美人だ。色っぽい。

今現在の状況はマンションの部屋のリビングで、向かい合ってソファーに座ってる。クリスの母親は最初は驚き、長年会っていない息子と会話をしようとしたが、クリスはそっぽを向いて無視。会話成立せず。今に至る。

俺は軽く紹介だけして傍観者になっていたが、もう耐えられん。

「あー。えっと……」

とりあえず、沈黙を破っては見たが言葉が続かん、どーしよ……ん、

「あ、アレが旦那さんですか？」

たまたま目に入った写真立てを指す。意思の強そうな目をした精悍な男とクリスの母親が並んで写っている。

「そうよ。こっちに来る前に魔界で撮ったの」

艶っぽい笑顔を浮かべ、母親は言うが……まずったみたいだ。クリスは先ほどからうつむいたままだったが、今のでさらにクリスの周りの空気が澱んでいるのがわかる。母親と駆け落ちした相手の話はマズすぎた。俺の馬鹿。

「……でだよ……」

肩を震わせ、クリスは何か言った。

「なんで何も言わずに出てったんだよ」

真剣な眼差しで実の母を見つめる。

「……クリスちゃん……それはね」

「聞きたくねえ！」

「いや、お前が先に聞いたんだろ」

またまずった。思わず突っ込んでしまった。空気読めよ俺の阿呆が。

「……どうしてだよ」

舌打ちをし悪態をつきつつも、クリスは話すよう促した。

「長い話になるけど――」

と、前置きをし母親は語った。

その話から俺が想像した物語はこうである。

現在より三年前――魔界。

北にそびえる山はいつもの如く火を吹き、南に建つ塔は、黒雲に覆われ天辺が見えない。空を見上げれば、雷鳴が休むこなく轟いく。魔界では青い空というのは見ることはない。

……以上が俺の魔界のイメージだったモノだ。過去形なのは、魔界荘の人達によってイメージが崩されたから。結構こっちと変わらないらしい。まあ、魔物はいるらしいが。

さて、三年前の魔界を舞台にしたクリスの母親のラブストーリーを始めよう。

「キャァァァ！」
穏やかな草原を切り裂く、高い叫び声。クリスの母親、リルハさん（年齢不詳）の声だ。
叫んで、怖がるリルハさん（見た目は二十代後半）を囲むのは魔物の群れ。鋭い爪と牙を持つ獣。狼っぽいのだと思う。
腰が抜け、木に背中を預けるリルハに一匹の獣が飛びかかる。リルハは太陽光でキラリと煌めく爪が視界に入り、目を強く閉じ死を覚悟した。
刹那。届いたのは痛みではなく、
「ギュオォォ！」
という魔物の断末魔。恐る恐る目を開くと、目の前に立つのは剣を構え獣と対峙する男。男は鋭い眼光で睨みつけると獣は、喧嘩に敗れた犬のように鳴いて逃げてっいった。
男は獣の姿が小さくなってくのを確認し、剣を降ろし振り向くと、
「大丈夫か？」
と、爽やかスマイル。
これはもう一目惚れするしかなかったそうな。ちなみにこの時点でリルハさんには七歳になる息子と夫がいます。だが、愛の前にはそんなのは障害にはならず……と。
照れつつもリルハさんは語ってくれました。
「どう？　わかってくれたかしら？」
リルハさんは妙にハイテンションになり、頬を染めて、身体を軟体生物のようにクネクネさせている。
「答えになってないだろ！」
クリス、それは俺の台詞……。ここまでのリルハさんが語った話だと、せめてクリスくらいには一言話すことぐらいはできるだろうしな。

リルハさんは笑顔だった表情をやめ、
「仕方なかったのよ。あの人も忙しい身だったから……あれから急いで魔王を倒しに行かなきゃならなかったし」
魔王って……、リルハさんを助けた人ってまさか、
「彼は勇者でね。異世界から――あ、こちらの世界のことだけど――呼ばれて、魔王を三十日以内に倒さなければ元の世界に戻れなくなるらしくて……、私も彼の手助けをしたくて、家に離婚届を置いて、彼を追ったの」
なるほど。それでクリスには……って、どこから突っ込めばいいですか。勇者から？　魔王から？
「……」
「あ、クリスちゃん！」
クリスは無言で部屋から出ていったな。泣いてたな。俺はどうすればいいのかな。
「……クリスちゃん……」
悲しげな顔をするリルハさん。まあ、親だし。しゃあない。
「俺、探してきます」
と、言って飛び出してきたが。
見つからね……と、言う間もなく見つけてしまった。しかも、もう一人いた。
マンション近くの公園のブランコ。
並んで揺れるクリスと、勇者。
リルハさんの部屋に飾ってあった写真に写っていた人物だ。何やら話をしているようだがここからだと分からない……が、クリスは笑っている。勇者も穏やかな笑みを浮かべている。
「……」
俺は去るとしよう。達者でな。

俺は公園に背中を向け、その場を去った。ここで、夕陽をバックにしたいとこだが、今は昼だ。

後日談になるが。

クリスは魔界に戻り、今まで通り父親と暮らすらしい。そして、魔界と人間界の通行証を取得し、たまにこちらにやってきてはリルハさんと勇者と仲良くやっているらしい。まあ、なんつーか、

グダグダだな。

魔界荘と温泉旅行（1）

ゴールデンウィーク。漢字だと黄金週間。今までは出口のない休日が続いてたから関係なかったが、今の俺にはそのありがたみが超わかる。なつきさんも気を利かせてくれたのか、五連休（定休日含む）になったから。存分に満喫しよう。

雪乃さんと出かけたり。

魅栗さんと出かけたり。

天使さんと出かけたり。

なつきさんや三神さんとも。

……ああ。難しいだろうさ。雪乃さんなら誘えば、笑顔で『いいですよ』と言ってくれるだろうが、他は難しいだろうな。

ま、とにかく休みだ。存分に満喫しようううじゃないか。

……暇だ。退屈だ。

いくらゴールデンウィークだからって予定もなけりゃ意味がないってモンだ。所詮、休みなんてあっても、悲しいかなこうしてやることなく昼寝するしかない。昔と変わらんな。雪乃さんを誘う勇気もないからな。

身体を伸ばし、時計を見ると午後四時四十四分のあたりを指していた。運がいいが縁起は悪いな。麻衣も押し入れで絶賛昼寝中だ。俺の中では猫型のアレに次いで押し入れが似合うキャラクターになっている。

「勇気さん、休み中何か予定とかはあるんですか？」

いつもの通り、雪乃さんの愛情がこもった夕食をごちそうになっ

てると、いつもの疲れを吹き飛ばす特効薬の笑みを浮かべ聞いてきた。
「いえ」
全くありませんよ。何ですか？　まさかデートのお誘いですか？
それでしたら、たとえ寝る間もないほどスケジュールが詰まっていたとしても空けますよ。
「でしたら、温泉とか興味あります？」
え……。今もの凄い単語が耳に入ってきたぞ。温泉とか混浴とか。
雪乃さんと温泉だと。
「ええ、まあ」
平静を装いつつ答え、トンカツを一切れ口に入れる。これは……
肉汁が口の中で広がり、つまりは美味。
「よかったら、いっしょに行きませんか？」
な、なんですと。今確かに『いっしょ』にどうかと聞こえたぞ。
雪乃さんといっしょに……これは妄想が止まらんね。
「ええ、いいですよ」
あくまでも平静を装いつつ答え、高鳴る鼓動を抑えるために麦茶を飲む。うん。よく冷えてる。
「楽しみだね。ユーキおにいちゃん」
「そうだな」
雪香と雪乃さんと温泉か。家族旅行だと思われたりしてな。その時はどうしようか、仲の良いファミリーでも演じたりするか。
「これで、魔界荘全員が行けるということですね、大家さん以外は」
は？　魔界荘全員？　どういうことっすか。あ、俺の早とちりか。つか、ここの大家はいつ戻ってくるんだか。家賃払わなくて済むのは助かるけど。
「ユウくん、家出でもするの？」

「違う。明日ここの皆で温泉旅行に行くことになったから、その準備だ」
　ホント、急だよな。せめてもう少し前に言ってほしかったが。毎晩雪乃さん家でご飯食ってるわけだし、言うチャンスはいつでもあったと思うが……まさか、あんまり来てほしくないから言うのを躊躇ってたとか……いや、いや、それはない。雪乃さんに限ってはそれはない。断言する。たまたま言い忘れていただけだ。うん。
「お土産買ってきてね。あ、食べ物とキーホルダーとかはなしね」
　あ、そうか。コイツは行けないんだ。この部屋から出られないから。
「あーはいはい。覚えてたらな」
　麻衣は数日間一人になるのか。一人の寂しさは俺にもよく分かる。
「あ、そだ。今日アレの発売日だよね」
「アレ？」
　何かあったっけか。
「ほら、ドラナイ５」
　ドラナイとは大作ロープレのシリーズだ。そういえば今日は最新作の発売日だったな。しかし、
「買わんぞ」
「えー！」
「興味ないし」
　大作なのは確かだが前作はつまらなかったんだよな。マンネリというか。
『ジュワン』
　その音に反応し、首が半ば勝手にテレビの方に向く。これはゲームのコマーシャルの時になる音で、まあ、俺のようにゲーム通ならばパブロフの犬のように瞬時に反応してしまう音だろう。あくまでも俺の独自論だが。
「ね、ね！　面白そうでしょ」
　うむ、確かに。コマーシャルだから面白そうに魅せるのは当然だ

が、何より俺が注目したのは、
「坂野美里だと……」
ヒロインの声を演じるのは、今俺の中でのマイブームな坂野美里。
人気としてはまだまだ途上だが、これからだと思ってる。
「どうしたの？」
首を傾げ麻衣がキョトンとしている。お前にはまだ美里ちゃんの素晴らしさは分からないらしいな。まあ、いい。
「ちょっと買ってくる」
俺は財布を手に部屋を飛びだした。

「ふぁぁー」
と、大きな欠伸を一つ。
「あら、勇気さん寝不足ですか？」
クスッと笑いながら雪乃さんは言った。お恥ずかしい所を見せてしまったな。
「ええ、まあ」
「温泉楽しみで眠れなかったのー？」
いや雪香ちゃん、そんな修学旅行を控えた学生じゃないんだから。まあ、学生レベルなのは違いないが。徹夜でドラナイ５に勤しんでいたなんてな。
まだ序盤だが前作の評判を払拭する出来だったよ。止め時が難しくて気付いたら東の空が明るくなってたよ。
今頃麻衣もプレイ中であろう。あいつはよく寝るクセして、ゲームとなると睡眠時間削るからな。この旅行から帰ったら既にクリアしてそうだ。ちゃんとネタバレさせないよう口止めしとくか。
「旅館まではまだありますから、休んでていいですよ」
「ありがとうございます」
ここは雪乃さんの優しさに甘えるとしよう。もう睡魔が迫ってる

し。車の揺れもゆりかごのようで心地いい。
ちなみに旅館まではレンタカーで行くとのこと。ワンボックスカーに魔界荘住人全七名が乗っている。運転手は黒木さんだ。見かけによらず安全な運転をしてくれてる。さて、そろそろ眠りに落ちそうだ。夢に雪乃さんとか出てこねえかな。

「勇気さん、起きてください」
どのくらい経ったかは現時点では定かではないが、上の方から耳へと入る雪乃さんの声。……ん？　上？　俺は確か座席に背中を預けて、あわよくば隣の雪乃さんの肩に寄りかかって寝てたはずだが。
何か頭に心地よい感触があるな。ヒンヤリして、とても気持ち良い。……まさか。これはまさか。
「……あ」
目を開けると、見覚えのある色のシャツ。確か雪乃さんが着てなかったっけ。つーことは頭にあるこれは、雪乃さんの膝枕？
「おはようございます」
名残惜しかったが、即座に起きあがる俺に、目覚めには最適な雪乃さんの笑顔が待っていた。
「あ、はい。すみません」
とりあえず謝る。全く、天国がそこにあったのにグッスリと夢の世界に浸っていた俺のバカ。夢じゃ黒木さんが出てきてたよ。
「いえいえ。では、行きましょうか」
と言って、ドアを開け車を降りる。俺もそれに続きながらふと、
「今何時だ」
誰に言うわけでもなくつぶやく。別に時間に縛られたくないとかダンディズムな理由はないが、腕時計は着けてはない。ケータイも未だなし。つか、魔界荘で持ってるのは、天使さんと黒木さんぐらいだ。
時代に縛られていないというか、ただ単にあまり必要ないから持たないという単純な理由だ。二人は仕事柄必要らしい。

「十二時三十三分」
魅栗さんが淡々と時報のように時刻を教えてくれた。じゃあ、三時間ぐらい雪乃さんの膝で夢見心地だったわけか。
それにしても何か見覚えのある建物が目の前にあるな。大手チェーンのファミレスに似てる。ここが宿なのか。
「さあ、たらふく食って、宿まで飛ばすか！　なあ日野」
バシバシと俺の背中を叩く黒木さん。絶対背中には赤い痕が残ってるだろうな。どうやらランチタイムらしい。

ファミレスの店員は不思議な団体を見る目だったな。何とか顔に出すまいと努めてたみたいだが。
そりゃまあ、魔界荘の住人というくくりがなければ絶対集まることのなさそうなメンツだしな。
どの男性も一人は好みが見つかるような三人の美女、泣く子も黙りそうな強面のオッサン、愛くるしい子供、メガネの青年、そして俺。
うーん。どういう関係に見えただろうな。雪乃さんと雪香は親子だな、それは事実だし第三者から見てもそう思うだろう。
天使さんと魅栗さんは雪乃さんの友人といったところで、荒木さんはそのどちらかの彼氏。
黒木さんは近所のたまたま付いてきたオッサン。そして俺は雪乃さんの夫……いや、恋人かな。ここは譲れん。そう思わしといてください。
夫と別れて一年余り、俺と運命の出会いをした――という設定はどうだろう。実際雪乃さんはバツイチらしいし、ありえない話ではない。
俺が何でそんな妄想を繰り広げてるかというと、落ち着かないからだ。先ほどまでは、俺の席は最後尾の真ん中だった。それは変わ

らないのだが、隣は雪乃さんと雪香に挟まれていた。
しかし今度は何の因果か魅栗さんと、天使さんに挟まれている。
うん、気まずい。
何か話題を振ろうにも、天使さんはイヤホンで音楽聴いてるし、魅栗さんは感情を出さないことが美徳という教育を受けているような無表情で、窓から流れゆく景色を眺めている。実に絵になる姿だ。どちらも、話しかけられる雰囲気じゃない。
ちなみに前席の雪親子は仲良く寝息をたてています。観てるだけで癒される光景だ。
俺も眠りたいが先ほどの安眠膝枕のおかげに冴えに冴えている。それに今寝たりして誤って天使さんの方に寄りかかったりしようものならどうなるか分からん。
抜群のプロポーションを水色のキャミソールとジーンズ素材のホットパンツで包んでいる姿は実にそそるが。……オヤジか俺は。
まあ、そんな一歩間違えたら痴女と思われかねない、天使さんの露出した肩に寄りかかったらどんなに気持ち良いのだろうかとか、その締まった太ももを枕にしたら……とか、妄想を掻き立てられる。
「……なに？」
そんな俺の視線を感じてか天使さんはこちらを向き不機嫌な表情を見せる。
「いえ、別に」
と、俺は言うが、そのシャカシャカうるさいイヤホンのせいで聞こえないと思い同時に首を振った。そして視線を他に向けた。
魅栗さんは相変わらずの黒いワンピースに身を包んでいる。つか、黒以外の服装を見たことがない。死神協会の決まりでもあるのかね『黒以外の服装禁止』とか。ところで死神協会って何ですか。
「……」
また俺の視線を感じてか魅栗さんがこちらを向き、何を言うのでもなく黙って黒い瞳で俺を見つめる。
「な、何ですか」

戸惑い、照れながら俺は言った。俺は魅栗さんと会話を盛り上げるほどの喋りスキルはない。どうしよ。

「別に」

短く言って、更に見つめ続ける。俺はもうどうしていいか分からん。だから、

「いい天気ですね」

窓から見えた澄み渡る空から、あまりにも面白味のない話をしてしまった。すいません。つまらん男で。

魅栗さんは首を回し窓の方を見て、すぐに戻し、

「そうね」

やった。会話が成った。

「最近どうですか？」

今度は主語のない言葉で訊ねてみる。

魅栗さんは少し首を下げ考えるような仕草をし、

「まあまあ」

また会話が成立した。

しかし、これ以上会話を繋ごうとすると俺の気まずさが限界に達しそうだし、そのまま沈黙を貫く。

少しして、魅栗さんはまた窓の方を向いて景色を観ることに戻る。今度は窓枠に頬杖を付き、窓を開けたため、風が艶やかな黒髪をなびかせ、一種の芸術作品のようだ。

俺は緊張状態から脱し、息を吐き身体の力を抜きシートにもたれ掛かった。

「……」

……つもりであったが、やけに柔らかい何かが頭にあたっている。その感触は数時間前にも経験したようなもので、それよりもさらに柔らかい気もして、それは人の胸だとすぐにわかって、俺の額からはなぜだか脂汗が吹き出して、すぐに頭を離すと不機嫌な顔をした天使さんの姿があって。

まあ、つまりは危険が危ないということだ。さて、俺はまた眠ることになりそうだ。既に天使さんの手から青白い湯気のようなのが立ち上っている。

永眠にならないことを祈ろう。

魔界荘の温泉旅行（2）

目が覚めたら、そこは山の中でした。

辺り一面が山に囲まれ、木々の緑の中に作られた茶色の道があった。その道は麓とこの温泉旅館を繋ぐ唯一の道で、夜中に灯りも持たずに飛び出したら、すぐに迷って白骨死体で発見されるだろう。

まあ、俺もなんだかんだで命が危なかったわけだが、この通り無事だ。この無事を誰に感謝すればいいだろうか。とりあえずは天使以外だな。ここは雪乃さんの全快魔法ばりの笑顔にしとくか。南無南無。

「勇気さん、行きますよ」

雪乃さんに促され、景色を満喫するのもほどほどに旅館に向かう。山の奥という立地もあってか、魔界荘一行が乗ってきた車しか見あたらない。

外装は山奥のしなびた温泉旅館というのがしっくりくるような寂れっぷり。貶しているわけではない、褒め言葉だ。俺はこういった建物が好きだったりする。

黒ずんだ木の板には『桃源郷』と書かれている。大層な名を付けたもんだな。だが、魔界旅館とか付けられてないだけマシか。

「いらっしゃいませ。お待ちしておりました」

入ると早々に着物を纏った女将らしき老女が膝を折り深々と頭を下げ、出迎えてくれた。

やはり桃源郷とは名ばかりだな。だが、この古ぼけた木の匂いとかたまらんね。

「お世話になります」

と、代表して雪乃さんが言って、

「女将の龍野と申します。お部屋はこちらです」

女将はゆったりとした動作で立ち上がり、ゆっくりと部屋に導く。

女将の背は俺の半分ほどしかなく、雪香と同じくらいだな。もう一世紀は人生経験したんじゃなかろうかぐらいの皺が顔に出ている。

ギイギイと忍者対策とも思える音が鳴る廊下を歩き、急な勾配になっている階段を上がる。女将は歳を感じさせない足取りで上がっていた。廊下脇の窓からは中庭が見え、建物でグルリと囲むようになっている。

「こちらの部屋になります」

女将が立ち止まったのは、襖の横には木板に桃の間と書いてある部屋。妙にガタツいた襖を開けると、開放感のある和室が広がっていた。

「うわー、ひろーい！」

先んじて雪香が入り走り回る。

部屋はゆうに魔界荘全員が寝れる広さがあり、中央には長テーブルが置かれている。つか、これはまさか雪乃さんと同部屋で寝れるということなのですか？

「ここが私達の部屋です。勇気さんたちは、別の部屋ですね」

うあ、妄想する間もなく崩れた。

「こちらになります」

と、男性陣が泊まる部屋に案内された。源の間と書かれたここは、桃の間と中庭を挟んで正面の位置にある。もしかして、郷の間なんてのもあるかもね。

「うおー、こっちも広いな」

「いい景色ですね」

はあ。そりゃ雪乃さんと同室だとかムシの良すぎることは考えてはいなかったが、この二人と二晩過ごすことになるとは。

まあ、荒木さんが好青年バージョンなだけマシか。別人格がこの旅行中に出てこないことを祈るのみだ。

部屋に荷物を置き、やるべきこと。それは、旅館の探索だ。食事は七時だと言っていたし、約三時間の自由時間。趣のある旅館だし、うろつくだけでも楽しいのだが、一つ確認をしたいこともあるし。

この旅館は空から見たのを想像するに口の字になっているであろう。二階からは日本的な中庭が望め、一階から出ることができる。情緒もあるし、あとで雪乃さんでも誘ってみるか。二階は主に客室で、桃と源の間の他にも、いくつか部屋があった。残念ながら卿の間はなかったが。

急勾配な階段降り、一階へ。

口の字の左下部分にあたるここからは、入り口が見え、従業員らしき旅館の羽織姿の男性がほうきで掃いている。女将以外にもちゃんと人がいるんだな。あたりまえだが。

さて、時計回りで見学しようか。と、俺が踵を返し振り向いたら、顔に柔らかい感触がぶつかった。

ここに来る前のあまり思い出したくもないような出来事がよぎったが、アレとは全く違う。これは布団だな。

「あ、すみません」

布団が謝った。正確には幾重にも重なった布団の壁の向こう側にいるであろう人物だが。声は若い女。女将ではない。

「いえ」

言いながら、壁際に退避する。

「本当にすみませんでした」

布団を持ってたのは、紅の着物を纏ったメガネ少女で器用にも布団を抱えたまま丁寧に腰を折ってあやまり、二階に上がっていった。若かったな、高校生にも見えたし、女将の孫……曾孫とかなのかもしれん。

そのまま直進して、休憩室（多分従業員用）と書かれた部屋と、

厨房を通り過ぎ角を曲がるとようやく、俺が気になっていた場所を示す印が見えた。浅くしたU字の中に湯気を表す波線が縦に三本。これぞ旅行の醍醐味。温泉。しかし、がっくしと来る事実が一つ。

きっちりと隣り合わせに、男と書かれた紺色の暖簾と、女と書かれた赤の暖簾で分けられているではないか。こんな山奥の温泉でわざわざ分ける必要はないだろうに。仕方ない、恐らくは中は高い木の板で仕切られてるだけだろうから、雪乃さんと同時刻に入って、壁越しに声でも掛けるか。それだけでも十分至福のひとときだ。

温泉に入る前、もしくは浸かって疲れを吹っ飛ばした後にいい運動になるのだろう。

温泉の隣は遊戯室があり、自販機と温泉には付き物の卓球台、あとアーケードの対戦ゲームがある。それも、最近家庭用に移植された最新鋭の代物だ。ネットで全国対戦可能でどうやら繋がっているみたいだ。この旅館はメーカーと太いパイプでもあるのか。普通はなんたらキャッチャーとか置いてあるんじゃないのかね。ここも楽しめそうだ。脳内予定表にメモっとこ。

その隣は広間になっていて、長テーブルが二つ並べられている。ここで晩飯らしいな。この山奥だ、山の珍味とか出るんだろう。楽しみではある。

さらにも一つ角を曲がった俺は驚愕した。温泉の神様はいるんだと思った。

先ほどと同じ温泉マーク。しかし、ここは入り口が一つしかない。これが意味するのはアレだ。混浴ということだ。木の板には露天風呂と達筆で書いてある。

絶景な場所だからな。緑に囲まれた露天風呂。絶好のシチュエーションじゃなかろうか。温泉の神様ありがとう。温泉万歳。

旅館内をほぼぐるりと一周し、口の字の右下に位置する階段を上

がったところで、雪乃さん達と会った。
「あ、温泉ですか？」
手に抱えた浴衣一式を見て訊いてみた。つか、いっしょにいる魅栗さんと天使さんはサイズ大丈夫なんかね。特に胸とか。
「ええ。食事の前に入っておこうと思いまして」
「そうですか」
「覗いたらどうなるか分かってる？」
天使さんが鬼のような眼光で睨みつける。これってフリですか？
俺に覗けという。いや、分かってるけどね。俺もまだ命は惜しいし。

紳士たる俺は覗きはしないさ。
ただ、雪乃さんと同じお湯に浸かるだけで十分お釣りがくるほど幸せですから。
即刻部屋に戻って温泉に参るとしますか。
「おう、日野もいっしょにどうだ？」
黒木さんが温泉に誘ってくれている。
どうしますか？
「あ、はい。行きます」
こう答えるしかあるまい。あくまでも雪乃さんと空間を共有するためだし。
「荒木さんは行かないんですか？」
お茶を啜りながら小難しそうな本を呼んでいる荒木さんに聞く。
もう片方とは違って、こっちは知性的なんだよな。
「僕は後にしておきますよ」
穏やかな笑みで荒木さんは答え、メガネを直し視線を落とす。じゃあ、俺は黒木さんと二人で入るということか。やれやれ。

相変わらず黒木さんは色んなところが大きいな。自信がなくなったよ。

少し濁った湯が特徴的な温泉で、中央に木の板が立てられ男湯と女湯を分け隔てている。この壁の向こうには魔界の美女三人が裸でいると思うと、どうにも……だ。今も雪香ちゃんがハシャいでいる声が響いてくる。

しかし、どうにも壁の向こうには話しかけにくいな。黒木さんと天使さんの存在があるからな。雪乃さんだけだったら、いい雰囲気で会話できそうなんだが。まあ、まだチャンスはある。今度はこれ以上の幸福がな。

まだ食事までは時間があり、俺は風呂上がりで色香漂う方々を誘い、温泉名物の卓球に勤しむこととなった。雪乃さんの発案でトーナメント制となり、優勝者には最下位の人がジュースを奢るという、大して有り難みのない賞品だ。だが、手を抜くことはしないさ。雪乃さんの眼前で格好悪い真似はできないからな。

が、そんなたき火ほどに燃え上がってはいたやる気も、開始前からマッチ程度に弱まってきている。

だって、相手黒木さんなんだもん。厳正な抽選の結果によりこうなったから仕方ないが。

図体がデカいせいか、黒木さんが持ってるラケットがしゃもじに見えなくもない。

「よし、いくぞ」

黒木さんが言って、風を切る音が聞こえそうな力強い素振りをし、ピンポン球を高く上げ、ラケットを振りかぶり、一閃。その瞬間俺の耳にヒュンという風を切る音が入り、一拍置いてコンコンという

ピンポン球が落ちた軽い音が背後より聞こえた。
「よっし！　どうだあ！」
いや、拳を握り喜んでるトコ悪いが黒木さん、
「卓球のルール知ってますか？」
「球を打てばいいんだろ」
うん、十点。
「それはそうですが、打った後一回相手側のコートでバウンドしないと駄目なんすよ」
「そうなのか」
どうやら分かってくれたようだ。さっきのでいいなら卓球台は無用の代物になるからな。んじゃ、再開しましょうか。特別に今のはなかったことにしてあげますから。
そして、俺は勝ったがルールも理解してなかった初心者に勝っても大して嬉しくはない。
俺も初心者同然ではあるが、黒木さんは細かいコントロールが全くなく、ほとんど自滅に近かったし。
早々に終わったし、隣はどうかな。天使さんと魅栗さんだったはずだが。尚、雪乃さんはこの二人の勝者と対戦で雪香ちゃんは応援。あと俺は決勝で待つだけだが、
「……え」
既に勝負はついていたようだ。
天使さんがほぼ一方的な展開で勝ったようだ。スコアボードにそれを如実に示す得点が書かれていた。
天使さんは涼しい顔で髪を払い、魅栗さんは勝ち負けはどうでもいいような無表情でベンチに座る。いよいよ次は雪乃さん対天使さんか。
「よろしくお願いしますね」
台に着き、ニコリと雪乃さんは微笑んだ。全く根拠はないが凄い試合になりそうだ。

いやはや、油断したとしかいいようがない。球技ではボールから目を離すなとか言ったりするが、その通りだと身を持って実感した。いや、けどね言い訳になるが、例えば目の前でたわわに実った高級メロンが二つ、動きに合わせて弾んでいたらどうしますか？　これはしっかりと凝視しなければ失礼というものでしょう。その結果が天使さんの某テニスマンガ並の殺人スマッシュで昇天というわけなのです。本日二度目。

気付いたのは、雪乃さんの膝枕だったつーのに、またもやその幸せな時間の記憶がないのは実に残念だ。何故か最下位扱いでジュースも奢りになったし。今日は厄日か、或いは朝の占いで最下位だったからかね。ラッキーアイテムのピンクのスカートでも履いてれば避けれた事態だったかもね。履いていたら、皆から別の意味で避けられるだろうけど。

魔界荘の温泉旅行（3）

次の日。
朝食を済ませた俺たちは現在、森林浴の真っ最中である。

一応、昨日の卓球大会後のことでも語っておこうか。
一人のけが人を出した（俺だ）卓球大会後、間もなくして食事の時間と相成った。山菜の天ぷらやらが出てきたが、これは特筆して語るほどでもないだろう。
俺が食事の味を頭の片隅に追いやって考えてたのはその後のことだ。
それはズバリ、雪乃さんとの混浴。
あの熱戦が繰り広げられた後だ、汗ばむ体を洗い流すため温泉に入るだろうと俺は踏んだ。
それも、既に片方の温泉は入った後だ。恐らく次は混浴の露天風呂に入るだろう。
雪乃さんが入ったのを見計らい、偶然を装い俺も続けば、何も問題もなく雪乃さんとの混浴を共にすることができる。完璧である。
いや、あったはずだった。
結果から言うと、雪乃さん達はまた温泉には入った。普通の男女別の方に。
何故そっちなのか、湯上がり美人達にそれとなく訊ねたところ『知りませんでした』だそうだ。
計画が脆くも破綻した俺は、汗を流すためまた男湯に浸かり、黒木さんのたくましい体を眺め、部屋に戻り就寝した。
まあ、諦めてはいないさ。
知らなかったんだからな、そもそもこの旅行の日程は二泊三日。

この旅館にも、もう一泊する予定だ。まだチャンスはあるさ。
んで、朝食時にニコニコな笑みを浮かべた雪乃さんから、一つの提案があった。
「水の精霊を見に行きませんか？」

そんな普通ならば、怪しげな電波を受信してる不思議少女が発するような案を、俺はすぐさま肯定し、今に至る。
あくまでも普通ならばだ。雪女に天使と死神、さらには幽霊までいる状況で、今更精霊なんていないと否定する根拠はないだろう。
今はハイキングコースには絶対になりえない、草木がスクスクと自由に生い茂った荒れ道を歩いている。
雪乃さんの話では、水の精霊はこの先の湖に住んでいるとのこと。
しかしまあ、そんな湖は見えそうにないのだが……あるのは背の高い木々のみ。つか、もう帰り道すら解らん。もしかして遭難したんじゃないかという不安要素はこのさい忘れよう。魔界人に鳥並の方向感覚が備わってるのを祈るしかない。
そんな、精霊探し探検隊に参加してるのは、雪乃さん、雪香ちゃん、荒木さん、魅栗さん、それと俺だ。
あとの黒木さん、天使さん両名は待機だ。今頃は酒でも飲んで、のんびりと温泉を満喫してることだろう。こっちは既に体力の限界だ。俺だけな。魔界人とは体の出来が違うのさ。まあ、ここは気力で歩いて、死神に仕事させないようにしないとな。せっかくの旅行中だ魅栗さんに苦労はかけんさ。
「雪乃さん、水の精霊の場所まではあとどれくらいですか？」
不安を紛らわす意味も込めて、並行して歩く雪乃さんに訊ねる。
「もう少しですよ」
と、雪乃さんは答え、疲れを微塵も感じさせない微笑みを浮かべた。答えはアバウトだったが、俺の体力は回復したね。

雪香ちゃん共々ポケットが多数付いたベストを着ており、リュックも背負い探索の準備は万端な姿だ。

そういや、この旅行を取り仕切っているのは雪乃さんだったな。コレも予定の一部に予め入っていたんだろうが、せめて事前に伝えておいてほしかったね。

俺は遭難死しても自業自得だと言われても仕方ない軽装だし、荒木さんはジーンズにTシャツ、魅栗さんはいつもの黒いワンピースだ。明らかに準備不足である。

だが、万が一でも、何かあるのは俺だけだという予感はする。魔界を甘く見ちゃいかんね。荒木さん（穏やかバージョン）は、微笑を称えながら不意に立ち止まっては草木を調べるくらいの余裕を見せてるし、魅栗さんは無表情で黙々と歩を進めてる。

水の精霊とやらに会えるかは解らんが、このまま前方の魅栗さんの黒い背中を追うしかあるまい。心なしか段々と木々の密度が濃くなってるとか、カラフルなキノコが生えてるとかは気にしても仕方ない。

精霊の居場所だ。国民全員がローラー作戦かけたところで見つかりはしないだろうし、いつの間にか異次元的な空間に迷い込んでるとしてもおかしくはない話だ。

ちなみにその精霊がどんなナリをしてるかは知らん。あえて聞いてないからな。楽しみとして取って置いている。この秘境探検を無事に乗り越えて拝む精霊の姿は実に神々しく感じること間違い無しだ。

「見えてきました。あそこですね」

と、雪乃さんが指す先には湖が見える。距離的にはまだまだあるが。まあ、目的地が見えたことでこの樹海探索ツアーにとりあえずの区切りができるな。

「早くいこー！」
と、笑みを絶やしてない雪香ちゃんは湖に向かって歩を早めた。
どうやら疲れ果ててるのは俺だけらしい。何気なく魅栗さんに確認したら三時間は経過している。
腹時計もそんな時刻を告げているな。ペース的にも湖での昼食もいいかもしれんが、誰か用意してあるのかね。雪乃さんの背負うリュック以外は皆手ぶらなんだが。俺はただの散歩気分だったし。
もし通信設備があったとしても連絡は取れないだろう。帰り道への不安はもう考えるのはやめた。なるようにはなるんじゃないか。きっとな。
さて、悲鳴を上げすぎて、限界を越えた足にもう一頑張りしてもらうか。湖まではあと少しだぞ。

改めて申そう。
俺たちは異次元空間をいつの間にやらすり抜けたのだろうか。だと、したらこんな風景が地球の技術を持ってしても見つからなかったのは頷ける。
足をようやく休めることができる場所、水の精霊が居るという湖の周辺は木々がなく、拓けた場所にあった。上空から眺めたら、短い芝の緑に囲われた丸い水色が陽光でキラキラとさぞ小さな楽園のように見えるのだろう。
しかし、トンでもなく澄んだ湖だ。漫画の一場面のように、裸の美少女が水浴びしててもおかしくはないな。
とりあえず俺は近くの手頃な大きさの岩を椅子代わりにし腰を下ろす。ようやくの休息で足が震えてるのが解る。マラソンの後とでも表せばいいか。最近してはいないがな。
こうして俺がちっぽけな空っぽの体力ゲージを回復してるが、他の方々のゲージはまだ十分にあるようで、三者三様の行動をとって

いる。
　魅栗さんは水際に自殺志願者のように突っ立ち、無表情で水面を眺めている。
　荒木さんは相変わらずの微笑を称え、湖の周囲を散歩でも楽しむかのように歩いている。
　雪乃さんは、湖へと入りなにやら語りかけているようだ。水の精霊でも呼んでいるのか？　雪香ちゃんもその近くで水遊びをして実に楽しそうに遊んでいる。ここから見ると水しぶきが煌めいて綺麗だ。
　雪乃さんは話し終わったようで、踵を返し、水際に戻ってくる。雪香ちゃんもいっしょだ。まさか、いなかったとかいうオチはないよな。そうだったら徒労どころではないぞ。と、
「おや、」
　湖を一周し終えた荒木さんが、湖面を興味深げに眺め、声を出す。まあ、そう反応するのも分かる。明らかに先ほどより水かさが減っている。まるで風呂の栓を抜いたかのように凄い勢いで湖面の高さが無くなっていく。一つ違うのは、渦がないということだ。ほら、風呂の水が少なくなっていくと出来る奴だ、最後にシュゴゴゴと鳴ったりして。
　ほどなくして湖は姿を変え、一つの窪みが出来上がった。クレーターのように凹んだ穴ぼこには、底に洞窟へと続くような穴があり奥へと続いてるようだ。
「なるほど、実に興味深い仕組みですね」
「前に来たことはないんすか？」
　指を顎に当て科学者ぶった言い方をする荒木さんに聞いてみた。
「ええ、精霊というのは魔界でも限られた者としか交流しないんですよ。あまり人前に姿を現すことを好まないといいますか」
　荒木さんは湖だった窪みに視線をやって、
「このように、自らの隠れ家みたいなところに住んで、滅多に外とは干渉することはないんです」

「案外簡単に会えそうな気もしますが」
「まあ、そうですね。白峰さんが知り合いだったことに感謝すべきですね。私もかねがね精霊には会ってみたいと思ってましたから」
荒木さんは晴れやかに微笑む。そいつはかなりツいてるということか。つか、ツきすぎてるな。魔界荘で魔界人と知り合いになり、そこに住む魔界から来た数少なき人が精霊と知り合いか。
曲がり角でぶつかった美少女が転校生で、そいつがアラブの大富豪と知り合いなくらいの偶然だな。
できればその運は宝くじ買うときのためにとっておいてほしかったが。
「では、入りましょうか」
との、雪乃さんの声で俺は重い腰を上げた。

森林探索から洞窟探索に移行した、魔界荘探検隊（仮）。
湖が干上がって現れた洞穴は、水に浸かっていたとは思えないほど、ジメジメとはしておらずコケむしてもいない。
あと、驚くことに内部は明るかった。
別に照明器具があるわけでもなく、不思議と明るいのである。月光に照らされてるような光だな。これも水の妖精とやらの力なのか。
「ココですね」
雪乃さんが言って、あちこちと洞穴内を見回していた視線を前へと向ける。
あー。これも水の妖精の力なのだろうか。目の前にはドアがあった。木製のそれは岩壁にもとからハマっていたかのように、寸分の隙間もなく水平に建て付けられている。
雪乃さんが呼び鈴を鳴らす。
もう疑問には思わん。世の中は不思議に満ちているんだ。このドアの向こうには３ＬＤＫ程の空間が広がっていてもおかしくはない

さ。
『はーい』
と、ドアの向こうから応答があり、少ししてドアが開かれた。
「お久しぶりですね」
雪乃さんが言って、ドアから出てきた女性は軽く笑みを浮かべ、
「久しぶりね。雪乃」
久方ぶりらしき友人？　に挨拶をし、後ろに控える魔界荘一行を見て、笑みを少し苦くし、
「また色々と連れてきたわね。どうぞ、入って」
隠れ住んでいると聞いて、不安にはなったがどうやら招き入れてはくれるようだ。ここで門前払いなんかされたら、ここまで来た疲労が倍にされるとこだったな。

俺はもう驚くことに労力は割かない。
洞穴にドアがあって、その先にマンションの一室のようなフローリングの床があろうが、それは詮無きことだ。
現に他の皆はそれを当然だと言わんばかりに、何のリアクションも見せないしな。雪香ちゃんはピカピカのフローリングをスケートリンクに見立てて滑ってるが、これは魔界荘の部屋は畳だし、もの珍しいからだろうし。
魅栗さんが驚く表情は見てみたい気もするがね。
「どうぞ」
淡々とした物言いで水の精霊は長方形テーブルにカップを置いていく。中身はただの透明な液体。おそらくは水だろう、氷すら入ってない。だが、ここまでの疲労から喉が乾いている。ありがたく戴くことにしよう。
ッ！　美味い。水にこんなに衝撃を受けたのは初体験だ。さすが水の精霊、六甲だとかエ〇アンとは比べものにならない美味しさ

だ。
「で、どうしたの？　こんな辺境まで来るなんて珍しいじゃない」
と、水の精霊は雪乃さんの隣に座して言った。
「旅行で近くに宿を取ったんで、ついでに寄ってみたんですよ」
どこが近くなんだと雪乃さんにツッコみたくなった。
「そ。魔界荘だっけ？　そこの旅行な訳ね。確か世間はゴールデンウィークだろうし」
「はい」
意外と日本の休み事情に詳しいな水の精霊。まあ、このリビングに大きい薄型テレビがあるし当然か。
「それにしても、」
精霊はカスピ海のような淡い水色の瞳を俺に向け、
「人間なんて珍しいわね。数百年ぶりかしら」
「いったい何歳なんですか」
思わず訊ねてしまった。
だって、当たり前のように数百年とかいうもんだから。数年、数十年とかは解るが、百の位を曖昧に言うとはな。百年変わるだけで文明がかなり衰退するんだが。
「レディに歳を訊くのは失礼だと思わない？」
ニコリと笑みを浮かべて、精霊は優しく言った。
だが、俺には見える。その笑みの裏には怒りマークが浮かんでるのを。つか、そのこちらに向けた掌はなんですか？　光線でもでるんですか？　あ、水の精霊だから水流がでるみたいですね。ほら、当たった。消防車の放水のような勢いで俺に――。

魔界荘の温泉旅行（4）

湖に映る空のような水色のセミロングの髪。二次元世界の美少女キャラのように奇抜な色だが、実に良く似合っていた。

キリッとつり上がった気の強そうな瞳は、サファイアのように青く澄んでいる。その見た目通り、気の強そうな空気を身体から醸し出しており、服装は水色のミニスカートに白のチューブトップと大胆な格好である。水風船のような胸だから破壊力は抜群だ。これでデレがあれば完璧なのだが、残念なことに未だそんな面は窺えることはなく、そのチャンスも自らのウッカリした発言により水泡のように無くなってしまった。

「お邪魔しましたー」

水の精霊の家、玄関先。雪乃さんが代表して辞去の挨拶を述べている。

ちなみに、俺がこの家にいた時間は体感的に数十分もない。実際の時はその何倍も経過していたらしい。何故俺と現実の時間の齟齬が発生したかというと、気を失っていたからである。水の精霊の怒りを買って。この旅行で三回目の気絶だ。

「実に楽しい時間でしたね」

誰に対しての台詞かは分からないが、或いは独り言を荒木さんは漏らす。これは俺への嫌みのつもりともとれるな。

「では、旅館に戻りましょうか」

雪乃さんが言って、皆が歩き出すが俺だけは足取りが重く感じているようだ。気絶した後遺症ではなく、帰り道のことを考えると誰しもそうなる。人間ならな。

「あの」
「なに」
「ここは何処なんでしょう？」
「森」
「他のみんなはどこにいるんでしょうね」
「解らない」
「これって遭難ですかね？」
「そう」
「そうなんです」
「……」
ここで黙んないでくれ魅栗さん。俺だって必死で場の空気を盛り上げたかったんだから。
さて問題だ、既に陽が落ち闇に包まれた深い森の中。出口も判らない。装備もなく非常食もない人間はこれからどうなるでしょう。
答えは考えたくもない。死神は隣に居てくれてるが休暇の身だし、仕事はさせらんないからな。
「とりあえず歩きましょうか」
小さく魅栗さんは頷き、歩き出した。黒い衣服だから見失わないようについて行かなければな。ここではぐれたら本当に命が危ない。いや、今も十分に危ういが不思議とそう感じないのは、魅栗さんがちっとも危機的なオーラを発していないからだろうか。
考えてみたら、方角も定かじゃない状況で闇雲に歩き続けるのは、沼地でもがくのと同じではないかとは思う。雪乃さん達が探しにくるのを待つ方が生存率は高いだろう。だが、そんな冷静を保った思考なんざいざ遭難に陥れば働かないもんだな。
「み、魅栗さーん！　どこですかー！」
俺の叫びを返してくれる声はない。
あと、冷静な思考を取り戻したのはいいが、考えに浸りすぎて視認する精度を弱めるのはお勧めしない。それもパートナーが闇に紛

れるかのように黒一色の服や髪の場合は特に。
そうだ。魅栗さんともはぐれた。
いや、ここは魅栗さんと二人きりで遭難を乗り切るシナリオだろうに。俺一人じゃどうにもならんだろ。
風もこうも闇といっしょになると不気味だな。木々の葉が揺れる音もホラーに相応しいＢＧＭと化している。
いやはや。日光の有無でこうも森は変わるかね。
まあ、はぐれたといっても魅栗さんはまだ近くにはいるだろう。人間の能力を超えた空間移動してない限りは……。

悪い予感的中。あれから体感時間で一時間は探しただろうが、魅栗さんの姿は影も形も見えやしない。つか、死亡フラグが立ったんじゃないかこの状況。俺が雪乃さんに会いたいと願ったら、変わりに死神が現れんじゃ無かろうか。それが魅栗さんだと嬉しいが……と。
ん。何か聞こえる。
木々のざわめきじゃない。
水音と。
「……お湯……す……」
これが雪乃さんの声だと俺の地獄耳（雪乃さん限定）が断定した。方角はあっちからだな。
旅館に戻れたという喜びは後にしておこう。目の前は天国があった。正確にはそびえ立つ木の板を越えた先にだが。
雪乃さんの声を道しるべに出た先は、旅館の露天風呂に面した場所。山の景色を楽しめる造りのため少しズレてたら、雪乃さん（裸）と鉢合わせになるトコだったが、運良く木の板が目隠しになってくれている位置に出てよかった。
つまりは、この先に広がるのはユートピアというわけだ。

だが、覗くなんて野暮な真似はしない。何故なら、ここの露天風呂は混浴だからである。覗き魔という汚名を被る必要もなく、堂々と雪乃さんとの裸の付き合いをできるわけだ。早速決行だ。

「おう、日野。遅かったなあ！　心配したんだぞお！」

入り口で黒木さんとエンカウントした。バシバシと頭を叩いてきた。痛い。おまけに酒臭い。

「すいません。疲れたんでひとっ風呂入ってきます」

「おう」

俺は黒木さんを適当にやり過ごし、桃源郷へ急ぐ。今更ながらこの宿の名前に嘘偽りがないことを実感する。女将さん疑ってすまなかった。

ラスト十メートルを走るランナーの気分で雪乃さん達が待つ栄光の露天風呂への扉の前に来た俺の目には、一位でゴールしたと思ったら周回遅れという事実を知ったランナーのように落胆を知らせてくれる木札が掛けられていた。

『只今女性専用』

墨で書かれた達筆な字だな。女将さんが書いたのかね。

「あ、すいません。露天風呂の方は今女性貸し切り中になってます」

ん。それは見れば分かる。と、心の内で言いながら、声の方を向くといつぞやの布団メガネっ娘がいた。

「ここって混浴じゃ……？」

訊ねて後悔する。これだと混浴目当ての下心丸出しの客だと思われるじゃないか。否定はする。俺は断じて裸体が見たいわけじゃない。雪乃さんとのんびり湯に浸かりたいだけだ。やましくはない。

「普段はそうなんですけど、お客様の要望があればこういったサービスもしてるんです」

この山奥の旅館でそんなサービスしなくてもいいじゃないか。

「そうなんですか」

「こんな山奥でお客さんもあまり来ませんし、必要ないとも思った

んですけど、お婆ちゃんが提案したんです。実はこのサービス使われたの今日が初めてなんです」
クッ……よりによって今日か。
「ああ、あの女将さんですか」
はい。とメガネ娘は頷く。やっぱり孫だったんだな。
「正確には曾々お婆ちゃんなんですけどね」
「……いくつなんです？」
「確か、百五十は越えたと言ってました。昔に」
おい。ギネス審議委員よ、ここに長寿世界記録が存在するぞ。何歳かは定かじゃないがな。しかし、驚きはしないのは魔界関係の免疫なんだろうな。
「じゃあ、仕事が残ってるんで。ごゆっくりどうぞ」
ペコリとお辞儀をし、小走りのメガネ娘を見送る。あ、ここで働いてるのか、或いは黄金週間だから助っ人に来てるのか訊いとけば良かったな。年齢は分からないが学生なら、ここから通うのは難しいだろうし。ただの興味本位だが。

『敗北！』
液晶モニターには負けを告げる熟語がデカく映っている。そしてコンティニューをするか否かのカウントが始まっている。ちなみに俺はステージ背景の歌舞伎風な絵が敗北と告げる演出が好きだ。
旅館の遊戯室。
そこに設置されているゲーム『サムライ大戦（ダブルゼータ）ＺＺ』は対戦格闘ゲームだ。シリーズ五作目になる今作はネット対戦も可能になり、今もゲーセンでは猛者達が腕を競っているのだろう。
かく言う俺も、前作の家庭版を購入し、一人で黙々とプレイし続けた結果、腕には自信があった。だが、今の対戦は惨敗となった。
そりゃそうだよな。対人戦とＣＯＭとの戦いじゃ動きが違うさ。

井の中の蛙とはまさにこのことだろう。言い訳になるが家庭用のコントローラーとこの機台のスティックじゃ操作感覚も違うからな。思った動きができなかったし。負けても仕方ないさ。

「ユーキおにいちゃん！」

と、雪香ちゃんの声と共に首に鉄アレイが連なった首飾りを掛けられたような衝撃が走る。つまりは雪香ちゃんが思い切り俺の首に飛びついてきたわけだね。

「いい景色でしたよー。勇気さんも露天風呂に入ってきたらどうですか？」

髪を湿らせた湯上がり美女の雪乃さんがいない露天風呂なんざ、葉の散った紅葉スポットのように意味のない場所ですが、勧められたら入るしかないでしょう。つか、俺の遭難未遂事件は無視ですか。

「コレやってたの。中々面白かったわ」

湯上がり美女その二こと天使さん。うん、目の保養……いや毒なナイスバディだな。浴衣からこぼれそうだな。

「対戦します？」

「いいわよ」

掛かった。俺は脳内でガッツポーズをした。天使さんはおそらく今日が初プレイだろう。腕も大したことはないとみる。悪いが快勝して先ほど負けた鬱憤を晴らさせてもらうぜ。雪乃さんに格好いい姿を見せれるしな。まあ、手加減はするけど。ギリギリで勝つぐらい素人相手には容易いさ。

さて、始まったこの対戦。

天使さんはジューベエか。扱いが難しい玄人向きキャラだな。素人はロクに使いこなせるわけがないな。

一方俺のキャラはムサシだ。誰にでも扱いやすく、能力も高い良キャラだ。キャラ選択から勝敗は決したようなもンだな。

台の向こう側で悔しがる天使さんの表情が見れないのが残念だ。もしかしたら泣くかもしれん。プライドが高そうな人だし。想像しただけで萌える。

「……クッ……ヒック……」
「雑魚ね」
「おねーちゃんつよーい！」
あれ。何で俺が泣いてんだ……。画面には土下座するムサシの姿が流れている。つまりは敗北を意味する。
「天使さん、コレやったことあるんですか？」
「今日が初めてだけど」
初めての人に負けたのか……俺は。しかもジューベエに。あんなに攻撃の激しいジューベエみたことねー。
まあ、仕方ない。天使さんをみくびってたのは事実だ。ここは他の人と対戦して俺が強いというのを認識させねば。
雪香ちゃん……はないか。子供をイジメる趣味はないさ。
雪乃さんは危険な気がする。初めてだろうが、俺の敗北するビジョンが見える。ならば、
「魅栗さん、対戦しませんか？」
やや遅れてやってきた湯上がり美女その三は小さく頷いて、対面の台に座した。悪いが悔し（以下略）やるぜ。
ここはもう手加減とかいってられんからな。俺は最強キャラであるコジローを使わしてもらうか。魅栗さんはミツルギか。そいつは上級者でも使い難く、下手に使ったら初心者にも負ける超玄人向けキャラだぞ。何故多数いる中からそいつを選ぶのか。
俺の勝ちは既に決定されたようなもんだな。魅栗さんは負けても気にせず無表情だとは思うが、万が一悔しがる意外な一面見れたりしたらラッキーだな。

「……」

「大丈夫ですか、勇気さん」

オチは既に分かっていたと思う。

俺はまた負けた。

あんな強いミツルギはみたことがない。

雪乃さんに慰められてしまった。

もしかしたら俺は井の中ですらなく、コップの中のオタマジャクシなのかもしれないな。

俺は目の前が真っ暗になった。

今回の旅行は気絶ばっかりであった。

雪香日和

『ええ、全ては――』

「アクアスプラッーシュ！」

「バーリア！　きききませーん」

坂野美里ボイスはいいのはもちろんだが、大作だけあってドラナイ5は面白いと思う。できれば静かな環境でプレイしたいが、今日はせっかくの休日だし、クリアまで一気にいきたいのだが……。

さて、簡潔に説明しよう。

今、俺の部屋に雪香がいます。麻衣と遊んでます。雪香が魔法少女アニメの必殺技を放つ真似をすれば、麻衣はパントマイムよろしく壁を張る動きをし、バリアだといい張ってる。つまり、部屋の中には小さな子供が二人で騒がしいということです。

つか、麻衣は十六（享年）だろ。雪香といっしょに遊ぶのはいいが、も少し大人に応対しろよ。正確には何十年も現世で過ごしてんだから、精神は俺より大人でもおかしくないはずなんだがな。

しかし、ここで怒鳴るなりしたら俺も同列だろう。ゲームに集中できんという理由だからな。それに、雪乃さんから預かってる身だし、キチンと見守る必要がある。

雪乃さんは確か夜には帰るとか言ってたし、それまではしっかりと面倒を見るさ。雪乃さんの大事な娘だからな。

「ダイヤモンドダスト！」

未だなりきりごっこは続いてるらしい。今度は氷の魔法か。雪香は手に持った魔法のステッキ（新聞紙仕様）を振りかざすと、無数の氷のつぶてが部屋内に走り、部屋が真冬の山みたいな猛吹雪になる。さすが雪女の血筋だな。

「ええい、サイコキネシス！」

それに負けじと、麻衣が叫んで部屋内の色んな物を飛ばして反撃する。安全面を配慮し人じゃなく押入の戸とかにぶつけているな。

ゲーム機も飛んでったわ。
ちなみに霊能力みたいなのでいわゆるポルターガイストみたいなもんだ。
やれやれと俺はため息を吐く。
そろそろ止めるべきであろう。
部屋が全壊したら困るしな。

「……ごめんなさい」
「別に邪魔したわけじゃ――いったーい！」
麻衣が雪香より幼いこと決定したな。
とりあえず二人を正座させ、あまり怒鳴ることはなく、言い聞かせるように叱る。
さすが雪乃さんの教育の賜物か、雪香は反省の色が窺え、麻衣はその素振りはなく、ハリセンで打たれた頭を抑えている。これは俺の教育が悪いのかね。
しかし、今日は下の階の天使さんがいないのは幸いだな。もしいたなら、走り回る音がうるさいとか言われ、あの青白い光弾が飛ぶとこだっただろう。
ふと時計を見たが、十二時を廻っているのか。ゲームに集中すると時間が流れるのが早い。
「そろそろ昼飯にするか。雪香は何か食べたい物とかあるか？」
雪香は表情を明るくさせ、
「ハンバーグがいい！」
元気よく注文を告げた。じゃあ、ファミレスにでも行くか。生憎、食事に関しては雪乃さんのお世話になってるから、冷蔵庫にはめぼしい食材はなく、コンロもない。
「あ、そだ。クロテンの新刊今日発売日だから買ってきて」
「へいへい」

パシリのような扱いだが仕方ない。麻衣は部屋からはでれないし、あと食べ物も食べれない。既に死んでるから飢えないのはいいが、味わえないというのは辛いだろうし、唯一楽しめるだろう娯楽に関しては十二分に味あわさせてやりたいからな。限度はあるが。

ちなみにクロテンというのは、一般的なタイトルの略語だ。ライトノベルのコミック版で、俺も読んでいる。

寂れた景色が広がる魔界荘から、都会ほどまではいかないが賑やかな喧騒が広がる街中まではそれなりに距離がある。

つい最近経験した遭難未遂に比べりゃ大したことないが、出歩くのは億劫にはなる。元ヒキをなめんな。

笑顔を絶やさず、ルンルンという文字が似合う雪香を連れ、最近人気が出つつあるチェーン店のファミレスに入る。

「いらっしゃいませぇ。二名様でよろしいですか？」

はいと答えた。

これは人気が出るのも分かる。

可愛い店員が身に纏うのは、赤と白の色合いが綺麗な制服。赤のミニスカートに白いニーハイソックスはまさしく神聖なる領域を形成している。

「注文が決まりましたらお呼びくださいー」

席へ案内され、メニューを開いて見やすいように雪香に見せてやる。

「お子様ランチ！」

と、雪香は小さな指で示す。このセットにはハンバーグに旗が刺さった写真が載っているな。俺もメニューが決まり、店員を呼ぼうと周りを見渡す。ファミレス自体馴れてないからな、タイミングが大事だ。できれば先ほどの店員を呼びたい。

店内を見渡すと、満席に近い状態だな。先ほどの店員も接客に勤

めている。心なしか家族連れより、男二人組が多いのは気のせいだろうか。まあ、あの制服だと無理もない。俺も雪香と一緒じゃなかったら、そんな店員目当ての客だと思われるんだろうな。

ファミレスで腹を満たした後、直帰はせず街をウロツくことにした。雪香も楽しそうに、はぐれないように繋いだ手を振り子のようにブンブンと動かしている。

「映画でも観るか？」

「うん！」

俺の提案に雪香は力強く頷いた。

賑やかな街の通りにある映画館。まだ入ったことはないが、人気作から、コアなアニメ映画まで幅広く上映されてるらしいと、三神さんから聞いたことがある。

「どれか観たいのあるか」

「アレがいい！」

と、雪香が指した映画看板は『魔法美少女シャーリィ』だ。よくある魔法少女モノで子供に人気な作品だな。俺もＴＶ放送版は欠かさず観ている。以外と楽しめるよ。

この映画版も実は気になってはいた。

だが、よく考えてみろ。たまの休日に男一人で子供向けな認識がなされてるアニメ映画をシアターに足を運んで観てる光景を。中には気にせず行くツワモノもいるらしいが、とてもじゃないが俺はその領域にはいない。

そう、そこでだ。雪香といっしょに観れば『子供に付き合い映画を観る気さくな兄（或いは父）』という見方がなされるだろう。人目とかの問題なくこの映画を楽しめるというわけだ。決して雪香をダシにしようとしてるわけじゃない。たまたま俺の提案に雪香が同調しただけだ。念のため。

良かった。実に良かった。
子供向けと侮る無かれ。中身は俺みたいなオタクに向けられて作られたような出来だったな。雪香もご機嫌ゲージが振り切ったようにスキップして、帰り道を進んでいる。
フフ……今日だけで雪香の俺への評価は高くなったな。つまりは雪乃さんの心証も上がったということ。
「あら。久しぶりねえ」
艶っぽい声を掛けてきたのは、紫の髪を靡かせるサキュバス。リルハさんだ。そして、
「……」
傍らに寄り添ってる犬コロは、無言で前を見据えている。その視線の先には、
「ユーキお兄ちゃん、知り合いなの？」
雪香が飼い主を見上げる子猫のように、俺を見て訊ねる。
「まあ、色々とあってな」
その色々とやらは、俺の行動によって解決したとは言いたいのだが、結局は勇者とやらに取られたという話だ。さすが勇者、汚い。
「白峰雪香です！」
雪香は元気よく名乗る。さすが雪乃さんの子。教育がしっかりしてる。
「ほら、クリスちゃん。挨拶は？」
リルハさんが言うが、クリスは少し母の影に隠れるようにして、何も言う様子はないな。前と小生意気キャラと違うんだが。
それにしても、クリスは犬耳を惜しげもなく露出させてるし、リルハさんの髪色や尖った耳も目立つだろう。毎日ハロウィンじゃないんだし、少しはこの街で話題を産んでいてもいいと思うが。この街に住む人は感覚がおかしいんじゃないかと。

「……」
「クリスちゃん？」
うーん。一向に挨拶もせんとは。
隠れつつ雪香を見るクリス。
頬を紅く染めるクリス。
目があって、雪香が微笑むと視線を逸らすクリス。
なるほど。これが示す答えは一つしかない。謎は全て解けました。

「今日はありがとう。助かりましたー」
「いえ。いつも世話になってますし、またいつでも言ってください」
雪乃さんの頼みなら、奪還屋でもなんでもやりますよ。
「今日はユーキお兄ちゃんといっしょで凄く楽しかったよー！」
嬉しいこと言ってくれるじゃないか。
その天真爛漫な姿にクリスが惚れるのも頷けるな。だが、俺には関係はない。当人の問題だからな。
何はともあれ、雪乃さんの俺への好感度は上がったな。確実に。
ドラナイの為の休日が半日無くなったのは痛いが、将来の地盤となるならば痛くはない。

あ、クロテン買うの忘れた。

勇気の幸せな一日（1）（前書き）

今回の話は一部顔文字を使っています

勇気の幸せな一日（1）

その日は、目覚めが良かった。
小鳥のさえずりが耳に心地よく、自然と目が覚めた。
カーテンを開けると、よく晴れ渡った空が残る眠気を吹き飛ばしてくれる。昨日の天気予報だと、曇りがちだと言ってただけに、少し意外なほど、空は青一色だな。
時刻は朝の七時。
押し入れでは、まだ麻衣が寝息を立てているだろう。最低十時間は寝るからな。
さて、まだ雪乃さん一家との朝食までは少し時間がある。枕脇に置いてある携帯を手に取り、とあるサイトにアクセスする。
声優。坂野美里のブログだ。俺の日課だ。彼女のブログはほぼ毎日更新があるから、楽しみにしている。今日の内容は……と。

『こんばんは。
ついさっき帰ってきました。
最近多忙です＞＜
疲れてます（T＿T）
でも、お仕事はとても楽しいので頑張れてます
実は明日と明後日は、お休みを頂いてます
この休みを利用して、旅行に行こうと思います！
行き先は秘密です（＝´∀`＝）

旅先で美里を見つけたら是非声を掛けてください
凄く喜びますから（＾Ｏ＾）

それでは、おやすみなさい（－．－）ｚｚＺ』

最近人気が出てきてるから忙しそうだな。やっぱドラナイ5のヒロイン効果だろうか。マイナーな時代から応援してただけに、メジャーになってきたのは、嬉しいが、ファン心理としては微妙な気持ちだ。

しかし、旅行か。その模様はブログにアップされるだろうか。されたら、今度行ってみようかね。

雪乃さんが作る料理は全て美味い。これは三ツ星レストランのシェフを凌駕するだろう。俺はいつの日か、『毎日雪乃さんの料理が食べたい』と言ってみたい。既にそうなっているが、プロポーズ的な意味だ。

「勇気さん、お茶です」

「どうも」

と、置かれたお茶をすすり、テレビを観る。この一時は他人がどんな対価を払おうが、手に入らない貴重な時間だろう。

「雪香、学校の準備しないと遅れるわよー」

「はーい。これ観てからするー」

雪香が今観ようとしてるのは、占いコーナーである。自らを占いのカリスマと評するクリスタル伊佐木が星座別の運勢を言う人気コーナーだ。

俺は占いなんて信じない質だ。元より、この人の紫色したフード付きローブをすっぽりと被った胡散臭い外見からして、信じる気を失う。当たると評判はあるらしいがな。

大仰な動作で水晶玉を撫で回し、一星座づつ、運勢を言っていく。このコーナーだけで十分は掛かる。

「上から飴が降ってくるって！」

嬉しそうに自らの運勢を見終わった雪香ちゃんは、ランドセルに教科書を時間割通り入れていく。いやいや、雨はともかく飴は普通

降らんだろう。だが、確かにクリスタル伊佐木は『舐めるアメだみゃー』と何故か名古屋弁で言っていた。

『蟹座の運勢――これは！』

俺の運勢はどうかねと、注目してみるが、クリスタル伊佐木は水晶玉を見て、目を見開いて驚きの表情を見せる。

『どうしました？　伊佐木さん』

と、唸る伊佐木に女子アナが声を掛ける。

『蟹座のボーイ！　特に二十代で六畳一間のような寂れた部屋に住む、ビンボーイ！　今日はベリーベリーハッピーな一日になる……ぜ……』

『伊佐木さん？　大丈夫ですか！？』

英語混じりに、ハイテンションで伊佐木は運勢を告げると、糸の切れた人形のようにクタリと座り込む。

しかし、どんだけピンポイントな占いだ。……ん。俺の部屋は六畳一間、そして二十代だ。伊佐木が言う条件に当てはまるな。まあ、信じる気は起きないが。

『……一つ忘れてたぜ、幽霊と暮らしてなきゃ駄目だ……』

と、言葉を振り絞るように言って、伊佐木は倒れた。

おいおい、幽霊と暮らしてる奴なんかいるわけないだろう。幽霊が見える、六畳一間で暮らす二十代の男なんているわけ――

「俺じゃねーか！」

「あらー。そうなんですかー」

魔界カフェに出勤し、開店準備をしながら、なつきさんに今朝の占いの内容を話した。

「どう思います？」

俺は占いは信じないが、ああまでピンポイントだと、気にはなる。

「良いことあるといいですねー」

「なつきさんは、占いとか信じる方なんですか？」
「そうですねー。朝のは見たりはしますけど、あまり信じたりは」
なつきさんは、はたと思い出したかのような表情をし、
「そういえばー。今日の占いは変わってましたねー。ワタシは言葉の最後にニャーと付けるといいらしいとかー」
なんですと。確か、なつきさんの星座はてんびん座だったか。猫座がないのが残念でならないが、それよりあの後も占いは続いていたのか。
「試しに付けてみたらどうですか？」
俺の案に、ほんの少し躊躇うような表情を見せたが、
「ええ、と、どうですか……ニャー？」
似合いすぎる。いや、前のしゃべり方がそもそもおかしかったのではないかと思うほどに。猫耳に、尻尾まで生え、愛くるしさがある幼な顔。そこに語尾にニャーが付くと、これ即ちパーフェクト。
「いいですよ。どうせなら、今日はこのまま、そのしゃべり方でいったらどうです？」
「そうですかー。じゃあ、今日はこれでいってみますー、ニャー」
冗談、半ば希望を込めて言ったつもりだったんだがな。
ふむ。ここはクリスタル伊佐木に感謝しなければならないか。ありがとう。これからもその調子で頼む。
死神は表情豊かにすると、運気が上がるとか。天使はツンデレになると、運気が急上昇とか言っておいてくれ。

今日のなつきさんは概ね好評だ。
そもそも、普段から猫耳なんかで、そういう層の客が常連にいるからな。語尾にニャーが付与するのは、寧ろサービス向上といって違いないだろう。
俺としても悪くはないと思うし、このまま続けてもらうのもいい

かもしれないな。
　そんな、なつきさんを見れたのは、ツいてるといっていいだろう。占いを完全に信じるわけじゃないが、ツキはいい風向きをしているんじゃないかとは思う。
　そして、今俺の手元には長方形の紙切れがある。買い出しをしていたら、商店街のイベントやらで、五千円につき福引き券を一枚貰えるというわけだ。
　商店街からお客を放さんとする努力が感じられるね。しかし、五千円も買い物をしないといかんのは、明らかに値段設定にミスがあるんじゃないかね。期間中に買った物のレシート持ち寄ってもいいとのことだがな。これで商品が地味だったなら、この商店街がシャッター通りと揶揄される未来も近いと見ていいだろうね。
　だが、そんな心配も無用だったようだ。とある店の前に設けられた福引き所には、各等の商品が書かれた紙が貼られている。
　一等はヨーロッパペア旅行券。
　二等は４２型液晶テレビ
　三等は最新型ゲーム機
　四等は商品券三万円分
　五等はポケットティッシュ
　この商店街が別の意味で心配になる。予算大丈夫なのかが。最新型ゲーム機なんて今や品薄状態だし。
　主婦が数人並んでいる。とりあえず、最後尾に並んで順番を待つ。
「はい。一回ですね」
　人当たりの良さそうなおじさんに福引き券を渡し、ガラガラと回る六角形の箱の取っ手にゆっくり手を当てる。まずは精神統一。脳裏に金の玉を浮かべながら――念じる。
　前に並んでた主婦は案の定ポケットティッシュを持って帰られた。占いの力が確かならば、この先雪乃さんとペアでヨーロッパを旅する景色が見えるはずだ。
　ガラガラと音を立て、箱の穴から飛び出してきた玉がコロコロと

転がる。
「はい。五等になります」
ふん。占い何て信じないね俺は。

「それなら、私も見てるけど」
午後。バイトに入った三神さんに、朝の経緯を話した反応がこれである。
「占いとか信じる方なのか？」
「まさか。ただ、クリスタル佐々木の動きが面白いから見てるだけ。占いとか全く信じないし」
「伊佐木なんだが」
「そんなのどうでもいいでしょ」
まあ。俺もどうだっていいが、大ざっぱなとこがあるな三神さんは。
テーブルを拭きながら三神さんは、ふと思い出したかのように、
「そういえば、日野くん。その占いに当てはまるってことは、幽霊と暮らしてるわけなの？」
ズバリと来たな。隠すつもりは大してなかったがな。天使や死神が当たり前のように存在して、この店に度々訪れてるといっても信じないように、幽霊と暮らしてるなんて冗談か頭に問題があるかしか思われんだろ。
「ああ。見た目は可愛いが、何かとやかましいのが一人な。だが、食費も掛からんし寂しくもなく便利だ」
あと、地縛霊でずっと部屋にいるから、一人になれないのはちと辛いが。というのは言わなかったが、これが麻衣に対してのほぼ本音である。
三神さんは、少しの間の後、
「へえ。いいなー。ね、今度日野くんの部屋見に行っていい？」

好奇心が詰まった笑みを浮かべる。
「別にいいけど。見えるか見えないかは保証できないが」
「オッケー。じゃ、今度の日曜行くから。後で住所教えてね」
強引だな。せめて、チラチラと視線を送りながら『行っていいかな?』なんて、恥じらいながら言って欲しかった。
だが、これも占いの力なのかね。うら若き乙女が、俺の部屋に来たいなんてさ。しかし、三神さんに麻衣の姿が見えるのかね。霊感に関しては俺もないだろうから、必要はあまりなさそうだが。
「いらっしゃいませ!」
三神さんが元気のいい声で、客を迎える。
「以外と普通……?」
これは初見の客の三割は放つ言葉だ。店名から、メイドカフェの類だと思うんだろうな。……しかし、どこかで聞いた声——あ。
「……坂野……美里……」

勇気の幸せな一日（2）

俺はクリスタル伊佐木のやけにピンポイントな占いによって、日本一幸運な男になったと思う。

それは偶然か、必然か。

現実的な考えならば前者かもしれない。だが、俺は運命というディスティニーを信じたい。同じ意味だ。

「コーヒーと……あと、何かオススメはあります？」

うおお。アニメやゲームで聴くのと変わらない綺麗な声。それはまさしく、音の芸術品。あなたの声を今ここで聴ける幸せに乾杯だ。

「そうですねー、ショートケーキとー、それに合うコーヒーはどうですかー。ニャー」

なつきさん、なんですかその『ニャー』は。坂野美里さんの前で失礼じゃないスか。この店が変な印象を与えてしまうじゃないか。

「じゃあ、それにしてください」

注文するその姿も可愛い。

「どしたの？　日野くん。ボーッとして」

「いや、ちょっと……」

ああ、三神さんが声を掛けたから、坂野さんがこっち見てるじゃないか。いや、声優に見られてるなんて、中々経験できることではないが、うはー。つぶらな瞳が可愛い。

「ちょっと？」

小鳥のように首を傾げなくていいから、さっさと離れてくれ。俺は坂野さんを少し離れた位置から観ていたいんだから。話しかけるなんてできやしない。宙に舞い上がって何言ってしまうか分からない。

「あのー？」

あああ。坂野さんがこちらに向かって声を掛けている。どーしよ。なつきさんはカウンターで背中向けて用意してるし、ここは三

神さんに、
「私、ちょっとトイレ」
耳元で小さく言って、三神さんはトイレに向かっていく。何故このタイミングなの。我慢できなかったのか。いや、我慢大会じゃないんだからさ、せめて客の入りとか見つつ余裕もって行っときなよ。
「あ、は、はい。なんですか？」
自覚できるくらい上擦った声を発し、坂野美里に歩み寄る。近い、近いよ。裸眼じゃ眩しすぎて見てらんねー。誰かサングラスをくれ。
「ここって、どうして魔界カフェって名前なんですか？」
俺は坂野美里に質問されたるとは。だが、しかし、その質問の答えは、なつきさんのみぞ知ることだ。一バイトの俺が知るわけ無い。一つ分かったのは坂野美里の天然はキャラじゃなく、本物かもしれないということだ。
「えっと、なつきさん」
と、店主にこの質問の答えを言って貰うことにする。
「店名ですかニャー。それはワタシが魔界――」
「――が、好きだからでしたよね！　前に聞いたことありました」
危ねえ。なつきさんの天然っぷりを考えてなかった。今、ハッキリと『魔界から来たから』みたいな答え方をしようとしてたな。いくら、信じてもらえないとはいえ、言い広げすぎると、いずれ本当に信じる輩が出てくるぞ。
「そうなんですか。実は私、声優をしてまして、魔界が関係したアニメのキャラの声とかしたことがあるんですよー」
あら。別に声優を隠したりはしないんだな。アキバじゃないんだし騒ぎになるとかはないからか。じゃあ、
「咲乃ですよね」
南沢咲乃ぐらいしか、美里さんが担当したことがある、魔界に関係するアニメキャラは知らん。
「あ、はい。私の事知ってるんですか？」
目をまん丸くして、美里さんが訊く。

「はい。ファンの一人ですよ」
いまにも発狂したいが、平静を装いつつ出来うる限りの爽やかさを纏って俺は答えた。
「そうなんですか。嬉しいなー」
女神のような笑みを美里さんは浮かべた。うがぁー、目の前でこの笑顔は……目が、目がぁ！　眩しすぎる。
「お待たせしましたー」
美里さんの前に、ショートケーキとコーヒーが置かれ、美里さんはそれをジーッと見てから、
「写真取ってもいいですか？」
と、なつきさんに訊ねた。
「はいー。いいですよー」
なつきさん、ニャーを忘れたか。
了承を得て、美里さんは携帯電話を取り出し、ケーキセットをカメラ機能で取り始めた。
「ん、どうしたの？」
今、トイレより戻った三神さんが不思議そうにその姿を眺め、俺に訊いてきた。ありがとう。おかげで俺は美里さんと会話ができたよ。
「写真、もしかしてブログに載せたりするんですか？」
もしやと思い俺は訊いた。三神さんは訝しげに首を傾げている。
「そうですけど、ブログまで読んでくれてるんですか？」
はい、と頷くと美里さんは「恥ずかしいなー」と言って頬を染める。俺は今この瞬間を写真に収めたいが、なんたること。今より携帯電話を持ってないことを恨んだ時はない。
「そのブログで、旅行に行くってありましたけど、それでこちらに？」
俺は半ば自暴自棄で、電車で気の向くままこちらに来たが、俺からしたら大した名物もない街だがな。いや、分かる人には魔界人がそれなりに存在するし、一種の名物やもしれんが。そんな人間は俺

以外は知らん。
「そうです。とりあえず電車に乗って、目的地もなく気ままに」
ぶらーり途中下車の旅か。
「へえ。楽しそうですね」
三神さんが食いついたか。俺の台詞だぞそれは。
「ええ。色んな出会いとかあって、面白いですよ。休みが取れたら、よく行きますよ」
それから、美里さんから旅の思い出話を聞いたりして、一時間ほど俺は幸せな一時を楽しむことができた。
占いは信じるべきだと思う。

「フフ……」
「ユウくん、気持ち悪いよ」
そこはせめて“キモい”と言ってくれたほうが表現が軟らかい気がする。ふん。まあいい。今の俺はどんな心の傷を瞬時に治す特効薬を入手した。
さて、この坂野美里直筆サインを飾るための額縁を買ってこなければならないな。家宝にしよう。

「勇気さん、何か良いことでもあったんですか?」
自然と美里さんが声を当てたアニメの鼻歌を奏でたくなるな。
「あ、分かりますか?」
「はい」
「何あったの、ユーキお兄ちゃん」
フフン。それは秘密にしておこうか。他人には美里さんの良さは分からんのさ。

「まあ、占いは信じるべきモノだと言うのがよく分かりましたよ。雪香はどうだった？　飴が降ってきたか？」
雪香は満面の笑みを咲かせ、
「うん！　学校で飴撒き大会やって、たくさん飴拾ったー」
豆じゃなく、飴をバラマくのか。最近の学校行事はよく分からん。
だが、雪香も当たってるとは、クリスタル伊佐木……侮れんな。
『クリスタル伊佐木が逮捕されました』
と、ＴＶのニュースから流れた。どういうことかと、注目する。
『自称占い師のクリスタル伊佐木。本名佐々木伊佐木（４２）が、昼頃、事務所に警察の家宅捜索が入り、色々な容疑で逮捕されました。クリスタル伊佐木は、朝の占いコーナーで人気を博していましたが、近日の占いは、ふざけすぎてる、当たらない、など苦情が殺到し、クリスタル伊佐木が以前より販売していた壺に関しても、色々あり色々とあって、逮捕に至ったようです』
うん。色々あったみたいだね。やはり胡散臭い奴だったということか。だが、俺への占いは見事すぎるくらい当たったがな……。

坂野美里のブログが更新されていた。

『こんばんはー
休暇中で只今旅先から書いてます（＾Ｏ＾）

今日一つ嬉しい出来事がありました
旅先で店名が面白いなと思って立ち寄った喫茶店の店員さんなんですが
ワタシのファンだったんです（≧≦）
このブログも見てくれてるとも言ってくれました。見てますかー？
その喫茶店のマスターさんがとても可愛いな人で思わず見取れてし

まいました（照）

また機会があれば行ってみたいと思う
良い雰囲気の喫茶店でした（＾Ｏ＾）

では皆さんおやすみなさい』
見てますよー！　と、叫びたい。
あと、カフェで撮っていたメニューの写真が載せてある。実によく撮れてるな。

今日は俺の人生で一番幸せな一日と行っても過言ではないだろう。

魔界荘の大家さん

梅雨前線がゆっくりと日本列島より去り始め、天気は快晴が続いている。ようやくカビとの壮絶な戦いは沈静化しそうだ。

雨漏りに、カビ、今時の家屋はそれらの対策は万全だったりするんだろうか。日本の建築技術の進歩は恐ろしいからな。どんな古い建築物もリフォームで、なんということでしょう、と驚かれるほど一新する。

だが、魔界荘はまるで一昔前の漫画家が住むようなボロアパートだ。文句はない。無駄に広かったら、雪乃さんと過ごす距離も広がっちまうからな。隣室から微かに聞こえる親子の談笑もなくなっら困るし、まあ、もう一方の部屋から漏れるホラーめいた音は勘弁願いたいが。何をしてるんだろう魅栗さんは。

第一に家賃を払わずに住んでいるというのは、かなりの恩恵だ。大家がいなくてラッキーである。

その家賃で浮いた金みたいな金で買った、カ◯キラーやらが入った袋をぶら下げな、残存勢力をどう駆逐するか考えながら、カラスの寂しげに鳴く頃に、俺は魔界荘に着いた。そして見てしまった。

魔界荘の庭は、国内の秘境にでもあるやもしれない、秘密裏の研究所から持ってきたかのような、バイオプラントが植えられている。

見た目からして毒々しい色で危険だと本能で分かるそれらが、もし、誰かに発見でもされれば、たちまち騒ぎになりそうだが、魔界荘は街の外れにあり、あまり普通の人間が好んで来るような場所ではない。魔界荘の周りは塀に囲まれてるため、ボロい建物マニアが立ち入らないかぎりは発見はされないだろう。

そもそも仮に見つかっても騒ぎにならない可能性もある。先日、バイトの同僚の三神さんが来たが、ただ『変わった植物ね』とだけ言って、興味なさげに一瞥しただけだったし。

そんな魔界植物の一つ、食人植物がただ今、口のようにパカリと開く、葉ともつぼみとも言えない先端部分で、人の頭をスッポリと包み込んでお食事の真っ最中だ。

突っ立った状態で頭だけ食われてる人は、ジーンズにTシャツという格好で、出るとこは出てないから男だと分かる。荒木さんかもしれんが、まだ帰宅時間じゃないし、仕事では（温和な方）スーツ姿だし可能性は低いだろう。手にはゾウの形を模したじょうろを持っているな。水でもあげようとしてたらしい。最近カンカン照りだったからな。それ故の悲劇か。

「うー……」

と、食われた人は唸っているような声を出して、手で植物を叩いている。力一杯には見えない。ムツゴロウさんのように、愛でるような優しいポンポンといった叩き方だ。

あれに食われたら消化するまで離さないと、雪乃さんに聞いたことがある。

とりあえず、俺は冷静に合掌をしたのち部屋に戻ろうかと、歩きだそうとした——時だった。

「このクソ植物がぁぁぁ！」

との怒声。続いて轟音と振動と共に、植物は一瞬のうちに消滅——いや、灰と化し、サラサラと吹く風に運ばれていく。光で煌めいて綺麗だと思ってしまった。

火？　そんなチャチなもんでは決してない。気だ。天使さんが放つような青白い気を、全身に迸らせ、そのマグマのような熱気で灰にしたのだ——多分。これは天使さんとは桁違いの力だ——多分。

「……ハァハァ……」

先ほどまで食われてた人物は、肩を上下させ息を整えている。髪がコンロの小のような青白い色をしていることと、今しがた放った気から魔界の人だろう。

人間より魔界の人と出会う事のほうが多くなってるせいか、馴れてきたな。

「おや、あなたは？」

気配に気付いたか、こちらを振り向いて、紫の瞳を細くして柔らかい笑みを浮かべる。優しげな父親といった印象だ。顔色が日に当たらず不健康な白さだが、魔界だからな。驚きも心配もしない。

「ここの住人ですが……」

逃げ腰になりつつ、俺は答えた。さっきの気を放たれたらと思うと、膝が震える。

「そうですか」

と、ニコニコとこちらに近づいてきて、手を差し伸べ、

「初めまして。大家の榊真央（さかきまお）です」

まお……女みたいな名前だな。つか、大家なのか。ようやく会うことになるとは。俺も名を名乗り、手を握る。

「勝手に住んでる形でしたが、よかったんですかね……」

ノン家賃でな。

「別に構いませんよ。空き部屋でしたからね」

寛容な人だ。優しい笑みを崩すことはなく、以前雪乃さんから聞いていた通り、いい大家さんのようだ。だが、さっきの光景は……。

「何をしてたんですか？」

「いやあ、ちょっと水やりをね。油断してましたよ。……ハハハ」

と、榊さんは苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、さっきのは大家さんが？」

「ええ、まあ。ちょっとやりすぎたようですね……。僕、怒ると理性が失ってしまうようでして……」

彼を危険人物に認定されました。キレて理性失って、あんな力を出されたらたまったもんじゃない。近づかないようにしておこう。

「あらー。榊さん帰ってたんですか」

「白峰さん、久しぶりですね」

「勇気さんも、おかえりなさい」

買い物帰りらしき雪乃さんが現れた。当たり前だが知り合いか。
「長い間空けてて、すみません」
申し訳なさそうに榊さんは頭を下げる。怒らなければ割と、いや結構いい人そうだな。
「いえ、魔界の方は一段落したんですか？」
え、どういう意味ですか。
「一応は。しばらくこちらに居ることができそうです」
「それは良かったです。大変みたいでしたね」
どうやら深い事情がありそうだ。俺は部屋に戻るとするか。

「へえ、帰ってきたんだ」
榊さんが戻ったことを告げた麻衣の反応は、あまり興味なさげである。
「だって、ほとんど会ったことないし」
「そうなのか」
右手にカ○キラーを、左手に使い捨ての歯ブラシを持ち、カビを撃退していく。まあ、これが意外に気持ちいいのよ。カビが綺麗に無くなってくのは、癖になる。
「でも、ウルサくなりそうだなー」
「そうなのか？」
榊さんの部屋は、俺の部屋の真下であるが、穏やかそうな人だったぞ一応。
「うん。前もそうだったから」
「そうなのか」
カ○キラーを噴射して、歯ブラシでゴシゴシ……。はい消えた。

「……あの、大家さんって魔界の方とかで何かしてるんですか？」
雪乃さんの部屋での食事風景の後、俺は訊いてみた。いつかはこれを一家団欒と言うことが俺の望みだ。いや、野望だ。
「えっと、そうですねえ」
雪乃さんは言葉を探るように視線を上にしている。ただ気にはなってたから何気なく訊ねたんだが、マズかったかね。雪香は先に銭湯に駆けてっていないが。
「……榊さんはあちらでは魔王でして、あ、こちらだと総理大臣のようなものですね」
魔王。榊真央。安直だな相変わらず。こちらの世界で名乗る名とはいえ、もう少し捻ってもほしいが、いや、雪乃さんはその名前がピッタリですよ。以前聞いた魔界での名前よりかは何倍も。
「だとしたら、何故、大家なんか……」
「趣味のようなものだと思います。あちらは殺伐としてるようですから。……安らぎが欲しいんでしょう」
こちらじゃ、総理大臣が安らぎ求めて、仕事放っぽいてゴルフなんかやった日にゃ、支持率がた落ちだがな。
「なるほど。だから、こちらに居ないことが多かったと」
「はい。でも、厄介な仕事は片づいたので、しばらく居られると言ってました」
厄介ね。不吉な言い回しだな。魔界大戦争みたいなことでも起こってたりしてな。

「……のクソタンスがぁぁぁ！」

その時、魔界荘が揺れ、ビリビリと空気が震動した。同時に怒声が響いた。
榊さんの声――最初に聞いた怒りの――だ。おそらくは魔界荘全体に響いたな。
「今の何でしょうか……？」

分かってはいる。だが、聞いときたい。背中に嫌な脂汗が滲んできている。これが恐怖。

「多分ですが、大家さんが、タンスの角に小指をぶつけたんでしょう。そして、怒った拍子にタンスが消滅しましたね」

クスクスと笑う雪乃さん。今のどこに笑い所が？　あと、まるで見えてるかのような的確な説明だな。いや、怒りでタンスが消滅って、富士山頂並に沸点が低いな。

「いい人なんですけど、怒りっぽくて……。でも、力は抑えてるみたいですね」

「いや、思い切り揺れたりしましたが」

「大家さんなら、辺り一帯を荒れ地にするくらい簡単にできますから。魔界で一番の力を持ってると言われてますし」

タチが悪い。魔界最強の方が怒りやすく、怒ると我を忘れる。セーブはしてるようだが。危険極まりないな。

なるだけ、関わらないようにしたほうがよさそうだ。

次の日。

「おや？」

関わりたくないと思うと、関わってしまう法則発動！　伏せカードはなし。

榊さんは、ジャージ姿でレレレなおじさんよろしく、箒で庭先を掃いている。つか、今まで誰もそんなことはしてなかったな。さすがは大家らしいな。俺としては、め○ん一刻の管理人さんみたいな人がよかったが。

「あなたは確か……」

目を細めてこちらをジッと榊さんは見つめてきた。眉間に皺をよせ、孫の名前をど忘れした祖父のようにムーっと唸っている。

「日野です」

さすがにこのままキレられたらたまらんし、名乗ってみた。
「ああ。そうでしたね」
榊さんの表情が解れ柔和な笑みへと変わる。
「最近、歳のせいでしょうか……忘れっぽくなってしまいまして…
…ハハハ。では、日野さん。いってらっしゃい」
「あ、はい。行ってきます」

怒りっぽくて、忘れっぽいか。
ガンコなお年寄りみたいな人だな。
要注意人物リストに入れておくか。

勇気の厄日（1）

寂しい。

一人での夕餉はこんなにもパズルのワンピースが欠けたように、寂しげなものだったんだな。

昔の俺は一人で食うのが当たり前だったから、そういう寂しさとかはほとんど感じなかった。いや、感じないように覆い隠していた。だが、今は一人で食事というのが不自然に思えるようにまでなってしまっている。

ここに来てから朝、晩と雪乃さんの部屋でいっしょにするのが自然になってしまったからな。

人というのは日常のサイクルから何か一つが欠けただけで、歯車の欠けた機械のように気持ちに微妙な不具合が生じる。俺にとって、雪乃さん達との食事の団らん風景は下手な歯車じゃ修復不可能なくらいの大きな損傷と言っていい。

「ユウくん。やけに馬鹿なりに難しそうな事考えてるような表情で食べてるけど、雪乃さんの料理美味しくないの？」

バカなりに……は余計だ。

「美味いに決まってるだろ。これをマズいといったら何を美味しいと言えばいいのか分からなくなるくらいに」

「ふぅん」

反応薄いなおい。

「ま、私にはどうでもいいけどね。食べれないし」

麻衣は幽霊だからな。食事は不要。学校も試験も何にもない。あと娯楽は必要だな。なかったらやかましくなるし。

「美味い物食べたときの幸せとか感じられないのは残念だと思うが。つか、思い出したりしないのか？」

「うーん。生きてた頃は味気ない食べ物ばっかりだったから。思い出したりはしないかな。今はいいよね。美味しそうな料理がたくさ

んあって」
　麻衣が生きてた頃というと、昭和初期か……。俺のイメージだと欧米文化が入り始めてカステラとかありそうだが、それでも庶民は質素な暮らしだったんだろうな。
「つか、そんだけ死後も過ごしてんなら、精神年齢は成長してもいいんだが」
「いつまでも若い心は持ってなきゃね」
　エヘンと腰に手を当てて威張る麻衣。褒めてはいないんだが。ま、いいか。落ち込んだ時に麻衣の脳天気さを見ると、細かいこともどうでもよくなってくるし。

　細かい事は気にしてはいけないな。
　この雪乃さんが運んできてくれた食事を味わおう。うん美味い。

　次の日。
　昨日、皿を舐め回すくらい平らげた食器を丁寧に洗ってから、それらを持って俺は隣室のドア前に来ていた。ちなみに実際に舐め回してはいないが。
　朝七時に朝餉を食べに訪れるのが毎日の生活パターンとして、既に染み着いている。これが崩れたら俺は身体に異変を起こしてもおかしくはない。
　それほどまで雪乃さんの柔和な笑みと手料理は、一日の活力を満たしてくれる。
　ノックを二回して数秒待つ。
　万が一にもいきなりノブを回して入ったりしたら、少年誌のちょいエッチなハプニングみたいな雪乃さんの着替えシーンに遭遇してしまうかもしれんし。……見たいけど。
　紳士な俺はそんな真似はしない。数秒待って返事がなければ入っ

ていいという合図だ。何か入ってはならない事情がある時だけ声が返ってくる。
心中で三秒数えたが返事はなし
俺はノブを回して部屋に――
「……ん？」
ノブが回せないッ！？
鍵が掛かっているのか？　今までそんな事ありえなかったはず。雪乃さんに何かあったのではないか。と、ドアを蹴破ろうか、自室から窓枠伝いに部屋に行こうかと考えると――ガチャリ。鍵が開く音がした。
「なに？」
ドアが少しだけ開いた。俺は視線を下に向け、
「おはよう。雪香ちゃん」
「なに？」
む。おかしい。いつもなら『おはよー』と無邪気な笑みを浮かべて挨拶を返してくれるんだが、今、顔を上げて俺を見る雪香の顔は、冷めたイマドキの子供のように笑みはない。
「あ、朝食を……」
改めて言うとなんと情けないことか。今まで当然の如く朝は雪乃さんのトコで、が根付いていたが、客観的に見ると毎日食事をせびりにくる隣人だからな。
「今日はない」
え、今なんと言いましたか。
「ないのか？」
聞くと、雪香は頷く。
「どうして？」
聞くと、雪香は何か言いあぐねるように家の中に一度視線を向けてから、
「……」
無言の返答。

「そうか。じゃ、これ渡しといてくれ。ごちそうさまでした、と」
食器を渡すと、雪香はドアを閉め、またガチャリと鍵を閉める音が聞こえた。
俺は涙目になりながら部屋に戻った。

朝の活力源を見ることが叶わず、おまけに部屋のミニサイズの冷蔵庫にはちくわしか入っておらず、栄養も満たされてない。
まあ、それでも魔界カフェでのバイトはしっかりとこなせてはいるが、頭の中では何故、雪香が冷めてて朝飯を食わしてくれないのかという、いつも餌をくれるばあさんが突然くれなくなって困った野良猫のような気分になっている。
どうして唐突にそうなったのか考えたが、金に困っている。とか、気まぐれだとかしか思いつかない。……さすがに俺に飯を食わすのが嫌になったはないよな。そう願いたい。
俺は団らんができればいいんだ、いっしょに食事風景に加われればいいから、食費くらい二人分含めて言ってくれれば出すというのに。帰ったら言ってみよ。
「あのー。勇気さん」
「はい？」
と、俺を呼んだなつきさんは続く言葉を言いあぐねてるのか「あー」とか、「えっとー」とか、視線をキョロキョロ、猫耳をピクピク、尻尾をフリフリさせ、落ち着きがない。その姿を見てると活力が湧いてくる。
ようやく、こちらをキリリとした瞳で見ると、一度気持ちを落ち着かせるように胸に手を当てて、そして言った。
「……は、働けクズ！　……ですー」
まるで恥ずかしさに打ち勝って告白を果たした女子のように、背

を向けて店の奥へと走り去っていくなつきさん。
その後ろ姿を徐々にぼやけていく視界で見送りながら、俺は石像のように固まった。
ハタラケクズ。
呪文のようにその言葉が脳内で巻き戻しては再生が繰り返される。
ホワイ？　俺はいつだって真面目に働いてきたつもりなんだが。
そりゃ確かに、客がいない間には雑誌読んだりしてたし、今し方も椅子に座って物思いに耽ってはいたが……。今まで一度たりとも仕事に対する姿勢に、なつきさんから苦言を呈されたことはなかったのに。ここに来てまさかのクズ扱いですか。これはボクシングチャンピオンの伝家の宝刀右ストレートをもろに受けたように効くぜ。

ピロリーン。
気の抜ける電子音が、今にもどこか遠くへと飛び去ろうとしていた俺の意識を、引き戻した。
「何を撮ってんすか、三神さん」
女子高生らしくない、ストラップすらないシンプルな黒い携帯を構えるバイト店員が目の前にいた。
「面白い顔してたから」
だからって勝手に撮らんでくれ。俺にも肖像権ってものが……まあ、いいか。今はそれより、
「何故、なつきさんがいきなりあんな事を……」
俺の疑問に、三神さんは自信に満ちあふれる笑みを浮かべる。
「簡単な事よ」
「え？」
三神さんは、横を向いて一歩二歩ゆっくりと勿体つけるように歩く。まるで自信満々に推理を披露する探偵みたいだ。
そしてキリリと引き締めた顔をこちらに向けると、
「日野くんが、真面目に働いてないからに決まってるでしょ！」
ドーン。

と、マンガならば集中線でより鋭く見せるであろう指先で俺を指した。

「……まんまじゃん。いや、俺は真面目に働いてるつもりだが」

俺の言葉を犯人の戯言を聞くように鼻で笑い、探偵気取りなのか三神さんはゆっくりと歩き出して推理を述べる。

「それは日野くんが思ってるだけで、なつきさんはそうは思ってなかったということよ」

「だったら何故今更言うんだ？」

「なつきさんが、不満をすぐに口に出せるような性格に見える？」

「……それは……」

普段、穏和な人ほど内にはストレスを抱えてると聞くが……なつきさんに限って……

「きっと日野くんの勤務態度に思うとこはあったけど、言うに言えなかったわけ。それが溜まりに溜まって今まさに――」

三神さんの歩が止まる。

顔だけをこちらに向ける。犯人を完全に追い詰めた探偵のように自信溢れた表情。

まずは人差し指を一度、ナンバーワンをアピールするかのように天を指してから、

「吐き出したってわけ！」

ドドーン。

真っ直ぐに腕を伸ばして俺を指した。

「……そうだったのか」

俺は完全に手詰まりになった犯人のように、膝から崩れ落ちて床に手を付いた。半分はその場の雰囲気だ。

まさかなつきさんが不満を溜めていたとは。注意を通り越してクズと言い放つぐらいまでに。

三神さんの推理を鵜呑みにしたわけじゃないが、なつきさんが言ったことは聞き間違いであってほしいが、現実なわけだ。それだけで、心には深い傷を負ってしまっている。

普段おっとりな人が、はっきりとものを申されるとこうまで心に響くものなのか。同じ事を三神さんに言われたとしても、こうまではならないだろう。

泣きっ面に蜂とはこの事か。

なつきさんからの戦力外通告のようなクズ発言に傷心したまま癒えることなく、バイトを終え帰宅した俺の耳に入ってきたのは麻衣の一言だった。

「お前に食わす夕飯はねえ！　だってさ」

やけに懐かしさを感じさせる言い方をしながら、雪乃さんから預かったという言づてを麻衣から受け取った。

せめて似せる努力はしろ。あと、多分脚色が加えられてるだろその言づて。雪乃さんはンな事言わない。もう少し優しく伝えるだろうよ。

というわけで、空っぽの冷蔵庫を何度開け閉めしようが、呪文を唱えようが腹を満たす物は出てこないから、片道三十分はあるコンビニに向かう途中、見知った後ろ姿を見つけた。

モデルのようにスラリとした体型が二人分。オーラでも発しているのか、その行く先は見とれながら道の端による人々。

光を具現化したようなブロンドのウェーブしたロングヘアーに、闇を凝縮したような超ロングな黒髪は、まさしく天使と死神だろう。

「魅栗さん、天使さん」

背後から声を掛けたが、振り返ることもなく会話もしてない二人は歩く。

無視ですか？　聞こえてないはずはないと思うが。今度は前に回り込んで、

「こんばんはー」

と、言うと二人の歩みが止まる。よかった認識はされてるようだ。

別にウザがられようが気にはしない。むしろ「なに？」とか綺麗な顔の眉間にしわを寄せて、眼光鋭く睨まれたい。変な趣味じゃないが、なつきさんと雪乃さんの普段とは違う応対をされた今となっては、普段と何ら変わりない反応された方が安心する。

「邪魔」

「……キエテ」

天使さんの冷淡な碧い瞳と、魅栗さんの髪間から覗く怨むような瞳が俺を硬直させ、二人は横を通り過ぎていった。

違う。いつもの二人じゃない。

天使さんは、石ころを見るように眉間にしわを寄せることすらなかったし、魅栗さんはいつもなら淡々と単語帳から引っ張り出したような短い返答をするか、無言を貫くはずなのに、呪いの言葉みたいなのを行ってきたんだが。

……たまたまか。

きっと今日は揃って虫の居所が悪いんだな。

……たまたまだ。

勇気の厄日（2）

夕陽に染まる寂れた公園。

走り回る子供の姿はなく、だみ声のカラスが鳴いている。手入れが行き届いてないブランコがキィと揺れる度に泣いている。俺の心も泣いている。

ガサガサとレジ袋が風で音をたてる。一応は温め済みの弁当も既に冷めてしまっているだろう。

もっともこうして斜線を背負いながらブランコを漕いでいなくとも、帰路に着く間に冷めてしまうだろうけど。

部屋に電子レンジはない。お隣さんに行けば、最新鋭のレンジで弁当の美味しさを一番引き出してくれる温度にできるが、今は行けない。行きたくはない。

もし氷のように冷たくあしらわれたら、俺のガラスのハートはハンマーで叩かれたあげく、すりこぎで粉末状にされたかのようになってしまうだろう。修復不可能だ。

コンビニで偶然会った榊さんにも傷つけられたしな。

声を掛けたら見ず知らずの人を見るような目をして首を傾げられ、オレオレ詐欺みたいに名乗ってみたらそれでも、記憶の片隅にすらないようで覚えてないの一点張り。終いには柔和な笑みで謝られてしまったし。

榊さんの物忘れがこうも酷くなってるとは思わなかった。

「はぁ……」

「はぁ……」

もうため息を吐くしかない。ん……何か二倍重苦しく聞こえなかったか。

「はぁ……」

「はぁ……」

ほら、重なって聞こえる。

「あ」
「あ」
横を向いて気付いた声が重なった。
グレーのスーツ姿の冴えないサラリーマンがいい年してブランコに座っていた。背中を丸め斜線を背負っているかのように哀愁が漂っている。
「……」
「……」
まるで鏡を見るようである。姿は違うが、脇に置いた鞄の茶色が哀しげに見えるし、内面が今の俺と似ているように感じた。
数秒見つめ合った後、互いに前に向き直る。相手が心に闇を抱いた美女だったならドキッとするが、見た目アラフォーなサラリーマンである。ときめきはない。
「……仕事辞めさせられそうなんですよ」
ブランコを揺らしながらサラリーマンが言った。呟きでもなくこちらに語るような声量だし、
「そうなんですか」
「会社の経営が苦しいらしくてね。退職者を募ってるんですが……上司に言われましたよそれとなく……ね」
勢いの着いたブランコに揺られながらサラリーマンは続ける。
「……当然の話なんですよね。年相応のポジションに居るわけじゃないですし、何かを切り捨てるときには真っ先に対象になる気はしてましたが……いざ、そうなると……」
漕ぐのをやめたブランコは徐々に振り幅を小さくしていき、ユラユラとした動きになる。
「妻や子にどう伝えたらいいんでしょうね……」
自虐的な痛々しい笑みを浮かべこちらを見ないでくれ。どう答えればいいかなんて妻も子もおらず人生の経験値も少ない俺には、
「……きっと、分かってくれますよ」
根拠もない無難な言葉でしか返せないな。

「そうだといいですが……」
僅かに表情を曇らせ言って、サラリーマンは次はあなたの番ですよと、無言で促してきた。
あなたに聞かされた話と比べたら大した重さのある話でもない気もするんだが……

「……そうですか。大変でしたね」
哀しみ二割り増しくらいやや大げさに心情を告白し、サラリーマンが真摯に受け止めてくれた。
しばし、沈黙が夕闇に染まり掛けてきた公園を支配した後、カラスのだみ声が合図になったかのように、サラリーマンが立ち上がった。
「互いにいいことがあるといいですね」
鞄底に付いた砂を払いながら、空元気にも見える表情をサラリーマンは浮かべた。
「そうですね」
俺は頷いて、ブランコを揺らしやや助走をつけて飛ぶ。
レジ袋を拾って後にした公園からは、もう一度だみ声のカラスの鳴き声が聞こえた。

自室にて冷たいままのコンビニ弁当を食った、床に仰向けになり薄汚れた天井をぼんやりと俺は眺めていた。
そういえば今日は雪乃さんの見てはいない。朝方行ったときには雪香の冷めた顔しか見なかったしな。道理で身体が気怠いわけだ。
雪乃さんの笑顔が一日一度は拝見できないと、そうなる身体になってしまってんのか。いわば雪乃さん中毒。
そして朝からいまいち気合いの入らない俺に、闘魂注入ビンタじゃなく、言葉の槍を心臓に突き刺してくれたのが、なつきさんの一

言か。

三神さんの推理によると、俺に十割の原因があるようだがそれは否定しない。一割でも、なつきさんが悪いこととするのは余計に心苦しくなる。

でも、鬱憤が溜まっていたとはいえ、なつきさんの口からあんな言葉が出てくるとは、おとなしかった女子が突然金髪に染めてメイク全開で登校してきたような衝撃があったね。そんな経験したことないが。

まあ、精神を傷つけられた慰謝料をなつきさんに請求はしたいね。金ではなく、メイド服を着てくれるだけでいい。それだけで精神的ショックは完治どころか、癒しオーラでコーティングされるだろう。

魅栗さんに、天使さん、榊さんに付けられた傷までも綺麗サッパリ無くなるな。

しかし、何故皆が結託したかのように俺に精神攻撃を仕掛けてくるのは偶然で流していいのか。

帰り道でも黒木さんに会って声を掛けたが、終始無言で、なまはげに劣らない泣く子も黙る形相だったのは、どういうことだろうか。元々か。

だけど、無言なのはおかしい。黒木さんは喋ったり豪快に笑ってるのが常時だ。そうじゃなきゃ、単なる怖い顔のオッサンだ。

コレでまだ今日は会ってない荒木さんを除き、魔界荘住人の9割に普段とは違う態度をとられたということか。

「……これは何かの陰謀か」

起き上がり、部屋中に視界をさまよわせる。押し入れからライトの光が漏れているな。ここ最近の麻衣はああして押し入れに篭もり何かをしているようだ。

絶対に入るな、と恩返ししにきた鶴のような事を言われ、そう言われたら“入れ”というフリだと思い、開けようとしたら超能力めいた力を使ってるのか、戸が接着剤で固められたかのようにビクともしなかった。戸を相手に四苦八苦するのも馬鹿らしいし早々に諦

めたが。
　そんな、幽霊が押し入れで何をしていようがどうでもいいが、雪乃さんやなつきさんの態度がこのままなのはよろしくない。主に俺の精神的に。
　なつきさんも、あれから何となくではあるが俺に対する接し方が透明な壁を挟んでいるような、どこかよそよそしさを感じるし。
　だが、三神さんに対してはいつもと変わりはなかった。これはつまり、機嫌を損ねているわけではなく、俺にだけ……こう、何か思うとこがあるのだということ。直接的に言えば嫌……やめとこ。
　そういえば、あの発言の後コソコソと三神さんと話してたのも気に掛かる。生憎、小声を聞き取ることができる聴力は持ち合わせてなかったが、想像するにこのような会話が交わされていたのではなかろうか。

「ついに言えましたー」
「日野くんかなりショックみたいでしたよ」
「はいー。これで自主的に辞めてくれるといいですけどー」
「ですね。私一人いれば十分ですし。あ、辞めたら時給上げてくれます？」
「いいですよー。早く辞めてくれたらいいんですけど」
「いざとなったら、クビで」
「そうですねー」

……誰かありえないと言ってくれ。
　だが、あの発言が最後通告みたいなものだとしたら、いずれクビが現実になってもおかしくはない。自主的に辞めはしないが。あのような理想的なバイトは中々巡り会えないだろうし。
　理想的と言えばここもそうだ。
　間取りは一昔前のフォークソングにでも出てきそうな六畳一間だが、何よりは住人に恵まれている。

目の保養になる美しき女性が三人に、見た目は怖いが良い人とか、キレなければ家賃滞納しようが温和でいる大家とかな。あと、魂を送ってくれるだろう死神に、天界にでも白い翼を広げ運んでくれるだろう天使もいるし、死後のアフターケアも万全だ。

それなのに、今日会った住人達の俺を傷つける応対はどういうことだろう。

もしかしたら、俺の知らないところでこのような会話が繰り広げられていたのではなかろうか。

「そろそろ、自分で炊事してほしいんですけど……毎日家に来られるのもいい加減迷惑ですし」

「そうそう。迷惑だよねー。アタシの事すんごく子供扱いするしさ」

「……キエテホシイ」

「何ならヤっちまうかァ！？」

「ウザいったらないわね」

「存在感薄いんですぐ忘れてしまいますね」

「日野は一々、オレを見る度にビクビクしやがるからな。失礼ったらねえな」

「家賃も払って欲しいんですけどねえ」

「すみません。私が払う必要ないと言ってしまったんで」

「いえ、白峰さんは悪くないですよ。人としてのモラルの問題ですから」

「……出て行ってほしい」

「ヤっちまおうぜぇ！　ヒャハハハ！」

「そうね。いくら名称だけとはいえ、ここに人間なんているのがおかしいし」

「でも僕、出て行くように強く言うのは苦手なんですよ……」

「でしたら、自主的に出て行くようにしたらどうでしょうか？　ここに居づらくなれば勇気さん自身で出て行きたくなると思います。街中からも離れてますし、生活上なにかと不便な場所ですから」

「ですが、家賃を滞納されたまま出て行かれても……」
「それならオレに任せときな」

ちと後ろ向き過ぎる考えだが、これならば皆の態度にも納得がいくが、
「ま、ありえないな」
たかだか一日二日程度、皆が団結したように冷たい態度を見せつけられたぐらいで考えが突飛しすぎだ。
皆既日食みたいに、ご機嫌メーターが偶然悪い位置でピッタリと重なっているに過ぎない。
数日経てば、雪乃さんの手料理が復活するだろうし、魅栗さんは淡々としてるだろうし、天使さんは……まあ、多少は温もりのある言葉が出てくるようになるだろ。

要は明日だ。明日。
まずは寝て、明日を待とう。元に戻るまでいくらでも待つさ。

勇気の厄日（3）

次の日。

俺は餓えていた。身体がではない。お腹は昨日念のため買っておいたコンビニおにぎりと、うめえ棒（バーベキュー味）で満たされている。

餓えているのは心だ。

既に魔界荘での悠々自適な生活に慣れ親しんだせいか、心が昼間の砂漠で歩き通した気分で渇いてしまっている。

オアシスである雪乃さんの部屋には今朝は訪れてはいない。今日も雪香の冷めた表情を見てしまったら、干からびてしまいそうだからだ。

水筒に残った温い水くらいにはなるかと、麻衣でも叩き起こしてやろうかと押し入れの戸に手を掛けたが、やはり開かない。中からは小さな寝息が聞こえてくる。寝ながらも超能力めいた力を解かないとか、中でいったい何をしてるんだか。無理に開けたら本当に鶴にでもなって飛んでいくんじゃなかろうか。

あとは、ミネラルウォーターな笑顔を得れに向けてくれることを期待してバイトに向かうしかないわけだが。果たしてどうなるだろうか。

結論から言おう。

俺の心の渇きは砂漠のど真ん中でビスケットを食べたかのようにカラカラのままだ。

なつきさんの様子は一歩白線を引かれているかのように、余所余所しかった。

なんというか、俺に対しては真面目な店長といった風で、業務的

な受け答えはするんだが、雑談には僅かに困ったような表情をした挙げ句無視される。私とあなたは仕事だけの関係とでも言わんばかりに。

まだ俺の勤務態度に何か思うところでもあるのだろうか。昨日までとは一転、無駄な事は一切入力されていない作業ロボットのようにせっせと動いているつもりなのだが。

いや、たかが一日や二日、サボり常習犯な社員が、エリートみたいになったところで以前のイメージが一新されたとはいえないのと同じ事か。

今の俺を続けて役立たずのレッテルをぬぐい取らなければ、なつきさんの態度は変わらないか。だが……既に肉体精神共に疲労困憊である。人間無理に自らの限界を超えるべきではない。スーパーサ○ヤ人じゃあるまいし。

そもそも、客や三神さんにはいつも通りの癒し系な姿を見せてるんだよな。俺と接したとたん、ハッとした顔をされ、まるで仮面を付けたかのように、笑みが消える。

これは、つまり、その、俺に対する嫌悪か――いや。これだけは思ってはならん。今の俺の心には劇薬だ。

「あ、日野くん。はいコレ」

と、普段と変わらないツリ目をした三神さんにメモ切れを渡され、

「買い出し行ってきてだって。なつきさんから」

ついに三神さんを介してのやり取りになってしまったか。なつきさんとの距離がどんどん離れていってないか？

「まだ、材料切らしてなかった気もするが」

メモに書かれた材料を見ても、昼頃見た冷蔵庫の中身と、客の入りからして、まだ残ってるであろう食材ばかりだ。

「細かいこと気にしてないでさ、早く行ってよ。全部買うまで戻ってこなくていいから」

シッシッとまるで鬱陶しい犬を追い払うみたいに手を払われながら、俺は渋々と寂しげな猫背を見せつけながら店を出た。

メモに書かれた品々を買い終えた時には、既に西の空は山火事みたいに真っ赤になっていた。

たまごがくせ者で、メモに書かれた銘柄のたまごは駅前のスーパーまで行かないと売ってなかった。せめて、行くときに一言教えてくれれば、色んな店を駆けずり回る無駄足もなかっただろう。

そして今、俺は、拗ねた子供のようにノスタルジックな公園でブランコを揺らしている。

遅れたところで、俺なんかの心配なんかしてないだろうさ……ケッ。

「昨日はどうも」

と、ゆっくりとキィキィ泣くブランコに揺られながら俯いてると声がした。

「あ、昨日の……」

夕陽をバックに殴り合った——じゃなく、境遇を語り合ったサラリーマンじゃないか。

「仕事辞めることにしました」

隣のブランコに座り、そう切り出してきた。なんで、俺はサラリーマンと並んでブランコを揺らして話してんだろうね。

「そうですか」

「昨日、家族と話し合ってね」

言って、その光景を思い出しているのか夕陽に映える笑みをしばし浮かべて、

「慰めてくれました。辞めて、新しい仕事を探せばいいと……救われた気がしました」

「よかったですね」

「ええ。ほんとよかった」

サラリーマンは夕陽を仰ぎ見ながら立ち上がり、こちらを向き、

「これから家族と外食に行くんですよ。あなたも向かい合って話し合ってみてはどうです？　では」
一礼し、鼻歌混じりに足取り軽く公園を後にしていった。幸せオーラが満ちあふれているな。
話し合う……か。結局、皆の態度が冷たくなってる理由は分かってないんだよな。一度聞いてみるべきかもしれない。
聞いて、心をえぐられる理由が判明したとしても、分からないままよりはマシだ。
「さて、帰るか」

言っておくが、俺の固まった決意なんてのは炎天下に置かれたチョコの如く溶けるのが早い。
今は名も無きサラリーマンの後押しで、強い気持ちで理由を問いただしてやるさなんて思ってはいるが、少し経てば、聞くのが怖くなってしまうだろう。
だから、カフェに戻る足も自然に早足になり、決意は形を保ったまま着くことができた。
ドアの前で一度深呼吸をする。
開けて、第一声に言おう。なつきさんに問おう。「俺のどこが嫌なんですか」と。　ドアに手を掛ける。ここでもう一度深呼吸。
そして、力を込めてドアを押し、店内に一歩踏み入れ、

「俺の――」

続く言葉はけたたましい破裂音によって出なかった。パンッ！　パンッ！　パンッ！　と、この音だけを聞いて俺にリアクションの素質があったなら、腹を抑えて銃撃戦の末撃たれた刑事のようにうずくまるんだが、この音を発した物を見ればその反応は不適切だと

すぐにわかる。
派手な模様をした三角錐の数々が銃口のように俺へと向けられている。クラッカーというヤツだ。
糸を引かれ、破裂音と共に飛び出した色とりどりのカラーテープが俺の頭に降りかかって、カラフルなロン毛を作った。それとほぼ同時にほぼ全員が一様にニンマリと笑う。

『誕生日おめでとう！』

まるでリハーサルを何度も繰り返したかのような見事に声が重なっていた。
俺は唐突。あまりに突然の出来事に次に発するべき言葉は出てこなく、店内を見回した。
壁には、白い板に『日野勇気お誕生日おめでとう』と書かれ、周りを手作り感溢れる折り紙の花とかで装飾されている。
……今日は何日だったかな。
いや、思い出すまでもないだろう。人は産まれた日を忘れることはないモンさ。つまりは今日は俺の――誕生日。

「ぅ……ありがとう……ございます」

「このくらいで泣くとか。みっともないわね」
別に泣いてないと天使さんに言い張りたいが、何故だか涙腺は未だ止まらない。それにしても天使さんは、ツンとしているが優しさが頭痛薬くらい垣間見える表情だ。昨日とは違う。
「ユーキお兄ちゃん、おめでとー！」
雪香も年相応な天真爛漫な元気っ子に戻っている。いったいこれはどういうことなのか……と、疑問符だらけな俺の表情を読みとったのか雪乃さんが、
「こんなに喜んでもらえてよかったです。計画通り――ですね」

なんだか久方ぶりに見るような笑みを浮かべる雪乃さん。
「計画？」
俺は首を傾げた。
「勇気さんに誕生日をより喜んでもらおうと思いまして考えたんですよ、一度皆さんに冷たく接してもらって、勇気さんが落ち込んだ後に、こうして祝ったらもっと喜びを感じられると思いまして。……どうですか？」
なるほど。昨日今日にかけての謎が全て解けた。
「えっと……じゃあ、なつきさんのあの発言は……」
と、なつきさんに視線を向けると蛇に睨まれたカエルみたいに身をピクンとさせ、
「本当にすいませんー！　どうしてもと言われまして……、あんな事全く思ってませんから！　すいませんー。本当に思ってませんからー」
大きな瞳をウルウルさせ、頭と耳を下げる。いやいや、今にして思えば、こういう事情がなければなつきさんがあんな事を言わないよな普通。俺は何を真に受けて真面目に働いてたんだか。しかし、こうも謝られるとアレは本音だったんじゃないかと勘ぐってしまうが。
「あ、なつきさんの台詞、私が考えたんですよ」
と、雪乃さん。大した策士だな。あの台詞となつきさんの組み合わせは最大限に威力がありましたよ。
「じゃあ、昨日の榊さんは」
榊さんに視線を移すと柔和な笑みを浮かべたまま、頭に手を置き申し訳なさそうに
「いやー。忘れたふりをするように言われてたもので」
実際忘れてたとしてもおかしくはないが。
「じゃ、天使さんと魅栗さんもですか？」
隣同士に並ぶ美女二人に訊く。
「……まあね」

と、デレが少し入った表情で言う天使に対し、死神はどう感情を読みとればいいか未だ分からない無表情で、
「……」
小さく頷いた。
更に集った顔ぶれを見渡すと、黒木さんはニカっと白い歯を見せ、荒木さんは穏やかバージョン。三神さんは……うん。いつも通りだな。
「ちょっと、私には何も訊かないわけ？」
不満げに三神さんが唇をとがらせた。
「……変わってなかったし」
「何ソレどうゆうこと？　私が普段から冷たいと言いたいワケ？」
うん。とも答えたかったが余計に怒らす真似はしたくないから、中心に位置する雪乃さんに顔を戻し、
「今日は最高の誕生日です」
これまでの人生で一番の誕生日パーティもお開きとなり、今まで害した気分を三倍返しで取り戻し、部屋に戻ったの俺を迎えてくれたのは、麻衣であった。それ以外に誰がいるというのか。
「ユウくんおかえり！　楽しかった？」
「ああ。もちろん」
「そっかー……クフフフ」
と、どこか馬鹿っぽい笑い声を麻衣は出す。そして、後ろに手を回してから勢いよく俺の前に出した。
「ジャジャーン！」
効果音を言いながら目の前に突き出されたのは、
「セーター？」
毛糸で編み上げられたそれはまさしく正真正銘のセーターである。

「そ、サマーセーター。手編みの」
「じゃあ、最近押し入れでコソコソとやってたのは……」
麻衣は照れたように頬を掻き、
「うん。コレ編んでたんだー」
セーターを受け取り触ってみると、よく出来ていて肌触りがフワフワだ、店に置かれていても違和感がないと思える。
「意外な特技だな」
「なにさー！」
心外だったのか頬を膨らませる麻衣。いや、普段の自堕落な生活から全く想像できんから。まあ、だがここは、
「悪い。ありがとうな」
「せっかく編んだんだからちゃんと着てね」
もう一度言おう。今日は最高の誕生日だ。だが、一つ疑問が残る。
俺、誰かに誕生日教えたっけ。

妹・登場（妹編）

六畳の部屋は空っぽになっていた。
カーテンは閉め切られ薄暗い。それは居た頃からそうだったけど、乱雑にあった物まで何もかもなくなっていた。
昔から好きだったテレビゲームも、それを映し出す小さなブラウン管も、いつも寝ている姿しか見ていなかった気がするベッドも、その下に隠してあったエッチな本も。サイテー。……風呂の間に見つけたアタシも悪いけどさ。
引っ越したみたいに何にも無くなっていた。寂しいと感じてしまった。ロクでもない兄だと思ったりはしてたけど、居なくなって、父と母に追い出されたと聞いたら、自然と涙が頬を伝っていた。
確かに駄目をいくつ連ねても足りないくらい駄目な兄だったけど、追い出すなんて……アタシに何も言わないで。せめて一言あれば、アタシの部屋に住まわせてあげたりなんか、考えなくもなかったり。でも、狭い部屋だし、いっしょに寝ることになって……それで、って違う違う。
今は探さなきゃ。どこに行ったかも分からないけど、もう会えないかもしれないから、だって駄目×∞な兄が放り出されて生きていける筈がない。確定してる。アタシがなんとかしなきゃ野垂れ死んでるに決まっている。

「……ハァ」
と、家を飛び出して一週間。未だ兄の手掛かりすらなし。もうバイト代も底を尽きそう。
お母さんから聞いた話だと、適当に衣類詰めたバッグしか持たせてないらしいから、遠くには行けない筈だし。順番に町を廻れば…

…なんて考えだったけど。浅はかだったかな。追い出されたのはまだ寒い頃だったらしいし、そう簡単に宿無しで過ごせるわけないか……。

「……ダメダメ！」

頭を振って最悪な考えを飛ばす。

絶対生きてる。駄目な兄だったけど、運はよかったから。Ｐ○３懸賞で当ててたし。きっと大丈夫。運良く住む家見つかったりして、運良く働けたりしている。確証はないけど。

でも、この町で駄目だったら、一端家に帰らないと。アタシが宿無しにでもなったら、探す所じゃないし。大学の夏期休暇も僅かだったっけ。うー。こうなるんだったら、もっと早く帰省しておけばよかった。

駅から出て、目的地もなく歩く。行き交う人の顔は注視しては見てるけど、兄らしき人は見あたらない。目立たない容姿だけど、アタシなら見逃したりはしない……ハズ。

でも、全てを見れるわけでもない。改めて無謀な事をしてるとは思う。一日中一つの町を歩き回ったって、見つかる確率は限りなく低い。こういう人捜しって探偵にでも頼めばいいのかな。

あ、何か今探偵っぽい人がいた。眠そうな眼に、手入れしてないような髪。顔も無精髭が見えるけど、割とカッコいいかも。ミステリー小説にでも出てくるような寂れた探偵事務所でもやっていそう。

でも、その人の隣を歩く小柄な娘のほうが目を引く。桃色のショートヘアーで、頭頂部に髪がピョコンと跳ねていて歩く度にピコピコと揺れている。なんだっけ、アホ毛っていったっけ。前に兄に力説された気がする。

その娘は隣を歩く寝ぼけ眼の男を見上げながら、喋りかけてるみたいだけど、男の方は面倒くさそうに頭を掻いている。その様子がなんだか可笑しくてアタシは笑みを作っていた。

それにしても、なんで髪がピンクなんだろう。流行ってるのかな。似合ってるとは思うけど。

って。何でアタシはあの人達を目で追ってたんだか。お兄ち――兄を捜してるのに。

「あつー」

真夏の炎天下。この暑さを目の当たりにすると、温暖化が進んでるのを実感する。既に汗だく。早くシャワーでも浴びたい。

何処かで涼んだ方が効率的にもいいかもしれない。このままだと脳まで解けて、人の顔が判断できそうになくなる。丁度ランチタイムでもあるし。

アタシは辺りを見回しながら歩く。人の顔じゃなく、お店を。店が並ぶ通りだし、美味しいランチを出しそうな店がないかと。店先の雰囲気から判断する。あとは直感。

「……魔界カフェ？」

思わず首を傾げたくなる店名が目を引いた。外見は至って普通の喫茶店。だけど、店名は一種のメイドカフェを連想させる。魔界ってあれだよね。ゲームとかファンタジーでよく出てくる世界。でも、悪くはないかもしれない。ここにしよう。

「いらっしゃいませ」

内装も普通だ。店員さんも普通。可愛い人だ。高校生かな。窓際の席（といってもカウンター以外はほぼそう）に案内され、メニューを見る。これも普通の喫茶店と同じ。コーヒーには拘りがあるのが窺える。

アタシはパスタを注文し、店内を眺めた。昼時だが空いている。アタシを除いて一人だけしか客はいない。ブロンドの髪が艶やかな美女だ。この暑さからか、水色のキャミソールにホットパンツの薄着。スタイルがアタシなんかとは比べるのもはばかられるナイスバディ。外国人……だよね。

カウンター奥に立つ人は、愛くるしい外見をしている。猫耳がある。なんで？　なんで猫耳なの？　似合っているけど。

少しして運ばれてきたパスタの味は絶品だった。あの猫耳さんが

作ってるみたいだ。店長らしい。
「いらっしゃいませー」
新たなお客。スーツと眼鏡姿のカッコいい青年。会社員だろう。茶色の鞄を脇に抱えている。ここは美男美女御用達のお店なのかな。アタシは場違いな気がしてきた。
「日野はいないのか……」
その青年の言葉にピクリと反応する。アタシの名字、もちろん兄も同じ。青年はカウンター席に座る。常連らしい。
「買い出しに行ってもらってますー」
ニコニコと柔和な笑みを絶やさず、猫耳さんは答えた。“日野”はここで働いてるらしい。アタシはまさか兄かもという考えが巡った。
「でも、行ってから結構経ってません？」
「そうですねー」
「電話してみますね」
と、店員さんは携帯電話を取り出す。アタシはパスタをフォークで絡めながら、聞き耳を立てる。別に、立てなくても聞こえちゃうけど。
「あ、日野くん。今何処？　――は？　じゃあ何で遅いわけ？　――まあ、どうでもいいけど買い出しは終わってるの？　――そ、じゃ、さっさと戻ってくること。いい？」
と、ため息を吐いて店員さんは電話を切った。寄り道でもしてたらしい。でも、この人は見たところ高校生だし、仮に兄だとしたら、年上だし、あんな風に言わないと思う。もし、兄なら情けなさすぎる。
恐らく、ここで働く“日野”は店員さんと同年代か下なのだろう。聞くのが手っ取り早いのだろうけど……、実家に帰る時間になっても見つからなかったらにしておこう。
冷房が利いてた店内から外へ出ることは、南極からサハラ砂漠に

ワープしたかのような感覚になった。引いてた汗がすぐに頬をつたり始めた。

「ねえ、可愛い彼女ォ。もしかして一人ぃ？」

余計に暑苦しくなる連中が現れた。

「俺たちと遊ばない？」

「暇なんでしょ？」

見るからに軟派なオトコ三人組。アタシの最も嫌いな人種だ。ニタニタと君の悪い笑顔を浮かべている。

「忙しいです」

穏便に済ますために、それだけ伝えてあげた。半ば睨みつけるように。

「ハァ？　いいじゃんちょっとぐらいさ」

言いながら肩に伸ばそうとした手を払いのけてやると、急に気味悪い笑顔が消える。

「アンダァ？　いい気になるなよ？」

「やっちまうかァ？」

「おうよ」

馬鹿オトコ達は互いに目配せして、アタシを取り囲む。

アタシはやれやれとため息を吐いた。それが杓に触ったのか、正面の一人が拳を振り上げる。それを去なそうと待ち構える。その時、耳に聞こえたのは断末魔だった。

「イデェェェ！」

「女性に拳を向けるのは感心しませんね」

振り上げたオトコの手を捻り上げ、柔らかな笑みを浮かべてるのは、肌が異様に白い男性。片手にはネギなどが顔を覗かせたエコバッグを下げている。

「テメェ……」

別のオトコがその男性に殴りかかる。だが、拳が届く前に蹴りが腹部に入れられ、アタシの脇を通り過ぎ、風に舞うレジ袋がごとく軽々しく吹っ飛んで転がった。凄い威力。

「早く逃げた方がいいですよ。僕は怒りっぽくて」
笑みを絶やさずに男性は残りの一人に言った。
「なんだコイツ……」
三人目はライオンに睨みつけられたかのように怯えた声を発し、後ずさる。男性は捻り上げていた手を離すと、そいつも逃げるように距離を取り、吹っ飛んだ奴も立ち上がると、
「覚えてやがれ！」
まさしく雑魚のような捨て台詞を残し、負け犬のように退散していった。滑稽だ。
「怪我はないですか？」
ドキッとした。目を細め柔和な笑みを浮かべ、優しく声を掛けてくれるその男性に。あ、瞳が紫に見える。
「あ、は、はい」
「そうですか。よかった」
シドロモドロ。頭の働きが鈍ってる。えと、まずはお礼か。
「あ、ありがとうございました！」
「いえ、お気になさらずに」
どこまでも良い人。次はどうすればいいか、何か恩返ししなくちゃ駄目だよね。
「何かお礼をさせてください！」
「そんな、気にしなくてもいいですから」
「でも、助けてもらいましたし……、何かしないとアタシの気が収まらないっていうか……」
もう思考が滅茶苦茶だ。多分アタシの顔はリンゴのように赤く色づいてると思う。
「そうですね、でしたら買い物の手伝いを頼んでもいいですか？今日は多いんですが」
「はい！　是非やらせてください」

「すみません。助かりました。重くないですか」
「い、いえ。鍛えてましたから」
助けてくれた、榊さんに付き合い、商店街を闊歩し、肉屋、八百屋、魚屋、ホームセンターやらを周り、アパートへの道を歩いている。榊さんはそこで大家をしているらしい。
それにしても大層な荷物。榊さんは木炭が詰まった箱、ジュース、ビールの箱を右手に担いで、左手には、様々な肉が数キロ分の袋と、同じような重量だろう野菜の袋を持っている。大人一人分の重さはあるだろう。それでも涼しげな表情をしている。
それに対しアタシは、それよりは軽い、魚が入った袋と、様々な花火が詰まった袋しか持ってない。凄く紳士な人だけど、悪い気がしてくる。
「ここです」
風景がどんどん寂しくなる中、ようやく着いたのは、……お世辞にも綺麗とか言えないアパート。
「……魔界荘」
塀に付けられた木のプレートに彫られていた文字を見て、呟く。今日の魔界は二つ目だ。庭には変な植物があった。
「狭い部屋ですが、お茶でも如何です？」
柔らかい笑みで榊さんは部屋に招く。
「あ、はい。ありがとうございます」
アタシは素直に好意を受け取ることにし、部屋に入った。六畳一間の部屋は、やはり外見からのイメージと一致する。あ、この部屋、タンスがない。
「どうぞ」
と、ちゃぶ台に紅茶が置かれ、アタシはその前に座した。一言礼を述べ、口をつける。おいしい。
「今日はこれからご予定はありますか」
「え、いえ。大したことはない、ですけど……」

確か、あることにはあった気もしたけど、森から一本の木を探すような途方もないような。

「これから、庭でここの皆さんとバーベキューをしようと思ってまして、よかったらどうです？」

「あ、その、いいんですか？」

榊さんは微笑んで「もちろん」と頷いた。

それから、榊さんが最近こちらに戻ってきたこと（外国？）や、アタシの大学生活のグチとか聞いてもらい、陽も朱けに染まり、準備をするというのでアタシも手伝いを申し出て、部屋を出た。そして見てしまった。

「……あ」

昼頃入ったのカフェの店員さんと、猫耳店長さんに挟まれた、そこにいる人物を見て、懐かしさがこみ上げてきた。気が付けば嬉しさがこみ上げ、瞳が潤んできた。アタシは呆けた声で、

「お兄ちゃん？」

呟いて、その人に駆け寄った。

妹・登場（兄編）

季節は真夏。どこかの組織が日本ハワイか計画を着々と進行中かと思うような暑さ、いや、熱気。

そもそも湿度が高いこの国じゃ、常夏の楽園なんて無理だろ。ただ体力と気力と水分を無駄に失わせるだけだ。

それで、外に出る気力も削がれ、喫茶店に出向くような人もいない、と。

魔界カフェは絶賛空席多数である。こんなに冷房利いて快適だろうが、一歩外に出たら地獄だからな。客足も途絶えるってものだ。

だから、客がほぼいない時間は雑務をこなしながら、テレビでもチラチラと観つつ過ごしている。

現在、朝の情報番組が流れ、今話題のバンド『ジェミニ』の特集をしている。

四人組のバンドでアニメのテーマとかになったりしてるから、割と知っている。女三人に男一人の構成だが、ギターと、ボーカルが双子なのだ。それも一卵性でそっくりの妙齢の美女。メディアだと、曲よりこちらの話題性が強く、今も双子に音楽とは関係ない質問をしている。

「ねえ、日野くんって兄弟とかいるの？」

高校は夏休みということで、最近は三神さんは早くから来ている。といっても、閑古鳥が泣きわめいてるのは変わりない。こんな風に、適当な話題を振ったりしながら、来客を待つのがいつもの光景だ。

テレビで双子の姉妹が出てるから、振ってきたんだろう。

「まあ、一応は。妹が一人」

「へえ。仲良いの？」

「……昔はな。……年頃になったら次第に距離が開いていってさ、そりゃそうだ。所詮ひきこもりだしさ。離れて当たり前さ。仕方ないよ。ま、辛辣な言葉を浴びせられなかっただけマシだよな……ハ

ハ……、今は大学生でさ、一人暮らししてるらしい。もう、何年も顔見たことないな……。結構、可愛くてさ、兄目線じゃなくともさ。大人になってんだろうな……」

「……なつきさんは兄弟とかいるんですか？」

おい、反応なしかよ。しかし、久方ぶりに思い出しちまったよ。実家のことなんざ記憶からなくなりそうだったし。

「いませんよー」

いないのか。姉妹とかいるんなら、お会いしたかったが。猫耳、尻尾、と萌え死にたかったのに。

「三神さんは、姉妹いるのか？」

「姉が一人ね。最近じゃ仕事忙しいらしくて会ってないけど」

さぞかし美人なのだろう。さて、この流れを利用して、聞いてみたいのがカウンター席の一番奥に一人。夏だからか、露出度の高い服装でグラマラスボディを惜しげもなく披露している、

「天使さんは、どうなんですか？」

おそらく会話の流れは本を読みながらでも入っていただろう。つか、最近じゃほぼ毎日居座ってるね。魔界荘の部屋にはエアコンないからな。気持ちは分かる。

「妹。ロクでもないのが」

本に視線を落としたまま、面倒くさそうに天使さんは答えた。どうやら、あまり触れてはいかん話題だったらしい。これ以上はやめよう。

「日野くんは、実家に戻ったりしないの？」

話題が変わったか。そういや、そろそろお盆か。

「実家なんて俺にはないし、戻りようがないな」

肩をすくめ自虐的に言ってやった。なつきさんと三神さんには、断片的にだが追い出された話はしてあるから、俺の答えに少し表情が曇る。まずかった。

「そ。でも、妹さんとか会いたがってたりしてたりして。あまり嫌われてるんじゃないみたいだし」

いや、何年も口を聞いてないのに嫌われてるも好かれてるもないだろう。案外最初から俺なんかいなかった風に上手く大学生活を送ってるさ。

「まさか。ま、そうだと嬉しいけど」

ありえんよ。望みとしては涙でも流して抱きついてくれりゃ最高だがな。義妹だともっと良い展開もできそうだが、残念ながら血はしっかりと繋がっている。

いやね、そりゃ普段から買い出しは俺の仕事になってるよ。暗黙の了解ってね。三神さんがいても、なつきさんから『勇気さん買い出しお願いしますー』なんて言われたさ。まあ、なつきさんの頼みなら断りはしないさ。客にとっても、三神さんがいたほうが嬉しいんだろうしな。だからってさ、こんな日にさ……せめて、ジャンケンでいいから行く人を決めてほしいよ。それなら納得はできる。ともかく、

「暑いんじゃクソー……」

駄目だ叫んだら余計に暑くなるから、叫べない。買い物は済んだし早く冷房利いた店内に戻らないと溶けちまう。俺が。

「ファイティングスピリット5入ったらしいぜー」

「ホント!?　見たい見たい!」

おー、子供は元気だねえ。商店街端に位置するゲーセンに入ってたよ。んー、エフスピ5かー。さすがだなー。こじんまりした店の割に最新鋭の機種が早く入荷するからな。俺もよく行く店だ。

「……」

エフスピ5か。気になってたんだよ。確か店内も冷房利いてたな。買った物もすぐに腐るモンでもない。寧ろ、俺がこのままだと熱中症の危険性がある。これは必要な休息だ。店に無事に届けるためにな。仕方ないことだ。そのついでに、エフスピを覗くのも仕方ない。

そもそも、急いで戻れとは言われてないし。……まいいか。なつきさんなら謝ればなんとか……。

「よし！」

新入荷したエフスピに群がるゲーマーの中に紛れ、他人が動かす画面を観賞すること三十分。撒き餌に群がる魚のような人垣から離されたのは、ズボンのポケットから伝わる震動だった。

とりあえず携帯を取り出し、開くと『三神莉子』との表示。買ってから数ヶ月経つが登録件数なんかたかが知れてるしな。天使さんは掛けてくる訳ないし、黒木さんも同様だ。

さすがにここだと色々なゲームの音がやかましく、所在がバレる恐れがある。俺は炎天下に身を晒してから、通話ボタンを押した。

「もしもし――」

「――商店街」

「――その、まあ、色々とさ」

「――終わってます」

「――はい。分かりました」

そしてプツリと電話が切れる音。

あまりの電話越しに伝わる迫力に思わず敬語になっちまった。しかし、俺は年上なのにな。バイト初日からタメ口だったな。普段からそうなのか。いや、なつきさんには敬語だったし、俺が下に見られてるか。

「……あつー」

寄り道したのは俺の責任だし、敬われるほど器はデカくないしな。何より三神さんにはあのサバサバした性格が似合ってるし。帰るか。

「遅い」
砂漠からオアシスに辿り着いたかのような魔界カフェの涼しさ。
汗が引いていく。
「すいません」
とりあえず三神さんに詫びて、買ってきた品々が入った袋をカウンターに置く。
「日野」
「なんです」
サッとカウンター席に座る客から距離を取り、警戒体勢になり、無愛想に俺は言った。
この眼鏡とスーツのイケメン青年はこの店の常連で魔界のお方だ。俺は彼の会社製品の実験台として、何度か酷い目にあったことがある。
「何故距離を取る」
「危険だからです」
「そうか」
と、青年は淡々と言い、鞄を探る。俺は身構えた。何か出したらすぐにはたき落としてやる。
鞄から出てきたのは、皮の財布。ブランド物のようだ。それを開いて何やらお札を取り出して、俺に差し出してきた。諭吉様が三枚。
「取っておけ。色々と助かってるからな」
言って、微笑むその姿は女ならず男でも見とれそうだ。俺はならんけど。
「いいんすか？」
「ああ」
「じゃ、ありがたく」
軽く礼を延べ、実験台手当てを頂戴した。三万円じゃ足りないくらい酷い目にあった気もするが、特に先月は。けど、嬉しい臨時収入だ。
「これからも頼むぞ」

……あ。今しがた耳に変な台詞が入ってきましたが。なんか、まるでこれからも実験台にされるみたいな。ま、気のせいだろうきっと。

「あらー。榊さん、いらっしゃいませぇー」

おや、榊さんが来たか。こちらに戻ってきてから度々訪れるようになった。

「こんにちは。あ、日野さん」

「なんです」

「どうして身構えるんです？」

つい、だ。さっきまでそうしていたから。榊さんも危険な人物だが、怒らさなければいい人だ。

「今日は天気がいいですから、庭でバーベキューでもやろうと思いまして。日野さんは大丈夫ですか？」

バーベキューなんて何年ぶりだろうか。

「ええ、楽しみにします」

「それはよかったです。天使さんも今日はお休みでしたよね？」

「そうね。ビールはあるのかしら？」

「今から買いに行くところです」

天使さんまだ居たのか。

「よかったら、なつきさんに、三神さんもいかがですか？」

「いいんですか？」

「はい。人数が多い方が楽しいですし」

「そうですねー。行かせてもらいますー」

俺は心の中で『ヨッシャ！』と、完封勝ちした瞬間のピッチャーのようにガッツポーズした。美女、美少女が集うバーベキューに今から心が盆踊り状態だ。

榊さんは一礼し、買い物に出かけていった。大層な荷物になるのだろうが、おそらくは百キロのバーベルすら軽々持てそうだし、問題はないか。

魔界カフェのある通りは、元々古き良き商店街な風情が漂うが、夕陽のオレンジが加わると、まるで映画のワンシーンにも使えそうなノスタルジックさがある。

普段はまだ開店中の時間だが、バーベキューパーティということもあり、今日は早めの店じまいだ。以降の客入りも少ないだろうしな。

日が傾きかけ、外は真昼よりは幾分か涼しくなっている。だが、寝苦しさは覚悟しとかなきゃならない暑さだ。

「魔界荘の人達で、私が知らない人とかってまだいるの？」

隣を歩く三神さんの問いに、俺は魔界荘の顔ぶれを脳裏に浮かべる。うん、麻衣以外は大抵カフェによく顔を見せている。

「多分いないな」

「あそこに住んでる人達ってさ、なんか個性的な人多いよね。天使さんとか美人だけど独特な雰囲気あるってゆーか」

それは俺も個性的な連中に入れられているという事か。勘弁願いたい。俺は森の中で緑の全身タイツを着るように目立たない人生を過ごしているつもりなんだが。

「そうですねー。でも、皆さんいい方だと思いますー」

そのいい方達に荒木さん（凶暴）は省いた方がいいかもしんない。つか、なつきさんの個性もランク高いですよ。

しかし、右手に三神さん、左手になつきさん。両手に華だねえ。俺は幸せもんだ。

魔界荘に住んで、もう半年になるのか。濃い半年だな。今までの俺の二十余年なんざ、薄めすぎたカルピスだ。味が全くしない。改めて親に礼を言っておくべきだ。

追い出してくれてありがとう。

妹の優梨にも――兄は幸せです、と。今度手紙でも書こう。

俺の人生を変えてくれた愛すべき魔界荘に着いた。塀を曲がり、榊さんの姿があった。まだ雪乃さん他の姿はない。

ん。榊さんの部屋前に一人居た。小柄な女性。どこか見覚えのあるその人はこちらにゆっくりと歩み寄ってくる。夕陽の加減ではっきりとは顔を見えない中、はて誰だったかと考える暇も与えず、

「お兄ちゃん！」

と、叫びながら。全速力で。

「な……」

俺に抱きついてきた。押し倒されそうになったがなんとか踏ん張り、そして分かった。やや古い記憶から探り出した……それは、

「……優梨？」

抱きついて胸に顔を埋める黒髪に声を掛ける。パッと涙目な顔を上げたそいつはやはり――

マイシスターだった。

妹・登場（2）

俺には妹がいる。

名を優梨という。

世間では妹はアニメキャラ以外は可愛くないもんだとか、リアルに妹がいると妹キャラは幻想でしかないとか言われたりするが、俺は実妹に今思うと萌えていたと言える。

俺比だけでなく、他人比から見ても妹は可愛いと最大ボリュームの声で言える。俺の妹はこんなにも可愛いに決まっている。と。

優梨は幼い頃、まるで人懐こい子猫のように俺にすり寄ってきては、『お兄ちゃんあそぼ？』と、水晶玉のようなつぶらな瞳で俺に訴え掛けていた。俺は大抵はニコリと兄スマイルを浮かべて遊んであげるが、たまに断りたいときもあり、そう告げると『遊んでくれないの？』と、瞳を潤ませるもんだから結局は遊ぶことになる。

俺がひきこもってからも、妹と俺との仲は変わらなかった。ように思えたのはたかが数年。妹が中学に上がり、俺に制服萌えというのを理解させてくれた妹は、次第に距離を置くようになった。

目を合わすと、不良娘のような鋭い目で『なに？』だの、『こっち見んな』だの、冷たく言われるようになった。

妹が風呂に入ってるときに、小説を借りようと部屋に無断で侵入し、シャンプーの残り香漂う妹とはち合わせた時は、まるで変態でも見るような目をされ、しばらく口を聞いてもくれなかった。

これで『お兄ちゃんの下着といっしょに洗わないで』なんて言われてたら、俺の心は木っ端微塵に砕けていただろう。

妹の進学先は女子高で、寮生活を初めてからは、徒歩でフォーミュラーカーと競争したかのごとく瞬く間に距離が開いてしまった。

帰省しても、指折り数えるほどしか会話がなく、俺の脳内で幾度も冷淡な妹の言葉が繰り返されていた。

そんな妹との距離も縮まらぬまま時が過ぎ、俺は両親から家を追

い出される形となり、今に至る。
もう妹とは会えないだろうとも思っていた（実家には戻りたくないし）のだが、何の因果か、俺が居を構える魔界荘にその妹がいた。

「で、優梨、何でここにいるんだ？」
とりあえず、何故だか涙目な優梨を落ち着かせ、魔界荘の庭に設けられた、ウッドテーブルの椅子に座らせ、経緯を問う。
ちなみに隣には三神さん、斜め前にはなつきさんが座っている。向かいには優梨が。……それにしても可愛さが何倍にも増している。
「……お兄ちゃんこそ、どうしてここに来てるの？」
質問返しか。
「そりゃ、ここに住んでるから当たり前だ。どっちかというと優梨がここにいる方がおかしいぞ。町外れだし」
うはー。優梨と会話をしたのは久方ぶりすぎる。喜びで顔が笑みを浮かべようとヒクつくが、三神さんとなつきさんの手前、兄として振る舞わねば。
「えっと、」
と、優梨はバーベキューの準備をしている榊さんに目をやってから、
「榊さんの手伝いをして、それで……助けて貰ったから」
うん。助けてもらった恩返しに手伝いをしたわけだな。さすが我が妹偉い。
「榊さん、キレたりはしなかったか？」
「え？　それはなかったけど。なんで？」
よかった。沸点の低さがなければいい人だからな。もし、キレて優梨に何かしたら俺がキレるとこだ。
「つか、そもそも何故この町に来たんだよ。大して見るものないし」
優梨は、見る見るうちに顔がリンゴのように朱くなり、『えっと』

とか『その』とか『どうしよ』とか、しばし狼狽えた後、意を決したかのように俺を真剣な眼差しで見つめ言った。

「お兄ちゃんを捜しに来たの」

俺は固まった。なにやら喜びや喜びなどの感情が沸々と湧きだし、自然と涙が頬を濡らしていた。うれし涙とはこの事を言うらしい。

優梨はこれまでの経緯を話してくれた。話の端々に『別に仕方なく』とか、『暇だったし』とか、『見つからなくてもよかった』とか、混ぜていたのが気に掛かるが、とにかく兄妹がまた出会えた奇跡には感謝しよう。榊さんに。

「じゃ、店に来た時も日野くん捜してた途中だったんだ」

「はい」

優梨は俺がいない間に店に訪れていたらしい。先ほど三神さん達と顔を合わせると、互いに驚いていた。

「丁度、入れ違う形になってたんだ。日野くんが寄り道してなければね……」

クッ……ゲーセンにさえ寄らなければ店で運命的再会を果たしていたのか。俺の馬鹿。

「寄り道ぃ？」

優梨は細めた目を俺に向ける。

「もう！　ちゃんと働きなさいよね」

優梨は呆れたようにふぅと息を吐く。何かが心にグサリときた。

「いや、暑かったから……」

「言い訳しない！」

「……すいません」

そんな兄妹の上下関係を垣間見せてしまい、なつきさんと三神さんは柔らかに微笑んでクスクスと上品に笑っている。優梨は、ハッとした表情を浮かべ、頬を朱く染めている。

「あ、日野くんの部屋でも見に行ってみたらどう？　まだ準備中みたいだしさ」
三神さん余計なことを。部屋片づけてないんだが、更に麻衣によって酷くなってる可能性も否定できんし。
「いい？」
妹よ、そんな上目遣いで見つめてくれるな。それは未だ克服できてない俺の弱点だぞ。
「ああ、もちろん」
「同棲相手、紹介できるといいね」
三神さん、あなた余計な事いいすぎですよ。
「同棲ぃ？」
ほら、優梨がジトーっとした座った目つきで俺を見ているじゃないか。
……はたしてどうなるやら。

さて、麻衣の姿を俺が見えるのはよしとしよう。三神さんが見えるのもよしとしよう。優梨が見えるのもよしとしよ――
「って、誰にでも見えるんじゃないのか……お前は」
幽霊が誰もかしこも見えてたんじゃ、霊能力者なんざいらねえ。胡散臭いのも消えて結構なことだが。
「そんなことないってば。前と前々に住んでた人見えてなかったし」
どうだか。見えなかったフリしてんじゃないのかね。それで気味悪がるんじゃなくて、騒がしいから出て行っただけじゃないのか。
「ね、お兄ちゃん。どうゆうことなの？」
ああ。優梨が麻衣を視認できたことを確認してすぐツッコんじまったから、優梨に怪訝な目で見られとる。ともかく同棲の誤解を解かねば。
「えっとだな、こいつは麻衣といって、この部屋に住む地縛霊だ」

あれ？　何か沈黙したぞ。マズいこと言ったか。
「ね、ユウくん。この人誰なの？　彼女？」
興味津々と言った様子で麻衣が訊ねてきた。普段部屋から出られないからか、たまの客人にはいつもこんな反応を見せる。
「……え、あ、アタシはその……」
黙り込んで目が点になってた優梨が、急にスイッチが入ったかのように慌てたように手をヒラヒラと動かす。
「俺の妹だ」
……あれ？　また沈黙したぞ。
「ウソォー！？　全く全然これっぽっちもユウくんに似てないじゃん」
ああ。失礼な物言いだが、似てなくてよかったよ本当に。
「妹だ」
「義理？」
「殴るぞ（ハリセンで）」
麻衣め……義理だとか最近毒されてきてないか。……まあ、今は巧妙に隠してあるが、ギャルゲーの影響かね。ちなみに１８禁ではない。
「うん、とりあえずは理解した……かな」
まだ多少戸惑いが残る表情ながらも、優梨はフヨフヨと浮かんで携帯ゲーム機で遊ぶ麻衣を見ている。
「まあ、単なるやかましい幸福を呼ばない座敷わらしみたいなモンだ」
本当にこちらに富をもたらすどころか、娯楽に金が掛かるからな。趣味が合ってるからいいが。
「そっか。で、その……お兄ちゃんは家出てから……どうだったの？」
ああ、それは語るも長い大冒険活劇が……ないが。実際、俺が家を追い出されて無事にこうして過ごしているという想像は難しいわな。

「……そうなんだ。よかった」
安心したように優梨は僅かに微笑みを見せる。以前は兄を見るたび眉間に皺をよせて、ゴミを見るように嫌悪感しかない表情しかなかったから、何か新鮮だな。
優梨には、一日の放浪の挙げ句、ひょんなことからこの魔界荘に行き着いた事、雪乃さんの優しい申し出により住ませて貰えることになった事、これまた雪乃さんの紹介により魔界カフェにてバイトをさせてもらえるようになった事、それらを名称以外は“魔界”のことを伏せて説明してやった。
まあ、この部屋の幽霊については隠す必要はないな。本人も隠すつもりはないようだし、何より見えてしまってるしな。逆にこの幽霊が見えないという人がいるなら会ってみたいもんだ。
俺は壁掛け時計を見て、
「そろそろ戻るか」
と、玄関に向かう。
「あ、お兄ちゃん」
「ん？」
「なんか、変わった……よね」
「……そうか？」
実感はないが、優梨が言うならそうなんだろう。

優梨を交えての魔界荘バーベキューパーティはつつがなく終わったといえる。夜も遅いのと久方ぶりの兄妹の再会ということで、優梨は俺の部屋に泊まることとなった。
まずは銭湯にいっしょに行き、裸の付き合いを高い壁越しにした。

優梨の身体の成長が見られないのは残念だった。番台のオッサンのことは『特殊メイク好き』と伝えておいた。

「悪いな。布団これしかなくて」

卓袱台を退けて、六畳間に布団を敷きながら俺は言った。

誰か泊まるようなことは想定外だったからな。俺の部屋には必要最低限の布団しかない。俺用と、麻衣のだ。幽霊の癖に贅沢にも布団と枕がないと寝れんらしい。

「あ……これっていっしょに寝るってこと？」

持参してたパジャマを着て、更に愛くるしさがました優梨が、クリッとした目を更にまん丸くして俺を見る。

「いや、俺は座布団でも枕にしてその辺に寝るよ」

「でも……別にアタシはいっしょに寝てもいいけど」

空耳か。今、まるでツンデレな義妹から好感度が高い状態で聴けるような台詞が優梨の口から聞こえたぞ。いや、ありえん。優梨が顔を湯上がりのようにほんのり紅く染めて、視線を逸らしてるが、そんな今まで散々雑にあしらわれてきたのに、今更いっしょに寝てもいいとかありえん。孔明の罠だ。

「あ、いや、それは……」

「あのさ、分かってると思うけど変な意味じゃないからね。ただ、アタシだけ布団使うのも悪いと思っただけだから」

変な意味とはどういうことかな～？　グヘヘ。などと変態じみた言葉が浮かんだが、当然言わん。ここにきて取り戻しつつある兄と妹との関係を崩すわけにはいかんさ。

「じゃ、いっしょに寝るか」

枕は一つしかないから、座布団を二つ折りにし枕代わりにして置く。

「おやすみ。お兄ちゃん」

「おやすみ」

優梨と一人分の布団を分け合い、俺は横になる。かすかに聞こえる優梨の寝息。……唯一また繋がった家族。また会えた。

明朝、優梨は大学の夏休み明けが近いと言うことで、早々に町を後にした。

俺の携帯電話には新しいアドレスが一つ追加された。

魔王の法則

ようやく。ようやくここまで来た。

「思えば既に買ってから一ヶ月経ってんだったな。昔の俺からしたら考えられないほど時間が掛かっている。前の俺なら三日あればどんなゲームでもクリアできたのにな……」

「ユウくん、一人で何ブツブツ言ってんの？　軽くキモいね」

「……それもこれも……」

俺はグッと、床に転がっていた対霊用ハリセンを右手に装備する。麻衣は卓袱台に寝転がり週間少年漫画雑誌を読んでいる。カチッと俺の中で何かのスイッチが押され、

「お前のせいだろうが！」

麻衣の空っぽな頭に振りかぶったハリセンを振り下ろし、バシーンと気持ちのいい音が響いた。

「何でワタシのせいなのさっ！？」

頭を抑え、頬を膨らませ抗議の眼差しを俺に向けてくる。音はいかにも痛そうだったが、あくまでもハリセンだ。ダメージはないだろうに。

「いつもゲーム占領してるだろ」

「ユウくん帰ってきたら、ちゃんとやめてるでしょ。気遣いできるワタシって偉いでしょ」

そんなお片づけをキチンとした子供みたいな顔をされてもな。

「よし。その言葉を頭に入れて、よく思い出してみろ」

――――――

――――

――

基本、俺がゲームをする時間帯は、朝、バイトに行くまでと、終

わって雪乃さんの部屋で夕食にあずかり、銭湯に行ってから寝るまでだ。
「あ、おかえりー」
銭湯から戻った俺に、ゲームをしながら首だけを回して言うと、麻衣はまたテレビに向く。
「そろそろ終わってくれ」
「んー。ちょっと待ってまだセーブできないからー」
俺は無理矢理やめさせるほど鬼ではない。セーブせずに、また同じ事をやり直す辛さを分かっている。
「あー。分かった」
そういう時は大体、ゲームの経過を見ないように（俺もプレイ途中で、麻衣は大抵先に進んでいる）、イヤホンで音楽を聴きながら、テレビと背中合わせに雑誌を読んだり過ごしている。少しして再度、
「まだ終わらないのか？」
「んー、もうちょっと」
更に時間が経過。
「まだか？」
「んー、あと少しー」
――
――――
――――――
「……思い出したか？」
「だって、セーブできないから仕方ないでしょ」
「アホ！　このゲームは大抵一時間以内にはセーブできる間隔があるんだけどな」
途端、麻衣はしおらしくなり、人差し指を合わせながら、上目遣いでこちらをチラチラと窺いながら、
「……えっとね、ユウくんが何も言わないからまだいいかなー……

なんて」
　バシリともう一度ハリセンで麻衣を叩く。
「待ってんだよ！」
「そんなワタシに八つ当たりしてるから、ゲームする時間なくなるんだよ」
　……ダメだこいつは。減らず口め。
　まあ、確かにこいつに関わって時間を無駄にするよりはゲームしてた方が有意義である。
　ようやくラスボスまで来たんだ。この休日にクリアして、さっさと最近出た大作をプレイしたい。

「……こいついつなったら倒せるんだ……？」
　ラスボス戦開始後三十分。未だ敵はピンピンしてやがる。回復アイテムも尽きてきたし。
「ユウくん、レベル低すぎだよ。少し上げてから戦えばいいのに」
「うっさい。俺は早解き派なんだ。やり込みは二週目にする」
「そもそも、弱点突いてないし、このままだとそのうち全滅するんじゃない、えっとね弱点は――」
「言わんくていい」
　追記だが、俺は初回は攻略法も見ずに自分で見つけるタイプだ。
「そっか。ま、頑張って」

『グハッ……』

　お、倒した。画面には片膝を着くラスボスの姿が映る。
『……やりおるな。我の真の姿を見せてやろう』
　ラスボスは人間の姿から、異形な怪物へと変わっていく。まあ、予想はしていたけどね。

『グホァ……』
何とか倒したな。
『フフ……それで我を倒したと思っているのか？』
ラスボスは、更にグロテスクな風貌に変わっていく。まだ変わるのか。
『アベシ……』
『やりおるな。だがまだ本気は出してはおらん』
『ウボアー！』
『まだだ……まだ終わらんよ！』

「……ようやく終わった……」
時計を見ると三時間経っていた。
変身しすぎだろ。
「おつかれー」
ＥＤを見終わり、ＥＮＤの文字のまま画面は動きを見せない。クリアデータのセーブがあったりするかもしれないし、クリア後の隠しがあるかもしれないから、流しっぱなしだが、五分ぐらい経ったか、未だ何も起こる気配はない。
「ね、終わったんなら消せば？」
「いや、まだ何かあるかもしれないだろ。た○しの挑戦状を知らんのか」
「知らない」
うん。霊期間も含めるとファミコン時代をゆうに越し、便利な家電すらもなかった時代だしな。
前と前々の住人はゲームとは無縁だったようだし、麻衣はゲームは最近始めたばかりだしな。当然の反応だ。俺もプレイ経験はないし。
それにしても、昔のＲＰＧのような作品だったな。そりゃ、映像

とかは機種の性能を十二分に使って綺麗だが、物語に関しては王道で、システムもオーソドックスだ。
けど、俺はレトロゲーは好きだし、悪くはなかった。
魔王は変身しすぎだが。
……魔王か。

「……え、変身ですか？」
魔界荘の大家兼、魔王である榊さんの部屋。優しげな若い父親といった風な表情を浮かべる榊さんに、変身できるのか聞いてみた。
一般人に同じ質問をしたら、頭がおかしい人として怪訝な顔をされ、しつこく迫れば狭い部屋でカツ丼を食わされることになりそうだが、魔王に言ったならば、単なる好奇心としての真っ当な質問だろう。
「はあ、一応できることにはできるんですが……」
歯切れの悪い答えで、榊さんは困ったような苦笑する。
「あ、やっぱりピンチにならないと駄目なんですか？」
あくまでも、変身は切り札的なことだろうからな。プロレスで最初から大技だすことはしないようにか。プロレス観たことないが。
「いえ、そういうことではなく、変身してしまうと自我が保てなくなるんですよ」
「はあ」
「以前……こちらの暦だと四百年前になりますか、魔界の方でいざこざがありまして、その時に変身したんですが……気付いた時には荒野になってましたよ」
と、榊さんはまるで不良だった過去を語る社会人のように自虐的に笑う。いや、規模が違うけど。
「それ以来、変身はしないと誓いました」
「危機的な状況とかあったりしたんじゃないすか？」

「いえ、ありませんでしたよ。実を言うとあの時も変身しなくても何とかできたと思いますよ。……若い頃の過ちです」

見た目からするとまだ若く見えるのだがな。

「そうですか。じゃ、俺はこれで……」

聞きたいことも聞けたし、さっさと戻るか。雪乃さん以外の部屋に長居はしたくないからな。

「そういえば、魔界の方から持ってきた菓子がありましたね。持って行ってください。きっと口に合うと思いますよ」

言って榊さんは立ち上がり、菓子を取りに台所の方へ向かう。人間の俺が食える菓子なのか不安だが。

「……あ」

今俺が漏らしたこの声について説明しよう。

台所に向かう途中、榊さんの足の小指が真新しいタンスの角にぶつけたのだ。

「……チッ」

榊さんの舌打ちについて説明しよう。

榊さんは常時は穏和だが、怒りの沸点が低いのだ。今も顔が見る見るうちに強ばっていき、青白い気を纏わせた右手でタンスを――

「ユウくんどしたの？　このお菓子食べないの？」

何故だろう。俺はその後しばらく震えが止まらなかった。俺が榊さんの部屋で観た光景はタンスが一瞬で灰なったとこで止まっている。どうやって菓子を持って部屋に戻ったかは分からない。とにかく、魔王の怖さを現実に味わってしまった俺は、魔王が出るＲＰＧをやりたくはない。

魔界荘ゲーム日和（1）

ジュースよし、お菓子よし、ポテチ用の箸よし。そして充電も完了。

ちゃぶ台に並べられた物を一々指さし確認し、時刻を確認。

時間まであと五分か。既に居るかもしれないし、とりあえず電源入れとくか。

「……私、虹色オーブ手に入ったら、ねんがんのレインボー装備作るんだ……」

遠い目をして、今にも成仏していきそうな笑みを浮かべているのは、携帯ゲーム機を片手に持つ、麻衣である。

「それは死亡フラグだろ……って、既に死んでるから、レアアイテムが手に入らないフラグか？」

「そんなこと言わないでってばー！」

そういや、ねんがんの剣を手に入れた聖騎士の末路は……ゲームの話だが。

“魔物ハンティングポータブル”

今、巷で大流行の大旋風を巻き起こしているゲームソフトだ。

プレイヤーは戦士や魔法使いとなって、魔物を狩っていくというタイトル通りでシンプルな内容なのだが、何故人気なのかというと、何から伝えればいいのか……まず、難易度が絶妙なのだ。

最初は苦戦しながらも徐々に腕前の上達を実感することが出来る。そして死闘の末魔物を倒した達成感は、まるで天使さんに褒められたような嬉しさがある。……そんなこと未だ無いが。

次にコレクター心をくすぐる装備の数々。

どれも個性的で、身に着けるとキャラに反映されるから着せ替え

人形を楽しむ少女のような気分になる。
そして何よりは、仲間と協力して戦えるということだろう。人といっしょに何かを成し遂げるというのは、それはもう、皆で文化祭へ向けて準備をし、大成功を納めたような感動があるだろう。……そんな文化祭は未経験だが。

とにかく、大流行と聞けば川に落ちた木の葉のように瞬く間に流されてしまう俺は、当然のごとく進行形でハマっている。
多人数でできるから、太っ腹な俺は麻衣にもゲーム機本体とソフトを買い与え（計三万四千八百円）いっしょにプレイしてたわけだ。
そして、基本的にゲームはやらない魔界荘住人に、テレビショッピングの司会者の話術に倣い、面白さを懇々と説いていった結果、同時に協力できる限界程度の人数は布教できた。
まあ、しかし、説いてく過程で皆一様に『懐かしい』とか言って、過去にリアルで魔物を倒してたと聞いたりした時は驚いたな。
流行ったのは、野球選手が野球ゲームをするようなものなのかもしれないな。
俺は絶対リアルではしたくないが。
ちなみに三神さんにも勧めたが『興味ない』と素っ気なく言われ、なつきさんには『機械苦手でー……』と悲しげに言われ今にも泣きそうだったからそれ以上は勧めなかった。

そんな訳で、魔界荘住人で今日はガッツリ狩ろうかということとなったんだが、俺の部屋には麻衣と俺しかいない。
だが、ゲーム画面には既に来ていた雪乃さんのキャラがいる。青白い髪色をしていて、キャラの方が雪女っぽく見える。まあ、普段の雪乃さんに雪女っぽさはないが。肌の触れてその冷たさにふと思い出すくらいだ。……数えるほどしかないが。

それにしても最近の携帯ゲーム機の進化といったら凄いとしか言いようがない。

こうして部屋にいながらにして、魔界荘くらいの狭さなら（皮肉ではない）繋がることができるのだから。

だが、便利とはいえ顔を見合わせながらプレイしたかったな。雪乃さんに『せっかく各部屋で出来るんですから』との案により、麻衣と顔を見合わせながらすることになってしまうとは。

いや、これでいいか。皆で一つの部屋に集ったら気が散って動きに精細を欠きそうだからな。真剣にゲームをする姿に見とれたりして。

『今日はよろしくお願いしますね』

と、スピーカーからでも清涼感のある雪乃さんの美声が聞こえ、雪乃さんのキャラがお辞儀をする。

「こちらこそよろしくお願いします」

「どんどん狩っちゃおー！」

画面上の自キャラとシンクロするようにこちらの麻衣も腕を天に突き上げている。スピーカー経由しなくとも隣に届いてそうな声の大きさだな。

集合時刻になり、ほぼ同時に天使さんと魅栗さんのキャラが入ってくる。これで揃ったな。

女性陣ばかりだが、男性陣にもしっかり勧めたと念のため言っておく。

荒木さんは温和なバージョンの時しかプレイしないから今日はいない。

割と苛々が募りやすいゲーム性な為か、勧めた次の日、榊さんのゲーム機は灰になっていた。

黒木さんは細かい操作が苦手なようで、少ししして飽きたとのこと。

というわけで、現在画面上には女性キャラしかいない。ちなみに俺は女性キャラを使用している。

キャラの容姿だが、魅栗さんはフード付きの黒いローブで全身をすっぽりと包み隠した、怪しい悪の魔法使いといった格好だ。事実、魔法をメインに扱うジョブだが。

ゲームの中くらい、もっとイメージを払拭するような格好すればいいのにと思ったが、それはそれで残念な気がする。

で、天使さんも現実と変わらず、ブロンドのセミロングに――ん、

「何で、裸なんです？」

思わず聞いてしまった。

天使さんのキャラは、実際に裸ではないが（だとしたら１８禁になる）、防具を身に着けておらず、ビキニ姿のようなインナーだけである。ちなみにこのゲーム、防具なかったら、ちびマ〇オのように一撃でほぼ確実に天に召されます。

趣味か？　ゲームで露出願望を満たしているのか？　だとしたら現実でも魔界荘敷地内くらいなら俺が許すが。

『こうでもしないと歯応えがないし』

歯応えか……そういや以前いっしょにプレイした時も、天使さんの動きは華麗だった。白を基調とした装備でその姿はまるで戦乙女（ヴァルキリー）にも見え、凶暴なモンスターが赤子のように捻られてた。

『あ、分かります。強い装備だとすぐ倒せてしまいますから』

と言う雪乃さんの装備をよく見ると、防御力が心許ない軽鎧だ。下鎧がミニスカートのようなっていて生足を惜しげもなく見せつけている。

その背中に担ぐ槍も攻撃力は高くはない。よく見ると天使さんも似たようなもんだ。

麻衣はともかく、キャラは女とはいえ中身は男の俺が、現時点で一番良い装備で身を固めてるのが恥ずかしくなってくる。

いや、いいさ。腕前の立つ二人と比べても仕方ない。二人に合わせて装備の質を落としたら無惨な姿を晒すことになり余計に恥ずかしい思いをするだろうし。

簡単な会議の結果、まずは麻衣の懇願するアイテムが手に入る可能性があるクエストに向かうこととなった。
ロード画面が終わり、緑豊かな大自然が液晶画面いっぱいに広がる。
スタート地点では魔物も来ないから安全で、俺は強化アイテムを使用しようとした時――
「え、準備しなくていいんですか？」
スタートするやいなや、全速力で駆けていく雪乃さんと天使さん。
俺が聞くと、
『何も持ってきてないし』
『強化する時間より、早く攻撃した方が効率いいですから』
……お二人は既に高みにいる存在なのか。山岳地帯に軽装で行くような真似をするとか。プレイ時間は俺の方が倍はあるのにな。
優秀な新人に力量のを差を見せつけられる無能な上司の気分かもしれん。

強化もそこそこに二人に追いついた時にはそこは既に戦場だった。
討伐ターゲットである“虹鳥”が、天使さんによって虹色の羽が舞い散らせ、雪乃さんによって極彩色の体が突かれていた。
その姿には、鳥王と呼ばれている（設定より）風格はなく、カラスに弄ばれる雛鳥を想像させる。
……俺、必要かな？
遠距離から援護するタイプの魅栗さんと麻衣はともかく、身の丈はある大きな剣を担いだ俺は近接戦闘しかできない。
ここまで一方的な戦いをしている二人に飛び込んだら足手まといになりそうだ。
「ユウくん戦いなよ」
何の遠回りもない一直線なお言葉が麻衣より届いた。デコピン程

度の弱々しい攻撃を安全圏からペシペシ与えてるだけの奴に言われると、眉をヒクつかせたくなるが、

「勘違いすんな。精神集中してただけだっ！」

ツンデレっぽく強がってみた。

本音を言えば傍観者に撤したかったが、そう言うとメンバーに筒抜けになる。つまり、雪乃さんの前でやる気のない姿勢がまる分かりとなってしまう。

よし！　とキャラを操作し、猛獣同士の戦いに草食獣が向かっていく。

怒りに羽を剣山のように逆立てる虹鳥のスキを窺い、ターゲットが天使さんに向かい尻をこちらに向けた。今が好機だな。

と、一歩二歩と間合いを詰め、剣を大上段に振りかぶった――瞬間だった。

クルリと虹鳥は狙いをこちらに向ける。そして、剣を振り下ろすよりも早く前足で俺を虫けらのようになぎ払った。

「あ」

ゴロゴロと転がる俺（女キャラ）を観てか、

『役に立たないわね』

傷口に容赦なく塩をまぶす一言が浴びせられる。俺だって好きでミスしたわけじゃないんだ、こういう時必要なのは――

『勇気さん、ドンマイです』

さすが雪乃さん分かってる。傷口が六甲の水で洗い流されてくようだ。今からいいとこ見せてやるとしようか。

だが、俺は元気が注入されたがプレイヤーそうはいかんようだ。体力ゲージがぐぐーんと減り、もう一度攻撃されたらやられてしまう。

このゲームはやられても三度までは復活可能だが、ペナルティとして戦利品が減る。ついでにそれを良しとしない天使さんに罵倒され俺の心がすり減る。それはいかん。

「あ、魅栗さん。回復お願いします」

と、言いながら黒いローブの魔法使いに駆け寄っていき回復を懇願する。

回復が魔法頼りしかできないため、魔法使いはパーティの生命線と言っていい。……まあ、未だ無傷の二人を見てると必要なのは俺だけな気もするが。

回復魔法が届く位置に着き、手早く治癒魔法により体力が全快する。

「ありがとうございます」

お礼を言って、戦線へと復帰するため、もう一度強化アイテムを使う。「どういたしまして」的な返答でもあるかと期待するだけ無駄だろう。無口な魔法使いにはな。

『……』

そう思ってたらあった。魅栗さんのキャラから吹き出しで無言の返答が。

いや、わざわざ文字入力してまで無言とか意味分からん。

戦列へと復帰した俺は鬼神のごとき大活躍――はなく、安全第一をモットーに攻撃を避けることを最優先で、大きなスキにだけ攻撃を加えていった結果、

「死に物狂いモードになりましたね。ブレス攻撃には注意してください」

虹鳥は瀕死に近くなると超強化される。攻略サイトで得た知識をひけらかしてみた。

『知ってます』

『うっさい』

『……』

「プッ、博識気取り？」

あー。これって皆で協力して魔物を倒すゲームだよな？　何故か味方の口撃で俺の心が打ち倒されそうなんだが。

『あ、勇気さん、攻撃が』

雪乃さんの声で、涙目を画面に戻すと、虹烏のくちばしから放たれたブレスが眼前に――

【力尽きました】

避ける猶予もなく、無惨にも俺のキャラは地面に伏すこととなった。

『あ……』

『ハァ……役立たずね』

『……』

「虹色オーブ出なかったらユウくんのせいだよ！」

【俺の心が力尽きました】

魔界荘ゲーム日和（2）

俺の壊れたハートが突貫工事で修復を終えた頃には、既に虹鳥は丸焼きが似合いそうなくらい見事に地面に横たわっていた。

どうやら、責め苦により粉砕された心を、密林に奥地の原住民族と一緒に炎を囲んで踊り狂って辛い出来事を忘れている間に戦闘はつつがなく無事に終了していたらしい。

「あ、出た！　これでレインボー装備が揃えられる～」

俺が日に焼けたマッチョな半裸とピョンピョン跳ねてた甲斐があってか、どうやら目当ての戦利品が手に入り麻衣はご満悦のようだ。

『あ、私もオーブ出ました』

と、隣で柔和な笑みを浮かべる雪乃さんが目に浮かぶ声が聞こえ、

『まあまあね。誰かのせいで数は減ったけど』

どうやら天使さんも中々の収穫があったらしい。……いったい誰のせいなのかは検討もつきませんが。

『……』

多分、流れ的に魅栗さんも上々だったんじゃないかと想像する。

これも脳内で行われていた収穫祭の成果だろう。ありがとう原住民の皆さん。もっと激しく踊り明かそう。太鼓のリズムをもっと早く！　……と、俺も確認しなければ。時間経過で戦利品が破棄されたら適わん。何も取得に貢献してない気もするけど。

――何も貢献していない

もう一度その言葉がリフレインされる。

そうだ。今回のクエストで俺がしたことといえば――虹鳥の攻撃を受けて瀕死にされ、魅栗さんに回復され、頼りになるツートップの二人に比べたら、スズメの涙にもならない攻撃を加え、ブレスを受けてやられ戦利品数の四分の一が消滅。

これを客観視したらどう見えるだろうか。
――カッコ悪い。
それ以外にも役立たずやら、足手まといやら、蔑すまされる言葉があるだろうが、お褒めの言葉が介入する隙間なんてないだろう。
カッコ悪い。すなわちそれは、女性陣にいい印象を与えられなかったと。
ま、ゲームのみならず普段から好感度ゲージが真っ赤に染まる伸び方をするような、良印象は与えたことはない。悲しいことに。
だが、ゲームなら別だ。
ＲＰＧ――ロールプレイングゲームを訳すと役割を演じる遊戯となる。
それは今プレイ中のマモハンも同じだ。普段はうだつの上がらない冴えないサラリーマンもゲームの中なら頼りになる戦士だ。
俺もゲームの中なら、姫を護る（守るじゃないのがミソ）騎士になれる。姫に襲いかかる魔物の前に立ちはだかり、華麗な剣捌きで討伐したら、なんと格好いいことだろう。
そんなことをたとえゲームとはいえしたなら、現実でも良い印象を与えられのではなかろうか。
――そう思ってました。
しかし現実は甘くない。
ゲームの世界でも俺は、おてんば姫に助けられるへっぽこ騎士のように役立たずであったと。
――これはいかん
「あ、次行きますか？」
二次会への参加の有無を問うように俺は言った。まあ、まだクエストやるかの問いだが。
『はい。行けますよ』
俺は心中で、よっしゃー！　と拳を握りしめた。まだ挽回のチャンスはある。
『今度は足引っ張らないでよ』

ええ。もちろん。今度はヘマはしませんよ。
『……』
だから、言語使ってくれ魅栗さん。俺は三点リーダの奥深くに秘められた言葉を読み解く力もないし、画面上のキャラクターの心を読む力もない。棒立ちってことはとりあえず、参加の意思はあるということか？
「当然。私も行けるよ」
それは分かってた。麻衣に他にできる暇つぶしもないし、まだ飽きる時間でもない。
「今度は、キングドラゴン行きませんか？」
俺は提案し、全員異論はなくキンドラ狩りに行くこととなった。

追記事項になるが、このモンス……じゃなかった、マモノハンティングポータブルは様々な魔物が登場する。
太古の空を舞っていたかのような鳥から、ファンタジー色が濃いドラゴンまで、種類も様々で、戦い方もそれぞれ特徴がある。
それは格闘ゲームで例えるならば、打撃系、投げ系とかみたいなモノで、対処法も全くと言っていいほど違う。
言い訳じゃないと前置きしておくが、ぶっちゃけてしまうと俺は先ほどの虹鳥は苦手な相手だった。ヒラリヒラリと俊敏な動きで、動きが読みづらいし。
だから、無駄のない立ち回りをする二人と肩を並べるのは所詮、無理で無謀な話だった。
しかし、今回のキングドラゴンは俺の大得意な相手だ。自慢じゃないが天使さんのように防具が無くっても無傷で倒せる自身がある。
蝶のように舞い蜂のように刺す、俺を見て雪乃さんはどう思うだろうか。評価がプラスに向かうのは間違いない。
『素敵です勇気さん……私もあんな風に戦いたいです』

『いえ。俺の戦いを見守ってくれてるだけで十分ですよ』
『別に……まだ私の方が上手いんだからね！　けど、アンタがいないと勝てなかったかも……』
『……（ポッ）』
おっと、妄想が弾けてしまった。
ゲーム画面に集中せねば。もうフライング気味と思えるくらい、始まった途端に雪乃さんと天使さんは走り始めてるし。俺も急いで追いついて活躍して、妄想を現実に近づけなければ。

出現場所に着いて間もなく、マグマ色した身体を持つ龍が、空から降りたって立ちはだかる。器用に二足で立つ姿はビルを連想させる。
睥睨と戦士たちを見下ろすと、轟音を響かせ叫ぶ。その大きな体躯とキングと冠される通り、攻撃力はハンパない。
肌を露出させ戦う天使さんはもとより、後方支援を主に担当する麻衣と魅栗さんも一撃で地に伏してしまうだろう。
だが、大きいということはそれだけ動きも大きいということだ。ボクシングなら大振りなストレートしか繰り出さないような動きの単調さで、馴れてしまえばこれほど楽な相手もいないだろう。
そんなわけで、俺は先ほどのヘタレっぷりは幻だったんじゃないかと思わせるくらい、攻撃を避けてできた大きなスキに攻撃を容赦なく叩き込んでいく。
『いい動きしてますね』
よし。雪乃さんに褒められた。
さっきと変わらず、無駄を極限まで削ぎ落としたような動きをしている雪乃さんに言われると、なんとも先生的な立場からのような気もするが悪い気はしない。
先生か……いいかもしれないな。今度マンツーマンで指導しても

らおうかな。優しい教え方で、苦手な魔物も克服できそうだ。
「ユウくん」
「なんだ？」
「尻尾来てるよ」
と、言われ、画面に注意を戻すとキングドラゴンのぶっとい尾が俺のキャラに迫っている。
しまった。などと叫んでも意味はない。油断していたとしか言いようがない。脳裏に、タイトミニなスーツ姿にメガネを掛けた教師スタイルな雪乃さんを想像していたのがいかんかった。
そのお姿をいつでも呼び出せるように焼き付かせてる間に、俺のキャラは尻尾で見事に吹っ飛ばされていた。
『ダサ……』
天使さんのため息にも似た声が聞こえたが、落ち込みはしない。人は何度も傷ついてすり減らして心は強くなるもんさ。
数ミリだが体力はまだ残っているし、集中しとけば同じヘマは二度はしない。現実に置き換えたならば、瀕死で剣をブンブン振り回すこともできそうにないのだろうが、ゲームだからな。動きが鈍ることはない。
脳裏には、厳しい言葉を吐き連ねるスパルタ指導を心情とする天使さん（教師バージョン）が映ったが、それは後ほど存分に妄想しよう。
今は目の前の敵を倒すことのみしか考えるな俺。

「やっと倒せたー！」
麻衣が両手をバンザイにし、身体中で喜びを表している。
あれから、俺のゲームキャラとシンクロしたかの如く目の前に立ちはだかる敵を圧倒する働きを見せ、華麗な女戦士×３の前にあえなく龍の王は地面に寝ることなった。俺が地面に横たわるというオ

チはないなだよ、フフフ。
『今回は勇気さんも役に立ってましたし、楽な戦いでした』
それはどうも。と、喜びたいがさっきは役立たずだったというニュアンスが含まれてるのは俺の耳がおかしいのか。そういうことにしておこう。
『ま、それなりの働きだったんじゃない』
お、珍しく天使さんに良い評価をもらえた。口を開けば氷柱のような冷たく厳しい言葉しかない天使さんにそう言われるということは、満点に近いと判断していいんじゃないか？
「いやあ、これが本来の実力で……あ、」
『どうしました？』
「いえ、バッテリー残量が僅かだったんで」
ふと、気付くとバッテリーの残量を示すランプがチカチカと点滅していた。まあ、それでもまだ少し持つだろうが、念のため充電しとくか。
部屋を見渡し充電器を探すと、すぐに見つかった。つか、プラグがコンセントに刺さっていた。それを辿っていくと、
「あ、使ってたのか」
麻衣が持つゲーム機に繋がっていた。つまりは充電中。
「うん。切れそうだったから。ま、戦利品画面までは充電しなくても大丈夫でしょ」
う。嫌な予感が。
麻衣の言葉を補足すると、魔物を討伐した後、戦利品を得る画面まで数分掛かる。この画面で精算を終えないと戦利品は手に入らないのである。
「そうだな。たかだか一、二分で切れるなんてことはないよな」
ハハハと笑ってみたが、これってもしかしてフラグが立ってんじゃないかと気付いたのは言った後だった。
「あ」

ゲーム画面に目を下ろすと、タイミングを見計らったかのようにバッテリーが力尽き、画面は黒い鏡面と化し俺の間抜け顔を映し出す。

『またレアアイテムでましたー』
『中々ね』
『……』
「ラッキー。今日はツいてるう♪」

ミンナヨカッタネー。
俺は何も手に入らなかったよ。
まあ、いいさ。お褒めの言葉が何よりの戦利品さ…。悔しくなんかないさ。

さて、原住民と踊ってくるか。

霊検診（1）

のどかな時間が流れていた。

魔界荘の自分の部屋。渋いお茶を飲みながら片手に持つ本（週間少年マンガ雑誌）に目を傾ける俺。

部屋にはしばしの間、ページをめくる時に紙が擦れる音、お茶をすする音、寝ころびながらマンガ（別の週間マンガ雑誌）を読む麻衣が足をバタバタとさせる音があった。

……最後の音がなければ良い秋の静寂が流れていただろう。

まあ、もうそんな麻衣のマナーのなっていない行動には慣れてはきたが、下階の住人がいることを忘れないでくれ。

怒らせると怖い人たちが揃ってんだからな。今のところは不機嫌面と『次はない』という脅しだけで済んでるが、次、天使さんにでもあったら、お前に娯楽を提供する人間が消えるのかもしれんのだぞ。

という注意を言っても、馬の耳に念仏、幽霊の体を掴むみたいな無駄な話だから、とりあえず今はマンガに集中だ。

お、絶体絶命のピンチに新たな力が目覚めた。燃える展開だ。

おお、次はコレか、ストーリーは皆無に等しいが萌え絵とお色気カットを毎度楽しみにしてんだよなー。どれどれ。

おおお、終わりか。今号も十分楽しめる内容だった。しかし、またあのマンガは休みか。

そして、本を閉じてお茶を一口。ああ、読み終えた後のこの一杯がいい。冷め切ってしまってるが。

さて、もう一方のマンガを読みふけってるのはどうかね。

「そっち、まだ読み終わらないのか？」

「んー、もう少――クシュン」

と、マンガ見たままの麻衣が答えて、クシャミをした。ツバ付い

たらどうする。……霊のツバが付くかは知らんが。
「風邪か？」
「んー、そういえばなんか頭痛いかも」
ほう、オカシいじゃなくて痛いのか。
「幽霊のクセに風邪引くのか」
「失礼しちゃうな～。私だって風邪くらい引くってば、ユウくんじゃあるまいし……ケホッ……」
俺は幽霊の専門知識なんてないから、一概に幽霊は風邪を引かないと断言はできかねる。痛覚はあるみたいだし、風邪も引いてもおかしくないか、俺じゃあるまい――ん？
「……おい、それって、俺がバカだと言ってるように聞こえるんだがな」
「さあ、どうだろうねー」
「だったら、お前が風邪引くほうがおかしな話になるな。いや、あまりにバカすぎると逆に風邪引くのかもしれんな」
「……ケホッ……うー、誰かがウルサいせいで余計に痛くなった」
どうやら、頭痛は嘘ではなさそうだ。いつもなら倍にして言い返してくるし、今も本に顔を埋めてる。
「とにかく安静にしといたほうがいいんじゃないか？」
「読み終わったらそうする」
しかし、幽霊が風邪ね。市販の薬は飲めないし効果の程度も分からん。とにかく安静にしろとしか言いようがない。
それにしてもそんな素振りは見なかったが。仮にも部屋の主である俺に心配をかけまいと気を使ってくれてたのか？
……いや、ないな。単に風邪に気付かないくらいバカなだけか。
とりあえず、読み終わるまで休むかね。と、二つに折った座布団を枕に俺は仰向けになる。
どこを見るでもなく天井のシミを眺めてると、マスクしといたほうがいいのかと考えた。幽霊の風邪は人間にうつるのか？
んー、まあいいか。後にし――

「……」

天井から足がはえてきた。

いや、出てきたというべきだな。これは俺の目がおかしいのか、アレだ、錯覚かもしれん。

と、結論付けるのは尚早である。何故なら壁を透過できる幽霊が実在するのだからな。イタズラで押し入れの戸から首だけを出された時は下手なお化け屋敷より怖かったな。

しかし、そのやんちゃな幽霊説は今聞こえたクシャミにより消えた。

じゃ、何だろうね。あの白いソックスに包まれた細い足は。更に、清楚さを感じさせる足が天井から降りてきて、透き通るような白さの太ももが見え、ニーソックスだと分かる。

更に更に、白を基調としたミニスカートまで見えてきた。白のニーハイとの間はまさに絶対領域の黄金比であると思う。腰まである黒髪の毛先がサラリと揺れる。

スーっと体全体が部屋へと収まるまで降りてきて、その人物はピタリと止まる。宙に浮いたまま。

いや、驚きはしないさ。部屋を縦横無尽に飛び回る幽霊を見ているからな、今驚くべきことは、その宙に浮いている人物のつま先が俺の眼前数センチという位置にあるということだ。

「失礼致します」

天井からの侵入者が何やら丁寧な言葉使いで言っているが無視しよう。

想像してみてほしい。

俺の目には二本の足が下からのアングルで映っている。二本の足がピッタリと合わされていたならば俺は足裏しか見えなかっただろう。

「へ？　誰……あ、ユリエちゃん。久しぶり～」

だが、そんな自衛隊ばりに足を揃えた気を付けをした状態ではなく、そこに床があるように普通に立っているのである。つまりは足

と足の間には拳一つ分くらいの開いているということだね。
「はい。そうですね」
で、その間を上へ上と目で追っていくとミニスカートの中へとたどり着くわけだ。その未開の地の果てには何が待っているか――答えるまでもなかろう。例えるならそこはエデンだ。楽園だ。俺はその楽園を存分に目に焼き付けるとしよう。
「そうだね。あ、見られてるけどいいの？」
「え？」
麻衣が指さしたのだろうか、ユリエとかいう人物は下を向いて、俺の姿があるのが分かり沈黙。少しして、自分のスカートの中身が見られていたと分かると、
「キャァァァァ！」
と、衣を裂いたような甲高い悲鳴が響きわたった。確かこの時間雪乃さん親子は出かけてたはずだ。よかった、万が一今の悲鳴を聞きつけて部屋に来られてあらぬ誤解をかけられたらと思うと……考えたくはない。
さてと、俺は起き上がり、今にも恥辱に顔を赤らめ、こちらを睨みつけながら釘バットを握り締める黒髪の少女が何者かを聞こうかと――ん？　金属バット？　何故そんな物騒な物を？　目指せ甲子園？　何でそれを持って一歩、また一歩こちらに来るわけ？
「エッチ！　変態！　死にさらせ！」
すまないが。罵声を浴びせられて興奮を覚える趣味はないのだが。あ、それと下着を覗かれたのは君の失態であり、俺に悪意があったわけでは――という言い分が通りそうもなく、金属バットを振りかぶり今にも俺の脳天へと振り落とされようと――
「ユリエちゃん、相変わらずエッチなの苦手なんだね。人格まで変

わっちゃうしさ」
「呑気に説明してる場合か！」
と、ツッコミながら俺は必死に金属バットをかわし、距離を取った。うわー、畳が見事に凹んでる。頭に当たってたらグロテスクすぎて、見るに耐えない有様になっていたぞ。つか、コイツ本気で殺しにかかってんじゃねーか。
「このクソスケベ！　死ね！」
いや～、下着見られたくらいで殺しに掛かるとは今時ない純情さだ。はぐれ刑事もびっくりだ。
……と、まあ、そんな思考を巡らせる余裕はないな。今にもバットを構え直し、次の一撃を放つつもりである。
「一分くらいすれば、元に戻るから、ユウくん頑張って～」
何、傍観者になろうとしてんだ麻衣。
宙に浮いて安全圏にいやがるし、完全に楽しんでるな。
さて、一分後に俺はどうなってんだろうね。

一分経過。
「申し遅れました。わたくしはユリエ。霊の看護士をしております」
キッカリ一分かは死に物狂いで回避に専念していたから定かではないが、まるで鬼コーチのように俺を追いかけながらバットを振るっていたユリエは、急に我を取り戻したかのようにしおらしくなり、ちゃぶ台の前で座布団に正座し、何事もなかったかのように名乗った。
まあ、俺もちゃぶ台を挟んで向かい合って座っているのだが、部屋は散々である。
畳はボコボコ、押し入れの引き戸は真ん中ら辺で折れてこんにちはしている。
いや、それだけで済んだのが奇跡かもしれない。これもひとえに

俺の逃げ方がよかったからだといえる。だが、どうせ壊すならなら雪乃さんの部屋を隔てる壁にしてほしかった。広いワンルームで四六時中一緒なスウィートな生活になったのに。

「で、他に何か言うことはないのか？」

俺は仏のような笑みを浮かべながら言ってやった。

「変態」

ハハハ……どうやら謝る気はないどころか、俺のイメージが変態に固定されたままらしく、ユリエは冷めた目を向けてきている。

看護士――つまりはナースらしく上下白の服装で清純さをアピールしてるくせに、内面は黒そうだぞ。下着と同様に。

「別にわざと見たワケじゃないだろ。君から勝手に俺の上に降りてきたわけ――」

「でも、じっくり見てましたよね？」

「……いや、それはだな……俺は首の間接の動きが悪くてな、急に動かそうとしたら激痛を伴ってしまうんだ。だから目を背けたくても出来なかったんだ」

「目を瞑ればいいと思いますけど？」

「……あー、俺は幼い頃から格闘技を厳しい両親の元やっていてな、瞬きもせず相手をよく見るように指導を受けていて急に目を瞑るなんてことができなかったんだ。だから不可抗力だ」

「……」

再び金属バットを構えるユリエ。

まさか、俺の完璧な嘘が見破られているのか！？

だが、あくまでも故意ではないから謝るつもりは毛頭ない。

例えば春風のイタズラでヒラリとスカートが舞い上がったとしたら、誰が悪い？　事故だろう？　犯人がいるならばそれは風であるのに、何故、見た側がまるで犯人のように睨まれる必要があるのか、すぐに目を逸らしたとしても疑いの眼差しを向けられるのには俺は納得がいかない。

更に言うならば、悪いのは注意散漫な君が悪い。俺には一厘も悪

いところはない。
「まあ、そんな事は置いといて」
俺はエア荷物を除ける仕草をし、
「霊の看護士が何でウチに？　麻衣が呼んだのか？」
フワフワ浮きながら漫画を読んでいる風邪幽霊を見る。
「私呼んでないよ」
ユリエに視線を戻すと、話が流されたことに不満げな面を見せ、
その不機嫌面のまま、
「定期診断です。一年に一度来ているんです」
「でも、今回早くない？　いつもだったら冬に来てなかったけ？」
「そうですけど、悪いウィルスが流行りだすとの予測がありまして、
今日は予防の為に来たんです。定期検診も兼ねてますが」
「ウィルス？　インフルエンザみたいなものか？」
「そう思っていただいて構いません」

へえ。霊にも流行り風邪みたいなのがあるんだな。
それで霊のナースか。じゃあ、ユリエも幽霊なのか？　俺、見えてるけど。……気にしないでおくか。

霊検診（2）

「つか、検診するまでもなく、既に風邪のようなんだが」
ユリエが来てからは、咳もしてはいないし、頭痛が辛いような表情はしてないが、確かにさっきまで風邪らしき症状はあった。
「……風邪、ですか」
何やら思案するように顎に手を当て、ユリエは考える仕草をする。
もしかして既に流行病にかかっているとか？　マスク着用したほうがいいのか？
「どんな症状がありますか？」
「咳とか頭痛がするとからしい」
何故俺が問診されてるんだろうか。小さい子供の保護者じゃないんだから。麻衣に聞けばいいものを。ちなみにその麻衣は壁際でこちらを見ているだけだ。
「そうですか」
「これが流行病なのか？」
ユリエは首を小さく振って否定する。
「その可能性は低いかと。他に変化はありませんでしたか？　普段と違う様子だったりとか」
言われて記憶をたどってみる。
三日前はチャンネル権の争いをして、二日前にはゲーム雑誌を見せつけながらソフト欲しいとかれこれ二時間やかましく駄々をこねられて、昨日は……あ、
「昨日は珍しく静かだったな」
「普段どのくらい騒がしい生活は分かりませんけど、特におかしい行動はなかったということですね」
呆れたようにユリエは冷めた目をする。
「別に私は普段からおしとやかでしょ」
何やら外野が言っているが気にせず話を進めよう。

「風邪だと何かマズいことでもあるのか？」
「悪霊になってしまうこともあるんです。可能性は低いですが」
「悪霊？」
と、怪訝に眉間にしわを寄せ聞き返して麻衣を見る。
「私が悪霊になるわけないじゃん。こんなに清らかな心なのにさ」
よくもまあ口からそんな嘘八百がだせるな。少なくとも清らかではないだろう。
俺は向き直り、
「で、悪霊になったらどうなるんだ？」
「代表的な例ですと、呪いとかです」
「呪い？　呪われたらどんな風になるんだ」
「色々ありますが、最悪死んだりとかもします」
死ぬ。つまりは呪殺か。脳裏には以前観たことがあるホラー作品が思い浮かんだ。
白い着物を身に付け、長い髪を乱した女が、寺の境内にある一本杉にわら人形を押し当て、奇声を発しながら心臓にあたる部分に五寸釘を何度も打ち付ける。そのわら人形の顔には女が怨む人の写真が貼られ、後に写真の人は原因不明の死を遂げたと。
……アレは怖かったな……
「えぇぇぇ！？　俺、死ぬの！？」
まてまて、冗談じゃない。昔の俺ならいざ知らず今の俺には未練が幾つかある。それらを残したまま死ねないっつーの。
「大丈夫です。悪霊には、心が著しく弱い霊か、誰かに強い怨恨を抱いた霊じゃないとなりません。風邪になると心身が弱ることもありますから、極まれにそうなる霊もいるということなので、一応注意しといた方がいいかと思いまして」
それを聞いて俺は胸をなで下ろした。
「じゃ、それはないな。こいつの心はかなり図太いし」
「私の心はガラス細工のように繊細だってば」
はいはい、聞こえませんよ。

「では、診察を始めます」
と、ユリエは麻衣の前に座った。
霊の診察ってどうするんだろうと、俺は興味津々でその様子を眺めた。まあ、服を脱ぐとかなったら無論目を背けるつもりだ。麻衣の身体に興味はないからな。
天使さんだったら、たとえ命を落としたとしても瞬きすらせず目に焼き付けるけど。
だが、目を背けなくてよさそうである。
ユリエは両の掌を麻衣へとかざして、身体から数センチ放して上から下へとゆっくり動かしていく。目を瞑り、まるで何かを読みとっているかのようである。スキャンみたいもんなのか？
掌は下から上へと戻り、ユリエは目を開けた。
「風邪以外には特に問題はありません」
「そっかー。よかったぁ」
麻衣は一安心といった安堵の表情である。診断の間はどことなく緊張していたみたいだったからな。しかし、霊にも見つかったら大変な病気とかあるのだろうか。
ユリエは宙に浮いて、天井に手を入れて、抜くと小物入れのような箱を持っており、再度座った。天井裏に置いてあったのかね。
「とりあえず、風邪薬出しときます。起床後と就寝前に飲んでください」
小物入れから取り出したのは、紅白のカプセルが詰まった小瓶。市販の薬となんら変わらないようだが……と、よく見ようと小瓶を掴もうとしたが、掴めずに握り拳を作ってしまう。
「霊用の物ですから掴めませんよ」
冷淡な口調でユリエが言った。
出来たら『何してるんですか～、掴めませんよ。クスッ』と笑ってくれればいいのに。先ほどから愛想笑い一つ見せてくれない。まだ俺から『変態』という不名誉な称号が取ってくれてないのだろう

か。
「これどんな味するの？」
薬の入った小瓶をジャラジャラとさせながら麻衣は聞く。
「少し苦いくらいです」
「えー、どうせなら甘いのがいいんだけどな」
唇を尖らし麻衣は我が侭を言う。
「子供かお前は」
つか、霊なのに飲めるのかコレ？　あ、霊用みたいだしそうなっているのか。多分。
「あと、流行病にかからないように」
ユリエは小物入れから注射器を取り出して、
「ワクチンを打っておきます」
注射器の先端を上向きに構える姿は実にナースっぽいね。針がキラリと光っている。そういや、昔の俺は注射は死ぬほど嫌だったな。今も苦手には分類されるが。

「注射イヤァァァァ！」

麻衣の甲高い悲鳴が響いた。

「駄目です。しておかないと、かかったら大変ですから」
注射器を構えたユリエが壁際に追いつめられた形の麻衣へとにじりよる。
「うー、しなきゃ駄目？」
麻衣は涙目で訴える。
「駄目です」
「それだけは勘弁してよぅ」
ウルウルと瞳を潤ませた麻衣は命乞いがごとく注射を拒む。
「しないと駄目です」

ジリジリとユリエが麻衣へと距離を詰め、いよいよ後がないといった様子だ。
注射を怖がり、小動物のように身を縮こまらせ怯えている麻衣の姿を見るのも面白いが、さすがに可哀想にも思えてくる。俺も気持ちは分かるだけに。
「なあ、もし流行病にかかったらどんな感じなんだ？」
今にも麻衣の腕を掴もうとしていたユリエはこちらを向き、
「あなたに分かりやすく言いますと、軽いインフルエンザみたいな症状ですが」
軽いんだったら、嫌がる奴に強引に打つこともないんじゃないか。もしかかったらその時また診てもらえばいいだろうし、と俺が麻衣に助け船を出す考えを固める。
「それだったら、無理矢理打つ必要もないんじゃないか？」
「霊はそれぐらいで済みますが、人間にも感染してしまうんです」
「マジか」
「霊と違って死ぬくらいですけど、やめますか？」
「なんだ。死ぬくらいなのか、なら――ってヤバいじゃねーか！　軽くヤバいってなもんじゃねーじゃんか！　つーか、激ヤバ！　くらいって……なに軽い症状みたいに言っちゃってんの!?　言ってんの？　人間死んだらエンドなのに。絶対打ってもらうからな！」
「元からわたくしはそのつもりですけど」
と、ユリエは麻衣へと向き直った。
俺もとりあえず麻衣へとにじり寄り追いつめる。ま、透過されるからプレッシャーかけるくらいしかできないが。
ユリエは再度麻衣の腕へと手を伸ばし――空を掴んだ。
「絶対イヤ！　注射されるくらいなら死んでやる！」
「いや、お前既に死んでるだろ」
宙に逃げた麻衣についツッコミを入れてしまう。クセみたくなってきたな。
「あっ……逃げられたじゃないですか」

いや。俺のせいと言いたげな瞳を向けないでくれ。
「別に、わるあがきにしかならんだろ」

一応だが説明しておくと、麻衣はなぜだかは本人共々知らないが地縛霊である。
この六畳間からは出られない。
つまりは、幾ら逃げようとしても狭い檻の中での無駄な抵抗と同じ事。
「大人しく打たせてください。暴れられると痛いですよ」
「暴れなくてもイタいもん」
「いい加減、観念したらどうだ麻衣」
玄関の戸に背中を押し当て、麻衣は袋の鼠になっている。開けようが開けまいが麻衣には出ることはできない。
ユリエは注射器を構えながら一歩麻衣へと近づく。
俺はその斜め後ろで息を整えながら事の成り行きを見ている。ここまで追いつめるのに数分掛かったからな。客観視したら某ネコとネズミが仲良く喧嘩するアニメだと思っただろうな。
「……ん？」
何だろうか。追いつめられて今にも針の先からワクチンを注入される未来が迫ってるというのに、麻衣の顔にはニタリと笑みを浮かんでいる。
これはどういうことだろう。諦めから出た笑みなのか、それでもここから起死回生の秘策でもあるというのか。
「何故、笑っているんです？」
ユリエも奇怪に思ったらしく、麻衣へと聞いた。
「ねー、ユウくん」
ん、どうして俺に話しかけてきたんだ怪しすぎる。
「……な、なんだ？」

「スカートめくりってしたことある？」
「は？」
唐突に訳分からん質問をしてくる。
俺は、清流の心を持って生きてきたんだ。自らそれを汚す真似はしたことがないさ。思ったことはあっても行動を起こしたことはないね。それをした勇者のおこぼれに授かり、視界に納めたことはあるが。
「変な事言って、誤魔化さないでください」
と、ユリエは更に一歩距離を詰めて、麻衣へと手を伸ばす。だが、掴まれるより早く麻衣の手が動いたのを俺は見た。
その動きはまるで女子のスカートをめくるかのように、下から上へと無駄のない小さな動きだった。
ここで言っておくが、麻衣は念力のような力で物を自在に動かしたりできるのだが、動かすには実際にそこに物があるような動作をしなければならない。
例えばボールを掴んで投げる場合は、掴む動きと、投げる動きを要する。つまりはシャドウピッチングみたいなことをすると、離れた位置のボールがその動きから生まれた運動エネルギー通りに飛ぶ。
つまり、今のスカートめくりをした動作が何を意味するかというと、
「……キャ……」
風呂場で冷たい滴でも肩に落ちたような小さな悲鳴をユリエは漏らした。
ユリエのスカートが下から風でも吹いたかのようにフワリと上へと舞い、その中身が完全に晒されている。
ここで俺の目がそこに釘付けになった言い訳をさせてもらうと、一言で伝えるならば『男の性』である。
とある登山家はいいました。
『そこに山があるから登る』のだと。
とある俺は思いました。

『そこにパンチラがあるから見る』のだと。
たとえ先に危険が潜んでいたとしても、登らずにはいられない、見ずにはいられない。何故ならそこにはロマンがあるからである。
ユリエは即座にギュッとスカートを抑えたが、確かに君のロマンは俺の心と記憶に残されせて貰いました。
ユリエは俺をギッと睨みつけ、
「……変態」
ああ。汚名は甘んじて受けよう。凝視していましたとも。
だが、命は惜しいから今し方どこからともなく取り出した金属バットの制裁からは逃げさせてもらいますが。
「死ね！」
顔を紅潮させ、死刑宣告とともにユリエは思いっきりバットを床に叩きつけた。
全くもって見事な策だよ麻衣。おかげで俺の命がより早く危険に晒されてるよ。

だが、それも一分の話だ。
怒りに狂うユリエの攻撃なぞ避けるのは容易。どうせなら、上手く攻撃を誘導して雪乃さんの部屋側の壁を壊してもらうとしますか。
俺は本気でそう思っているのさ。

『あら……壁が……』
『すみません。俺がユリエを怒らせたばっかりに』
『いえ。気にしないでください……むしろ、嬉しいです』
『え？　雪乃さん今なんか言いました？』
『何でもありません。あ、いっしょに寝ることになるんですね』
『そうですね。あ、俺は角で寝ますから安心してください』
『……よかったらいっしょに並んで寝ても……いいですよ』
『え…それじゃ雪香を挟んで川の字で寝ましょうか』
『はい。……いずれは州の字にしたいですね』

『それって……』

ここで、一つ忠告したいことがある。

妄想は時と場合と状況を考えてからするべきである。と。

例えば、糸のように神経をピンと張って大振りなバットの攻撃を避けている途中に妄想が介入すると、その神経が弛んでしまい、注意散漫になり、今にもバットが直撃しそうな状況になる、と。

一つ言い残して置くならば、先ほどの“州”についてだが、真ん中は成長した雪香で、点は三つ子だな。俺の妄想では将来は雪乃さんのような美しさになる、美人の三つ子姉妹だ。

で、もうタイムアップのようだ。

金属バットが目の前に……

数秒後、俺の意識は途絶えた。

余談だが、麻衣は無事ワクチンを打たれたようだ。

死神のお仕事（1）

秋深し　隣は何を　する人ぞ

という松尾芭蕉だったか、小林一茶だったかが残した句が頭に浮かんだ秋。

魔界荘から見える景色もすっかり色合いが変わり、どうにも言い表せない不思議な色の植物達が頭を垂れている。

さて、この句を俳人はどのような意味を込めて創ったは俺には判らないが、そのままの意味として受け取って、隣人が何をしている人かと言うと俺には分からない。

近年の近所付き合いの薄さによって判らないのではない。むしろ魔界荘住人は全員が家族のような絆があると俺は思っている。いずれは隣の住人と本当の家族に――げふんげふん。

だが、隣の住人、まずは白峰家から見てみると、一人娘である雪香は年相応の学生という身分であることは知っている。

知らないのはその親である雪乃さんだ。俺が朝バイトに行く時もたまに見送ってくれるし、夕方帰ってきてからもおいしい夕飯を用意して待っててくれる。お、こう言うと既に家族っぽい――ゴホンゴホン。

俺が休みの日も家にいるようだし、出かけた姿を見ても、少ししして買い物袋を手にさげて帰ってくる。

生活が貧窮してるわけでもなさそうだし、収入源は未だ謎に包まれている。

以前それとなく訊ねたところ『うふふ。秘密です』とニッコリ微笑んで言ってくれて、俺はときめきを覚え――あー、結局分からず終いだった。

雪乃さんは、その不思議さを着飾って美しさを増してるし、俺としても別に深い詮索はしようとは思わない。

もう一方のお隣さん。暗闇で見る滝のような長い髪を持つ、魅栗

沙羅。夜道で不意に会ったら今でも心臓が止まりそうになる雰囲気を纏う彼女が何をしているか、それは既に聞いてはいる。

それは死神だ。

死神というと、卍解やらを駆使し、次々と強敵を打ち破るバトル漫画のイメージとか、黒いノートを所持しリンゴしか食べなかったりするが、一般的には死を告げる者だろうか。

多分、魅栗さんもそういった事をしているのだろうと思っているが、実際はどうかは分からない。何故なら魅栗さんの仕事現場に立ち会ったことがないからだ。

ほら、イメージって大事だからさ。今は、暗いけど根はいい人という感じだし。わざわざ探偵紛いな尾行でもして、身の丈もある柄の先端に銀色の三日月のような刃を付けた鎌で、人の魂を切り取ってたりするのを見たりしたら、隣に殺人鬼がいるような感覚になってしまうかもしれんし。

だからさ、隣が何をしてようが、気にしなくていいんじゃないの。今の関係で満足してるし。例えばお隣さんがちょっと強面だけど気のいい人だと思ってたら、職業が外見通りそのスジの人と知ったら今後の付き合い方考えちゃうだろうし。好奇心は身を滅ぼすかもしれないからな。俺はいつも安全志向しかできない臆病者さ。

だが、それは唐突に知ることとなってしまった。

俺は風邪を引いた。

起床したときから頭痛はするし、鼻水は垂れるし、おまけに咽が痛かった。医者に見せずとも風邪だと分かる症状である。

そのことを同居人の幽霊は『夏が終わったのに風邪引くなんて……』と、晴れ渡った空を眺めながら雨が降らないかと心配したりし

て、遠回しに人を“バカ”だと伝えてくれたからハリセンで殴っといた。

つか、部屋から出られんくせに天気の心配をしてどうするんや。

――おっと、流れていないはずの浪速の血が出てしまった。

とりあえず、熱を計るため雪乃さんの部屋に行き、体温計を借りることにした。以前、風邪菌とは無縁なひきこもり生活だったし、たまの風邪症状になると体温が気になる。三十八とかいう数字になるのを見ると何故かテンションが上がったり。

で、結局雪乃さんは“人間用の”体温計は持ってなかった。

なんでも、市販品の体温計では反応しないらしいとのこと。確かに、お二人の体温は、人間ならば死後数時間経ったぐらいに低いようだからな。

ちなみにもちろんマスクは着用して行った。うつすわけにいかないし。

そして雪乃さんが病院を紹介してくれるというのを丁重にお断りし、街にある市立病院におそらくは三十九度はあると自己診断した怠い体を引きずるようにして来たわけだ。

紹介されたのが魔界病院とかだったら嫌だしな。風邪の治療と称して改造人間にされたらかなわんし。仮面ラ〇ダーみたいな変身ヒーローになったら格好いいかもしれんが、イーイー喚く雑魚キャラにされる可能性だってある。そうなったら、デパート屋上でやるようなヒーローショーしか働き口がなくなる。

診察を終え、結果は見たまんま風邪だということを医師に告げられ、既に休むことはなつきさんに伝えてあるから自宅静養するかと、病院内に併設された薬局で薬を受け取りに行こうとした時――見てしまった。

それは、このような施設にはそぐわない人物、というかモノを持っていた。一歩でも踏み入れた瞬間、警備員に止められてもおかしくはない。

だが、その人物は入り口で目を光らせる警備員の脇を何事もなく通り過ぎた。

普通なら、身の丈もある鎌を持った人物がいたら距離を取りつつその場から撤退するが、隣人という間柄だしと、

「こんにちはー。魅栗さんも風邪でもひいたんですか？」

世間話を振ってみたんだが、魅栗さんは俺なんかアウトオブ眼中と言わんばかりに無視して通り過ぎました。

「あのー、魅栗さん？」

やや不安になりつつ、もう一度声を掛けるが、振り返ることもなく黒髪を揺らしながら階段を上がっていった。

んー。このまま病室に向かうのか？　知り合いのお見舞いなのか……鎌を持って？　……まあ、悪い想像というか“仕事”をこなそうとする姿しか想像できないわけだが。

「……行って見るか」

まだお見舞いに来たという可能性が消失したわけでもないし、やっぱり死神がどんなものかという僅かな好奇心が勝っていたりする。身を滅ぼすまでは突っ込みはしないけど。

三階。幾多の病室が並ぶ階である。

俺は適度な距離を保ちつつ、魅栗さんを追ってこの階に来た。

看護士に美女をストーカーするモテない男だと思われないよう、骨折した悪友をからかい半分で見舞いに来た。という風を装いながら尾行し、一つの病室前に着いた。

どうやら個室のようだ。ネームプレートは一人分の名前を入れることしかできないみたいだし。

「……聖沢優」

ひじりさわゆう。か、性別はどちらともとれないな。女の可能性が高そうだが。

それにしても魅栗さんはこんな病室に何のようだ。個室……症状が重い？　そして魅栗さんは死神。……まさか。

「あ、また来てくれたんですね！」

病院らしい清潔感漂う白いドアの向こうから明るい声が聞こえた。魅栗さんじゃないことは確かだ。もしそうだったら、意外な一面発見てな感じだし。ここに入院してる人の声だろう。

また、ってことは以前にも来たことがあるのか。それに喜々とした声って事は、今から魂を刈りますという状況ではないようだ。単なるお見舞いと考えるのが妥当だろう。

ちょっと意外だとは思ったが、友人がいてもおかしくないだろう。

「あの、」

ふいに後ろから声を掛けられ、振り返ると白衣の天使がいた。心まで白そうな若い看護士だ。俺、何かあったらここに入院しよ。

「優ちゃんの知り合いですか？」

てっきり怪しい人物扱いされるかと思いきや、それだけで特効薬になりえそうな優しげな笑みを浮かべ聞いてきた。

「あ、いや、知り合いじゃないですが……知り合いが中に……」

まさしく、しどろもどろに俺は手を無意味にワタワタとさせながら答えた。怪しさがより増したな。

「えっと、中にいるんですか？」

「まあ、多分」

「でしたら入ります？　優ちゃんも喜ぶかと思います」

俺の返答もまたずに看護士はドアを引いて、

「調子はどう？」

言いながら病室へと入る。いいのかね俺が入っても。ま、魅栗さんに知り合いだと言ってもらえばいいか。

「あ、はい。いいで――あ、」

ベッド端に腰を掛け看護士に答えた、おそらくは（他にいないし）聖沢優が、ドア近くに立つ知らない人物（俺だ）を見つけ、小さく声をあげた。

「ドアの前にいたんだけど、知ってる人？」
看護士はチラリとこちらを見てから、聖沢さんに聞く。「知らない」と答えられるであろうことは明白で、少女の病室前にしばし立っていた怪しい人物扱いもされたくはないし、
「え、いや俺はそこの……」
と、ベッド脇に立つ黒い人物を見てハッとなった。
本当に怪しい人物というか危険な人物はそこに鎌を持ってボーっと立っていますよと言いたくなった。何故、注意しないんだ？
この病院は刃物の持ち込みオーケーなのか？
「あ、はい。知り合いです。こんにちは」
聖沢さんはそう言って、ニッコリとこちらに向かって微笑んだ。

聖沢優という少女――見た目は十代後半だろうか――は、儚げに咲く一輪の白百合と表現したくなる美しさがあった。
色素が薄い、黒と言うにはやや物足りない肩下までの髪に縁取られた顔は、癒し系にジャンル分けされるだろう、小振りな鼻と口に、ぱっちりとした瞳をしている。顔色はやや日光が足りないといった感じだな。魅栗さんよりはマシだが。
水色に丸い白がちりばめられた水玉模様のパジャマを着た身体も華奢で、ここでの生活の長さを物語るようだ。
だが、暗さというのは感じられず、看護士とのやり取りも笑顔を絶やさず、明るく会話をしていた。

簡単に病状について訊ねたりした後、
看護士はこちらを一瞥してから病室を後にしドアが閉じられるのを見て、聖沢さんは魅栗さんとその隣に立つ俺へと身体を向ける。
「あの、あなたも死神さんなんですか？」
純粋が詰まったような瞳で、そう訊ねてきた。魔界荘住人以外か

ら死神なんて言葉を聞いたのは初めてだな。
「いや、日野勇気というただの一般人だが」
そう答えると、聖沢さんは驚きを表すように、二度まばたきをして、
「そうなんですか。あ、私は聖沢優といいます。死神さんと知り合いなんですよね？」
「まあ、隣人だし知り合いといえばそうだけど、魅栗さんが死神って知ってるのか？　あと、何故俺を知り合いだと答えてくれたんだ？」
「はい。死神さんがそう言ってくれましたから。知り合いだと答えたのは、死神さんの姿は今、他の人には見えないらしいので、それが見えていた日野さんも死神だと思ったんです。すみません」
なるほど。看護士にはこの場に居た魅栗さんの姿が見えなかったと。聖沢さんの機転がなけりゃ、今頃看護士の冷めた瞳が向けられてただろう。というか、何故俺には姿を消しているらしき魅栗さんが見えるんだか。
「……魔に敏感になってきてる」
読心でもされたか、魅栗さんがそう心中で思った疑問を答えてくれた。
魔に敏感って、魔界荘住人と関わってるからか、或いはあの周辺がパワースポットのように変な気が密集しているのか、要するにそういう魔と関わることによって、俺が敏感にかぎ分けられるようになったと。何となくだが、そういうことらしいな。ファンタジー的思考だが。
「……大体合ってる」
マジで読心術を心得てんじゃなかろか、魅栗さんは。だとしたら俺の妄想が筒抜けということに……なんてこった。
ん？　待てよ。魅栗さんがステルス化してたということは、最初に魅栗さんを見かけて挨拶した場面を他人から見たら、幻覚が見えてる奴に思われたなきっと。

「えっと、ところで魅栗さんは何故ここに？　聖沢さんに死神だと伝えてるみたいですけど」

頭の片隅で一つの漢字が浮かんではいるのだが、違う答えが返ってくるとも思い、魅栗さんに聞いてみた。

しかし、その答えを返してくれたのは聖沢さんだった。

「私、あと数日で死ぬみたいなんです」

そう穏やかに言った少女は綺麗に微笑んでいた。

――死ぬみたいなんです。

聖沢さんは、そんな自分の行く先を微笑を称えて言った。

俺はどんな言葉を返したものか分からず、必死に探す。目の前に死神と名乗る美女が現れて、死を告げられて平然と認める聖沢さんは強い心を持っているのかもしれない。

俺だったら、混乱しながら、やり残した事を考えてる間にタイムリミットになりそうだ。

「――ですよね？」

と、聖沢さんは傍らに立つおそらくは自分の死期を告げた者を見上げて、確認でもするように訊く。

「……」

魅栗さんは漆黒の瞳を向けたが、言葉を発さず、首も動かさず肯定も否定もしない。

「死ぬの、怖くないのか」

こういう時、こんなありきたりな言葉しか出ない自分が恨めしい。だが、何か言わないと俺の方が悲しくなりそうだった。

「怖いですよ。――ですけど、」

と、聖沢さんは言って、胸の辺りに手を当てて、

「私、もう長くないのは分かってましたから」

悲しいのを隠すために無理に作ったように聖沢さんは微笑んだ。

「……そうか」

俺の口から出た言葉は実に弱々しかったと思う。

「そんな顔しなくていいです。私、今すごく楽しいんですから。こうして死神さんが直々に来てくれて、姿まで見せてくれたんですから」

「まあ、確かに。魅栗さんのような人が現れたらドキッとなるかもしれないな」

色んな意味で。

「はい！　私もあの時は凄く驚きました。綺麗な人だなあ……って」

俺が初めて会った時は、まずホラーチックな幽霊を見たように心臓が鼓動を早めた後、よく見たら美女だったことに気付いてさらに心臓が高鳴ったな。確か。

「というか、よく死神だと言われて信じたな」

俺も今思えば、詐欺師の格好の餌食になりそうなくらいアッサリと信じてしまったが。

「最初見たときからそうかもしれないと思っていて、死神だと告げられて、あっやっぱりそうなんだ。って、私の好きな小説に出てくる死神とそっくりでしたから」

「そっくり？」

と、俺は首を傾げてると、聖沢さんは本が幾つか並んだ棚に手を伸ばし、一冊取り出した。それにしても実にご機嫌よくニコニコとしている。死神が好きなのかね。某殺人ノート漫画もあるようだし。

「これです。似てますよね」

差し出された本を受け取り、表紙を見ると俺も読んだことがある作品だと分かった。死神が主役のライトノベル。表紙には主人公の死神が描かれ、それと魅栗さんの姿を交互に見て。

「どこがだ？」

ハッキリ言おう。見た目だけなら似て非なる者だ。表紙の死神は白を基調とした姿なのに対し、魅栗さんは黒だ。正反対だ。　横浜ベイスターズにいたローズと近鉄などにいたローズくらい、同じ死神にしても違いすぎる。

唯一似てる箇所といったら、鈍色の鎌を持ってるところぐらいか。

「確かに見た目は少し似てない部分もありますけど、雰囲気が似てるとは思いません？」

少しどころか全く似てないと返したくなったが飲み込んで、もう一度表紙を眺めてみる。やっぱり似てないな。

挿し絵でも見比べようかと、何気なく中身をパラパラ漫画のように繰ってると、ページの間から白い紙がヒラリとユラユラと舞いながら床に落ちた。

「あ、それは……」

聖沢さんが小さく声を挙げたのを聞きながら、俺は屈んでそれを拾い上げる。

拾った瞬間の手触りで分かった、白い紙に見えたそれはどうやら写真であると。腰をあげながら俺は写真ひっくり返し、それに写るのを見た。

若い夫婦らしき男女に挟まれ手を繋いでいるのは、聖沢さんを十数年幼くしたような子供。三人とも幸せを目一杯笑顔として浮かべている。背景には葉が赤や黄色に色づいた大きな一本の木が写っており、そのさらに後方には無数の木々が同じく赤や黄色の葉を纏っている。

秋の行楽で撮った家族写真。それ以外には思い浮かばない。

「すまん」

「……あ、いえ。ありがとうございます」

写真を渡すと、聖沢さんは目を細め、写真を眺め、

「昔、お父さんとお母さんで紅葉を見に行ったことがあるんです。これはその時に撮った写真で、大きな木からモミジがゆっくりと降ってきた光景が綺麗で……」

思い出を語る聖沢さんの頬に一滴の雫が伝って、白い床に水の玉を作った。

「……」

「あ、すみません……」

魅栗さんがそっとハンカチ（どこから出したかは分からん）で聖沢さんの目から流れた雫の軌跡を拭った。

「また、見たいな……」

か細い声で呟いて、病室の窓の外に広がる街並みを見る聖沢さんの姿は哀しげだった。

そんな死神と出会った少女との話を終え、俺が自宅で静養し、雪乃さんに献身的な看病をしてもらいたいという願望を思いながら寝てると、風邪の症状はだいぶ治まってきた。

弱ってきた風邪菌に止めをさしたのは、雪乃さんの栄養満点な料理だろう。

一日にて完全復活した俺を呼んだのは、意外な人物であった。

「……」

沈黙。

そこには、互いに望みもしないお見合いで二人きりになったような空気が流れていた。どちらが先に話を切り出せばいいのか分からず、互いにチラチラと視線を合わせたり反らしたりしてるうちに恋が芽生え――なんてことはあるわけがない。

そもそも、チラチラなんてしていない。ブラックホールのような瞳をずっと、真っ黒なテーブルを挟んで座る俺から離さない。

というか、呼んだのはそちらで、そちらの部屋にいるのだから、話を切り出すのはそちらからが当然の流れで、あと粗茶でも出してほしいのだがそれもない。……いや、紫色でゴボゴボ沸騰し続ける液体を出されるかもしれないし、なくていいか。

このまま見つめ合ってても、俺は一向に構わないのだが話が進まないし、

「あのう、魅栗さん。話ってなんですか？」

最初の三点リーダからして、分かっただろうが、俺を呼んだのは魅栗さんだ。

いつの間にか俺の傍に立っていて、『来て……』と言われた時は、

どこか別の場所（黄泉とか）に連れて行かれるかとも思ったが、隣室で安心した。

初めて魅栗さんの部屋へと足を踏み入れたが、無駄な物を置かない主義なのか、殺風景すぎる部屋だ。家具の色がほぼダーク系で揃えられてるのは、やはり死神的イメージカラーだからだろうかね。

しかし、普段どうやって過ごしているのか検討もつかない。瞑想するくらいしかできなさそうなのだが。

「これ」

と、魅栗さんは十分振りに口を開くと、一枚の紙切れをスーッとテーブルに滑らせ俺の目の前に差し出してきた。

「神平山」

紙に書かれた達筆な、山の名らしき文字をそのまま読んだ。ちなみにどう読むかは不明だから“かみひらやま”と読んだ。その下には近くの町らしき地名が書かれている。なんだこれ。

「……分かる？」

「へ？」

聞いたこともない山と町名だ。

「行き方」

そう聞いて数秒してなるほどと、魅栗さんが言いたいことが分かった。この山への行き方を知りたいのか。

「まあ、俺は知りませんが、調べたらすぐ分かるかと」

多分、文明の利器インターネットを介せばすぐに出てくるだろう。

「調べて」

そりゃ、魅栗さんに頼まれたらノーという言葉が出ることはないが、

「どうしてです？　よかったら理由聞かせてもらってもいいですか？」

わざわざ、初めて俺を呼んでの頼みごとだ。余程のことなのか、もしくは他の人に頼むほどではないくらいくだらない事なのか。どちらにしても理由くらい聞かせてもらう権利はあるだろう。

「写真」
何故、魅栗さんとの会話のキャッチボールは、投げられた短い言葉から伝えたい意味を考えなければならないのか。疲れる。
写真ね。……なるほど。俺をモデルにして写真を撮りたいと、背景には山がいいと、紅葉をバックに俺を撮りたいということだな。いいですよ、幾らでも付き合います。……んなわけがない。と、自分でツッコんどく。
「聖沢さんのか？」
当たりといったふうに魅栗さんは頷く。
魅栗さんと俺との関係の中で写真が登場したのは今日の一件だけだしな。俺が知り得ない所で、他に写真がどうのこうのという話があったとしても、“写真”というヒントだけでそこに行き着くには土台無理だ。
「で、その聖沢さんの持っていた写真の風景がある場所が神平山ですか」
コクリと魅栗さんは頷く。
「そこに行くんですか？」
魅栗さんはコクリと頷く。
「一人で？」
できたら俺もお供したいが。紅葉に映える美女が見たい。荷物持ちとしてでいいから是非行きたい。
そんな俺の妄想が届いたのか、顔を微振動させ、否定の意を示した。
「じゃあ……俺と……とか？」
ゴクリと生唾を飲む。思い切って聞いてしまった。いや、多分違うだろうけど。ほら、魅栗さんは何考えてるか分からんし、可能性はゼロってわけでもない。さあ、どう反応を示すか。
「できるなら」
と、淡々と魅栗さんは答えた。
……これってデートだよな？　二人きりで紅葉見物という。つ

いに俺にも春が訪れたな。秋で紅葉だが俺の心中には桜が満開だ。
「あ、いつ行きます？　まあ、俺ならいつでも大丈夫ですよ」
なつきさんなら一日、二日休んだくらいニコニコと認めてくれるだろうしな。万が一には仮病という秘策もある。
「……明日か明後日。彼女の時間はあと僅かだから」
明日かー。風邪が長引いてるという手もあるな。彼女も時間がないようだ――ん？
「……えと、誰ですか彼女って？」
「聖沢優」
「聖沢さんもいっしょに行くと？」
「そう」
いやまて、聖沢さんの時間があと僅かって……やっぱり本人が言った通りだったのか。
それで、あの写真を懐かしむように儚げな表情で見ていた余命幾ばくもない少女に、その紅葉風景を死ぬ前に今一度見せてあげたいということだろう。しかしな、
「聖沢さんは入院してるし、そもそも外出は難しいんじゃないか？」
病室でみた聖沢さんの姿を思い返す。
日陰に咲いた白百合のような華奢すぎる弱々しい身体だったし、ベッド脇には車椅子があった。院内はともかく、山へのピクニックは酷というものだろう。
「大丈夫」
魅栗さんは淡々とだが、しっかりとした口調でそう答えた。
「いや、あんまり無理な事はさせないほうが――」
「大丈夫」
もう一度、今度はやや芯の強さを感じさせながら魅栗さんは言う。
相変わらず表情は無を貫いているが、熱血主人公なら瞳に火を灯していそうだ。
まあ、魅栗さんがそう言うのならまさしく大丈夫なのだろう。任しとくことにしよう。

「分かりました。じゃ、俺は神平山への行き方を調べとけばいいんですね？」
「お願い」
そんな懇願するような黒い瞳（俺の勝手な思いこみ）で言われたら、たとえ行き先が異世界だろうと調べ上げますよ。
「けど、よくあの写真の場所の山分かりましたね。聖沢さんに聞いたんですか？」
「彼女は知らなかった。調べたのは知り合いの探偵」
魅栗さんの知り合いの探偵か。何となくだが俺にも思い当たる人物な気がする。インチキクサいわりに意外と迅速で優秀なやつが。
まあ、どうでもいいか。
さてと、俺も探偵並に迅速に行き方を調べなきゃな。その探偵、行き方も書いといてくれればいいものを詰めが甘い……いや、だったらこうして魅栗さんに頼まれることもなく、一緒に行けなかったかもしれないのか。前言撤回、ナイス探偵。
と、腰を持ち上げ部屋を後にしようとした時、
――コンコン
ドアをノックする音がした。

死神のお仕事（3）

ノックの音を聞き、俺は類人猿から人間への進化図の真ん中らへんのような中腰姿勢で、魅栗さんを見る。

「……」

目があった。

日本人形のように正座した状態から微動だにせず、魅栗さんは首だけを斜め上に向けている。

コンコンと、一回目と同じ強さのノックがなった。

出なくていいんですか？　という視線を送ってみた。声には出さない。万が一にでも居留守を使わねばならん相手だったら困るし。……ん、確か鍵は閉めてなかったし、明かりが点いてるし居留守は難しいか。

ちなみに俺の部屋も鍵を閉めていることは少ない。この辺にまで仕事に来る空き巣はいないだろし、入られたとしても取られて困る物も大して置いてない。なんなら幽霊でも持っててくれていい。それに、開けとけばいつか寝坊しそうな時に雪乃さん辺りが耳元でささやいて起こしてくれるかもしれないし。

「……」

ジー。という擬音が空耳として聞こえそうなくらい魅栗さんは俺を見続けている。

俺に応対しろと？　と、自分の顔に人差し指を向けてみた。三度目のノックが聞こえた。

「……」

もはや置物であるかのように視線は固定されたまま動かない。単にそこを動きたくないような気がしてならないが、とりあえず俺に出ろってことですか。

魅栗さんを訪ねる物好きな人物（失礼だが）に、僅かばかりの期待感を持ちつつドアへと近づき、ノブを回す。鍵はやはり開いたま

まだ。出るまで待つ、律儀な人らしいな。
「ん？　何者だ？」
ドアの先に立つ人は、俺より頭一つ分はある長身で俺を鋭い目つきで見てそう言った。
まるで仮面ライダー（近年の）の変身前のような整った顔を見て、心中で惚けながら俺は、
「……えっと、ただのお隣さんです。……はい」
実に弱々しくそう言った。切れ長の目がなんか怖かったんだ。
「そうか。失礼する」
仮面ライダー変身前さんは、手早くかつ丁寧に靴を揃えて脱いで、部屋へと上がる。
俺はどうしようかと考え、とりあえずドアを閉め部屋へと体を向けた。
「……」
目の前に立ったイケメン俳優のような男の顔に、魅栗さんは視線を微調整して合わす。
イケメンは顔にかかったサラリとした黒い前髪を手で払うという、俺がしたらどん引きされること確実な仕草を、爽やかさを感じるくらい自然と行い、
「また、対象者に姿を現したな？」
魅栗さんを見下ろしながら、爽やか仕草で男はこれまた女性受けしそうな声で不機嫌そうに言う。
「……」
「そして、既に一日期限を過ぎている」
「……」
「分かっていると思うが、我らにとって命を延ばすことは重大な過ちといってもいいことだぞ」
「……」
「あのー」
と、等身大のマネキン（正座）に話しかけてるようにも見える、

男と魅栗さんのやり取りに割り込む。
男は俺に睨むような視線をくれ、
「なんだ？」
「えっと、まずあなたは誰なんですか？」
「お前には関係ない」
冷たく言い放たれた。
「どうせ死神だとは思うが、名前くらいは聞いときたいんだが」
ズバリそうらしく、死神らしき男は一度魅栗さんを見てから、面倒くさげな嘆息を吐いて、
「零（ゼロ）。お前の言うとおり死神だ」
そう名乗った。
話を聞くため、俺はまた座布団に座り、ゼロは壁を背にして寄りかかっている。
黒いジーンズに黒いジャケットという格好で、それがモデル体型によく似合っている。やはり死神カラーは黒なんだな。
「で、何を聞きたいんだ？」
そう言われて俺はまず、
「対象者……って、もしかして聖沢さんのことなのか？」
「ああ。知ってるのか」
やはり。聖沢さんのことだったんだな。なんとなくだがそんな気はしていた。
「死神って姿見せるのは駄目なのか？」
「ああ。タブーではある。姿を見せること、正体を教えてしまうことによって死期に誤差が生じることもあるからな」
「俺は知ってるんだが」
「魅栗沙羅が隣人ならおかしくはない話だ。こいつには死神のタブーなんて問題視していない。だからこそ、人間界で暮らしてるのだ

ろうがな」
　横目で魅栗さんを見て、ゼロはニヤリと笑みを浮かべる。死神といっても誰もが無表情を信条としているわけではないらしい。
「ところで、一日期限が過ぎてるということは、聖沢さんは――」
「本来なら昨日死んでいた。問題児な死神が延ばさなければな」
　言われて、魅栗さんを見ると描写するまでもなく同じ姿勢のままだ。もしかしたら目を開けたまま寝てるんじゃなかろうか。「だけど、今日会った限りじゃ聖沢さんは元気そうだったが」
　昨日亡くなっていたかもしれないなんて、死を司るヤツから聞かされたとしても信じられない話だが。まあ、俺はコイツを信じてるわけじゃないが。魅栗さんからなら信じるが。
「容体が急変して――となるはずだったからな。で、」
　と、ゼロは切れ味鋭い横目で魅栗さんを見る。
「今回は何をしたいんだ？　ただ無意味に命を長らえさせてるわけじゃないんだろう？」
“今回”ってことは以前にも、同じようなことをしてたということか。死神の異端児なのかね魅栗さんは。しかし、長らえさせる力があるんなら聖沢さんには長生きしていてほしいが。
「それは無理な話だな。本来死ぬべき命を死神が持つ力で無理矢理引き延ばしているに過ぎない。せいぜい長くて一週間が限界だ。車なら僅かなガソリンを継ぎ足したようなモノだ」
　なるほど。車の比喩はいらんが、魅栗さんにはそうした理由があるってことか。引き延ばす理由が。そりゃ、生きたいと思う人なら生きてる時間は少しでも長い方がいいのだろうとも思うが、一週間は一生から比べると僅かな時間だし、死神のタブーを犯してまでそうするには理由があると。
「彼女には心残りがある」
　ようやく、置物と化していた魅栗さんが口を開いた。
「なんだ？」
　ゼロは眉をクイッとあげる。一動作ごとになんでも様になる野郎

だ。
「思い出の場所」
「どこだそれは？」
「……」
答えず、魅栗さんは俺を見る。ここでパスですか。言うなら答えまで行ってほしいんだが。言葉のエコを実践してるのか？
「紅葉……ですよね？」
やや不安げに俺は言った。自信はわりとあったが、自信ありげに答えて万が一にも『なに言ってんのこいつ』みたいな冷たい視線が返されたら嫌だし。
「そう」
「それが心残りというわけか」
魅栗さんは首肯する。
ゼロは、ふう……と諦めたようなため息を吐き、
「じゃ、その心残りとやらを解消したら送ってくれ」
と、壁から背中を放し、ゼロは玄関へと向かう。靴を履きドアを開ける前にこちらを振り返り、意味ありげな目付きで魅栗さんを一瞥し、ドアを開けて出て行った。
俺は魅栗さんを見て、
「……えっと、大丈夫なんですか？」
魅栗さんは僅かに顔を動かしこちらに向けただけで何も答えない。言葉が足りなかったか。
「ほら、タブーだとか言ってましたけど……」
「大丈夫」
淡々と魅栗さんは答えた。
うんまあ、そう言うのなら大丈夫なんだろう。もし、死神をクビにでもなったりしたら、新たな職として占い師でも勧めてみるか似合いそうだし。カップルの行く末でも、世界の終わりでも表情を変えずに淡々と伝えそうだ。
「そうですか。じゃあ俺は明日に備えて行き方調べておきます」

言って、よっせいこらせと立ち上がる。

「ありがとう」

魅栗さんからの感謝の言葉を受け取り、俺は部屋を後にした。

死神のお仕事（4）

その日は絶好の山登り日和と言える快晴であった。
天気予報じゃ降水確率は三十パーセントで、曇りマークだったが、この青空を見る限りだと、雨より鳥のフンのほうが降ってくる確率が高そうだし、曇りマークじゃなく、晴れマークしか必要ないくらい太陽だけが空に煌々と輝いている。
これも死神の力かとも考えたが、さすがに天候まで自由に操れるほどの完璧超人じゃないだろうし、単に天気予報がものの見事に外れただけだろう。

イケメンな死神ゼロが去った後、大至急俺は寡黙な死神、魅栗沙羅から頼まれた、神平山への行き方を調べた。
調べた。といっても検索サイトに【神平山】と打って、それで解った場所への経路を時刻表と睨めっこして調べた程度だが。
所要時間は一時間も掛からなかった。
荒木さんの部屋に、パソコンも時刻表あったしな。
で、明朝、魅栗さんに結果を伝えると明日行くことに決まった。
一週間は命の火が持つみたいだとはいえ、早い方がいいということだろう。突風が吹いて火が消えてしまう可能性がないとも限らない。

聖沢さんと会ってから二日後の朝。
つまりは聖沢さんが死ぬ予定の日から三日過ぎた日。
俺は待ち合わせした駅前に向かっている。
時刻はまだ十分に余裕がある。人を待たせるような時間にルーズ

な人間じゃないさ。五分前行動を常に心がけてる。
今日はとくに、人生日誌に見開き二ページに渡り書き込まれるであろう、記念すべき日だ。何たって美女と美少女と共に紅葉見物だからな。この一大イベントを無碍にするわけがない。もしもしたなら、もったない大魔神でも出てきてしまうだろう。
念には念を入れて早起きをして、三十分前には着きそうなペースだ。
『すいません待たせてしまって』
『……』
『いや、俺も今来たとこさ』
という理想の待ち合わせ会話を実行することができる。
――そう思ってたんだが。
こちらに気付いたか、控えめに手を振る華奢な人と、傍らに棒立ちする黒い人は、視力にさほど自信がない俺でも誰だか分かる。
聖沢さんと、魅栗さんである。
「すみません。待たせてしまって」
と、駅舎前で待っていた二人に駆け寄ってまずは謝る。
「いえ、私達も今来たところですし、まだ待ち合わせ時間より前ですよ」
病室で会ったときと変わらぬ柔らかな微笑みを浮かべ聖沢さんは言った。
「身体、大丈夫なのか？」
しっかりと立ってるし、血色も心なしか良くなってる。魅栗さんの力を疑う訳じゃないが、一昨日の今日だし気にはなる。
「はい。全然だいじょぶです！　死神さんのおかげです。ほら、この通り――」
クルリと聖沢さんはバレリーナみたくその場で回転して見せ……、
「キャ……」

ふらりとバランスを崩し、倒れそうになった華奢な身体を、魅栗さんが背中に手を差しだして支える。
「すみません。あ、ありがとうございます」
恥ずかしげに魅栗さんの顔を見上げ聖沢さんは礼を述べた。頬を朱に染めながら。
……俺、邪魔じゃないかね？
「まあ、とにかく無理はしないようにな」
「はい。あ、」
と、聖沢さんは小走りで立ち位置を変え、俺と魅栗さんの目の前から二、三歩距離を取り、こちらに向き直る。
「えっと、その、私のために……って言うとなんか偉そうですけど……あの紅葉の場所を調べてくれて、そしてつれてってまで頂けて……今日はよろしくお願いします」
深々と頭を下げる聖沢さん。なんていい娘やねん。
「気にしないで」
いつも通り淡々と言う魅栗さん。俺も頷き、
「ああ。俺も小旅行は好きだしな」
――この二人と行けるとなると俺のほうが頭を下げたいくらいだ。むしろ、そんな特権がないと小旅行なんて行く気にはならないね。俺は根っからのインドア派だし。休日はゲームでもしているに限り。
と、本音が口からでかかったがゴクリと飲み込んだ。
顔を上げた聖沢さんは、
「ありがとうございます」
潤ませた瞳で綺麗に笑ってみせた。

心地よい揺れと、リズムを奏でながら進む電車。
人も疎らな電車内で聖沢さんは、実に嬉しそうに語った。
今朝方、魅栗さんが病室に来て鎌を一振りすると異変は起こった。

パァーと光って、フワーンって体が軽くなって、ドドーンってなって、そしたら体が十七歳の健康な少女になっていたと。（聖沢優談）

……ドドーンって爆発でもしたのか？　或いは太鼓とか。

それから、着替えさせられると、突然魅栗さんにお姫様抱っこをされ、窓から飛び降りて病院を抜け出したと。（ちなみに病室は三階）

その経験を聖沢さんは、まるでヒーローのようでしたと魅栗さんのことを、白馬の王子様に出会ったように、頬をリンゴ色に染めながら言っていた。

どうせなら、俺がその役をやりたかったが……いや、やめとこう。三階の窓から飛び降りは無理だ。

で、お姫様と白馬の王子様ならぬ黒衣の死神は、二人仲良く駅へと向かいながら、聖沢さんは思い出の景色を見に行く旨を聞いたそうだ。

そんな話を喜々として聖沢さんが語り終えたタイミングで駅へと停車し、乗り換えて更に目的地へと向かう。

車窓から見える景色からは徐々に人工物の割合が減っていき、秋色に染まった芝生と、遠くに見える赤や黄色に色づいた山々が、見事な田舎風景を創っている。

そんな景色の中を真っ直ぐに、時には緩やかに曲がりながら、ガタゴトと振動を尻に響かせながら、急ぐことを知らない鈍行列車は走る。

ボックス席で対面に座る聖沢さんはその景色を、もの珍しそうに息で窓が曇るくらいに顔を近づけて眺めている。

病室から見えるのは、敷地内に造られた手入れが行き届いた僅かな緑と、遠くには町並みが見えるくらいだろうしな。

聖沢さんの隣に座る魅栗さんも、何を思って見てるかは読みとれはしないが、首だけを窓側に向けている。

俺はその二人を眺めている。景色をみるよりは有意義だ。
「あ、日野さん」
そう言って聖沢さんはこちらを向き直り、
「これから行く山ですけど、どんな場所なんですか？」
「覚えてないのか？」
聖沢さんの表情が僅かに陰る。
「……はい。ほとんどよく覚えてないんです。昔の事ですし…。写真の場所のことは今でも鮮明に思い出せるんですけど……」
仕方ない話だな。あの写真に写っていた幼い聖沢さんは、見たところ五、六歳といった可愛い妖精みたいな姿だったし。その光景にたどり着くまでの記憶が薄れているのも無理はない。
「私、あの……高い山だったりしたら、ちゃんと行けるかどうか……」
聖沢さんは実に不安げな瞳を俺に向ける。
「それなら大丈夫だ」
と、俺は安心させるよう強く言った。
神平山は、その町にある小学校低学年での遠足コースになるくらいの、手頃な山である。と、一昨日調べて分かった。
今の時期になると紅葉見物の穴場らしく、観光客もちらほら訪れたりするスポットとのことだ。
「そうなんですか。あ、……けど、ちゃんと用意したほうがよかったんじゃないですか？」
「そんな不安にならなくていいって。散歩みたいなものだと思ってくれればいいさ」
ちなみに聖沢さんの服装は、良家のお嬢様が、紅葉を眺めにいくような（実際眺めにいくようなものだが）秋ファッションといった装いだ。ついでに伝えておくと魅栗さんはいつもの黒のワンピースである。
「はい。安心しました、ありがとうございます」
聖沢さんは柔らかな笑みを浮かべ、胸をなで下ろして景色を見る。

その横顔からは死を告げられた怖さというものを窺い知ることはできない。

まあ、言った通り散歩みたいなものだろうし、万が一の可能性も万能そうな死神が無くしてくれるだろう。

そうなると益々、俺は付いてきてよかったのかと疑問に思うが、確か魅栗さんに是非ともいっしょに来てほしいと懇願されたような記憶もあるし、いいのだろう。

だが、もし聖沢さんが疲れた様子を見せたなら俺がおぶって運ぶ役割を申し出ることにしよう。無理はさせられないからな。あとで、疲れたら我慢するなということを伝えておくか。

乗り換えてから一時間ほどで、駅に着いて神平山を目指して、歩き出す。

「この辺り……見たことあるような気がします」

周りの風景を見渡しながら聖沢さんは言う。俺も周囲を見渡す。

周りは既に稲が刈り取られ、役目を終えたかかしが寂しげに立つ田んぼしかない。その間に一本の道路が真っ直ぐに伸びている。

駅前の方は、見渡せばまばらながらも人の姿を確認できたが、少し山の方へと向かうと、人の姿は格段に減った。

遮蔽物がなく遠くまで見渡せるが、人らしき影が全く確認できない。空から見渡したら俺ら三人が歩く姿がすぐに発見できるだろう。

あくまでも徒歩の人が見えないというだけ、先ほど何台か俺たちの横を、スピード違反気味であろう車が通り過ぎていってはいる。ほとんどが赤く色づく山の方へと向かっているし、俺たちと同じく紅葉を見に来たのだろう。

「聖沢さんは、この辺に住んでいたのか？」

「いえ。この辺りには、」

と、聖沢さんは思い出すように一度視線を上に向けてから、

「確か、ドライブで来たんです。お父さんが田舎風景が好きで、休みの日にはよく連れてかれました」
聖沢さんは前を向き、思い出と今見てる風景を重ね合わせてるのだろうか、顔を綻ばせている。そして続ける。
「あの頃は、はっきりいって嫌だと感じてました。
何もない田舎道をただ走って、お土産店とか見たりしてるだけでしたし、私にはつまらないだけでした。どこに行ったかは覚えてませんけど、つまらなかったことだけは凄く心に残ってます」
苦笑して、さらに聖沢さんは続ける。
「けど、唯一楽しかった思い出が、あの写真の場所なんです。凄く綺麗な場所で幻想的で……とにかく楽しかったのをよく覚えています」
思い出語りを終えた聖沢さんは、ふと我に返ってまた苦笑いを浮かべる。
「あ……、すみません。興味ありませんよね」
心底申し訳なさそうな表情になる聖沢さんに、俺は即座に首を振り、
「いや、全然構わないが。そもそも最初に話振ったの俺だし。魅栗さんも気にしてませんよね？」
駅から一言も声を聞いていない死神はコクンと頷く。
「ええ」
「……ありがとうございます」
聖沢さん、涙声になってないか。目を潤ませているかは、前を向いたから分からないが。
「そんな綺麗な場所なら何度か来たりしてたりしたのか？」
俺はこの何気ない言葉を発したことを後悔した。
「いえ、その時だけです。この数ヶ月後、父が亡くなりましたから」
時間が止まった気がした。
一秒あったかくらいの沈黙だったが長く感じた。そして、俺の口からはありきたりな言葉しかでなかった。

「……悪い」
「あ、気にしないでください。こういう時謝られるのが一番困るんですよっ」
聖沢さんは明るく言いこちらを向いて、にっこりと笑って見せる。
俺は危うく二度目の『悪い』が出掛かったが、
「そっか。じゃ、今回が二度目なんだな」
「はい。十……二年ぶりになりますね。凄く楽しみです。あ、それと日野さん、私のことは呼び捨てにして構いませんよ」
「じゃ、優、でいいか？」
ちょっと馴れ馴れしいかと思いつつ冒険してみた。
「じゃあ私は勇気さんって呼びますね」
クスッと微笑んで、聖沢さんは小走りで山へと駆けだした。

「……強い」

そんな魅栗さんの呟きを聞きながら、俺も後を追った。

死神のお仕事（5）

神平山の麓は、さすが穴場の紅葉スポットらしく、心ばかりの駐車スペースとプレハブの建物があった。パタパタと小さく風にはためくのぼりを見るとどうやら土産店のようである。

「あのお土産屋、キーホルダーとおいしくないお饅頭くらいしか置いてなかったんですよ」

ポンと右のパーを左のグーで叩いて古典的な動作と共に『思い出しました』と、優が土産店を指して言い、その時の不満を表すように口を尖らせる。

確かにこんな田舎町でなおかつ観光客もまばらな穴場だ、そこまで気合い入れて商売するつもりはないのだろう。“根性”とでも彫られた紅葉と無関係なキーホルダーや、安っぽい紅白饅頭に紅葉型の焼き印でも押した手抜き饅頭が目に浮かぶ。

「とりあえずお饅頭を買って、食べたんですけど、……もうおいしくないのなんの、って口を揃えて文句言ったんですよ。でも、それもそれで楽しかったのを思い出しました」

「じゃ、また買って食べるか？」

俺の提案に優は首を振る。

「いえ、もう食べたくないです。ホントにおいしくないんですよ」

観光地価格が適用されている自販機の飲み物での小休止をして、一路山へと入った。

道はしっかりと整備されており、頂上までは労せずに着けそうだ。

道の左右には葉が赤や黄色に色づいた木々が生い茂っており、吹く風によって時折ヒラヒラと舞い降りては落ち葉の絨毯の一部と化していく。

木々の間をすり抜けるそよ風が秋の匂いを運ぶ。おいしい空気だと何となくわかる。

魅栗さんと優は横に並び、背が高い魅栗さんが優に歩調を合わせてゆっくりと歩く。会話は少な目に、互いに景色を眺めながら先に進む。

俺は一歩引いた位置で、まるで芸術品のように景色に映える二人を記憶へと収めている。携帯電話のカメラを使い納めてもいいが、それは後にしておくか。

「その写真の場所、どの辺りなのかは分かるのか？」

俺が聞くと、優は立ち止まり、クルリとこちらを振り返る。魅栗さんはこちらに顔だけを向ける。

優は周囲を見渡してから、

「それが……よく覚えてないんです。ツマらないと思ってましたし、確か母に手を引かれながら、前を歩く父の背中を追っていただけでしたから。すみません」

申し訳なさそうに優は頭を下げる。

「いや、気にしなくていい。とりあえず頂上目指してみてみるか」

「はい」

さすが小学生の遠足コースということもあり、三十分も掛からないであろううちに、頂上へと到着した。

「……違うようだな」

俺が言うと、前屈みで息を整えている優が、息を吐くような疲れた声で「はい」と答えた。

魅栗さんの力を持ってしても、体力は並までは回復しなかったようで、優は途中から疲れを見せ始め、俺がおぶろうかと聞いたが気丈に笑顔を振る舞い断られ、ここまで一人の力で歩いてきた。

その苦労が報われたかは俺が言った通りだ。

写真と見比べるまでもない。頂上に広がる光景は優の思い出とは異なっていた。

頂上は円形に拓けており、囲むように紅葉を纏う木々があった。来た道を振り返ると、町を一望でき、枯れた色をした田んぼと、駅舎が遠くに小さく見えた。

写真にあった、一際目立つ大きな木はどこにも見あたらない。どの木々も平等に似たような高さだ。

「とりあえず、あそこで休むか」

俺は中央に二つ並んで設けられた木の椅子とテーブルを指した。

頂上の空気は一段と心地良く、三百六十度に広がる秋色の世界を見渡せば、俺の鈍い感性でも素晴らしく綺麗だとため息が出るばかりだ。

一度この絶景を見たら、ここが観光スポットになるのも大いに頷ける。

こうして頂上に来た人は、丸太で作られた木製の椅子とテーブルに着いて景色を見て、心と身体を休めてから山を下るのか。すれ違った観光客らしき人の足取りも軽やかだったな。

頂上には自販機やゴミ箱もなく人工物は極力削られており、自然を満喫できるように配慮されているみたいだ。観光客のマナーもいいようでゴミはざっと見渡しても見あたらない。

しかし、感嘆から出るため息じゃなく、落胆から出るため息を吐くのがテーブルを挟んで向かいに座る優だ。

俺が持参してきた水筒から、紙コップに注いだ麦茶に視線を落とし、景色は蚊帳の外といった様子で俯いたままだ。

体力不足の身体に無理させて頂上まで登りきったが、思い出に色濃く残っているだろう風景はなし。落ち込むのも分かるのだが、優はせっかく付き合ってくれた俺たちにも申し訳ない気持ちがあるよ

うだ。
　別に気にしなくていい――というのを言葉で伝えてもいいが、優の気持ちを僅かに安らげることしかできなさそうだ。
　俺は腹の虫的にも昼だと告げているしと、背負ってきて、今は足下に置いてあるリュックから二段重ねの四角い箱を取り出してテーブルに置いた。
　トン、と漆塗りの重箱を置いた音を聞き、優は僅かに顔を上げる。優の隣に座る魅栗さんの黒い瞳もそれを見る。
　俺はやや得意げな表情をし、
「まずは腹ごなししないか？」
　言って、フタを取る。
　一段目には、唐揚げやら玉子焼き、ポテトサラダにタコさんウインナー。と、子供が見たら目を輝かせてヨダレを垂らしそうなおかずの数々が詰まっていた。
　優も「おいしそう……」と呟いている。
　更におかずの段を持ち上げると、その下にはサンドイッチがお目見えした。具はタマゴにツナにポテトサラダ（またか）、その他と種類も豊富だ。中央の仕切り板から向こう側には、おにぎりが並んでいる。恐らくはこちらも中身の具材のバリエーションは豊かそうだ。
「さ、召し上がれ」
「あの……いいんですか？」
　と、優は上目遣いで聞いてきた。
「もちろん。遠慮はしなくていい。お隣さんが『みなさんでどうぞ』と作ってくれたんだしな。味は三ツ星を保証する」
　この行楽にはピッタリなお弁当は雪乃さんの手作りだ。ここに行く旨を伝えたら今朝方持たせてくれたものだ。その優しさには涙が溢れてくる。
「……ッ！」

玉子焼きを口に含んだ瞬間、優は目を見開いて、数秒間時が止まっているようであった。

これが料理下手なヒロイン作のお弁当ならば、あまりの不味さに『……』しか言えないパターンだが、これは雪乃さん作である。万が一にもソレはない。逆だ。あまりにも――

「……あの、甘くて……なんていうか、凄く美味しいです」

先程の沈んだ面もちから一転、幸せ溢れる笑みを浮かべて優が感想を述べた。

雪乃さんの料理はいわば、筆舌に尽くしがたい（無論良い意味でだ）味だ。料理マンガなら口に入れた瞬間、別世界に旅だってしまうような。

言葉を失ってしまう雪乃さん手作り弁当を、元々言葉数の少ない死神も盛んに箸でおかずを口に運んでいる。表情は変わらないが美味しいからに決まっている。

俺も飽きが永久にこない、雪乃さんの手料理を味わおうと、唐揚げをモグモグと咀嚼する。美味い。

「……」

雪乃さんの愛に溢れた料理に舌鼓を打ち、目を閉じて美味の世界に旅立ってから、ふと優を見ると一口かじったサンドイッチを持ったまま、難問クロスワードを前にしているかのような、何かを真剣に悩んでいる表情をしていた。

ここは声を掛けようか。『はい』『いいえ』の二択を真剣に悩んでいると、優の肩に白磁のような美しい手が置かれた。

「あ……」

吐息のような声を漏らし、優はその手の主に顔を向けた。

手の主は優を見て無言で小首を傾げてみせる。

俺には分かった。優を見る魅栗さんの表情には心配が僅かばかり浮かんでいると。見た目は付き合いの浅い人には相変わらずの無表情にしか見えないだろう極小さな変化だが。

「あ、はい。大丈夫です」

優にも魅栗さんの気持ちが伝わったかそう答えて微笑む。
「……」
魅栗さんはまばたきを一つする。
「いえ。大したことじゃないです。少し思い出したというか……」
あれ？　会話の脈絡が見えない。誰か優に何か言ったか？　少なくとも俺の口はおにぎり（中身は梅）を食べてモグモグと動かしていたからないが。
ただ優と魅栗さんが視線を交わしているだけだったはず……。まさか、目と目で通じ合っているとか？　もしくはテレパシー？
まあ、いいか。話進めよ。
「何を思い出したんだ？」
「……ここでこんな風に休憩して、帰り道なんですけど、その途中で父が横道……獣道みたいなところを進んでいったんです。その先に写真の場所があったような……多分ですけど」
懸命に記憶の糸を手繰っているようで、優はしきりに視線を景色や斜め上に動かしながら言った。
「道理で見つからないわけか。じゃ、休憩したら下りながら探すか」
優はサンドイッチを持った手を振り、
「あ、でも……はっきりとした記憶じゃないですし……迷ったりするかもしれませんし……」
確かに山をなめたらいけないとは言うが。
「小さな山だし心配しなくていいと思うが。まだ明るいし、いざとなったら携帯もある」
と、優を安心させることを言ってから携帯を確認するとアンテナは三本立っていた。電波状況は良好のようだ。
それに文明の利器よりも頼りになりそうな存在が優の隣にいるし。心配は皆無だろう。
「……でも、どの辺りだったかも思い出せませんし……時間掛かってしまうと思います」
どうにも優は他人に気つかう性格のようだ。だが、今は何よりも

自分のことを優先すべきだ。
「気にすんな。俺もその風景を見てみたいし、絶対に見つけてやる」
いざとなったら、俺のクモの糸のように細い人脈を使ってでも見つける腹積もりだ。少ないが頼りになる人達だ。
「…あの、……いいんですか？」
不安げに上目遣いで優はおずおずと聞いてくる。
俺は力強く頷いた。
次に優は魅栗さんに顔を向けると、コクッと魅栗さんも頷く。
「ありがとうございます」
優は瞳を潤ませそう言った。

死神のお仕事（6）

頂上での休憩を終え、せっかくだしと雪乃さんへの土産に景色をデジタルカメラに納め、山を下ることとなった。ちなみに荒木さんから借りたカメラだ。

下山する、といってもこのまま駅まで行って『良い景色だったな』とか電車内で談笑するのはまだ尚早だ。

もしこのまま一気に下りたとして、落胆を隠して微笑みを作るであろう優に、俺はどんな言葉を掛ければいいか分からない。

だから考えなくて済むように、何としても優の思い出を見つけだして本当の笑顔を眺めながら帰りたい。

俺たちは現在来た道をゆっくり戻っている。

まるで宝の地図に記された秘密の通路を探すように視線をしきりに動かしながらだ。

端から見たら少しばかり怪しげな集団に見えないだろうか。葉が色づいてる上じゃなく、主に膝丈くらいまである草むらを眺めているからな。

優の記憶によると獣道を抜けた先らしいし、注意深く見ていけばなんらかのヒントがあるはずだ。草が妙にうなだれていたりとかな。

幾ら携帯の電波が入るといっても、無闇に草むらをかき分けて探すよりは可能性が高いだろう。万が一にも遭難したら困るしな。魅栗さんと優は何となくそうなっても大丈夫そうだが、俺は自力で何とかしなければいけなさそうだし。

「なんか目印でもあればいいんだけどな」

“こちら隠れ紅葉スポット”とでも書かれた矢印看板とか。こうも左右が同じような景色ばかりだとどこから入ればいいか分からん。

「目印ですか……お父さんもそういうのがあったから入っていったんだと思いますけど…」

道の端を木々の隙間を覗きながら歩く優が俺の呟きに答えてくれ

た。

……そういや、魅栗さんが依頼したという探偵はあの写真からここだと判ったんだよな。だったら探偵に聞けばいいんじゃないか……しまった。番号知らない。最終手段にしておくか。

――その時、ふいに風が吹き抜けた。

唐突の強風により木々の葉ががさがさと騒がしくなり、落ち葉が舞う。優も乱れる髪を手でおさえている。

すぐに風は治まり、元の静かな風景が戻った。

晴天で風は穏やかだったのにな。山の天候は変わりやすいというが。

魅栗さんの方は大丈夫かと、あの長身痩躯が吹き飛ばされてやしないかと心配になり後方に首を向けると、

「……魅栗さん？」

長い黒髪を一切乱した形跡がない死神が道の脇へと瞳を向けて棒立ちしていた。別に驚きはしないさ。魅栗さんがいつの間にか前方百メートル先にいてもおかしいとは思わないし、強風対策シールドを展開していたとしてもおかしくはない。

「何かありました？」

テテテと優が魅栗さんに駆け寄っていき、

「あ！」

と、魅栗さんと同じ方向を見て驚きの声を出した。なんだろうか。ツチノコでも見つけたのか。

「……おお」

俺もため息を吐くように驚きの声を漏らした。

魅栗さんの向いている方向。そこは草むらが木々の隙間を埋めるように広がっていたのだが……その草がまるでバイクでも通ったかのようにペシャンコになっていた。

「……獣道？」

優はそれを見ながらつぶやいた。
確かに獣道なのか判断しがたいな。狼がここを頻繁に通っていたとしてもここまではならないだろう。人為的な匂いもする気がする。というより、俺が先程見たときは草はピンピンしていた気がするのは俺の記憶違いか？
「行ってみるか？」
俺は二人に、特に魅栗さんに判断を仰ぐように聞いた。この御方ならベテラン裁判長よりも的確な採決を下してくれる。
魅栗さんは数秒黙してから、草むらに足を踏み入れた。その先に求める場所があると考えていいんですね。信頼していますよ。
「……」
優を見ると、胸に手を当て呼吸を整えていた。堅い表情だ。この先にあるかもしれないと思って緊張しているのか、膨らむ期待を抑えているのか。
「行くか」
俺は手を前に出す。
「はい」
頷いて優は俺の方を見ずに死神の黒い背中を追った。
差し出してみたこの手はどうしようか。はぐれたら危険だと思ったんだが。俺はやり場のない手で頭を掻きながら二人を追った。

草がうなだれてできた道は、木々を避けるように蛇行しながら、奥へ奥へと続いていた。
これはもはや動物の仕業ではないと断言できる。動物がこうも綺麗なS字を描くように草を踏み固められたなら、それは新種で結構な知性を持っていることだろう。九九なら答えられるくらいの。
誰が犯人かは分からないが、はてさて先には何が待っているか。まあ、落とし穴くらいなら笑ってやれる。あからさまな誘いに乗っ

かったわけだし自業自得だ。ここでもっとも腹立たしいのは途中で道が途切れるパターンだな。何もなく引き返すだけというのは時間の浪費でしかない。

そして歩くこと体感的に二十分くらい。

草が敷き詰められた道を辿り無事にゴールへとたどり着いた。

褒美は眼前に用意されていた。

拓けられたその空間は、色づいた木々によって円形に囲まれていて、その中心には大きな木がどっしりとした存在感で立っていた。その周りに木々はなく、まるで木が放つ威圧感で恐縮して離れているようにも見える。

「はぁ……」

その木を視界に入れて優と俺は感嘆していた。魅栗さんも黒い瞳で木を見つめている。

一言で表すなら幻想的。

鮮やかな紅葉を枝に纏う一際大きな木。土が見えないくらいに敷き詰められた落ち葉の絨毯。拓けている場所のためか、空からの陽光がこの空間を照らし出し、紅と黄色のコントラストをより鮮明に際立たせている。

この場所を映画製作会社にリークしたら確実にワンシーンに使われるだろう。しないが。

「ここです……」

優は感極まった声を発し、ふわりとした一歩を踏み出した。

「あの時の場所です」

言わずとも分かる。写真を見比べるまでもない。ここが優の思い出の場所。また訪れたかった場所だ。

落ち葉を踏みしめながらゆっくりと一歩一歩、優は木に近づいていき幹に手を触れ、木を見上げ柔和に微笑んだ。

俺に絵心があったなら是非ともイーゼルを立てキャンバスを置いて描きたいが、生憎絵に自信は全くない。幼稚園児並だという自信

はある。
「あの風、魅栗さんがやったんですか？」
隣に立つ死神に訊いてみた。
ここにたどり着く起点となった一筋の風。偶然とはあまりにも言い難い。
「私ではない」
濁すようにに無言でも貫くかと思いきや、淡々と魅栗さんは答え、こちらを大仰な動作と声で呼ぶ優へと向かっていく。
魅栗さんじゃないとすると他に誰がいるんだ、という疑問はこの際気にしないことにする。
偶然でも、誰かの仕業でもこうして目的は果たせたんだ。結果良ければ全て良しというやつだ。
俺も優へと駆け寄っていった。

それから、思い出の風景の中で満面の笑みを浮かべる優と、隣で等身大パネルのように変化のない無表情の魅栗さんとのツーショットを写真に納めた。
休憩がてら、地表を押し退け地面を這うぶっとい木の根に腰を落ち着けて、しばし歓談。
優はここの思い出だけは色濃く残っているらしく、再び訪れたことでより鮮明になったのか饒舌に語ってくれた。
ここの風景に両親と一緒に感動したこと。
木をバックに写真に納めようとしたが、三脚もなく、ツーショットの写真しか撮れなかったこと。
交代して写真撮っていると、綺麗なお姉さんが現れて写真を撮ってくれると言ってくれてこと。
そのお姉さんを紅葉のお姉ちゃんと呼んで楽しく会話したこと。
それらの話をする優の表情が喜びに満ち溢れていて、俺にも当時

の優の気持ちが伝わってくる。家族との温かい思い出。
「また来れてよかったです」
優は大木を見上げながら郷愁に浸るように優しく言った。
「……本当に」
葉がふれ合うような声量でそう呟いて、優の表情に儚さが滲んだように見えた。
優はここに来れるのはもうないと確信しているのだろう。明確な日付と時刻はおそらくは伝えてないと思うが、死神と名乗る者が現れたんだ。信じてしまえば命が短いと悟る。わざわざ数年前に来ることもないだろうし。
俺は命があと数日でも気丈に笑顔を絶やさない優にこの言葉がついて出た。
「来年も来てみないか？　今度はここで弁当でも食べて本格的なピクニック気分で。今度はもっと大勢で。魅栗さんももちろん行きますよね？」
言って、魅栗さんを見る。肯定も否定もなく黒い瞳を俺へと向けているだけだ。
優も俺を見ていて、口を結び悲壮感溢れる表情をしていて、顔を背けると下を向いた。
「……そんなこと言わないでください」
絞り出したような震えた声を優は発した。
肩も小刻みに震わせていて、心配するように魅栗さんが優の小さな肩にそっと白い手を添える。
繊細な髪が横顔を隠していて窺えないが、それだけで優が泣いていると知るには十分足りえる情報だった。そして俺の言葉が優をそうさせたことも。
優のカレンダーには来年――いや今月すら――がない。それを自覚している優に対し、勝手に来年の秋に予定が書き込まれたらどう思う？
俺は大馬鹿だ。優の気持ちを一ミリたりとも分かってなかった。

その結果がこれだ。俺は優を泣かした。
「……お二人とも優しいですよね」
か細い声でそう言い、優は顔をあげた。
魅栗さんを見て、俺を見て、遠くの木々を見ながら優しく笑みを創った。目元の雫を華奢な指で拭い、
「そんなこと言われたら、死にたくないって思っちゃうじゃないですか」
優は、赤くなりはじめてきた空を眺める。
「私は長い間病院のベッドで過ごしてきて、いつかこのまま出られずに死んじゃうんだろうなって思ってました。けれど、それは仕方ないことで、それが私の運命だからって割り切ることにしてきました」
優は瞳だけ悲しそうに潤ませ、
「本当は凄く怖かったし、このまま何もなく死んじゃうのかと思うと、なんてツマらない人生なんだろうって……寂しくて悲しくて結構泣いちゃってました」
優は魅栗さんに顔を向け、
「死神さんが現れたのもそんな夜でした。月明かりで凄く幻想的に見えて、涙を指先で拭ってくれたんです」
できたらその役は俺に譲って欲しかった。言ってくれたら駆けつけたのにな。
「それから、死神だということ、私の命があと僅かだということを聞かされました。……でも不思議と怖くはなかったんです」
どうしてだ？　という疑問を汲み取ったかのように優は潤んだ瞳で遠くを見ながら、
「私は死神が出てくる物語が好きです。でもそれは架空のお話で、実際にはいないって分かってたつもりです。ですけど、心のどこかには死神さんが私の前に現れて死を運んでくれるかもって思ってたんです。……それが実際にあって、怖さより嬉しさが勝ったんだと思います」

優は一度区切るように森の空気を吸い込んで吐いた。
「それからは清々しい……みたいな感じで過ごせました。勇気さんと会って、この場所まで連れて行ってくれるって死神さんから聞いた時、私は今一番幸せなのかもって感じました。……最期にこの景色を目一杯観ておこうって……観たら綺麗に死ねるんだろうなって……」
ピタッ。と小さく音がした。
優の膝の上に置かれた手。その甲に滴が落ちる音。堰を切ったように滴が優の白い頬を伝っては落ちていく。
ハンカチはないかとポケットを探ったがなかった。家を出るときにチェックしとくんだった。いや、そもそも家にすらなかった。
「あ……ありが……グスッ……とうございます」
吐息のような声を漏らし優は涙声で言った。
しなやかな白い指先で優の目からこぼれる水玉をすくい取り、魅栗さんは無表情をほんの少しだけ柔らかくした顔を優に向けている。
俺には似合わないやり方だな。魅栗さんだからこそ絵になる。悔しいが俺はここは入り込んでいい空気じゃないな。

「私……今、死にたくないって思ってます」
膝の上に置かれた優の手が小刻みに震えていた。
「このまま、生きて、もっと死神さんといっしょに過ごしてみたいです……」
震えを抑えるためか優はギュッと手に力を込める。ここで俺は？と聞くほど俺は空気の読めない人間ではない。
「……今になって死ぬのが凄く怖い……」
寒さに凍えるかのように優の肩は小刻み震えている。
「……死にたくない」
優は心の奥底から絞り出したかのような細く小さな声で、はっきりとそう言った。
優の生きたいという気持ち。それを聞いて俺はどこか安心してい

た。死ぬのを受け入れているみたいに振る舞う優。だが、本当は誰しもが怖いに決まっている。その心を見せてくれたからかもしれない。

俺は自然に一度目を閉じ深呼吸をしていた。心を落ち着かせて、掛ける言葉を見つけだし、目を開けた。

――俺の目に映ったのは

優が胸に手をあて苦痛に顔を歪めている姿だった。

その時の俺の脳内はパニックだったことを先に言い訳しておく。

「大丈夫か！？」

想像しえない痛みに苦しむ優に対し俺が掛けた言葉がこれだ。この様子を見たらあまりにも不適切。

「……ハァハァ」

優の呼吸が荒い。胸を押さえ体をくの字にして必死に痛みを堪えている。

俺はまず何をすべきかと考えようとするが、脳が働かず、ただただ呆然としかできないでいた。

「……」

そんな情けない俺に対し魅栗さんは違った。

今にも地面に倒れそうに前に傾き掛けた優の体を支え、優しく背中をさする。優の表情が僅かだが安らいだ。

と、魅栗さんと目が合った。

「お願い」

真剣な瞳でそう言われた。

「えっと……」

「優を支えてて」

初めて魅栗さんが自分以外の人の名前を口にしたのを聞いたが、今はどうでもいいことで、言うとおりにする。

すると、魅栗さんは立ち上がり俺たちから距離を取った。五歩くらいだろうか。

そして手を横に払うと、弧を描いた刃が鈍色に輝く鎌を手にしていた。柄はかなり長く、魅栗さんの背丈くらいある大きな鎌だ。

まるで手品のように一瞬に出現したが、タネは普通のマジシャンが仕込むようなものではないだろう。

魅栗さんはその鎌を軽々と振り、切っ先でXを描いた。ヒュンと

風を切る音が聞こえただけだ。いったい何をするつもりだろうか。
一瞬ではあるがここで優の魂を――などと不安が過ぎったが、先ほどの行動と真剣な瞳を見てそれはないとすぐに確信する。俺ができることは限られてるし、ここは魅栗さんに任せるしかない。
魅栗さんは柄の中ほどを持って水平に構える。目を閉じて数秒。集中しているように見えた。
そして目を開けると、鎌を回しだした。風車が回るかのようにゆったりとした速さ。それでも先端には切れ味のよさそうな刃があるためうかつに近づいたらスッパリだな。
その回転速度を保ち、二十回転くらいしただろうか、見てるうちに俺の視界がぐらりと揺らいできた。催眠術とかでよくある揺れる五円玉を見てると眠くなってくる――そんな感じにも思えた。
まるで陽炎のように魅栗さんの姿が揺らいで見え、挙げ句に鎌の円を描く軌道にそって不可思議な模様まで見えてきた。
雨上がりの晴れた日に水溜まりに浮かぶ油のような、それが円形に広がって宙にあり、そこから先の景色が見えない。その模様はなだらかに波打っており、ただの変な絵じゃないことが分かる。
透明度もないため当然、魅栗さんの姿もすっぽりと覆い隠されて見えなくなってしまっている。
これは俺の目の錯覚ではないな。魅栗さんが何かしたと考えるが妥当だ。無意味に鎌を回転させるわけがない。
出現した円の横から魅栗さんが現れ、こちらへと歩いてくる。鎌は持っておらず、表情には疲れた様子もない。
「えっと、あれはなんなんですか？」
「ホール」
訊ねると優の前にしゃがみながら淡々と答えてくれた。なるほど。意味が分からない。確かに穴にも見えなくもないが、後で詳しく聞くとするか。今は優が最優先だ。
魅栗さんは優の腰に手を回すと、軽々と持ち上げお姫様抱っこをする。いったい細い体のどこにそんな力があるとかは今更疑問には

思わない。
抱き上げられた優の容体はだいぶまずいと素人目にも見て取れた。額には脂汗が滲み、おそらくは意識も混濁しているだろう。
今から下山して病院に着くまでの時間を計算したら、助かる確率は低いと思える。だが、それを無視できるのが魅栗さんだと俺は思っている。
やはり、魅栗さんは“ホール”へと向かっていき、躊躇うことなくその中へと消えていった。俺の推測だとあの円の向こう側は病院だ。ワープみたいなものだな多分。
危険がないのは魅栗さんと優が入っていったことで証明されたし俺も後を追うことにした――

「あふん」

我ながら変な声を発したことが恥ずかしい。
ええと、説明させていただきますと俺はホールに入ろうと、時をかける少女が時空を越えるかのごとく軽く飛び跳ねて入ろうとした瞬間、消えたんです。ホールが。擬音にするとパッ！　です。
むろん、俺の体がホールへと消えていくこともなく、時を遡ることもなく、勢い余った俺は落ち葉へとヘッドスライディングをすることとなりました。変な声がでました。以上。

立ち上がり落ち葉を払って俺は周囲を確認する。
三百六十度綺麗な紅葉風景が広がっているだけだ。中央に位置する大きな木の紅葉は一段と美しい。
その絶景の中に、つい先ほどまであった場にそぐわぬおかしな模様はなかった。
ポツン。
俺は一人取り残されたらしい。
「いやー、酷いなあ魅栗さんは。自分だけさっさと入っていって、

すぐにアレを消してしまうなんてさ。ホント酷い話だよなー、アハハハハ……」

……さてと、どうするか。

とりあえず冷静に考えようともう一度根っこに腰を落とした。

まあ、魅栗さんも優のことが精一杯だったんだと思う。あのホールとかやつは作り出した魅栗さんが通って少ししたら消滅する仕組みと考える。

きっと優のことが落ち着いたらまた迎えに戻ってきてくれる。俺は魅栗さんを信じてここでしばらく待つか……ん？

今、後ろの方で音がしたなかったか。枯れ葉を踏んだ感じのパリッといった音だった気がする。

……まあ、小動物の類だろうね。リスかなあ。

もう一度聞こえた。心なしかさっきより近い気が。いやいや熊はない。出没注意の看板も見あたらなかったし、こんなピクニック気分で登れる山にいるわけがない。

……けど、確かに更に近くでまた聞こえた。

野犬か？　チワワ辺りなら可愛いだろうが、獰猛で牙をむき出しに威嚇するような犬だったら……いやいやいや、それもない。野犬に注意の看板も見あたらなかったし、きっとリスかキツネ辺りだろう。

「あのう」

「……え？」

背後から人の声がしたような。俺ら以外にもここに来れた人がいたのか？　と、俺は慎重に振り向いた。

大きな木の隣には妙齢の女性がいた。

目が合うと穏やかな笑みを浮かべた。

「精霊？」

大きな木の幹に背中を預けて座った女性は自らを山の精霊と名乗った。

「あ、聖域の霊と書いて聖霊。勘違いさせてしまいませんでした？」

「……ああ。だけど、どう違うんです？」

「自然の力を司るのが精霊で、聖域を護るのが聖霊になります。力の差は歴然としてますが」

山の聖霊は苦笑する。精霊の力の方が強いということか。確かに自然を操るというのは凄いしな。光とか氷とかマグマとか。

「じゃあ、この山って聖域……というやつなのか？」

だとしたら、何かしらの罰とか待ってないだろうな。聖なる場所を犯した報いとか。

「聖域……なのかは分かりません。ですけど、この山を護るのがわたくしの一族が代々担ってきた使命です」

俺は景色に目を移した。

誰もが心洗われる光景で、護られてきたというのも納得できる。

視線を山の聖霊の胸元に戻す。

着ている服は、楓やイチョウの葉が散りばめられた和服。それだけなら、自室の金食い虫幽霊の普段着――というか着替える必要がない――だから見慣れてはいるのだが、デザインがやや扇情的というか胸元の辺りが開いている。

山の聖霊の胸も山だった。自室のペタンコ幽霊とは雲泥の差の膨らみがあり、その二つの山の間には谷ができている。

優のことも心配ではあるが、男のさがのせいで目がどうしてもそちらにチラリと向いてしまう。

「えと、山の聖霊。決まりとかはよくは分からないけど、聖霊ってそう簡単に人前に姿を見せてもいいものなんですか？」

胸元から視線を上にあげ顔に固定する。あまり見過ぎるのはイメージダウン必至だ。

「紅葉（もみじ）」

質問の答えとしては意味不明だ。

「わたくしの事はそう呼んでくれると嬉しいです。以前、ある女の子から貰った名前です」

温かさを感じさせる微笑を湛えながら紅葉さんは言った。ある女の子に、俺は一人の顔が脳裏に浮かんだ。

「もしかして、優の言っていた……」

紅葉のお姉ちゃん。優が初めてここに来たときに家族三人を写真におさめてくれた女性。

「ええ。あなた方の会話は聞いてました。わたくしのことを覚えていてくれて嬉しかった。姿を見せたのは、あなたなら大丈夫かと思ったからです。死神と知り合いみたいですし驚くこともないと」

まあ、確かに天使や魔王と知り合いで、今更聖霊と出会ったぐらいじゃ「へえ、そういうのもいたんだ」ぐらいにしか思わなくなったな。

「昔の優に姿を見せたのはどうしてだ？」

紅葉さんは朱に染まりつつある空を見上げ、懐かしむように遠い目をして、

「困っていましたから。交代で写真を撮ってる時、優さんは寂しそうでしたから。素敵な笑顔を浮かべてほしくて、それでつい……」

優の素敵な笑顔か。確かに優の微笑みは俺にしたらモナリザより価値がある。だが、話を聞いていた限り山登り最中の優は楽しいとは感じてなかったはず、ここに来るまでは。たどり着いたのは偶然か？　いや、

「だから、ここに導いたと」

確信を持って言える。幼少の頃のプリティーな優と、今の清楚な優をここに来れるように仕向けたのは、

「そうです。わたくしがここへと導きました。この山に訪れてくれたのに、それをつまらない思い出にはさせたくありませんから」

「今日は何故です？」

紅葉さんは悲しげな表情を俺に向け、

「死神がいっしょにいたので分かりました。彼女の命が僅かだと。

あなた方の会話からここに来たいのだと聞いて……それが理由です」
「もしかしたら俺の方が死神の対象だったかもしれないだろ？」
どこから俺たちの話を聞いてたかは分からないが、少なくとも駅から降りて、ここに来るまでの間、命に関することは話してなかったはずだ。
「死神が気に掛けてたのは優さんでしたから。あなたの方は全く気にしてなかったみたいですし」
納得できるが、したくない。
「変わった死神だと思います。普通、死神というのは対象者の魂を黙々と運ぶだけだと聞いていましたので」
「その通りみたいですよ」
タブーを何度も侵していると別の死神も言っていた。
「そういう死神もいるんですね。優しい死神も。彼女の命はあとどれくらいですか？」
「四日らしい」
「そうですか」
悲しさはあまり感じない柔らかな声で言うと、紅葉さんは立ち上がり、傍の幹に手を充てる。
「死神の死期の予言は的確だと聞きます。だからこそ死神は魂をさまよわせることなく導くことができる。
ですけど、生命というのは不思議なものです。この木もそう。一度枯れかけたこともありましたが、今はこんなにも美しい葉を毎年いっぱいに纏ってます。
生きたいと……そう言って泣いていた彼女ならきっと大丈夫です」
紅葉さんは美しく色づいた葉を眺め、まるで母親のような温かな微笑みを浮かべていた。

死神のお仕事（8）

優と魅栗さんと紅葉見物に行った日から四日が過ぎた。
不慣れな山登りで筋肉痛になっていた足も癒えてきたし、そろそろ真面目に働いてもいいかもしれないな。三神さんにどやされるのも飽きてきた頃だ。
だけど、今日はその前に寄るところがある。多分、そこには死神もいるだろう。

隠れ紅葉スポットでそこへの案内人こと山の聖霊である紅葉さんの話を聞いているうちに空は朱く染まりきっていた。
時間を確認しようと携帯を開くと、小一時間が経っていた。しかし、魅栗さんが戻ってくる気配はなく、このままだと日も暮れて夜の山で紅葉さんと二人きりといういろいろと危ない想像をしてしまい、俺は山を下りることにした。
紅葉さんの麓まで案内してくれるという申し出をありがたく受け入れ、並んで歩く紅葉さんに俺は言葉じゃ言い表せない感動を覚えた。
歩くたび、お胸揺れるよ、ぽよぽよと。
などと五七五が浮かぶくらいにだ。
この胸が紅葉さんを聖霊たる存在とさせているんだと勝手な解釈をしつつ、俺はいつか後生にその感動を伝えようと心に決めつつ凝視する。
天使さんにだったら命がけな行動も、紅葉さんは『なんですか？』と小首を傾げるくらいで済んだから俺は遠慮なく見ていた。
バチが当たったんだろう。土に埋まっていた漬け物石には最適そうな石につまずいて俺は盛大に転んだ。

痛かったが自業自得であり、心配してくれる紅葉さんに空元気を見せつけ、日が地平線に半分鎮まった頃、麓に到着。
桜の季節もいいと勧められ、絶対行くと約束して俺は帰宅の途に着いた。
その日は慣れない山登りに身体の節々が悲鳴を上げていたし、優のことも気に掛かってはいたが、明日にして寝ることにした。

一週間前に訪れたばかりの病院。
優の病室の前。
そこで、一旦深呼吸する。脳裏に浮かぶ微笑みが待っているのを期待してノックをした。
「あ、はい」
そよ風のような涼しげな声が返ってきたのを確認し、ドアを開ける。
一歩病室に踏み入り、一週間前と同じようにベッド端に腰掛ける聖沢優に、片手を挙げて軽い挨拶をした。
そして優は一週間前と同様に丁寧な挨拶を返して微笑んだ。違うのはその顔に初対面という反応がなかったことくらいだ。
「調子はどうだ?」
背もたれのない丸イスを優の前に持ってきて座りつつ聞く。見た様子だとこれも一週間前と変わりはないように思える。
「良いですよ。あ、紅葉の時と比べたら全然ですけど」
優は言って苦笑する。
「あの時はすみませんでした」
眉尻を下げ申し訳なさそうに頭を下げる。あの場所でのことを言ってるのか。むしろ、慌てるだけだった俺の方が謝りたい。
「気にしなくいい。ま、あの時は驚いたけど」
周りを見渡すが死神の姿はないな。来てないのか。

「あ、死神さんならついさっき帰りました」
聞きたいこともあっただけに残念だが、優と二人きりの空間になれたしそれはそれでナイスだ魅栗さん。
「何か言ってたりしたのか？」
優は知らないのだろうが、死期の延長期限は今日になっていると別の死神が言っていた。まだ日付が変わるまであるとはいえ何もなく帰るというのは疑問が残る。単なる見舞いの可能性も捨てきれないが。
優は嬉しいような、困ったような表情になり、少し言いよどむ仕草をしてから、
「間違いだった……みたいです」
「間違い？」
「そうみたいです。さっきそれだけ言われて……私もよく分からなかったんですけど……」
そう言い、優の顔に安堵しているといった笑みが浮かぶ。
「私、まだ死なないみたいです」
それだけ伝えられてすぐに居なくなったと優は付け足し、照れたように小指で頬を掻く。
本当に間違いなのかは俺には分からない。
だが、死なないと魅栗さんが言ったのなら本当にそうなのだろう。
たった二言、淡々と優に告げる黒い美女の姿が目に浮かぶ。
「よかったな」
魅栗さんに倣うわけでもないが、俺も短く言った。
「はい。……本当によかったです」
優はしんみりとした声になり、瞳を潤ませて俯く。
「これで、また来年も行けそうだな」
俺の言葉に優は少し顔をあげ、何のことかといいたげな表情を一瞬したが、すぐに思い当たったようで、
「そうですね。来年の秋になったら……また一緒に行ってくれますか？」

「もちろん」
即答する以外に選択肢はない。
来年の秋のスケジュールは真っ白にしておくし、万が一予定があったとしても俺はその記憶を無くすこともいとわないさ。
「ありがとうございます」

優の春の陽気のように麗らかな微笑みを、いつでも呼び起こせるように脳裏に保存してる最中に、病院の入り口前の道路脇に見覚えのある顔を見てしまった。
「よう」
俺を視認し、仏頂面を張り付かせそいつは片手を挙げる。今日はこの前と違い、ファッション誌から出てきたように、カジュアルな服を見事に着こなしている。
いったい俺に何の用があるのかと気にも掛かったが、今は優の笑顔を焼き付けることの方が大事だから俺は無視して通り過ぎた。
「奇跡」
背後で何か言っている。俺は歩く速度を緩めた。『無視かよ！』というツッコミがこの場面だと適切な反応だと思うが、死神はひと味違うみたいだな。
「人間にはそれが起こってしまう。困ったもんだ」
俺は立ち止まる。振り返ってはいないが、声からして本気で困ってるという感じはなく、恐らくはキザな笑みでも浮かべていると思う。
「そうか」
「その奇跡を起こしたのは間違いなくアイツだ。また余計なことをしやがった」
魅栗さんをアイツと呼びやがった同業者は吐き捨てるように言い、

舌打ちをする。
「おかげで聖沢優の運命は大きく変わってしまった」
「大きく？」
その言葉が気になり俺は振り返る。
死神ゼロはやはり表情に困った色はなく、僅かに唇の端をもたげた微笑を作っている。優のとは質が違う癒し効果は皆無な笑みだ。
「僅か一週間――いや、既に消えていたはずの命が――具体的には言えないが、大きく延びてしまったな。残念でならないな」
言って、ゼロは肩をすくめる。そう思ってるならそれらしい顔をしろ。本当にそうならな。
「そりゃ、残念だな」
「まあな。ま、こっちの評価に傷が付く訳じゃないしどうでもいいことでもあるがな。落ちるのはアイツの方だ」
「評価とか気にしないんじゃないか？」
ゼロはフッと鼻で笑い、
「よく分かってんな。ところで――」
急に真剣な表情になる。どんな顔になろうが異性を虜にできる顔っていいよな。……カッコいいな。この顔なら異性どころか……
「――奇跡についてどう思う？」
なんだその問いは。
俺は具体的な答えのある問いも苦手だが、抽象的な答えしかできない問いに答えるのも苦手だ。だから、
「よく分からん」
首を振ってそう答えた。お前の話に真面目に付き合う気はあまりない。
適当な答えに不機嫌面になるかと思いきや、ゼロは予め返答を用意していたようで、スラスラと言った。
「自分で起こすもの。今回もそうだ。聖沢優自身が奇跡を起こした。アイツはその手助けをしているに過ぎない」

死神ゼロは言いたいことは言ったのか、これからデートだとかぬかしてさっさと立ち去っていった。

何やらプライベートでこちらに来たついでに優の様子を見に来たようだ。俺には関係ないとか言いつつ、以外と気にしていたようだな。……ツンデレなのか？

それにしてもデートとはな。俺のイメージだと『女？　興味ない』とか言いそうだったが、それはそれで腹立たしい。

とりあえずデート中バナナの皮でも踏んでコケるよう念を送りながら、バイト先までの道すがら奴の言葉を思い返してみる。

――これからデートだ。

……おっと、この台詞じゃない。しれっと言う姿が実に憎らしい。コケた後側溝にでも足を突っ込めばいいのに。

――自分で起こすもの。

それがゼロの思う奇跡。

優は自ら運命を変えた。

死神が告げた“死”を“生きたい”という気持ちで乗り越えた。

そう考えていいのか。

だが、優は死を受け入れようとしていた。自分に言い聞かせるように本心を隠して死んでもいいと思っていたと言った。

けど、あの場所で優は死にたくないと泣いた。それが奇跡を引き起こしたのかもしれないな。

魅栗さんは奇跡を起こすキッカケを作ってあげたくて優を連れ出した。生きたいという強い想いを引き出すために。

――まだ、生きていたいって思ったんです。

これは下山途中で紅葉さんが語ってくれた話だ。とある老樹の話だった。

枯れかけだった大木が、山を庭のように駆けずり回る子供達の笑顔を失わないためにまた緑を取り戻した。

『もう春になって葉を咲き乱す生命力もなくて、わたくしも見守ることしかできなかったのですが……子供達が、この木を秘密の隠れ家にして楽しんでいた子供達が、葉が少なくなった木を眺めて、一様に寂しい顔をしていたのです。その後でした木に変化があったのは毎日少しずつですけど、葉が生えて、夏に入る頃には枝が隠れるくらいに葉を纏っていました。

まだ生きていたいと思ったんですきっと。子供達のためにも。生きていたいと思う力は運命にも負けません。

だから――優さんも大丈夫です』

生きていたいと思う力……か。熱さを加えたら松岡〇造的な精神論のような言葉になりそうだが、悪くない。

とにかく優は生きている。奇跡でもなんでもいい。要は結果だ。それが良い結果になってるなら理由はいらない。

「今日はちゃんと働いてよね」

魔界カフェに着いて早々、挨拶より先に三神さんのキツいお言葉を授かった。

それは脳内でツンデレに変換するとして、俺はカウンター席へと歩み寄った。

「間違いだったんですか？」

冗談っぽく魅栗さんに声を掛ける。

「……」

魅栗さんは何も答えずにブラックコーヒーに口を付けている。

「感謝してましたよ。以前より調子よくなったって。これも観に行

ったおかげですかね？」
コトッと白いカップを置き、
「そう」
短く言った。
俺は優にあの場所を見せ、こうなること――奇跡――を予測していたのか聞きたかったのだが、
「無駄話してないでさっさと働きなさいよ。今日はお客さん多いんだから」
三神さんに手首を強く握られ無理矢理引き離されたため、聞きそびれてしまった。
半ば引きずられながら、俺は見た。魅栗さんの横顔が柔らかに微笑んだのを。
良い結果があれば、理由はいらない。再び思う。

「ま、いいか」

俺は呟き、今日は八十パーセントの力で頑張るかと動き出した。

天使と見習い悪魔（1）

俺がバイトをしている魔界カフェには様々な種族の客がよく訪れる。

ああ間違ってない。人種でも職種でもなく種族だ。エルフやら妖精やらウサミミが頭にひっついた男やらを他にどう表せばいい？ひっくるめて魔界人でもいいかもしれないが。

ちなみに妖精といっても手の平にちょこんと乗るような愛くるしい大きさではなく、人間大だった。けれども童顔な可愛らしい少女で、アイドルに対してファンがなんとかの妖精とか呼ぶようなそんな感じにも思えた。

透き通るような薄手のヒラヒラした服の背中から生える、トンボの羽根に銀の粒子をまぶしたような綺麗な小さな羽根を見なければ、俺も本人が本物の妖精だと言い張ってもアイドル（電波系）なのだと疑ってただろうね。

ウサミミ男はノーコメント。まあ、その種族は女ならまさしく付け耳ではない本物のバニーガールなのだろうが……生物の繁栄には雌雄が基本不可欠であり、もし女性しかいない夢のような種族だったらそれは夢であり今日まで存在してはないだろう。雌雄があってこその世界なのはどこも変わらないらしい。

だが、心のどこかでは落胆した気持ちがあったのを今でも覚えている。

そういう一見しただけで普通ならば人間なのかと首を傾げたくなる連中に対し、おそらくは魔界が実在していることを知らない純日本人である三神さんはどういう反応をしているかというと、

『ここって変な人多いよね』

と、実にアッサリしたことを言っていただけで特に深くは気にしてないようであった。

店長が店長でもあるし、多少の容姿のおかしな部分には耐性がで

きてるかもしれないな。
　というより、『客』じゃなく『人』としたのは俺も変人にカテゴライズされてるのかと不安になるのは、考えすぎだろう。

　そんな前フリを置いて、平日の昼間の店内には現在一組の客しかいない。なので流れる穏やかな癒し系ＢＧＭよりも会話の方が嫌でも耳に入ってくる。
「天使をブチノメして、ふんじばって、連れてくことでしょ！？」
「ベシル……少し物騒じゃない…かな？　それに、僕は……そういうのはあんまり……」
　語気を荒くして怒鳴るように言うベシルとやらに対し、気の弱そうな少年の方は耳を澄ませなければ聞こえない声量で精一杯の意見を述べている。狭い店内だから聞こえてはいるが。
　いかにも気の強そうな顔立ちをしてるのは年齢十代後半くらいの少女で、テーブルを挟んだその正面でヘビと対峙したカエルのように猫背気味にオドオドとしているのは、少女より一、二歳は若いであろう少年だ。
　二人とも格好こそ年相応なこっちの世界に合う私服だが、双方とも銀髪に紅い目をしており肌も不気味なくらいに白さが際だっている。
　染色したとは到底思えない銀だし、カラーコンタクトの線もないと思わせる見事な真紅。魔界人だろうね九分九厘。
……魔界の存在を認識してから俺の常識はどうにも浸食されつつあるね。一度医者に看てもらおうかな。
『隣人は死神で下の階には魔王と天使が住んでます。あと部屋には幽霊がいまして――』
　……うん。頭のおかしな人だ。
　ちなみに先ほどの二人の会話を少し戻すと『アタシたちの目的はなに？』と少女が確認するように聞いて、少年がしどろもどろに言いにくそうにしてるのを見て――という流れだ。力関係が垣間見え

るやり取りだ。
「なにルシル？　アンタ、今更やっぱやめますとでも言う気なわけ？　ここまできといて」
「僕は……無理矢理連れてこら……」
ルシルと呼ばれた少年の言葉を遮るようにテーブルを少女が強く叩く。その音にルシルは臆病な小動物のように体が硬直させる。
「そんな六月みたいなウジウジした考え方しかできないから、アンタはいつまでも見習い悪魔のままなのよ！」
ルシルの顔を指さしながらベシルは言う。悪魔だったのか。悪いの？
「悪事は特に働きませんがー、悪魔は魔王さんの支配下から離れて、魔界の中で独自の世界を構築している種族ですー」
と、なつきさんが説明してくれた。榊さんが魔界全土を収めているわけじゃなかったのか。あちらにも色々とあるんだな。
「……でも、わざわざこんなことをしなくても、地道に頑張れば……立派な悪魔に……」
ルシルは床に呟くように俯き加減で言うが、
「今はそんな時代じゃないのは分かってるでしょ！　実力主義なのよ全ては実力で決まるの。誰もが愕然とする結果を見せないと悪魔のトップクラスどころか、一生見習いのまま！　相撲だったらずっと幕下みたいなもの。アンタはそれでいいわけ？」
何故、国技で例えたんだろうか。悪魔の流行りなのか。というか昨今を見てると国技と呼んでいいのかは疑問だが。
「僕は別にこのままでも……」
ベシルはため息を吐き、冷めた瞳を向け、
「バカルシル。アンタには出世欲がないの？」
「……」
僅かにだがルシルは頷いたように見えた。元々俯き加減だったからわかりにくいが。
「ま、いいわ。今日は根暗なアンタにも手柄を分けてあげようと思

って連れてきたわけだし。幼なじみとして特別よ。……特別」

最後に付け加えるように小声で特別といいながら顔を背けるベシルの仕草に、俺の萌えセンサーが反応を示した。

これはツンデレだ。気弱な幼なじみに素直になれずついキツい言葉を浴びせてしまう。さらには弟を心配する姉的な要素も入ってるなコレは。

ツンデレ幼なじみ。オーソドックスではあるがそれ故にポイントは安定している。いいね。グッジョブ。

ちなみに俺の萌え得点でトップに君臨して未だ落ちないのは無論なつきさんに決まっている。萌えの宝物庫で未だに俺は萌えまくっている。そこに慣れなんて言葉はない。いつか、なつきさんの萌え要素を書物にして後生に伝えようと考えている。

「？　勇気さん？　どうしました？」

くっ……キョトンとしながらウグイスのように小首を傾げる仕草を完璧にかつ自然にやってのけるとは。頭の二対の猫耳のピクリとした動きもパーフェクト。

なつきさんには幼なじみツンデレなぞ足下にも及ばない。殿堂入りも視野に入れとく必要があるな。他が可哀想だ。

「……でも、やっぱり天使を捕らえるのはマズいんじゃ……それに見習い程度の僕らじゃ力不足だと思うし」

「それはあくまでも階級の話。実力はアンタはともかくアタシは中級悪魔くらいはあるわよ……多分。それにアタシたちが狙う天使ってのはね、来る前に言ったけど」

あくまでも――というのが悪魔に掛かってるのかという疑問はさておき、ベシルは黒い羽根の絵が散りばめられた柄のポシェットから一枚の写真を取りだした。

「コイツ、天使だけどこっちで暮らしてることは言ったわよね」

ルシルはコクンと頷く。

「天界の方から役目放っぽりだしてこっちに来たことも覚えてる？」

「うん。両親が天界じゃ高貴な家系……だったよね」

天使と聞いて、思い当たるツンとした顔が浮かんでいたがボヤケてきた。高貴なイメージとはほど遠い中身だし。というか天界とは何ですか？　なつきさん。

「天使も悪魔と同じように、魔界の中で独立した世界を築いているんですー。空の上にあるので天界と呼ばれてるんですよー。結界が張ってあって天使しか行き来できない世界なんですよ」

なるほど。魔界には天使の暮らす天界と悪魔の暮らす悪魔界（仮）があるということか。

ベシルは写真をテーブルに置き、

「そ。で、コイツねどうやら家出してて天界の方じゃ困ってるみたい。何度か連れ戻しに来たみたいだけど返り討ちにしてるんだってさ」

「……うん」

「だから、ひっ捕らえるわけ」

「……けど、難しいんじゃ……」

「返り討ちしてるってことは結構な強さってことだけど、考えても見なさい。つまりはコイツを捕らえればアタシの強さの証明になるわけ。実力を示せば昇進間違いなしってわけよ！」

輝かしい笑顔でベシルはルシルにグッと立てた親指を突きつける。二人のテンションに差が開きすぎてるんだが。

「それに天使をブッ倒せるいい機会だし」

そう言ってクリームソーダを手に取りストローを使わずにベシルは豪快に飲み干し、

「おかわり！」

と、空のグラスを呼び鈴のように揺らしながらこっちを向いて要求してきた。ちなみにベシルは既にランチを食べ終わり、ルシルの方はパスタをゆっくりと口に運んでいて、まだ残っている。

「どうぞ」

自画自賛したくなるくらい手慣れた優雅な動作でクリームソーダを置き、ついでにテーブルの写真を見る。

俺の頭に浮かんでいた通りの人物がそこに写っていた。まるで免許証の写真のような仏頂面。だが、それでも一瞬で男のハートを貫いてしまうであろう美貌がありありと伝わってくる。

俺は何食わぬ動きでテーブルから離れ、イメージする。うーん、高貴と言われたらそうなのかもしれない。俺の高貴イメージは語尾に“～～ですわ”なキャラを真っ先に想像するが、いつも他者を見下すような冷めた瞳をして近寄りがたい雰囲気を醸しだしてるのも高貴かもしれないか。

しかし、私生活のだらしなさを垣間見たことがあるし高貴と言われるとやはり首を傾げたくならざるをえない。ボロアパートに住んでるしな。

家出してるとか言ってたが、それはあり得るかもしれない。高貴な家の厳しいしきたりが嫌になって――なら納得できる。誰かに縛られたりとか嫌いそうだし。俺の見る天使さんは自由奔放なイメージだ。

「じゃ、さっさと行って待ち伏せするわよ」

ベシルはソーダを一気に流し込み、空のグラスを置くと、立ち上がりながらルシルに言った。

「え、まだ残ってるし……それに待ち伏せって？」

「言葉通りの意味に決まってるでしょ。予め隠れて帰りを待って、油断してるスキを突くわけ」

「……それって卑怯じゃ……」

「は？　別に正々堂々の果たし合いってわけじゃないのよ？　どんな方法だろうと勝てばいいの。勝てば。じゃ、いくわよ」

と、ベシルは強引にルシルの腕を引っ張って店を後にしようとする。

「いや、ちょっと待て」

俺は静止の声を掛けた。

「なに？」

ベシルは入り口近くで足を止めて振り向き、俺に睨むような視線

をくれる。首をホールドされてるルシルが助けを求めるような瞳で見ているが無視。

「このまま出て行くつもりじゃないだ…ですよね？」

危うく敬語を忘れる所だった。お客様には丁寧な言葉遣いを――だ。守らなかったらなつきさんに優しく注意されるからな。それも悪くないが。

「それがなに？」

あれだけ注目させるように大声で話していて、このまま出て行かせるほど俺の目は曇っちゃいない。

だが、まだ店から出てないなら客だ。雪乃さんには全く及ばないが、俺はできるかぎりのやんわりとした微笑を作り言った。

「お会計がまだですよ」

「忘れていたわ」

ベシルはあっけらかんと言って、ルシルを背を小突いてこちらに差し出す。

なんだ？　金がないからそいつをこき使ってくれとかか。悪いが人手は足りているし、それに、ルシルの容姿からしていわゆるジャ〇ーズ好きな方々から人気が出そうだし、俺の影が薄くなる。よって不要だ。

「……あの、おいくらですか？」

なるほど。こいつが払うのか。

将来的に尻に敷かれる映像しか見えない。

俺は淡々と飲食代を告げた。

茜空を背景に赤トンボが横切った。

そんな風情ある情景を見上げながらの帰り道。俺はいつものように今日の夕食を予想する。

秋だからサンマとかかな。鮭は三日前にあったしな。　脂の乗った焼きサンマに大根おろしをのせて醤油を垂らす……想像しただけで涎が出てきた。地面に垂れた。

だがまあ、雪乃さんの作る料理に外れはないどころか全て大当たりだから何が出てきても涎ダラダラだ。

そんな雪乃さんが隣人という俺は何という幸せ者だろうか。望んでも易々と手に入らない環境を俺は手にしてしまっている。

この幸せを誰かに分けてあげたいが、生憎俺は引っ越す予定はない。もし、そうなることがあるならば、それは雪乃さんが引っ越す時かもしれない。無論、俺も隣に引っ越す。ストーカー？　いや、許可は得るつもりだ。問題はない。

もしくは雪乃さんの部屋に引っ越す可能性も待っていなくはないか。今も半ば同棲ともいえなくもないような気がしないでもないし。寝る場所もいっしょになってもいい頃合いじゃなかろうか……

「……ないな」

今の所の関係性はいっしょに食事をする隣人でしかないし、進展は期待できないさ。いや、隣人というより家族に近いとは思うのだが、雪乃さんからしたら手の掛かる子供と思われてそうだ。見た目はともかく実年齢はそれなりのようだしな。

以前、テレビ昔のアイドルの曲が流れて懐かしいと言っていたのを聞いて、年齢を訊ねたところ、ニッコリと微笑んだだけで冷めた殺気のようなものを発したから分からなかったが。

ま、年齢なんて関係ないね。

そんな妄想をしてるうちに魔界荘はもうすぐになっていた。

さて、答え合わせだ。漂ってくる匂いから夕食が何か分かるという便利能力が俺にはある。基本的に他の住人は基本的に外食で済ましている人が多く、匂いの発信源は大抵雪乃さんの部屋からだ。

俺は鼻をヒクつかせる。

……焦げ臭い。いやまて、雪乃さんに限ってそんなミスをやらかしはしない。……まさか。

俺は不安を胸に魔界荘へと駆け寄ると、庭に人の形をした黒こげたものが二体地面に横たわっていた。すすだらけのように黒くなった顔はバイト先に来ていた悪魔に似ている。

焦げた匂いの元はこれかと俺は一安心し、

「今日はカレーか」

スパイスの香ばしい匂いに鼻孔をくすぐられながら、俺は気持ちを弾ませ、自室へと帰った。

天使と見習い悪魔（2）

俺がバイトをしている魔界カフェに来る客は常連も多い。
その一因にはあえて説明するほどでもないだろうが、なつきさんである。まるで本物のようなネコミミと二股のシッポにほんわか癒しオーラを纏う萌えの宝石箱。本物であることを俺は知っているけどな。
目の保養に最適なネコミミっ娘を目当てに男女問わず訪れる客がいないわけがない。俺としたら見物料を取りたいくらいだ。
ちなみに三神さん目当てと思われる、客もいたりする。物好きだなと言いたいが、多分Mなのだろう。マナーの悪い客に物怖じせずにハキハキと注意する姿は確かにファンができるのも頷けるが。
もちろん料理やコーヒーが良いという常連もいる。
そして、人間じゃない客も常連として多くいる。周りからはどう見えてるかは分からないが、俺が見たところ、お前外出たら珍生物として捕獲されるぞ、と一言いってやりたいと思うのもいたりする。
とまあ、経営が一気に傾くことはないくらいの常連さんたちがいるが、不思議と行列が出来たり満席になることは少ない。
平日の昼間を少し過ぎた時間帯というのはもっとも暇といえる。今も一組の客しかいない。
なので、店内に流れるおだやかなクラシックよりも会話の方が鮮明に耳に届く。俺はクラシックに関しては全く知識がないが、なつきさんの選曲だと思うと、アニソンの神曲よりも耳心地よく聴こえてくる。これをなつきさん効果と名付けて学会で発表したい。

「諦めたらそこで終わりなのよ！」
ドン！
と、力強くテーブルを拳で叩きつけ客の一人が叫ぶ。某バスケ漫画でも読んだのだろうか。

叫んだ客は乗り出した体を戻すと、衝撃で波打つ緑色の液体の入ったカップに口を付ける。メロンソーダだ。

「……もう、終わりでいいと思うけど……」

言われた側はやる気になるわけでも、バスケがしたいと言うわけでもなく、テーブルに呟くように気弱な台詞を返す。

あーあ。ネガティブオーラ丸出しな反応だとまた怒鳴られるぞと、他人ながら忠告を心中で言ってやる。

「確かに、あの強さは予想外だったわ……」

が、怒鳴ることもなく苦々しい表情でベシルは言う。

会話を聞くところによると、ベシルとルシルの見習い悪魔コンビは昨日、功を立てるため天使さんを倒そうと魔界荘で待ち伏せていたとのこと。

しかし、実力には兵卒と武将くらいの大きな差があったらしく、部屋から出てきた天使さんの前に立ちはだかったところ秒殺されたとのこと。

その話を聞いて思い出したが、昨日の帰り庭に誰か倒れていたが、アレが二人だったということか。昨日の記憶は雪乃さん特製カレーの味が八割を占めているから忘れていた。

「甘く見ていたわね」

ああ、雪香向けにか甘口だったなあのカレー。

「僕らの力だとやっぱり無理だったんだよ。一気に出世なんて、世の中そんなに甘くないと思うよ……」

いや、市販の甘口よりも甘かった。だが、カレーのカレーらしさはしっかりと主張されていた。さすが雪乃さん。カレーの気持ちを理解していると俺は感心した。

「アンタのこつこつ送りバントするような考えの方が甘過ぎったらないわね。一発ドカンと狙わなきゃ悪魔界じゃ一生下っ端のままなのよ！」

ベシルは巨人ファンだろう。

「狙った結果がこれじゃないか……それに僕は別に下っ端でも……」

ルシルはグチるように言うが、ベシルとは目を合わせようとしない。というか悪魔界での下っ端ってどんな感じなのだろうか。奴隷みたいのをイメージしたが、分かりますか？　なつきさん。

「下っ端といいましてもー、普通に暮らしていけると聞いたことがありますよー。大半の悪魔は下の階級ですし、不平不満も聞いたことがないですから、その通りだと思いますよー」

普通にですか。もしかしたらこっちよりも暮らしやすそうだな悪魔界。

「うっさいルシル。一生下っ端はごめんだけど、今回の結果は反省する必要はあるわね」

ルシルは顔を上げ、少しだけ嬉しそうな表情を覗かせ、

「じゃあ、一旦魔界に」「ここでもう一度作戦を練り直さなきゃ」

ルシルは再びうなだれた。可哀想に思えてくるが、俺が口出しすることでもないだろう。その方が面白い。

ベシルはメロンソーダを飲み干して、おかわりを要求してから、

「じゃ、アンタは何かアイディアある？」

「え？」

唐突に作戦のアイディアを促されルシルは戸惑いの表情を見せる。

「さーん」

その表情を見ても、ベシルは非情なカウントダウンを始める。

「にー」

カウントを取るベシルの表情は実に楽しげで、

「いーち」

対照的にルシルの顔は焦りの色を濃くしていき、視線を左右にさまよわせている。

「はい、終了」

結局はルシルはあわあわとするだけであった。ルシルはドヤされる未来が見えているのか、肩をすぼめて俯いている。

「駄目。ダメダメ。時間制限あれば自棄になって無茶苦茶な案でも言うと思って、そこからいい案に繋がると考えたけど……駄目ね。

もしアンタが芸人だったら失格だわ」
　呆れたようにベシルはため息を吐く。俺もがっかりだ。面白くなくてもいいから何か言ってほしかった。
「ま、いいわ。アタシの作戦を聞いて勉強することね、耳を突っ立ててよく聞きなさい」
　自信満面な笑みを浮かべるベシル。ルシルは気の弱そうな顔をあげて、銀の髪をかき分けて、尖った耳を露出させる。
「それは――」と勿体つけるように一旦区切り、フンと鼻を鳴らして、

「人質よ！」

　と、ベシルは店内全体に響きわたるくらいの声量で告げる。他に客いなくてよかったな。
　まあ、銀髪に真紅の眼の少女から人質だとか不穏な言葉が出たところで、本気だと思う人はいないか。
「人質をとって、変な動きしたらこいつの命はないって脅すわけ。あいつも一応は天使なんだし人質を無視するなんて非情な行動はできないだろうしね、そんで動けないあいつをボコボコにするわけよ。あ、もちろんその役はアタシね、アンタは人質を捕らえてればいいわ」
　得意げに言って、イメージを膨らませたのかニヤニヤとした笑みを浮かべるベシル。うむ、趣味が悪い。

「そんな悪魔みたいな真似……」
　ルシルは青ざめた顔になり、がくがくと体を震わせる。ツッコミを求めているとしか思えないな。
「アタシらが悪魔でしょ。というか、普通の悪魔はそんなことしないでしょ。アタシはするけど」
「……けど、人質って……どうするの？」

おずおずとルシルは聞いて、ベシルは顎に指を当て考える仕草をする。
「そうね、さすがに無関係な人を捕まえるのは問題があるし、それにアイツと親しい人を捕まえて、何もできずに悔しそうに唇を噛みしめる様を見た方が有意義だわ」
「親しい人に心当たりがあるの？」
ルシルの問いに、生き生きとした笑みを浮かべていたベシルは再び考える。
俺が見た限りだと、天使さんと親しいのは魅栗さんだな。というよりそれ以外の交友関係はしらない。
「それは……」
ベシルが悔しげに顔をしかめる。
「ほら、だったら一旦戻ったほうがよくないかな？　よく調べたほうがいいと思うし」
これを天使さん襲撃作戦を考え直させる好機と見たか、ルシルは説得にかかる。
「そうね、けど、まだ諦めるのは早いわルシル」
ルシルはがっくしと肩を落とす。
「……えっと……何か案があるの？」
「あの…なんだっけ？　アイツが住んでるオンボロ荘あるでしょ」
失礼な。……事実だけど。
「そこの住人なら少なからず関わりはありそうだし、人質にされていたなら放ってはおけないはず」
ナイスアイデアと得意満面といったように、ひまわりのような笑みを作るベシル。逆に陰鬱度合いが増すのはルシルで、
「……昨日、黒い人が部屋に入ってったけど、僕らじゃ到底適わない魔力だったし……無理だよ」
ベシルは苦々しく「う」と呻く。
黒い人とは魅栗さんのことか。まあ、雰囲気からして普通ではないし、凄いんだろう。

「あ、あれは偶然よ。偶然。こっちにそうちらほらと高い魔力の持ち主がいるわけないでしょ。たまたまあそこに住んでただけよ。他の住人は雑魚ばっかりでしょ多分」
「……けど、天使も同じくらいの魔力だったし、他にもいるかも……」
「さすがにそれは後ろ向きすぎると思うわ。まあ、その可能性がゼロとも言えないわね。二人も見かけたら他にもいるという考えもできるし」
台所辺りに生息する黒い生き物のような言い方だな。
しかし、その考えは多分当たっていると思う。今は魔界の方に戻ってるが、魔王である榊さんとか。黒木さんや荒木さんも凄いんじゃないか。俺のイメージだが。
「……じゃあ、一旦戻ったほうが……」
「それは尚早。まだ雑魚がいないとは決まった訳じゃないし、もう一回あそこに行って見定めてから決めるべきね。…無理そうだったらアンタの言うとおりするわよ……不服だけど」
言って、ルシルから顔をそらすベシル。頬が赤いしこれは……どうでもいいや。
ルシルは全員が人質には適さない強者であることを祈ってるのか眼を閉じている。
後は、雪乃さん親子か。実力の程は定かじゃないが、捕まえたら俺が絶対に許さん。
麻衣は……問題ないか。つか、どうでもいい。
メロンソーダを豪快に飲み干して、グラスが割れるかと心配になるくらい力強くベシルは置くと、
「じゃ、早速行くわよ！」
立ち上がり、大股で出口へと向かう。
「あ、え……」
ルシルはまだ半分近く残るパスタと、ベシルに視線を交互に向けてから、名残惜しむようにもう一度パスタを見てから立ち上がり、

「あの、幾らですか？」
俺の方へと近寄りながら聞いてきた。
「大変みたいだな」
と、気遣う言葉を掛けてやる。なつきさんの前だし印象がいいだろう。
「あ、はあ……慣れてますから……」
無理に作ったような苦笑を浮かべるルシル。悪い奴じゃなさそうだし、雪乃さんに何かしたら……と、脅――忠告して置こうとも思ったが、俺が魔界荘住人だと知られても面倒くさいことになりそうだし、俺は淡々と会計を告げた。

天使と見習い悪魔（3）

昨日の風情のある茜空とはうってかわり、今日は灰色の雲が重々しく空を覆い尽くしている。

今にも一雨来そうだなと、仰ぎ見て不安視しつつ俺はやや早足で帰路を歩いていた。

朝の天気予報じゃ夕方の降水確率は二十パーセントで、俺は八十パーセントを信じて部屋を出たため傘は持ってきてなかった。

まあ、結局は間に合ったといえるのだが、俺は急ぐあまり一つの懸念を失念していた。魔界カフェであくどいようなそうでもないような作戦会議を開いていた悪魔のことだ。

人質をとって天使さんの動きを封じるという作戦のため、ふさわしい相手を見極めるのに魔界荘で待ち伏せ見定めるという話だった。

しかし、俺が思うに魔界荘住人というのは人質は適さないような人が多いということで、俺は安心していたのだが、不安がせかせかと戻ってきた。

俺自身を忘れていたのである。

自慢には絶対にならないが、俺は魔界荘内じゃもっとも弱者だと思う。下手したら雪香よりも弱いかもしれない。

それはただの人間だし、仕方ない話だ。

もし、諦め悪く俺の帰宅時間まで奴らが粘っていたら……もしかしたら狙われるのは俺かもしれない。そんな不安だ。

だが、あのベシルの一方的な話し合いをしていた時間は昼過ぎだったし、張り込みする刑事がごとく忍耐強く待つような性格とも思えないし、楽観もしてたのだが……

「人質ゲットだぜ！」

「……俺はミニモンか」

魔界荘入り口の塀の影から現れたベシルに捕らえられたのである。

虫取り網で。

ちなみにミニモンとはミニミニモンスターという子供に人気のゲームである。

「す、すみません。……あ、あの、少しの間だけ協力を……あ、」

謝りながらベシルに続いて出てきたルシルは、頭に網を被された俺を見て、目を丸くした。

ここは『お前はあの時の！』とでも言って運命の再会を装うか迷ったが、美少年にときめく趣味はないし、

「まだいたのか」

呆れ気味に俺は言った。

「……えっと、ここに住んでるんですか？」

「まあ、な」

「何？　ルシルの知り合いなの？」

小首を傾げベシルが言う。覚えてないのかよ。

「ほら、喫茶店の店員さんだよ」

ルシルが説明するが、ベシルはそれでもピンと来ていないようで、

「ふぅん。別にどうでもいいけど」

心の底からそう思っている表情で言われるとさすがに少し傷つく。

「つか、この網さっさと上げてくれ」

自分で取ろうにもベシルは柄をミシミシいわせながら力一杯押さえつけてるせいで上がらない。

「私に素直に従うならそうしてあげる」

「あー、分かった。少しだけな」

時間的にはまだ夕食まではあったはずだしな。付き合ってやってもいいか。

「あの憎たらしい天使が出てきたところで、すかさず『少しでも動いたら、こいつの命はない』って脅すわけ。そして、アタシがアイツをやるわけよ」

カリカリ、と小枝で地面に描いた天使と書かれた棒人形に×印を付けるベシル。
「少しありきたりだな」
「なに？　不満なわけ？」
自分の策にケチをつけられ、俺を睨んでくるベシル。
「もう少し派手さがほしいな。そんな刑事ドラマから引っ張ってきたような台詞じゃあな」
「じゃあ、どうしろってのよ」
ベシルは唇を尖らせる。
「もっと悪役に相応しい台詞があるんだよ。よく見とけ」
と、俺は立ち上がり動きをつけながら手本を見せることにした。
「まず、天使さんは俺らを見て『何？』とか不機嫌に言うと思う。それを聞いてからベシルが『何？　と聞かれたら』と返してだな、続けてルシルが『答えてあげるが世の情け――』って言ってだな」
俺はキレのある動きで一人二役で口上を述べていった。最後の喋る猫まで完璧にやり切った俺の表情は、悔いのない演技を果たした舞台役者のような爽やかさだっただろう。
「……」
「……」
俺を見上げる二人は口をポカンと開け放っている。感動しているのかもしれない。或いは完璧すぎて、自分たちには難しいと思わせてしまったか。
「で」
ベシルは肩を震わせ、
「できるかあぁぁぁ！」
叫び、小枝を地面にたたきつけた。
「長すぎるし、意味不明じゃない！　それに……ラブリー…とか…と、とにかく却下よ却下！」
途中チラッとルシルを見て、顔を紅潮させながらベシルは俺の台詞案をはねのける。ルシルはどうだ？　顔を向ける。

「……すみません。僕もちょっと……言ったら失敗しそうな予感もするし……やられ役の台詞のような……」
気が弱そうだからコクコク頷いて賛同するかと思ったが、意外にハッキリと言う奴だったんだな。
「じゃ、お前はどんなネタがあるんだ？」
「ネタ……？」

作戦も練り終え、後は天使さんを待つだけとなった。ちなみにルシルはとんだ期待はずれだった。ガッカリだった。
「さあ出て来なさい」
フフフ……と魔界荘の入り口に仁王立ちでベシルは不敵に笑う。
ここに立つことでとおせんぼする形になり、嫌でも関わることになる。つまりは背後に立つルシルに捕らえられている（今はまだ自由だ）俺を助けざるを得ないということだ。
雪乃さんに助けを乞うのは俺のプライドが許さんが、天使さんは別だ。普段冷たい天使さんが『仕方ないわね』とやれやれとため息を吐きながらも、俺を助ける。中々に萌えるシチュエーションではないだろうか。
時代は助けられる男だな。毎度さらわれる桃姫を助ける赤い男なんて古いぜ。
「でも、今から出掛けるってどんな仕事をしているんですか？」
ふいに疑問に思ったのかルシルは聞いてきた。俺は振り返り、
「夜のお仕事だ」
簡潔に答えてやった。
「あ、え……夜の……」
ルシルの顔が真っ赤になる。元々、日の下に出たことのないような白い肌のため、その変化は明白だ。
「ああ。毎晩客に癒しでも振りまいてるんじゃないか」

俺へ接する態度見てると想像し難いが。
「そ、そうなんですか……」
何を想像したのかは分からないが、ルシルの顔はさらに赤くなる。
「何人も相手してんだろうな多分」
「……」
ルシルは耳まで赤くして俯く。いったいどんな想像をしたのやら。
……俺は間違った説明はしてないが、キチンと正確に教えてやるか。
「あー、天使さ――ぐあ」
背後から頭を思い切り叩かれた。舌を噛んだらどうしてくれんだ。
「なに、変な言い方してんだか」
顔だけ振り向くと呆れ顔のベシルがため息を吐いていた。
「え？」
顔を上げルシルはキョトンとしている。
一層長いため息をベシルは吐き、
「ルシル、アンタも変な想像してんじゃないっての……天使の仕事はね……えっと」
言葉に詰まり、ベシルは俺を睨みつけるように見る。ど忘れでもしたのか。
「飲み屋。つまりはスナックだ。そこで働いてるらしい。俺は行ったことはないが」
アルコールは苦手だしな。客としていって天使さんにどんな態度を取られるかは気にはなるが、いつもの天使さんも、営業スマイルを浮かべる天使さんもどちらも怖いから行く気はない。
「それよ。それ。アンタの想像してるような仕事じゃないから」
「……そ、そうなんだ……」
「いったい何を想像したんだ？」
自分の中でかなり嫌らしい笑みを浮かべながら俺はルシルに問う。
いや、意地悪ではない。単に俺も天使さんの仕事を知る前雪乃さんに同じことをされたから気になるだけだ。俺の想像力にはかなわないだろうがな。

「変なこと聞かないでよね！」
怒鳴るベシルはスルーし、
「恥ずかしがることはない、男はそういう生き物さ。天使さんの容姿を見て、夜のお仕事と聞かされて、想像しない方がおかしい。俺は十万は払えると思ったね。……いや、純血は大切な人に……それはどうでもいいか。さあ、言ってごらん」
俺は柔和に微笑み、両手を広げてみせる。想像の全てを打ち明けて楽になれ。
「……」
ん？　どうしたルシル。目を大きく開いて。別に驚くほどの告白じゃなかっただろ。男としてごく在り来たりな想像を話しただけだ。

「……邪魔なんだけど」

邪魔？　不機嫌な声で言うのは誰だ。これからルシルの想像を聞かせて貰う大事な場面なんだ。俺は振り返り、
「邪魔なのはそっちだ――」
その時、雷鳴が轟いた。幻聴かとも思ったが、黒に近い曇が空を覆ってるし、実際に鳴ったのだろう。俺が幻聴を疑ったのは振り返った目の前に立つ人物が纏う雰囲気が恐ろしかったからだ。

「楽しそうな話してるとこ悪いけど。退いてくれない？」

金髪碧眼の美女。スタイルも抜群で外見に文句を付ける人がいたならば、それは妬みか、視力を疑った方がいい。
それで微笑みを浮かべたりしてればいいのだが、基本的には近寄りがたい不機嫌そうな表情を四六時中浮かべている。
全ての天使がそのような雰囲気だったら、俺は善行なんかクソくらえと思っただろうが、ここにいる悪魔の話によると、天使さんは

天界から役目を放り投げてきた問題児らしいし、まだ善行を積む価値はありそうだ。

「ここは通せないのよね。悪いけど、アンタはここでやられる運命なのよ！」

ベシルは予め自ら用意していた口上を叫び、ズバッと天使さんを指さす。

俺の経験からして、今の天使さんはマズい。不機嫌度が二割増しだ。俺の想像を聞かれていたのかもしれない。撤退を進言したほうがいいか。

「おっと、動かないで！　一ミリでも動いたらこいつの命はないわよ」

天使さんは動いてないが、ベシルは決め手おいた通りに台詞を進める。俺がまだ拘束されてない状況でいったい誰の命がなくなるというのか。

ちらりと後ろを見ると、ルシルは塀に隠れてこちらの様子を窺っている。逃げるの早いなおい。危険を余地したのか。

もう自棄だ。

「助けてくださいー。ころされるー」

棒読みで俺は言った。

台詞を考えたのはベシルだ。ベシルである。大事なことだから二回言っておく。

「ふん、観念なさい」

ベシルは勝ち誇ったように鼻をならす。実に頼もしい姿だが、天使さんの手をよく見て欲しい。

美しい手だが、その掌が青白い気を纏っているね。その掌をこちらに向けているね。邪魔な存在を消すのに無駄な言葉はいらないということだね。

さて、俺も逃げようかと一歩後退し――

雷光のような光が俺の目の前に広がった。

頬を冷たい滴が伝う。
「降ってきたか」
もちろん涙ではない。実力差が開きすぎているであろう相手にやられて、悔し涙を流してどうする。
「……ベシル、大丈夫？」
天使さんが去ったのを見て駆け寄ってきたルシルが、焦げた臭いを発し地に伏すベシルの側に屈んで声をかける。
それにしても、仕事に向かっただろう天使さんの表情は心なしか少しスッキリしてたな。こいつらを容赦なく倒したことでストレス解消になったのか。
「別に……ちょっと油断しただけよ」
なんか涙声になってないかベシルは。
同じく体が痺れ、地に横たわる俺は首をベシルの方に向けると、顔を隠すようにルシルに背中を向けていた。
「油断も何も力の差は歴然としてたと思うが」
「……うっさいわね。アンタがちゃんと台詞を言っていれば、万事うまく言ったはずなのに、あんな大根で……」
「俺のせいか。つか、天使さんに対し人質でどうにかしようとしたのが間違ってる。それすら敵としてしまう残忍、凶悪さ。あれは天使の皮を被った……いや……俺だったからか…」
他の住人と明らかに扱いが違う気がするし。だが落ち込むことはしない、あの態度はきっと、
「嫌われてるのね」
ベシル……それは違う。気になるがうえに冷たくしてしまう子供的な一面……そう思わしてくれないか。じゃないと俺は泣くぞ。雨に紛れて大粒の涙を流すぞ。

「勇気さん、ご飯ですよ」

と、曇天すらも晴れに変えてしまえるような澄んだ声が聞こえてきた。

俺はすぐさま立ち上がり、二階の廊下に立ちこちらを見て柔和に微笑む雪乃さんに、

「はい！　今行きます」

手を挙げて返した。

雪乃さんは軽く頷いて部屋に戻った。

「……って、なんでアンタそんな元気なわけ？」

ベシルは俺を見上げ聞いてきた。ルシルも不思議そうに俺を見る。

「ああ……」

俺は空を見上げ遠い目をする。

思い返すは過去の思い出。天使さんとの思い出だ。嬉しい少年誌的なハプニングがあったわけでもなく、不機嫌な時にばったり合っただけで痛い目にあった日々。

もう、どうせ痛い思いをするなら、わざとハプニングを起こそうかと何度、女湯に入ろうかと苦悩したことか。……その果てを考えたら痛いじゃ済まなそうだからやめたが。

そして、何度もやられる度に俺は快感を……覚えはしなかったが、回復が早くなった。一日痛みが引かなかったのが、今や十分まで短縮。要は、

「馴れだよ」

俺は言って、部屋へと向かった。

土で汚れたし着替えが必要だ。この姿でおじゃまして雪乃さんの部屋を汚すわけにはいかないからな。

雨粒が屋根を叩く音が強くなった。本降りになってきたようだ。

「……」

俺は一度後ろを向き、庭を眺める。ようやく体を起こしたベシルと側で体を支えるルシルの姿がある。

「仕方ない。雨宿りくらいはさせてやるか」

やれやれと呟き、俺は庭へと降りていった。

ゲーム日和

日曜の午後。俺は魔界荘の二階に続く鉄製の階段をリズムよく鳴らして駆け上がり、部屋前へと戻ってきた。ノブを握る前に乱れる呼吸を整える。

気分が高揚しているのは、秋晴れでも、赤信号に引っかからなかったからでも、百円を拾ったからでもない。まあ、それも少しは今の気分の一旦にはなっているが、もっとも俺の気分を盛り上げてくれてるのは、手に持っているレジ袋の中にある。

「ただいま」

適当に靴を脱ぎ捨てて、言いながら部屋へと入る。

「あ、おかえりー」

「……お邪魔してます」

「うぅ、ここでこうして……」

三者三様の反応が帰ってきた。

畳の上でうつ伏せで遊んでいる携帯ゲーム機から顔を上げて、脳天気な表情と声で言ったのは麻衣。居候の幽霊。

壁際で突っ立ったまま、弱々しい声でペコリと頭を下げたのはルシル。見習い悪魔の少年。

ちゃぶ台に置かれた紙に向かい、鉛筆片手に唸っているのはベシル。見習い悪魔の少女。

余計な奴が二人（できたら三人にしたい）いるが、もう慣れた。

天使さんのストレスの捌け口……いや、天使さんを倒して出世を企てる二人組はまだ諦め悪く、未だ天使さんに挑んでは返り討ちに合うのを繰り返している。

その討伐作戦の会議の場として俺の部屋を勝手に利用している。なんでも、金に余裕があまりなく、魔界カフェを何度も利用できないから、天使さんの部屋にも近いここにしたと、ベシル談。

遠慮という言葉が辞書にあるか分からないベシルはともかく、それに下僕がごとく付き従うことしかできないルシルは申し訳なさげに謝ってくれてるが、俺はあんまり迷惑ではない。

俺は日中は部屋にいないし、その間部屋に一人きりの麻衣のいい話し相手になっているようだしな。

ルシルに関しては、部屋の掃除やらの家事までこなしてくれ、帰宅すると見違えるように綺麗になっている。片づけという言葉を教えても馬の耳に念仏な麻衣とは偉い違いで、日当をあげたいくらいの働きをしてくれている。

「何か、新作買ってきた？」

麻衣が目ざとく袋を見つけ聞いてきた。

「ああ」

俺は袋の中に手を突っ込み、ゲームソフトを掴み勢いよく引き抜くと、黄門様の印籠よろしく突きだした。

「『モモ次郎散歩１７』だ！　とくと見よ！」

ドーンと効果音を付けたいくらいの俺の高らかなる叫び。こんなんで気分が高鳴るのは子供っぽいが、新作を購入したこのワクワク感はいつになっても止められない。

「……なんだソレか」

ん？　何故麻衣は俺のテンションとは対照的な冷めた瞳をしているんだろう。

ベシルはウルサいと言わんばかりに睨みつけてくるし、ルシルと視線が合うとアワアワと視線を右往左往。

「えと……何故か温度差があるようなんだが……なあ、モモ次郎散歩だぞ？　略してモモ散だぞ？　人気シリーズの１７作目だぞ？」

と、麻衣にパッケージを見せながら詰め寄る。麻衣は残念そうにため息を吐き、

「私、そのジャンル興味ないし」

何様だコラ。という怒りたくなった。

誰の金でゲームができてるんだと。それより、以前はどんなジャ

ンルでも目を爛々と輝かせてたじゃないか。目が肥えてきたのか…
…だがな、
「まあ、一度でいいからやってみないか？　意外と楽しいかもしれないだろ。ジャンルの選り好みは良くないと思うぞ」
「これやり終わったらね」
素っ気なく言い放って麻衣はゲームに戻る。
何様だコラ。という怒りが湧き拳を握り絞めたが、ここは自制心を働かせ抑えつけた。
「ベシルはどうだ？　やってみないか」
次にベシルに狙いを定める。
「何コレ？　対戦？」
モモ次郎がニッカリと笑うパッケージをまじまじと見てベシルは訊く。ここに来てゲームもやったりしているから知識は付いてきたようだ。
「対戦といやあ対戦だな。いかにトップに立てるかっていう。そういうの好きだろ」
悪魔界で上へと登り詰めようと日夜、天使さんをやっつけようと考えてるしな。これはノって来てくれるだろ。
「てか、これって前に何作もあるんでしょ？　アンタはやったことあんの？」
「ああ。近いのだと12だな。アレは傑作でかなりやり込んだ」
「じゃ、パス」
あっさりとベシルは誘いを断った。
「何でだよ？」
「だってアタシやったことないし。そしてアンタはやってたんでしょ。ならそっちが有利だし。アタシ負けんの嫌いなのよね」
負けるからやらない。実に合理的な考えだな。それなのに何故、天使さんに挑むのだろうか。地球人がスーパーサ〇ヤ人に挑むくらいに無謀だと思うが。
「いや、だからといって経験者が勝てるとはいえないのがこのゲー

ムの面白いところだし、それに俺は対人戦は初めてだから、そこまで力の差はないと思うぞ」

ベシルはうつむき加減で悩むような仕草をしてから、

「やっぱ、パス。どうせ陰湿なやり方で勝とうとするに決まってる。前に観た雑誌に書いてあったわ。オタクは空気を読まずに勝ちだけに拘る輩だって」

いったい何の雑誌の知識だ。

「つか、俺はオタクに見られてるのか？」

「当然でしょ。四六時中妄想に明け暮れている顔してるし、何よりキモいし」

……あれ、俺の目から何かしょっぱいものが。否定したいが、多少なりとも自覚している所もあるし押し黙るしかない。

「じゃ、ルシルはどうだ？」

と、残ったルシルを誘うことにする。四人でプレイ可能なゲームだし、できたら四人でしてみたかったが、仕方ない。二人で我慢しよう。

「……あ、僕も……その……」

「ん？」

ルシルは俯きがちに言いよどみ、指をもじもじとしている。

「……あまり興味は……」

囁くような声量でルシルは言った。

誘いを断らないだろうと最後に残しておいたが、意外と意思は示すタイプだったんだな。少し強く言えばコロリと変わりそうではあるが、

「あー、わかった。悪かったな」

苦笑して俺は謝った。残念な気持ちもあるが無理強いはしないさ。

そして、テレビ前に置かれたゲーム機にソフトをセットしスイッチを入れた。

「一人でやるの？」

麻衣が言った。

「そうだが」
「こういうのって一人だと虚しくなったりするんじゃないの？」
そりゃまあ、これのコマーシャルでも多人数で賑やかに楽しんでる様子が流れてはいた。
「そういう人もいるだろうが、俺はそうではなかったな。１２の頃は他にしてくれる相手もいなかったし。
だから一人でやり込んでたが、意外に一人でも楽しめるもんだぞ。何度も九十九年を繰り返したしな。まあ、対戦相手は最低一人は必要だし、必然的にＡＩキャラを選ぶんだが、そのキャラが個性的でな、進めていくうちに思い入れが湧いてきて、邪魔されたりすると『そりゃないよ』とか笑いながら言ったりしてたな。
ＡＩ相手も飽きた頃には四人分を一人で操作したりもしたな。想像力で他三人のキャラ設定を作ったりして中々楽しめた。
まあ、まずはＡＩとガチ対戦するか。ロース（ＡＩキャラ名）め、今回は負けないぜ」
と、俺が懐かしい思い出を振り返っている間にテレビはタイトル画面になっていた。スタートボタンを押し、モード選択画面になる。
「ユウくん……ごめん。やったげるから」
ゲーム機にコントローラーを差し込みながら麻衣は言った。一体何を謝っているんだろう。何故、涙目になっているのだろう。
「仕方ないわね。やればいいんでしょ」
面倒くさそうにため息を吐きつつ、ベシルが麻衣の隣に座る。何故、俺に哀れむような眼を向けているのだろう。
「……僕もします」
ルシルが俺の隣座る。何故、悲しげな表情をしているのだろう。
「じゃあ、四人でするか。コントローラーは二つしかないから、割り当ては俺（１Ｐ）とルシル（３Ｐ）、ベシル（２Ｐ）と麻衣（４Ｐ）でいいな」
かくして賑やかな四人対戦が始まった。

モモ次郎散歩とは、モモ肉に目と口と手と足が付けられたキャラクター『モモ次郎』が主役のボードゲームである。

このモモ次郎というキャラ、割とリアルなモモ肉を擬人化した感じのどこが可愛いのか俺の感性じゃ理解できない見た目なのだが、人気があるらしく、他にも幾つかシリーズ作品になったりしている名キャラクターになっている。

モモ次郎散歩シリーズ。通称『モモ散』とは、モモ次郎や他にも幾つかのキャラが各地を巡り、名物などを買ったりしてポイントの合計を競うゲーム内容になっている。

その単純明快なゲーム性に加え、運の要素が多分に絡んだりする様々なシステムがあり、老若男女、ゲーム初心者から上級者まで分け隔てなく楽しめる国民的ボードゲームの一つである。

かくして始まった四人での対戦は、序盤は俺がルールを細かく説明しながらプレイし、和やかなムードが流れた。

三人とも飲み込み早く、ゲーム内の季節が三回りする頃には慣れたようで、サポートアイテムを上手く使い目的地に入ったりしたが、過去の作品で培った知識で勝る俺が一歩リードする展開で中盤を迎える。

「お」

ルシルがアイテムマスで手に入れたものを見て、

「いいアイテム出たな。それ使えば結構なダメージ与えれるぞ。誰か一人だけだが」

俺は簡潔に説明した。だが、今すぐには使わないと状況から見て取れた。ルシルのキャラは目的地に近く、サイコロで四以上出れば着ける状態だからだ。ここでアイテム使うとサイコロが触れずにその場に留まることになる。

「よくやったわ！　ルシル、早く使いなさい！」

隣で喜々とした声でベシルの命令が飛ぶ。

「……え？　でも……」
迷うルシル。別に協力プレイでもないから自分の利益を優先しても構わないのだが、もし命令に背いた場合リアルでベシルに何をされるか分からないからだろう、カーソルが『サイコロ』と『アイテム』を何度も行き来している。
ここは一押ししてやろう。アイテムで狙われるのは俺だろうし。
「振った方がいいんじゃないか？　目的地には二分の一の数で入れるし、出なくてもプラスマスだ。リスクはない」
カーソルが『サイコロ』で数秒止まる。早く押せ。
「ポイントマイナスのアンタがポイント得たところで意味ないんだから。ここはトップを潰しとくべきでしょ。というか、何を迷う必要があるわけ？」
ベシルがルシルを睨みつけて脅しを掛ける。だが、的確な指示でもある。今のルシルのポイントなら、目的地を目指すのは一度、アイテムでプラマイゼロにしてからのほうがいいだろう。急ぐ必要はない。
カーソルが『アイテム』で止まる。
このままだと俺のトップが危うくなるし、麻衣にもルシルの説得を頼もうと視線を向けると――携帯ゲーム機で遊んでいた。
「おぃ……何をやってんだお前は」
「だって、待ち時間暇なんだもん」
「画面見とかないと、他プレイヤーの情報が分からなくなるだろ。致命的だぞそれは」
「ちゃんとそっちも見てるから大丈夫だよ」
「本当か？」
怪訝に思いながら俺は言った。携帯ゲーム機の方はＲＰＧとはいえ、目を離せる時間も多いとは思えんし。
「本当だってば。ユウくんのポイントは――」
と、麻衣は各プレイヤーのポイントを一桁も間違えずに言った。
「お前……無駄に凄いスキルを……」

その記憶力を他に活かせばいいのに。
他というと何があるのかと考えていると、デロデロデーンと不吉なメロディが鳴った。
「あ！」
俺は驚愕した。なんということだろう。俺のキャラのポイントが見るも無惨な有様になっているじゃないか。非道い。
「よくやったわ。ルシル」
指をパチリと鳴らしてベシルはしてやったりと笑みを浮かべている。
ルシルを見ると「すみません」と言うように申し訳ないという視線を俺にくれる。
「やられた……」
俺は悔しさに顔を歪めた。だが、このピンチ、燃えてきた。絶対に返り咲いてやるぜ。

あれからベシルは妨害アイテムに味を占めたのか、ルシルにアイテムを集めるよう命令し、否応なしに従わされたルシルとの協力体制になった。
高圧的なベシルの指示に逆らえず俺だけを執拗に狙うルシルに、妨害で足止めをくらう間に目的地を狙うベシル。その絶妙なコンビネーションで俺のポイントは見る見るうちに減っていった。
俺は逆転を目指し、ルシルに反旗を翻すよう言葉巧みに説得するも、ベシルには逆らえず、謝りながらも俺の妨害を続け、結局俺の逆転は適わなかった。
順位はアイテムを集めるだけで稼げなかったルシルが四位。
俺は三位。
ベシルは二位……で、一位は、

「なんでお前なんだよ！？」
「さあ。普通にやってただけだよ？」
けろりと麻衣は言う。
確かに麻衣は妨害の対象になっていなかったし、地道に稼いでいたからな。というよりもっと喜べ。携帯ゲームをするな。
「もう！　何で一位じゃないわけ！？」
ベシルは怒鳴り散らし、コントローラーを叩きつけた。
「おい、投げるなら床じゃなくクッションにしてくれ」
怒りでコントローラーに当たりたくなるのは分かる。投げやすいからな。だが冷静になって、壊れてた時の自責の念は並のものではないぞ。
「こんな時間掛かって二位とか、ホント時間の無駄だったわ。そもそも、戦いにもならないしつまらないったらないわね」
ベシルはグチグチとこぼす。
「順位とかは気にしなくていいだろ。そりゃ一位を目指すゲームではあるが、そこまでのいろんなイベントやハプニングを楽しむもんだと思うぞ」
「アタシは一位にならないと楽しくないわ。アンタ一人でやってればいいじゃない。……悪いけど」
「私も、大して楽しくなかったしもういいや」
ベシルは言い放って横になり、麻衣もテレビに背を向けて携帯ゲームをする。
二人とも冷たいなおい。いや、最初は乗り気じゃなかったんだし、一度参加してくれただけでよしとするか。俺は結構楽しめたからな。
「ルシルはどうだったんだ？」
俺は寂しげに笑ってルシルに聞いた。ほとんどアイテムマスを回っていただけ、何が楽しいんだと芳しい答えはこないと思ったんだが、
「……面白かったですよ」
「本当か？」

ルシルの性格からして気を使ってるのだろう。
「本当です。僕自体はあんまり自由ではありませんでしたが、観てるだけでも楽しかったです。……キャラも可愛くて……」
照れくさそうに頬を染めてルシルは顔を伏せる。男だから可愛いものを公然と良いとか言いにくいのだろうか。
別にいいと思うし、ルシルの場合なんの違和感もない。というよりルシル自身が可愛いに属す外見だし。
「わかっているじゃないか。モモ散の魅力はキャラの可愛さと、シュールなイベントにあり、だ」
思わず俺は語り、手を差しだしルシルに握手を求めた。ルシルは唐突のことに戸惑いながらも握り返してくれた。
モモ散によって一つの友情が芽生えた瞬間だった。
「なにやってんのアンタたち……」
ベシルの呆れた声が聞こえたが気にはならない。
「よし、次はＣＰＵも交えてプレイするとしようか」
「はい」
ルシルは頷きコントローラーを手に取った。
ルシルとのモモ散は実にほのぼのとした雰囲気で楽しめた。

魔界と人間界

俺はバイトからの帰り道には商店街をよく通る。
別段、何かを買うというわけではないし、ここを通るのが一番近いというわけでもない。まあ、どんな道を選ぼうか片道四十五分が劇的に短縮はされないのだから、俺は数通りの帰り道を気分によって変えている。
落ち込んでいる時は寂れた公園がある通り。手入れが行き届いてないブランコをキィキィと泣かせてから帰る。
もっと落ち込んだ時は川辺を通るルートを選択し、石を川に投げて気分を晴らす。渡辺俊介ばりのアンダースローでだ。低い放物線を描いてボチャンと水底に沈む。水は切らない。
とまあ、他にも幾つかあるが俺は暗い顔を魔界荘まで持ち込むことはしないようにしている。余計な気を使わせるわけにはいかないしな。
だが、昔とは見違えるくらい暗い顔をすることはなくなったと自分でも思う。人の繋がりの素晴らしさを俺は魔界荘に来てから痛感した。
そんなわけで、とりわけ平常運転のテンションが多い普段は商店街を通ることが多い。
大通りと住宅街を結ぶ長い通りには多くの店が軒を連ねている。住宅街から真面目な主婦が夕飯の材料を買いに来たり、学生も買い食いをしたりして活気に溢れている。
魚屋に八百屋に肉屋と各食材別に揃う専門店の軒先では、陽気な店主が近所の奥さんと談笑し、その場のノリで五割引だとか叫び、肉屋では自慢のコロッケを買う学生服姿がある。
どこか懐かしい光景。もっとも俺はここ以外だと映画の中の風景でしかなかったが。この郷愁を思わせる優しげな雰囲気がいい。
特に夕焼けの朱に染まるこの時間帯が俺は好きだ。

しかし、不況の煽りというのはどこにでも訪れるもので、閉められたままのシャッターもそこそこ見られる。寂しい限りだ。

俺が左右に首を振りつつ、若奥様や女子高生を見ながら歩いていると、見覚えのある姿が目に入った。

同じように左右に視線を振ってるが、見てるのは看板だったり、店先に並べられた商品のようだ。それらを見ては片手に持った紙切れを見る。ちなみにもう片方の腕にはエコバックを下げている。青々とした長ネギが顔を出している。

立ち尽くして困ったように不安な表情を浮かべる姿は、誰しもが声を掛けたくなるだろうが、誰も声を掛ける様子はない。他人とは一定の距離を保つ、世の中はそんなものだ。

初めてのおつかいを想起させるが、そいつの見た目から考えたら、無事目的を果たしたとしても感動もなく、できて当然の結果として、拍手喝采もないだろう。

銀髪に真紅の瞳に肌も不健康な白に近いとはいえ、ルシルは見た目は青春を謳歌する年頃の少年だしな。謳歌するはずだった青春時代をドブに捨てた俺にはどんな感じなのかは妄想するしかできないが。

余程、メモらしき紙に困るような品物が書いてあるのだろうか。エロ本とか。

だとしたら俺は背中を後押しするくらいしかできないな。誰だってそうやって大人の階段を登っていくんだ。

「よう」

俺は軽く手を挙げて自然な感じで近寄った。

「あ、勇気さん」

メモとにらみ合って周りの様子が目に入ってなかったらしく、ルシルは顔を上げると目を丸くして驚く。ん、ちょっと涙目になってないか。

「買い物か？」

「はい。……ですが、何を買ったらいいのか分からなくて……うぅ」
俯き加減になり、ルシルは肩を小さく震わせる。まさか泣いているのか？　そのくらいで泣くなよ。というか、この状況はまずくね？　人通りの多い商店街の真ん中で……

「あら、あの子泣いていないかしら？」
「綺麗な髪の色ねえ外国人かしら？」
「きっとあの子の前で立っている男が怪しいわ」
「きっとカツアゲというやつですわね」
「まあ、なんて非道い！　ひ弱な子を脅すなんて！？」
「イジメカッコ悪い」

奥様方の視線が刺さるように痛い。勝手な想像をフル回転させてのヒソヒソ話ならもっと小さい声でしてくれ。
「とりあえず、どこか落ち着ける場所行くか」
確か店先にベンチを置いてあるところがあったはずだ。ルシルの手を取って俺はそこに向かった。
「誘拐かしら？」
「援交？」
「いやですわ。可愛らしかったけど、男の子でしたわよ？」
「最近はそういう趣向の人が増えてるらしいと読みましたわ」
何か聞こえてるが気にしないことにした。

洋菓子店の軒先に設けられたベンチに俺とルシルは並んで座りながら、プリンを一口食べる。
「美味しいです」
ルシルも幸せそうに顔を綻ばせている。
ここの洋菓子店の特製プリンは俺が三ツ星を個人的に送りたいく

らいのオススメの品だ。ただベンチを借りるのも迷惑だろうからと買ったんだが、そんな表情をされたならば奢ったかいがあったというものだ。

俺ももう一口食べる。美味い。

濃厚なプリンの甘さが口の中で優しく広がり、カラメルソースのほんのわずかな苦みがより甘さを引き立てる。

まさに『人生とは真逆の味のプリン』だ。これを一口食べると、俺の人生もこの味のようだったらいいのにな……と感慨に浸ってしまう。ちなみに『人生の味のプリン』もあるのだが、苦みが強すぎて不人気らしい。

さて、と食べ終えたプリンを脇に置き咳払いをして、本題と行こうか。

「俺の狙い目としては三丁目の本屋だな。脂ぎった中年のオヤジがレジ担当だから気兼ねなく買えると思うぞ」

俺は利用したことは無いがな。部屋に余計な居候がいるせいで隠せないし。

「えっと……」

怪訝そうにルシルは首を傾げる。

まさか、安全策を取らずスリルを求めているのだろうか。

「なら、二丁目のコンビニはどうだ？　今の時間帯だとレジはおとなしめな女性だ。淡々と仕事をこなし無表情を装うと思うが、内心を想像するだけでご飯三杯はいける！」

念を押すようだが俺は買ってない。買ったつもりの妄想で留めておいているからな。

「そのう……」

何か言いたげな上目遣いでルシルはこちらを見る。

俺はあらぬ思い違いをしていたのかもしれない。ルシルも見た目は若いんだ。写真だけで満足がいくはずがないか。だとすると、本じゃなく、

「なら、一丁目のＴＡＴＳＵＹＡがいい。夜に行けば安心安全な男

性店員。緊張感を欲するなら今の時間帯を勧める。大学生くらいの女性店員だからな」

しつこいが俺は映画とアニメしか借りたことはない。クソッ……部屋にあいつさえ居なければ……

「勇気さん……」

む。まだ満足を得る答えじゃなかったというのか。しかし、俺にはこれ以上の答えは返せそうにはない。どうしよう。

「何の話をしてるんですか？」

心底、怪訝だという表情で首を傾げるルシル。

「え？　エロ本を買うことに悩んでいたんじゃないのか？」

ルシルの顔が真っ赤になる。

「な、な、なんでそんな話になるんですか！？」

「……何故だっけか」

腕を組んで思い返してみる。

「ああ。そのメモの内容をルシルの行動から推理した結果、そうなったんだった」

と、ルシルの脇に置いてあるメモを指す。ルシルはメモを手に取り、

「……何でそうなるんですか。あ、勇気さんこれ分かりますか？」

差しだしてきて、それを手にとって俺はメモを見た。書いた人の美しさが透けて見えてくるような達筆な字だ。

「長ネギ、大根、白菜、牛乳、牛肉、たまご、豆腐……今夜はすき焼きと見た」

大好物を雪乃さんが作ってくれるというのを想像するだけで今から心が弾む。最近はルシルにベシルも一緒に食卓を囲むこともたまにある。

「そうです」

「で、おつかいを頼まれたわけか」

「はい」

「もう買ってあるみたいだが、何を困る理由があるんだ？」

エコバッグをのぞき見る限りだと、今読み上げた材料は揃っているようだ。
「その下を見てください」
言われて、メモの続きを見る。こう書かれていた。
南瓜、西瓜、胡瓜、苦瓜、秋刀魚、鰻、鯨、海豚、河豚、醤油、味醂。
「どこぞのクイズ番組に出題されそうな漢字だな」
「……読み方が分からなくて……」
ルシルはため息を吐いて肩を落とす。
そりゃそうだろう。スーパーでも漢字表記をしないのも多い品々だし、スーパーには置いてないであろう品まである。……雪乃さんの悪ふざけだな。そんな茶目っ気のある雪乃さんも悪くない。
「とりあえず、魚屋とスーパーだな」
俺は立ち上がりながらルシルに言う。
「分かるんですか？」
「まあな。読むのは得意だからな」
書けはしない典型的な現代の若者だが。尊敬が入った眼差しを向けているルシルには言わないが。
単なるクイズか買う品かなのかは、恐らくは縦線で区切ってある片方だろう。海豚や鯨なんて動物愛護団体がウルサそうなのを買ってくるってことないだろうし、醤油が入ってる方のグループだな。

「……と、これで全部か」
スーパーから出て、買い物メモを見ながら俺は言った。
「すみません。助かりました」
両手に買い物袋とエコバッグを下げたルシルが申し訳なさげに言う。
「別に気にしなくていい」

間接的にだが雪乃さんに頼まれたと思えば全然苦ではない。というか、この総重量が幼女くらいはある品々をルシル一人に任せるのは、さすがに罪悪感がある。

そこで、ふと思った。

「一人で買って帰るつもりだったのか？」

俺の両手もレジ袋で塞がれ、中にはペットボトルのジュースにみりん等が入っていて、帰る頃には筋肉痛になりそうな重さだ。これらを毎日買っては家まで歩く主婦を俺は尊敬したい。

「……ベシルも頼まれたんですが」

困ったように言いよどむルシルで理解した。

「なるほど。面倒くさいからアンタ一人で行きなさい、と」

「はい」

コクンと頷くルシル。これからの将来を考えると同情を禁じ得ないが、その顔と異性の幼なじみがいると思うと、ざまあみろと思うのは妬みからだろうか。

帰路を歩きながら、再びメモを見た。

何故雪乃さんは、下手したら大人でも読み方に迷う漢字で書いたんだろうか。偶然にも俺が通らなければ、ルシルは困り続けていたのは容易に想像できる。

困って不安げな表情を浮かべ立ち尽くすルシルか……

「なるほど」

それは俺も見てみたいかもしれない。さっき見たときも、保護欲をかき立てられるなにかがあった。雪乃さんもルシルを困らせたかっただけかもな。

俺が話しかけなくともそのうち誰かがそうしたかもしれないし。強面のオッサンだったら誰もそうしないだろうが、ルシルは誰しもが助けてあげたくなるか弱い少年だ。

俺は首を振って前後左右を確認してみた。雪乃さんがその様子を、電柱の影とかで見ているかもと思ったがいなかった。

「どうかしました？」

ルシルが俺を見上げて不思議そうに首を傾げる。
「いや。なんでもない、ところで」
と、俺は大事に持っていたメモを顔の前に持って見ながら、
「難しいのは仕方ないとして、簡単なのは読めるんだな。白菜とか」
言ってから小馬鹿にしたと思われかねなかったかと不安が過ぎったが、ルシルは特に機嫌を損ねた様子もなく言う。
「ある程度の読み書きができないと、こっちには来れないので」
以前それとない疑問として雪乃さんに訪ねたことがあったが、魔界とこちら――人間界――の言語は違うと教えてくれた。
少し頭を捻れば当然のことだ。大海原を渡れば言葉が通じなくなる。地球儀を幾ら回そうが記されてない魔界がどうなのかは言わずもがな、か。
というか、仮に魔界にこちらの世界の言語が広まっていて母国語として使っていたとしても、小さな弓状列島の言語を使う確率は低いか。

「こっちの言葉を学べる場所とかあるのか？」
「いえ。僕とベシルは知り合いに分かる人がいたので教えてもらいました」
「ということは、その前は日本語はさっぱりだったのか」
「はい」
「その割には流暢だな」
「りゅうちょう？」
知らない単語を耳にしたかのようにルシルは首を傾げた。
「日本語が上手いってことだ」
ルシルは理解したらしく納得したというスッキリした表情の後、苦い笑みをこぼし、
「まだ分からないことも多いですね」
「あんまり使わない言葉だしな。それだけ話せれば十分だと思うぞ」
流暢なんて外国人と会った時しか使わない単語だろうしな。それ

も日本語ペラペラな。
「そうですか……僕の言葉おかしくはないですよね？」
不安げな様子で訊いてくる。ルシルの背丈からして自然と上目遣いで見る形になる。愛らしい仕草だ。
これがもし美少女だったらなら、おかしいと言って俺がマンツーマンで教えてあげるが、
「全然おかしくはない。どう聞いても魔界人とは思わないな」
見た目は外国人かハーフにしか見えないが。
ルシルは安心したかのように一息吐き、
「よかったです」
「何かマズいことでもあるのか？」
「魔界の存在を知られるのは駄目なんです。なので、言語を疑われない程度にこなせることがこちらに来る条件の一つです」
俺は歩みを止めた。遅れてルシルも立ち止まり、振り向く。
「なあ」
「はい？」
「魔界を知られるのはマズいのか」
「はい」
「へえ……隠すつもりないように俺は思ってたんだが」
思い切り『隠すつもりないだろ！』と叫びたかったがまだ通行人も疎らに見えるし自重した。
魔界荘にしても魔界カフェにしても魔界を前面に押し出してしまってるだろ。日本人に紛れた宇宙人が『宇宙　仁』と名乗ってるようなもんだろ。
「それは大丈夫みたいです」
「ホワイ？　何故？」
「もし勇気さんが魔界のことを知らなくて、それを見たら魔界があるって信じますか？」
これは即答できる。
「信じないだろうな」

「つまりは疑われなければいいみたいです」
「疑うもなにも俺は既に知ってしまっているが？」
ついでに優も空想が実在することを知っているしな。
「要は大勢に魔界の存在が知れ渡ることがなければいいんです。相応の発言力を持つ人……総理か学者みたいな人に。それに信用に値する人になら打ち明けてもいいらしいです」
「もし、俺が魔界を言いふらしたらどうなる？」
ニヤッと笑みを作って俺は言った。もちろん冗談だ。
「……信じる人はいないと思います」
「そりゃそうか」
魔界は実在するんです。と俺が言い回っても単にイタい人として扱われるに決まってる。さすがに電波さんになることを分かって触れ回りたくはない。
「だが、もしも信じる人がいたらどうすんだ」
「そういう人は純粋な心を持っていて、無闇に言い触らすこともないということで、問題ないみたいです」
「なんか色々と適当なんだな」
結局は信じるも信じないも貴方次第という都市伝説に落ち着くから、言うも言わぬも自由ということじゃないか。実在すると証明するには幽霊と同様に困難だろうし、魔界を信じない人が大半だろうしな。
「だから、少しでも信じる人が出ないように言葉を学んでないと駄目なんです。ふいに魔界の言語を発したりしないように」
「なるほどな。それでベシルとのやり取りもこっちの言葉を使うわけか。しかしな、外国語くらいにしか思われないだろ」
それに、ふいにおかしな、いわゆる宇宙人っぽいフニュフニュした感じの発音が出たとしても悪ふざけとしか取られないだろ。ところで魔界語ってどんな感じなんだろう。
「……そうかもしれませんけど、少しでも可能性を減らすことが大事なんです。他にも獣人はこちらには来れないというのもあります。

見た目で怪しまれますから」
「獣人というと、ゲームなんかで見かける人間の体躯をしてて顔が獣で毛も全身に生えてるような奴か？　ドラ○ンボールでもよく出てくる感じの」
「はい。そんな人が町中に居たら目立ちますよね」
目立つと聞いて、ある人の愛くるしいお姿が浮かんだ。
「なつきさ――魔界カフェの店長はどうなんだ？　獣人とは違うのか？」
ピョコピョコと動く猫耳に感情を如実に表す二本の尾。あれはどう見ても獣のソレだ。
「猫又も獣人に含まれはしますけど、店長さんは人に近い外見ですから、大丈夫と判断されたのだと思います」
「いや、大丈夫なわけあるか！　猫耳に尻尾に天然に童顔だぞ！？　仮に俺が魔界を信じずとも、なつきさんを一目見たらこの世界の人じゃないと疑いを持つね。きっとメルヘンの世界から抜け出して来たんだと思っただろうね」
俺の熱弁にルシルがたじろいで一歩後ろに下がり、露骨に困った人を見るような表情になる。
「……えっと、秋葉原という街に行けば獣耳は珍しくないみたいですし……」
「確かに猫耳メイドカフェなんて店もあるようだが、それでもなつきさんの可愛さはこの世のあらゆる人、物、森羅万象を凌駕している！」
「……とりあえず、人に近ければいいみたいです」
あ、適当に話を終わらせたな。
なつきさんの萌えについての話は帰るまでには終わりそうにないから置いとくとして、魔界も人間界と関わるに当たってルールみたいなのがあるということか。
自由に行き来されていたら大変なことになるかもしれないしな。
短絡的な思考だが、大家の榊さんや天使さんみたいな力を持つ輩

がもしも暴れたりしたなら辺り一帯は容易く焦土と化すかもしれないし、その力を誇示して世界征服もあり得るかもしれない。
まあ、俺はそれはそれで面白いが。……危険思想だな。
けれども、魔界を収めている魔王である榊さんが邪な考えに染まらない限り、世界征服を企む奴が易々と成功できるとは思えないし、抑止力にもなっているのだろうな。

ま、非日常もいいかもしれないが俺は今の日常が大切だし続いて欲しいと願う。
半年前までは非日常だった日常がな。
「さて、腹減ってきたし急ぐか」
俺はそう言い駆けだした。夕日を浴びて駆ける姿は青春っぽくないか？
「あ、はい」
振り返ると、やや遅れてルシルが追いかけて来る。
その姿を見てると弟が出来たみたいでつい顔が綻んでしまう。
……歳はルシルの方が上らしいが。

ゲームの世界へようこそ（1）

まず、俺が気付いたのはここが外だということだった。それも町の中ではない広々とした場所。人工物が発する雑多な音は聞こえない。

目を瞑っていても分かる、草の匂いと涼やかな風が肌を撫でている。瞼を通して感じる光も、少し前に浴びたフラッシュではなく太陽の温かな光だ。

足踏みをしてみる。足を着けている場所もフローリングではなく、大地なのだと音が伝えてくれる。

実に不思議だ。そうとしか言えない。

期待半分と万が一目の前に凶暴な魔物でもいたらという不安半分に目を開ける。

「うわ……」

思わず俺は驚嘆した。予想はしていたとはいえ、それの遙か上をいっていたからだ。

周囲の景色をからすると大草原のようだ。三百六十度の緑が広がり、ゴルフボールが飛び込んだら探すのに苦労を強いられるであろう丈の草がそよ風に靡いている。

種類としては普通の草としか言いようがなく、ここを綺麗に刈りとったら総天然芝の野球場が幾つもできそうだ。

草を蹴ってみると、散った草が風に揺られて落ちる。まさしく本物としか思えない。ここに立っている時点で今更な話だが。

次いで空を仰ぎ見ると、仰天した。

青い大空を、翼を広げ優雅に飛行するのは鷹か鷲かとも一瞬思えたが、遙か頭上を通り過ぎさろうとしてるソイツは足と手が生えていた。人間のようでもあるが、腕と足には茶色の毛で覆われているように見える。よく見ると足の指が三又に分かれ先が鋭い鉤爪になっている。

恐らくは鳥人間なのだと俺は一人で結論を出し、感嘆し呟いた。
「これがゲームなのか……」

時間を少し巻き戻し、舞台はしがない喫茶店へと移る。
店名と店長と客層が少しおかしいくらい――いや、建物とメニューは普通の喫茶店と言った方が早いか。
店から見える外の街路樹も秋の装いを越えて寂しげに葉を散らし始めているが、店内に視線戻すと何も変わり映えがない。
窓際に三組ある白い丸テーブルに白い椅子が二つ挟むように置かれた席に、木製の椅子が並ぶカウンター席は、働き始めたころと全く変化はない。今はカウンター席に客が一人いるだけだ。
なつきさんなりの拘りがあるのかもしれないし進言はしないが、少しは季節感を取り入れたりはしないのだろうか。冬だとクリスマスツリー飾ったりとか……
たった今、俺はナイスアイデアを閃いた。古典的な表現ならば電球が頭上でピカーンと輝いた。
店内ではなく、店長自信が季節やイベントに合わせた格好すればいいんじゃなかろうか。
夏なら浴衣、クリスマスならサンタといった風にだ。これなら季節感もあって集客に繋がるかもしれない。言わずもがなサンタはミニスカじゃないと駄目だ。ほら、なつきさんは尻尾があるからな、スカートのほうがゆとりがあっていいだろ。
普段もスカートが多いしな。今日も秋らしい色合いのロングスカートだし。尻尾が見えないのは残念だが。夏はミニが多くて最高だったが。
機会があれば提案してみるか。それと高性能のデジタルカメラの購入も検討も視野に入れとくか。
「日野」

と、俺の名を呼びかけてきたのは客の一人だ。モデルのような体型でスーツを着こなし、眼鏡を掛けた知的な印象を与える青年は店の常連だ。

耳がやや鋭角な以外は人生で挫折なんてなかったエリートサラリーマンにしか見えないが、魔界ではエルフと呼ばれる種族らしい。

ファンタジーな世界観のＲＰＧだと弓の扱いに長けている印象が強い。ちなみにエルフと聞くと、俺は金髪にツリ目の気の強い少女が浮かぶ。ツンデレで、ふとした時に見せる柔らかい表情が強烈に可愛い。俺の脳内美少女名鑑十八頁より。

「なんですか？」

俺は警戒気味に歩み寄った。いつも世間話を弾ませるほどの仲でもないし、何かあると勘ぐる。

以前にも、こいつの勤めている会社の胡散臭い不思議商品で嫌な思いをしたことがちらほらある。それらは、現代科学を超越して未来の猫型ロボットの便利アイテム並の凄さなのだが、着眼点がどこかズレており、役に立つかと言われたら微妙と答えざるを得ない。

それに、そんな商品を販売してるのを見たことがない。裏社会で出回ってるのか、そもそもこっちの世界で売られてないのか。

市販されてたら悪用されそうな品もあるし、それでいいとは思う。今回は何が出てくるのやら。何故か人ん家の風呂場に繋がることが多い不思議ドアだといいな。通勤時間を有意義に使えるし。

「お前はゲーム好きだな」

「いや、何ですか唐突に」

否定は出来ないがお前に趣味をバラした覚えはないぞ。何で決めつけたような言い方をするんだ。

「そう見えたんでな」

「……そうすか」

ベシルといい俺は他人にそういう印象を与えてるのか。イメージの脱却を図るべきか。

「丁度いいものがある」

常連の眼鏡男子はそう言い、隣の席に立て掛けた鞄を探り、取り出した物をカウンターに置いた。
俺は更に近寄ってそれを見た。
サイコロを何十倍にも大きくしたようなキューブ状の物体。全体が水色のそれの表面には『〇〇の話』とも書かれてはおらず、突起も窪みもない。見た所プラスティックのような材質で光沢がある。単なる四角い立方体という以外の感想はない。素晴らしいフォルムとでも褒めればいいのか？
「何ですかコレ？」
あれこれ詮索するより、答えを知ってるであろう当人に率直に聞いてみる。
「ゲーム機だ」
実に簡潔な返答だが、これがゲーム機とは思いがたい。
確かに大きさとキューブの形状は某大手ゲーム会社が販売していた家庭用ゲーム機を彷彿とさせるが、コントローラーを差し込む穴もゲームソフトをセットする蓋も見当たりはしない。というか、もしあったなら裁判沙汰にならないだろうか。
「コントローラーはどこに挿すんです？」
もっともな疑問を伝えてみた。
「必要はない」
「なるほど。センサーで動きを感知するとかそんな感じですか」
昨今のゲームの進化には甚だ感心せざる得ない。
「何を言っているんだ？」
呆れたような冷めた口調で言われてしまった。
「じゃあ、いったいどうやってプレイするんです？」
「直接動けばいい。何と言ったか……そうだ、バーチャルリアルゲームというやつだそうだ」
この人は何を言ってるんだろうか。
直訳だと仮想現実。ＣＧの世界にあたかも自分が居るかのように感じるゲームだと考えればいいのか？

ありえな……くもないか、現代からしたらオーバーテクノロジーだが、魔界の技術ならありえるかもしれない。もしかしたらこっちと魔界を行き来できるのも凄い技術力の賜物かもしれんし。

それに今ならヘッドマウントディスプレーを用いれば視覚だけなら仮想空間にいるように錯覚もできるだろう。もしや、それか？

「ゴーグルみたいなのを装着したりするんですか？」

困った生徒の的外れな質問を聞いたかのように眼鏡の客は嘆息する。

一言怒鳴っていいすか？　と、カウンターの奥に立つなつきさんを見ると暗号会話でも聞いているかのように首を傾げている。

「起動してみれば自ずと分かるだろう」

「ソフトは？」

「ああ、忘れていた」

淡々と言って、鞄を探ってゲームソフトを取り出し、カウンターに置いた。

「まんまファミ○ンですね」

赤い長方形のロムカセットである。しかも正面に張られたラベルの周りには豆電球が囲んでいる。そのラベルには、

「魔王クエスト……」

ああ、俺の長年のゲーマーの感覚が告げる。これは駄作だと。それに魔王ってあんたらの世界治めてる人じゃん。このラベルの絵（どことなく鳥○明風）を見る限りだと勇者一行が魔王（榊さんとは似つかない不気味さ）に対峙していてどうみても敵にしか見えないし。

「何コレ？」

店の奥から現れた三神さんがカウンターに置かれた物を指して聞いてきた。

「ゲームらしい」

「これが？」

疑う目つきでキューブを見る。さすがにゲームをしない三神さん

でもゲーム機には見えないらしい。
「なんでも、バーチャルリアルゲームだとからしい」
意味が分からないと首を傾げられても俺にはそれ以上の説明のしようがない。
詳細はマイペースにモンブランを食べてるそこの甘党な客に聞いてくれ。んー、だがしかし、
「やってみれば分かる……ってこれって二人プレイできるのか？」
「四人まで同時参加可能だ」
眼鏡青年が答えた。
「というわけで、いっしょにどうだろう？」
腕を組んでどうしようか考えているのか、ゲーム機に視線をやりながら、
「早く終わるならいいけど」
どうなんだろう。数分では終わることはないと思うが。
「これは体験版だ。そう時間は掛からない」
「そなんだ。じゃ、別にやってみてもいいけど」
グッ、と俺は心中で拳を握りしめた。しかし、まだそれを天に掲げるのは尚早。これで布石は整った、俺はなつきさんに顔を向ける。
「なつきさんもどうですかいっしょに？」
「わ、私もですかー？」
なつきさんは明らかに戸惑っている。機械音痴だし不安なのだろう。その反応は折り込み済みだ。
「そう不安にならなくても大丈夫ですよ。ただのゲームですから」
「ですけどー、よく分かりませんし……迷惑掛けてしまうかもしれませんしー」
「そんなこと気にしないでいいですよ。俺も分かりませんし。ゲームは皆で遊んだ方が楽しいですし、やってみません？」
「そうですねー。でしたら、やってみますー」
遠慮がちな笑みを作り参加表明してくれたなつきさん。俺の心中では穏やかな電子音が流れ“なつきさんが仲間に加わった”とテロ

ップが出現し、握った拳を持ち上げてガッツポーズをした。
俺のテンションは最高潮で小躍りでもしたくなったが、抑えて平常心を装う。
恐らくはファンタジーＲＰＧみたいな内容だろうし、バーチャルリアルだ。その世界では迫り来るモンスターからなつきさんを護る騎士になれるのだろう。
今にも襲いかからんとするモンスターを斬り伏せたりしたら、なつきさんはどう思うだろうか……考えただけで今から楽しみだ。

「じゃ、始めていいか？」
「ああ」
「ええ」
「どうぞー」
俺たちはゲーム機の前に並び頷く。
四人参加可能らしいがプレイするのは俺たち三人だけだ。青年はアドバイスなどで手助けしてくれるとのことだ。万が一にも備えるとか言っていたが深くは訊かなかった。後悔する気がして。
青年が手にしたロムカセットをキューブ状のゲーム機の上に近づけると、溶けるように窪みができ、一旦端子に息を吹きかけてからソフトを差し込んだ。
あのロムカセットにどれだけのデータが詰まっているのか気になる。バーチャルリアルとはかけ離れたドット絵の世界だったりしないだろうな。
次に青年は正面の一部分を指で押した。
ムニュ。
擬音にしたらこんな感じか。突起もない滑らかな表面が指の圧力で緩やかに凹で、放すとゆっくりと元の形に戻った。
「あ、光った」
感嘆もなく淡々と見たことを三神さんは言った。
俺も驚きはしない。ただソフトに付いてある豆電球が青白く光っ

ただけだ。むしろ、驚くべきはコンセントに差してもないのに点いたことだが、俺は『まあ、あってもおかしくないか』と問うことはしない。

驚くことはそんなことを思っていた瞬間に起きた。

――シュン。

風を切ったような音が横から聞こえ、顔を向けると三神さんが消えていた。

凄いな。いつの間に瞬間移動を身に着けたんだという感心は当然なく、バーチャルの世界に飛んだんだろう。

「あらー、消えてしまいま――」

まるでマジックでも見たような驚き方をしていたなつきさんの姿も消えた。まさしくあっという間だ。

「ところで、あの電球に何の意味が？」

俺も消える前にちょっとした疑問を訊ねてみた。

「起動しているのを知らせるためだ」

「だとしても数が多すぎると思いますが」

一個で十分だろうし、というか起動を知らせる意味は？　昔のファミ○ンソフトにもそういうのがあったという話を聞いたことはあるが。

「気付かずにリセットを押すか抜いたら戻れない可能性もあるからな」

今、さらりと衝撃的な発言がなかったか？

「……あー、俺、やめても――」

――シュン。

ゲームの世界へようこそ（2）

気付いたら真っ暗闇の中に俺は立っていた。
頭からすっぽり黒い布でも被されたような黒の世界。
どこに壁があるのか、床がどんな色でどんな模様をしてるのか全く分からない。もしかしたら、ないという可能性もある。地に足を着いて立っているという感覚はあるが、一歩踏み出した瞬間落ちていくとも限らない。
ところで、ついさっきまで店にいたはずなのに――という疑問は必要だろうか。
そんなことよりも俺は不安で致し方ない。ここから戻って来られないかもというのを知ってしまったからだ。
最悪、俺はゲームの世界の住人になりかねないのだ。毎日同じ行動パターンを繰り返し、勇者にタンスを荒らされ壷を割られようと略奪行為を黙認しなければならないのだ。想像するだけで恐ろしい。
――ま、それはそれで面白いそうだが。
実際の所そこまで不安視はしていないしな。後でゲームの終了方法を聞けば済むことだし。雑魚モンスターでも一匹倒したらさっさとやめよ。
『言い忘れてたが』
どこからともなく店の常連のエルフ野郎の声がした。俺は何となく上を向いた。もっともこの暗闇じゃどこを向こうが黒しか見えないが。
『これは体験版なんでな。セーブ機能がなくて、クリアまでは終わることはできない』
「うおぉい！　最初に言っておけそんな大事なこと！」
俺は上に向かって叫んだ。狭い空間にいるのかよく反響するな…
…って、クリアまで戻れないってその間に現実で何かあったらどうすんだ。

『だから忘れていたと言っただろう』
開き直るとかじゃなく、元々悪いとか感じていない口調だな。
まあ、クリアすればいいんだ。体験版だからそんなに掛からないだろうし、ちゃっちゃっと終わらせよう。文句は戻ったらすればいいか。
『お客さんが来たらどうしましょうー』
なつきさんの声が聞こえた。声のした方向は分からないが、近くにいるのか？
『安心しろ。裏返してきておいた』
店のドアに掛けてあるオープンの札をクローズにしてきたのか。これは気の利くことで。勝手に閉店してくれるなんて。
『ありがとうございますー』
素直にお礼を言うとは器が大きいのか天然なのか。冷静に考えてみれば店員も店長もいない状態で営業はできないから正しい判断ではあるのか。全く、それを予測できずにゲームに誘ったのは誰なんだか。
『早く終わるといいけど』
三神さんの声だ。
「デートでもあるのか？」
『別に。観たいドラマあるだけ』
実にあっさりと答えだな。俺の理想としては『バカッ！　そんなんじゃないわよ！』と顔を赤くして否定してくれたら、ご飯三杯はいけたのだが。
しかし、こんな不思議空間に飛ばされても戸惑いも疑念も持ってないのかね三神さんは。俺は不思議耐性みたいのが付き始めてるから大丈夫だが。何が起きても驚かない自信はある。
『魔王クエストの世界へようこそ！』
「うおっ！　なんだ？」

女性の声が響いた。デパートとかにある子供向けのゲームから流れる説明のような声質だ。もしくはヒーローショーのお姉さんの方が適切か。

あと、俺は本気で驚いたわけではない。なつきさんに三神さんの反応が薄かったら困るから、率先して唐突の声にびっくりしたリアクションをしただけだ。

ツンデレ風に言うと『別に、驚いたわけじゃないんだからねっ！』

『最初に貴方のクラスを選んでね』

対象年齢いくつくらいだろうかこのゲームは。

『クラス？』

疑問系のなつきさんの声。可愛く小首をでも傾いでいると想像する。

「ジョブ……いや、職業……何というか剣士や魔法使いとかのことですよ、多分」

俺はＲＰＧをしているうちに自然とそういうもんだと分かるようになっているが、ゲームに疎い人に説明するとなると難しいな。

『……そうですかー。ありがとうございますー』

「まあ、すぐに分かるかと……ほら」

と、目の前に画面が現れた。

立体映像のタッチパネルとでもいえばいいのだろうか、青白い光でチカチカと明滅する半透明の四角い画面がある。

その中には『剣士』『魔法使い』などＲＰＧじゃお馴染みの名称が並ぶ。結構種類があるな。

『なりたいクラスをタッチしてね』

見れば分かる。

とりあえず『狩人』と書かれた文字に触れてみた。万が一にも押

したただけで選択を取りやめることができなかった時のことも考えてだ。『山賊』になったりしたら嫌だし。

すると別の画面が宙に現れた。

『弓の扱いに長けたクラス。各種族に効果的なスキルを覚え。倒したモンスターを食料にすることができる』

狩人の説明文の下には『このクラスにしますか』とあり、『はい』『いいえ』と大きな文字が出ている。

説明を見てから決めることができるわけか。説明文の右側にはその職の服装が表示されている。

俺は『いいえ』をタッチすると、説明画面は消える。

弓で後方から安全に戦えるのは魅力的で、食料にできるとかあるし、長いダンジョンでいると便利そうだが、体験版だしそういうダンジョンは出ないだろうという判断で狩人は選択肢から外した。

「二人はもう決めました？」

『まだですー』

『私は剣士にしたわよ』

三神さんは剣士か。わりとピッタリかもしれないな。頼りになって凛々しい印象あるし。それにセミロングの黒髪女剣士というのは良いものだ。

「何故、それにしたんだ？」

『慣れてるから。これって自分で動いて戦うんでしょ？』

「慣れてる？」

剣の扱いに慣れてるって、まさか三神さんは身の丈はある大剣を振るい、日夜街にはびこる異形の怪物と戦ってたりしているのか？

『剣道やってるから。ウチ道場だし』

「なるほど。なつきさんは何にするつもりですか？」

『いっぱいあってー、どれを選んでいいのかー』

「俺が決めましょうか？」

『そうしてくれると、助かりますー』

それを聞いて俺はギロリと目の前の画面を睨む。真っ先に『メイ

ド』を探したがなかった。
まず前衛職は却下だ。なつきさんを前線に立たすわけにはいかない。
となると後衛職だが、ガンナー、魔法使い、鞭使い……ん？　鞭使い……。なつきさんは優しいしな、モンスターであろうとも傷つけるのは心が痛むだろう。却下。
支援職が妥当か。アイテム使い、踊り子、アイドル……どれも捨てがたいが俺の目に止まったのは、
「クレリックはどうですか？」
『クレリック？』
確認のためタッチする。
「回復と支援の専門職みたいです。回復役はゲームじゃかかせませんから」
『そうなんですかー。では、それにしようかと思いますー』
なつきさんのクレリック姿が今から楽しみだ。画面にはクレリックの服装が映っているが、聖書片手に布教する神父が着るような黒いローブを鮮やかな水色にした服に、食パンに似た形をした帽子。ハッキリ言って俺は着たくない。
恐らくは性別で衣装も違うのだと推測する。『騎士』が女も変わらずフルフェイスの兜に全身鎧に包まれていたらユーザーから不満が届きそうだし。俺も送る。
よって、女性版のクレリック衣装は期待できる。なつきさんがそれを着たらどんな些細な罪でも毎日懺悔にしに行くだろう。
「さて、と」
俺も選ぶとするか。
それにしても結構な数のクラスがある。『剣士』『魔法剣士』の違いは分かるが、『魔法騎士』『魔法戦士』は被ってないか？
水増し感がするというか、そこまでするなら少なくてもいいと思うが。
「……企業戦士」

場違い過ぎるだろ。説明は……
『靴の踵をすり減らし日々家族のために戦う戦士。ストレスに強い。リストラ候補だと知り最近うつ気味』
サラリーマンだな。というよりどうやって戦うんだよ。うつ気味だし。ちなみに衣装はグレーのスーツに革靴。
『開発スタッフがお遊びで加えたらしい』
そうすか。絶対に選ばんからいいや。
剣士とクレリックに混ざるスーツ姿はシュールすぎる。
企業戦士の説明画面を消して、再び一覧から選ぼうとすると『選択時間終了』と画面に浮かび上がった。
俺まだ選んでないんですけど？
画面の文字が変わり、
『貴方のクラスはニートに決まりました』
「ニート！？」
『ああ、時間内に選ばないと優柔不断だとされ、そうなるらしい。リアルだろう？』
「そんなリアル必要ですか？」
『さあな』
うわっ。何という他人事な態度だ。
ファンタジー世界でニートなんて悲しすぎるだろ。ん、ニートの説明文が。
『働いたら負けかな』
適当だな。しかも、この文は某掲示板で悪いイメージを広めるために頻繁に使われてた言葉だろ。実際のニートは……いや、いいか。長くなる。
『決まりましたね。では、物語の始まりです。準備はいい？』
「……」
『はい。いつでもいいですよー』

『聞こえないぞー。もう一度聞くよ。準備はいい？』

やり直し！？　ノリが完全にヒーローショーの司会になってるし。

「ああ」

『ええ』

『いいですよー』

『声が小さい！　もう一度！』

五度のやり直しを強要されようやく物語は始まった。

世界観の説明をされた後、俺の目の前が真っ暗になった。

「――起き――」

誰かの声が聞こえる。

「――起きな」

どこかで観たような始まりだな。

「――起きなってんだろうがバカ息子がぁぁぁ！」

耳元での怒声に俺は跳びはねた。何故かベッドの上で正座になる。

顔を上げると恰幅のいいオバサンが仁王立ちしていた。

「毎日、毎日、昼前まで寝てんじゃないよ！」

性別を勘違いしそうなだみ声だ。

「ごめんよ母ちゃん。でも深夜アニメ観てるから朝早くは起きれないんだよー」

俺が言った。いや、俺は言ってない。

勝手に口が動いて勝手に俺が喋っている。まるで操り人形になったかのように。表情筋まで動き、俺はさぞかしナヨナヨとした表情をしているだろう。

「またアンタは屁理屈ばっかり……いい加減働いたらどうなんだい」

俺はイジイジと指でベッドに“の”の字を書きながら、
「働こうとは思ってるよ。今プレイ中のゲームをクリアしたら働くつもりでいたのに、そんなこと言われるとやる気なくなっちゃうよ」
俺、最低じゃないか。夏休みの宿題を先延ばしにしてる小学生みたいな理屈ぬかしやがって。
「そう言い続けて働いた試しがないじゃないの。いい加減にしないと母ちゃんにも考えがあるよ」
「考え？」
「アンタには魔王を倒しに行ってもらうよ。そのくらいして世間様の役にたってきな」
俺は母ちゃんにすがりついた。弾力のある腹の感触が気持ち悪い。見知らぬオバサンにひっつくことになろうとは。
「それだけは勘弁してよ母ちゃん。俺に魔王を倒せるわけがないじゃないか。俺、働くから……働いて親孝行するから……」
女々しく懇願する俺。体と声は自分だからなんだか悲しくなってくる。
「アンタ……」
フッと母親らしい和らいだ表情になる。
「母ちゃん……」
俺は安堵した表情を浮かべる。
と、むんずと太い腕で俺の服の襟首が捕まれ、
「……なら」
母ちゃんが勢いよくそのまま回転し、砲丸投げよろしくぶん回される俺。絶叫マシンより怖い。
「魔王を倒して親孝行せんかぁぁぁい！」
そして投擲。勢いのついた俺の体は魚雷がごとく頭から窓ガラスを突き破り宙を飛ぶ。母ちゃんの雄叫びを段々と遠くなる。人間投げの世界記録出るね確実に。
「魔王を倒すまで帰ってくんじゃないよ！」

――こうして俺とニートのユウキは魔王退治の旅に出ることになったのだった。激しくメンドクサい。

呑気にナレーションしてんじゃねーよ俺。

このままだと綺麗な放物線描いて地面に頭から突き刺さる未来が待っている、というかジエンドじゃないか？　怖いから目を閉じておくか。

――シュン。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6506n/

魔界荘の日常

2011年10月19日07時09分発行